

10月26日(土)

口頭発表		A会場 (Zoom1)		B会場 (Zoom2)	
セッション1	司会(補助)	鴻野 知暁 (佐伯 暁子)		太田 陽子 (苅宿 紀子)	
	ホスト	小川 晋史		幸松 英恵	
	10:00 10:40	A-1 p. 1	『文集抄』鈔本二種の漢字音について —『白氏文集』加點本諸本との 比較を通じて— 鄭 門鎬	B-1	(なし)
	10:50 11:30	A-2 p. 7	『古今集遠鏡』における推定の助動詞の 訳出方針 久保 亜子	B-2 p. 43	日本語における「無」ではじまる語の 特殊な意味についての研究 TRAN QUOC HIEP
	11:40 12:20	A-3 p. 13	奈良時代から平安時代前半期の 資料における「すなはち」と 「即・則・便」 柳原 恵津子	B-3 p. 49	「ダイエット」・「ダイエッター」の 和製の意味用法の変遷 呉 文傑
休憩 (50分)					
セッション2	司会(補助)	坂井 美日 (久保蘭 愛)		幸松 英恵 (小川 晋史)	
	ホスト	佐伯 暁子		鴻野 知暁	
	13:10 13:50	A-4 p. 19	古文書における「候」字形の変化 山本 久	B-4 p. 55	無標実現と有標実現の使い分けについて —意志と潜在意図— 王 イリン
	14:00 14:40	A-5 p. 25	呉語系中国資料にみる 日本語のモーラについて —陰声韻と入声韻の転換に着目して— 王 竣磊	B-5 p. 61	テシマツタの意味に関する一考察 三好 優花
休憩 (20分)					
セッション3	司会(補助)	中川 奈津子 (坂井 美日)		苅宿 紀子 (太田 陽子)	
	ホスト	久保蘭 愛		堤 良一	
	15:00 15:40	A-6 p. 31	勧誘文の類型化をめぐる —「さあ」「ねえ」との共起を中心に— 邢 立中	B-6 p. 67	陳述副詞における 陳述の意味発生の類型性 —漢語副詞を中心に— 姚 堯
	15:50 16:30	A-7 p. 37	滋賀県における 若年層の素材待遇語の使用実態 —第三者待遇偏用から「関係者待遇」へ— 坪井 菜央	B-7 p. 73	四コマ漫画における連点の表現機能 高橋 愛子
休憩 (10分)					
大会式典会場 (Zoom1)					
司会		高木 千恵			
ホスト(補助)		田村 早苗 (矢田 勉)			
16:40 17:00		大会式典 会長挨拶 日本語学会会長 木部 暢子 学会賞授賞式			
談話室		10:00-17:00 オンライン談話室 (ovice)		会場担当: 宮澤 太聡, 森 勇太	
懇親会		17:10-18:40 オンライン懇親会 (ovice)		司会: 庵 功雄 会場担当: 宮澤 太聡, 森 勇太	

10月27日（日）

ワークショップ			A会場（Zoom1）		
セッション4	ホスト（補助）	田村 早苗（矢田 勉）			
	9:30 11:00	W-1 p. 107	ワークショップ 帝国議会議事速記録のコーパス構築に向けた翻刻・文字起こし支援システムの開発 発表者 伊藤 孝行, 山下 倫央, 横山 想一郎, 川村 秀憲, 北野 勇太, 平間 友大, 小木曾 智信		
	休憩 (20分)				
			ポスター発表（ovice）		
セッション5	会場担当	荻宿 紀子（全体） 久保蘭 愛（P-1），鴻野 知暁（P-2），太田 陽子（P-3），小川 晋史（P-4），堤 良一（P-5）			
	11:20 12:20	P-1 p. 79	単語ベクトルを用いた『天草版平家物語』と原拠本『平家物語』の対応付け 北崎 勇帆		
		P-2 p. 85	現代語書き言葉コーパスと著作権処理—BCCWJ2の構築に向けて— 小木曾 智信, 山崎 誠		
		P-3 p. 89	統合型日本語語彙データベースJ-CLIDの開発と展望 呂 建輝, 片山 鮎子		
		P-4 p. 95	慣習から逸脱した表記に見る文字の修辭的機能—現代短歌を資料として— 権田 彩良		
		P-5 p. 101	実例から見られる代行指示の「その」の四つの特殊タイプについて 鞠 恩彤		
	フリータイム	(15分)			
	学生セッション（ovice）				
	会場担当	宮澤 太聡（全体） 久保蘭 愛（G-1），幸松 英恵（G-2），佐伯 暁子（G-3），堤 良一（G-4）			
	12:35 13:35	G-1 なし	仙台市方言における形容詞の無活用化の実態 中川 葉月		
G-2 なし		首都圏在住女子大学生における援助行動表現のスタイル・シフティングークラスタ分析を用いて— 杉原 奏音, 橋本 優美, 小林 星蘭, 中尾 真子			
G-3 なし		タリ形・タ形が用いられる連体節とその参照節の時間的關係 末吉 勇貴			
G-4 なし		X(旧Twitter)にみられる顔文字・絵文字が表す感情類型と回答者の類型化パターン—多変量解析による分析をと おして— 村瀬 瑠々, 丸山 花, 吉川 心遥, 山下 ゆき, 畠澤 百恵, 菅沼 美音, 吉川 春菜, 大池 美心, 秋元 叶夢, 山岸 優空, 佐々木 穂乃花, 勝呂 友耀, 齋藤 恵			
フリータイム	(15分)				
休憩 (10分)					
シンポジウム会場（Zoom1）					
セッション6	司会	中川 奈津子			
	ホスト（補助）	田村 早苗（坂井 美日）			
	14:00 17:00	p. 121	シンポジウム 多文化社会のための複言語教育：ことばの研究の社会的役割とは 言語から話者へ：複言語教育の射程 パネリスト 大山 万容（大阪公立大学） 日本の国内の消滅危機言語の再活性化の事例より パネリスト 半嶺 まどか（名桜大学） 異言語脱出ゲームの取り組み パネリスト 菊永 ふみ（一般社団法人異言語Lab.） 企画担当 中川 奈津子（九州大学） 坂井 美日（鹿児島大学）		
談話室		9:30-17:00 オンライン談話室（ovice） 会場担当：宮澤 太聡, 森 勇太			
書籍展示ブース		11:00-14:00 オンライン談話室（ovice）			

『文集抄』鈔本二種の漢字音について
— 『白氏文集』加點本諸本との比較を通じて—

チョン ムノ
鄭 門鎬（日本学術振興会外国人特別研究員／京都大学）

1 はじめに

中唐の文人である白居易の『白氏文集』は日本において大きな人気を博し、神田本、金澤文庫本といった多くの古鈔本が現存する。現存鈔本の大多数は、巻ごとに書写されたものであるが、一部の白居易の作品を抜き取り他の作品と混ぜ合わせた『和漢朗詠集』『千載佳句』のような鈔本もあり、白居易の作品のみをダイジェストした所謂「選抄本」も存する。『白氏文集』の「選抄本」としては『文集抄』、内閣文庫蔵『管見抄』、東大寺図書館蔵『白氏文集要文抄』などが現存する。本発表では「選抄本」のうち、『文集抄』と題する建長二年（1250）写国立国会図書館蔵本（以下、国会図書館本）と建治二年（1276）写天野山金剛寺蔵本（以下、金剛寺本）を対象とし、2種の『文集抄』に書き込まれている漢字音注記（仮名音注・声点・反切注ならびに同音字）の加點傾向の差に着目するものである。加點者の属する集団や地域差などの位相差により、漢字音の注記から窺える言語現象には差があることが諸家の研究から明らかになりつつある。本発表では、二種の『文集抄』鈔本を加えて、拙稿（2023）で扱った「新樂府」（『白氏文集』の巻第3・4）鈔本5種ならびに独自で調べてきた『白氏文集』諸本¹⁾の注記との比較を通じて、当資料に加點されている漢字音注記から見られる言語現象の差をより多方面から分析する。

2 資料について

両資料は上巻のみが現存し、同じ題名を冠する資料であり、書写年度も26年しか離れていない。いずれも醍醐寺の僧侶による鈔本であり、更に作品の選定において、広く流布した「新樂府」を除いて編成されている共通点がある。ところが、作品の構成、加點の様式の面で違いがある。各資料の概略は以下の通りである。

2.1 国会図書館本（全体字数 8,024 字）

綴葉装。錯簡あり²⁾。巻第1・2・5から順に64首を収めている。奥書により、建長二年（1250）醍醐寺観心院にて桑門阿忍により書写され、同年に「円蓮房本³⁾」という本を利用して付注をし

¹⁾ 本発表では『文集抄』の漢字音注記を比較するため、以下の『白氏文集』鈔本を用いた（*は拙稿（2023）で対象にした鈔本である）。**新樂府以外**：金澤文庫本（大東急記念文庫・天理図書館、延べ20巻、1231~1233年写点・1251~1252年校点）、管見抄（内閣文庫、選抄本・975首あり、1295年写・点）、**新樂府**：*神田本（京都国立博物館、巻第3・4、1107年写・1113年点、墨点院政期A筆、鎌倉初期B筆あり）、*時賢本（宮内庁書陵部、巻第3、1324年写・1325年点、色彩により家点を区別して書写、うち加點が多い墨点[菅原]を主として利用する）、*嘉禎本（大東急記念文庫、巻第4、1238年写・点）、*正応本（天理図書館、巻第4、1289年写・点）*永仁本（天理図書館、巻第4、1293年写・点）、谷村本（京都大学谷村文庫、巻第4、鎌倉中期写・点か）、正和本（京都大学附属図書館、巻第4、1313年写・点）、京大本（京都大学附属図書館、巻第3・4、南北朝期写・点か）。

²⁾ 太田（1997：中211）は「錯簡が一ヶ所あるが落丁は認められない」とするが、現状第36帖と第37帖が元来は各々第24帖と第25帖となるため、正確には二ヶ所の錯簡があることとなる。挙例の位置を示す際は、太田による翻字・移点（1997：中236-325）に所収されている再配置した位置で示す。

³⁾ 太田（1997：中211-220）は当本を欄外の音義注のみならず阿忍が加點に利用した底本であると述べ、出家し醍醐寺入りした藤原日野流の「藤原資宗（円蓮房念寂）」が該当事である可能性が高いと述べている。

たことがわかる。欄外には多数の漢籍⁴⁾から該当語句に関する音注・義注が詳細に書き込まれている。仮名・声点・句読（墨星点）・返点すべて墨筆⁵⁾が用いられている。

2.2 金剛寺本（全体字数 7,128 字、目録を除く）

粘葉装。5 丁の落丁あり。巻第 21（先詩後筆本の系統では巻第 38）・1・2・5・6 から 52 首を収めており、作品の構成は国会図書館本と異なる。奥書を通じて建治元年（1275）小坂（現・逗子市）にて桑門願海⁶⁾により書写された底本を以て、建治二年（1276）京の白川にて書写された鈔本であることがわかる。また、朱墨両点が使われており、朱筆のヲコト点（星点）・句読点、墨筆のヲコト点（鉤点）、仮名、返り点、声点が施されている。

3 仮名音注の表記

国会図書館本の仮名音注の被注字数は 308 字（全体の 3.8%）であるが、金剛寺本の仮名音注は 78 字（全体の 1.1%）のみであり、金剛寺本の場合は、仮名音注を通じてわかることは限られる。本節では、仮名音注に現れる表記の揺れと漢音形以外の混入について挙げることにする。

3.1 韻尾の表記

三内入声韻尾の表記は、両資料とも表記のハ行転呼音・促音化などによる揺れは見られず、t 韻尾は「ツ」、p 韻尾は「フ」、k 韻尾は「ク・キ（硬口蓋・軟口蓋音による相補分布）」で現れる。また、撥音韻尾の η 韻尾の表記も「ウ・イ（硬口蓋・軟口蓋音による相補分布）」であり、表記の揺れは見られない。ただし、m・n 韻尾の表記には表 1 のとおり、どの鈔本でも揺れがある。

表 1	神田 A 1113	神田 B 鎌倉初期	金澤 1233	嘉禎 1238	谷村 鎌倉中期	国会 1250	金剛 1276	正応 1289	永仁 1293	管見 1295	正和 1313	時賢 1325	京大 南北朝
m	ム	6	23	1	8	18	1	51	8	35	4	1	2
	ン	3	3	45	23	1	3	14	3	136	2	1	13
n	ン	4	10	32	151	58	14	3	232	45	417	3	13
	ム	0	3	27	7	13	25	0	25	31	45	12	2
													1

m 韻尾と n 韻尾は、各々「ム」「ン」表記が付与されていたが、中世初期には同音に帰したと考えられるため⁷⁾、拙稿（2023）で言及した通り表記の仕方は、加点者の意識により異なると考えられる。国会図書館本は両者ともム表記が優勢であるのに比して、事例は僅かであるが金剛寺本の場合は、1 例を除きすべてン表記である。

3.2 サ行拗音の表記

歯音声母字（サ行音）のうち、拗音となる韻母に属する字であっても、『韻鏡』の 2 等韻に配置される字の漢音形は「崇^{スウ}(06A1、崇母東韻拗)」「莊^{サウ}(14B2、莊母陽韻)」「蔬^ソ(18B4、生母魚韻)」のように直音となる傾向がある。ところが、国会図書館本の場合、それ以外の字にも直音表記を見出せる。「奢^サ(28A5、書母麻韻拗)」「衰^サ⁸⁾(28B1、邪母麻韻拗)」「繪^{ソウ}(18B5・32A3、從母蒸韻)」「嗟^サ(28A3、精母麻韻拗)」などがあり、「蛇^{シヨ}-鼠^フ (05B3)」「腐^フ-鼠^ソ(17A5)」のように、同字に対しても拗

⁴⁾ 国会図書館本には漢籍のみならず、ごく一部に『日本書紀』のように国書加点本の引用も見られる。また、欄外の音注・義注などの引用には、更に漢字音注記を含む訓点が施されている所も多数あるが、本発表では『白氏文集』の本文に関わらないものに関しては対象としない。

⁵⁾ 欄上に朱筆による頁数があるが、修理（錯簡が生じた後）の段階に書写したものと判断される。

⁶⁾ 後藤（2012）によると、金澤文庫古文書や鎌倉遺文などから願海は相模の醍醐寺系の寺院を中心にその名が見えることが指摘される。

⁷⁾ 沼本（1986：241-243）、肥爪（2019：279-280）

⁸⁾ 欄上に「シヤ」の仮名音注と欄下に「六(音)虵・六(音)耶(ママ、邪の誤り)・六(音)虵」の同音字注あり。

音と直音表記が併存する事例も見られる⁹⁾。ただし、「繪」「嗟」は他の『白氏文集』鈔本でも直音で現れる¹⁰⁾。諄韻（真韻合口）字の場合の表記は「逡^{スキム}(24A3)」「逡^{シキン}(31B4)」「逡^{シユム}(31B4)」「循^{シヨ}(35A2 左)」のように同一資料内でも表記のバリエーションがある。金剛寺本のサ行拗音字は「黍^{シヨ}(430)」のみであり、直音の事例は見られない。

3.3. ㊦ヨウ・㊦ウの表記

漢音形で「㊦ヨウ（鍾韻・蒸韻）」と「㊦ウ（蕭韻・宵韻）」と表記される字のうち、「㊦ヨウ」>「㊦ウ」となる事例は最古の『白氏文集』訓点本である神田本から見出せる。『文集抄』の鍾・蒸韻字の表記は国会図書館本の9例すべてが㊦ヨウ、金剛寺本は1例が㊦ヨウ、1例に㊦ウ表記があり、蕭・宵韻字の表記は各々11例、3例が㊦ウで表記されており、揺れは見られない。唯一の例外として金剛寺本の「徴^{テウ}(389)」があり、拙稿（2023）で挙げた通り、他の鈔本で見られる用例と同様、舌音字（漢音形ではタ・ラ行音）の用例である。

3.4 漢音以外の混入

国会図書館本：㊦音^{シヤウ}錚(06B6/サウ)／㊦^ク他^{アウ}區(02A6、34B6/ウ)、𪛗^{チフ}[𪛗](08A7/チウ)、𪛗^{キン}(09B3/ゴツ)、羸^{スキ}(10A7 欄上/ルイ)、𪛗^{ケウ}(12A2/ゼウ)、要¹²⁾(12B4 欄上/エウ)、𪛗^{セム}¹³⁾(17B4/エン)、𪛗^{テウ}(22A1/チウ)、𪛗^{カク}(23A4/カツ)、𪛗^{シユ}(34B5 左/スイ)、𪛗^{カウ}(43B6/サウ)、𪛗^{テム}(46A4/ヘム)

金剛寺本：㊦音^{シヤク}折¹⁴⁾(515/セツ)／㊦^ク他^{アウ}區(082)

㊦音と判断される事例は両者とも1例のみである。国会図書館本の「錚」は金剛寺本では「錚^{サウ}」であり、また同作品（巻第1・夢仙詩）に現れる字である。その他の事例は「區（區）」「𪛗（𪛗）」「𪛗（更）」のように、字画の一部による類推と判断されるものや、字画の一部を構成する要素を共有する別字の字音で読んでいるもの「𪛗（調・凋など）」が見られる。「𪛗」は字形が類似する「允」の字音であるが、後に校点の過程で「コツ」を追記した事例である¹⁵⁾。

次に「𪛗」は、字体と字音は問題ないように見えるが、書き込まれている反切注「張留反^左」に拠ると「チフ」の仮名音注はハ行転呼による混同のようにも判断しうる。ところが、当該字は地名の「𪛗[𪛗]屋縣」で用いられており、本文誤写によりもたらされた字音と判断できる。最後に金剛寺本の「折」は「夭折」という漢語の一部で、同音字注「と錫」も「折」を「析」に読んでいるための誤りである。更に「析」の漢音形は「セキ」であるため、「シヤク」は㊦音の混入と判断しうる。

⁹⁾ 現行の漢和辞典でも『大漢和辞典』「シヨ」は漢音、「ソ」を慣用音としており、『漢辞海』「シヨ」を漢音、「シヨ・ソ」を㊦音としており、一様ではない。「鼠」の事例は管見に入る『白氏文集』鈔本のうち、仮名音注が施されているのは国会図書館本のみである。他の漢籍の事例としては金剛寺本『遊仙窟』に「ソ」1例、高山寺本『史記』夏本紀（1145年点）に「シヨ」3例、安倍本『史記』夏本紀（1248年点）に「ソ（墨筆）」「シヨ（朱筆）」併記1例が見られる。

¹⁰⁾ 「嗟サ」の事例は永仁本、時賢本、京大本、「繪ソウ」の事例は正応本、管見抄にも見られる。

¹¹⁾ 左側に「コツ」の仮名音注と合点あり。

¹²⁾ 右側に「エウ」の仮名音注あり。

¹³⁾ 左側に「エム」の仮名音注と合点あり。

¹⁴⁾ 右側に「セツ」の仮名音注あり。

¹⁵⁾ 『白氏文集』巻第6「冬夜」には管見抄が「允」、金澤文庫本が「元」に作る箇所も存する。

4 声点

国会図書館本は 666 字（全体の 8.3%）、金剛寺本は 598 字（全体の 8.4%）に対して声点が差されている。両資料とも声点は墨筆圈点で施されている。声点については、轻声点の加点率、上声全濁字の去声化、濁声点の加点率、多音字の加点の 4 つの側面から加点の差に注目する。

4.1 轻声点の加点率

院政・鎌倉時代の漢籍訓点資料の多くは六声体系（平声・入声の軽重あり）が残存する声点の加点が行われる。理論上、平声は全清・次清字、入声は全清・次清・次濁字が轻声となるが、軽重の区別は漸次消滅する。院政・鎌倉時代は消滅の過渡期であり、当時の資料には両者が混同する事例が多く見られる。

表 2	神田 1113	金澤 1233	嘉禎 1238	谷村 鎌倉中期	国会 1250	金剛 1276	正応 1289	永仁 1293	管見 1295	正和 1313	時賢 1325	京大 南北朝
平声点	60	147	229	107	107	43	358	131	88	163	1	30
平重点	53	117	234	81	48	58	174	270	351	356	9	419
比率(平)	53.1	55.7	49.4	56.9	69.0	42.6	67.3	32.4	20.0	31.4	10.0	6.7
入声点	52	195	154	48	59	42	165	136	94	105	13	20
入重点	18	35	19	21	3	10	57	66	69	130	2	194
比率(入)	74.3	84.8	89.0	69.6	95.2	80.8	74.3	67.3	57.7	44.7	86.7	9.3

上掲の表 2¹⁶⁾のように、2 種の『文集抄』における軽重の区別は、国会図書館本の方が比較的良好に保たれており、金剛寺本は重点へ移行する比率が高くなる。ただし、諸本を比較すると、底本の新旧・加点者が持つ漢字音の知識などの要素により、ほぼ同時代の鈔本であっても諸相が見られるため、単に 26 年の間に起きた通時的な変化とは言い難い。

4.2 上声全濁字の去声化

漢音声調は母体音である唐代長安音の音韻変化である上声全濁字の去声化が反映される。ところが、この去声化の比率は資料により去声化の比率が高いものから、ほぼ反映しないものまで様々である。また、拙稿（2023）では、嘉禎本のように、音節数により上声点と去声点が相補分布する（一音節曲調を回避）鈔本があることを述べた。表 3 のとおり、国会図書館本は嘉禎本のような類型に近く、去声点の比率も低い。それに反して、金剛寺本は音節に関わらず、去声点の事例が優勢と言える。

表 3	神田 1113	金澤 1233	嘉禎 1238	谷村 鎌倉中期	国会 1250	金剛 1276	正応 1289	永仁 1293	管見 1295	正和 1313	時賢 1325	京大 南北朝
1	上声	0	5	25	6	2	2	5	9	10	0	16
	去声	13	28	0	9	4	24	19	5	12	0	15
	その他	0	3	1	1	0	0	0	2	5	0	2
2	上声	0	2	0	3	1	0	1	14	2	0	1
	去声	24	62	32	19	16	29	41	22	23	4	48
	その他	0	1	0	3	1	0	1	7	5	0	2
去声点の比率	100.0	89.1	53.3	93.3	58.1	83.3	96.4	89.6	45.0	61.4	100.0	75.0

4.3 濁声点の加点率

濁声点の加点形式は、国会図書館本が「◦◦」、金剛寺本が「○ー」（◦◦2 例混用）で施されている。濁声点の形式と加点の比率は博士家・宗派により差があることが先行研究¹⁷⁾により言及されているため、醍醐寺（真言宗）の僧侶関わった両資料は加点率が高いことが予想される。漢音では疑母・日母・泥母・明母¹⁸⁾（各々ガ・ザ・ダ・バ行音）濁声点が集中するが、該当の字に加点さ

¹⁶⁾ 本表は、『広韻』の平声全清・次清字の平声点・平声点、入声全清・次清・次濁字の入声点・入声点のみを集計し、上声点・去声点などの例外は除いて、その比率を計算したものである。

¹⁷⁾ 佐々木（2006）

¹⁸⁾ 『文集抄』の声点加点字のうち、濁音にならない以下の泥母・明母字であるナン難、ナム男南、ネイ倭、ネン年、ノウ能、マウ尫莽孟、メイ命冥茗、メン眊、モウ濛蒙を除外した。また、ダ・ナ行音の表記が両立する国会図書館本の

れている濁点と単点の数を集計すると以下の表4の通りになる。

表4	神田 1113	金澤 1233	嘉禎 1238	谷村 鎌倉中期	国会 1250	金剛 1276	正応 1289	永仁 1293	管見 1295	正和 1313	時賢 1325	京大 南北朝
主要形式	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇(朱)	〇	〇(朱)
濁点	8	55	221	77	45	50	228	245	246	228	24	211
単点	47	126	10	3	10	12	24	11	23	24	4	20
比率	14.5	30.4	95.7	96.3	81.8	80.6	90.5	95.7	91.4	90.5	85.7	91.3

神田本（藤原家鈔本）、金澤文庫本（藤原家鈔本か）を除くと、8割以上の高い比率で濁声点が用いられているが、国会図書館本、金剛寺本とも醍醐寺（真言宗）の影響を受けている鈔本と考え、先行研究と合致する。ただし、金剛寺本は濁声点の多くが「〇」を用いており、形式的な面では合致しない。

4.4 多音字の加点

声点は元来、破音の区別のために生じたものであり¹⁹⁾、複数の音（義）を持つ多音字のうち派生義を持つ字に加点が集中するが、日本の訓点資料においては破音のみならず音読する字にも加点される。全体の声点加点字のうち多音字が占める比率は博士家鈔本（神田本・時賢本）が高く、声点加点が多い仏家鈔本は当然ながら、比率が低くなる。表5のように、国会図書館本と金剛寺本は新樂府の仏家鈔本よりはやや多音字が占める比率が高いが、金剛寺本の方がより高い。

表5	神田 1113	金澤 1233	嘉禎 1238	谷村 鎌倉中期	国会 1250	金剛 1276	正応 1289	永仁 1293	管見 1295	正和 1313	時賢 1325	京大 南北朝
多音字数	283	960	406	159	182	188	447	428	677	443	133	544
全体声点	776	2220	1903	729	666	598	2059	1740	1931	2053	353	2057
比率	36.5	43.2	21.3	21.8	27.3	31.4	21.7	24.6	35.1	21.5	37.7	26.4

また、多音字の加点法式的面でも差が認められる一例として、金剛寺本の場合、多音字のうち、音読ではない「為」に平声点7例（転義に去声点2例あり）があることは特徴的である（国会図書館本は「為」の声点加点事例なし）。音読を除き、本義（平声）で読む場合は、『白氏文集』の鈔本のみならず他の漢籍でも平声点を施す場合はほぼ見られない。同じく『白氏文集』鈔本のうち、金澤文庫本には「為」36例のうち、1例のみが平声点であり、京大本に1例が見出せるのみである。金剛寺本の平声点加点箇所には「す」「なり」といったヲコト点・仮名点が加点されていないため、ヲコト点の代わりに平声点で読み分けをする習慣があったと判断される。

5 反切注・同音字注

国会図書館本と金剛寺本の行間・欄外には反切注・同音字注の書き込みも認められる。渡辺（2002）によると、最大の鈔本である金澤文庫本に書き込まれている反切注の約8割が辞書である切韻系韻書ならびに玉篇から引用されたものであると述べている。『白氏文集』には中国側注釈書がないため、これらの音注は必要に応じて辞書・音義書を利用し、加点者が適宜書き込むものである。下掲の表6²⁰⁾のとおり、反切注・同音字注の被注字数は資料により大きく異なり、まったく現れない鈔本も存する。

表6	神田 1113	金澤 1233	嘉禎 1238	谷村 鎌倉中期	国会 1250	金剛 1276	正応 1289	永仁 1293	管見 1295	正和 1313	時賢 1325	京大 南北朝
反切注	18	373	0	0	28	46	18	0	10	0	24	0
同音字注	27	222	0	0	16	25	5	0	3	0	19	0

「喃(平濁)ナム右（合点あり）、タム左(21B4)」は合点の語形に従い除外した。

¹⁹⁾ 石塚（1995）

²⁰⁾ 白居易自注と考えられる割注形式の音注を除いた数値であり、時賢本の事例は墨筆のほか濃朱筆・朱筆による音注を含む。

ただし、これらの音注のうち、特に同音字注は、中国の中古音の体系では同音にならず、日本語の音韻体系内部において同音となる所謂「類音注」ないし「和風音注」と見做せるものが大多数である。国会図書館本の10例、金剛寺本の17例は切韻系韻書における声母・韻母・開合が一致せず、反切注も誤写・本文異同等の理由で国会図書館本5例、金剛寺本の6例が一致しない。被注字が重複する場合も、反切注は7例のうち3例、同音字注は4例のうち2例が一致し（すべて同作品の用例）、音注を共有する部分が僅か5例のみである。また、国会図書館本の同音字注の標示は「六（音の省画字）」のみが用いられているが、金剛寺本に現れる「六」「𪛗」「𪛘」が混用されており、複数の底本が用いられていた可能性がある。

6. おわりに

以上、国会図書館本ならびに金剛寺本『文集抄』における漢字音注記の特徴を他の『白氏文集』資料と比較しながら述べた。両資料は同名を冠する資料であり、両方とも醍醐寺系の僧侶が関与しているが、作品の構成、加点形式、仮名音注の加点数およびm・n韻尾表記、声点における軽点の比率、上声全濁字の去声化率と音節数による加点の偏り、同音字注・反切注における共通箇所などの少なさなど、様々な面で差異が認められる。このような差が生じる原因は、加点者の宗派による違いからは求めにくく、加点者個人が持つ意識の差、各鈔本が依拠した底本の性格の差（地域差・集団の差）と底本の数に起因するものであると考えられる。

主要テキスト

国会図書館本：(国立国会図書館デジタルコレクション) <https://dl.ndl.go.jp/pid/2534310>

金剛寺本：『天野山金剛寺善本叢刊 第一巻 漢学』（2017、勉誠社）

参考文献

石塚晴通（1995）「聲點の起源」『日本漢字音史論輯』

太田次男（1997）『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』、勉誠社

後藤昭雄（2012）「金剛寺蔵『文集抄』」『本朝漢詩文資料論』、勉誠社

佐々木 勇（2006）「鎌倉時代の日本漢音資料における濁声点加点について」『小林芳規博士喜寿記念国語学論集』、汲古書院

鄭 門鎬（2023）「院政・鎌倉時代書写加点『白氏文集』における漢字音の諸問題—博士家・仏家書写「新樂府」鈔本の比較を通じて—」『訓点語と訓点資料』150

沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』、東京堂出版

肥爪周二（2019）『日本語音節構造史の研究』汲古書院

渡辺さゆり（2002）「金沢文庫本白氏文集に書き込まれた反切注について」『訓点語と訓点資料』

【付記】本発表は日本学術振興会科学研究費・特別研究員奨励費「漢籍訓点資料を対象とする漢字音の研究」（課題番号：23KF0232）の成果の一部である。

『古今集遠鏡』における推定の助動詞の訳出方針

総合研究大学院大学学生・日本学術振興会特別研究員 DC1 久保 粧子^{くぼ まきこ}

1. はじめに

『古今集遠鏡』(1793 年成立、1797 年刊)は、江戸時代の国学者・本居宣長(1730~1801)による『古今和歌集』の注釈書である。本書の方針は、「古今集の歌どもを、ことゝくいまの世の俗語に訳せる也」という記述の通り、『古今和歌集』の真名序、長歌を除いた和歌の部分に、当代の口語を用いて逐語訳を施している。そのことから、本書が江戸時代の口語資料として日本語史研究において重要であることはすでに知られており、本書に関する多くの研究の蓄積がすでに存在している。また、2021 年に『Himawari 版古今集遠鏡』が公開され、現在は形態論情報を付与したコーパスの構築が進められているため、これまでより詳細かつ正確な調査が可能となっていることから、コーパスを活用した研究の意義が高い資料でもある。本発表では、『古今集遠鏡』における推定の助動詞ラシ・メリの訳出方針を、『日本語歴史コーパス』(以下「CHJ」)、『Himawari 版古今集遠鏡』(以下「Himawari 版」)を用いて収集し、特徴を考察する。

2. 調査対象・調査方法

本発表の調査対象は、『古今集遠鏡』の和歌本文における、ラシ・メリと、それに対応する宣長訳である¹。まず、CHJ を使用してラシ・メリが用いられている和歌を抽出し、該当和歌を Himawari 版で検索して宣長がどのような訳を施しているか、現代の注釈書も用いて調査した。この調査結果については、5 で述べる。また、この調査結果を受けて、洒落本・人情本といった江戸期の口語資料との比較を行った。この調査結果については、6 で述べる。なお、CHJ の検索に用いた検索条件式は、本稿末尾の「使用データベース」にてまとめて示す。

3. 先行研究—江戸時代における推定表現

先行研究によると、江戸期における推定表現(伝聞関連も含む)には次のような特徴があるとされている(発表者まとめ)。

- ・ゲナは室町末期から江戸後期には伝聞専用の用法となり、安定した地位を占めているが、江戸末期から衰退傾向となる。(金沢 1998)
- ・ソウナは江戸後期から末期において、推定から伝聞にわたる多様な用法を有して使用されるが、徐々に伝聞へと傾いていく。(同上)

¹ 現在、主に伝聞・推定の意味を持つとされる終止形接続のナリは、『実例詳解 古典文法総覧』で述べられている通り、昭和 30 年代初頭の論争まで、詠嘆の機能を持つ助動詞として扱われていることが多い。『古今集遠鏡』においても、終助詞サや、感動詞アレを添えて詠嘆の機能を含めた宣長訳が主であることから、推定の機能を検討対象とする本発表の調査範囲からは除外する。

- ・ソウナの用法変化により、明治期に推定表現の空白期が生まれるが、「ラシイ」の生長がやや遅れていることがわかるものの、未解決となっている。(同上)
- ・終止形承接のソウダは「事態内容を経験的に把握できない」ことを提示する(岡部 2000)
- ・幕末人情本のヨウダには原因推定がなく、洒落本・滑稽本・人情本でのソウダには原因推定の例がみられる(岡部 2002)
- ・ヨウダの基本的意味は「話し手の印象では現状(X)が事態(Y)に見える」として規定できる(同上)

また、『古今集遠鏡』の宣長訳における文体の特徴としては、はしがきに次のような記述がある。

俗言は、かの国この里と、ことなることおほきが中には、みやびごとになかきもあれども、かたよれるみなかのことばは、あまねくよもにはわたしがたければ、かゝることにとり用ひがたし、大かたは京わたりの詞して、うつすべきわざ也、たゞし京のにも、えりすつべきは有て、なべてはとりがたし、

この記述から、俚言訳には主に近世の京都における口語が用いられていることから、先行研究での近世上方語の特徴を中心として検討材料とし、考察していく。

4. 『古今集遠鏡』はしがきでの訳出方針

『古今集遠鏡』のはしがきには、助動詞を中心とした一部の語についても、訳の方針をあらかじめ示している。ラシについては、次のような記述がある。

○らしは、さうなと譯す、さうなは、さまなるといふことなるを、音便にさうといひ、るをはぶける也、然れば言の本の意も、らしと同じおもむきにあたる辞也、たとへば物思ふらしを、物を思うさうなと譯すが如き、らしもさうなも共に、人の物思ふさまなるを見て、おしはかりたる言なれば也、さてついにいはむは、世にらんとらしとを、ただ疑ひの重きと経きとのたがひとのみ心得て、みづからの歌にも、其ころもてよむなるは、ひがこと也、たとへば時雨ふるらんは時雨がふるであらう也、時雨ふるらしは、時雨がふるさうなの意也、此俗言のあらうとさうなどの意を思ひて、そのたがひあることをわきまふべし、

ここからは、ラシをサウナと訳す方針であること、推量の助動詞ラムと対照した際の訳の違いに関する宣長の考えがわかる。ここでの記述と、実際の本文での訳し方に相違があるかどうかを含め次項以降で調査していく。一方、メリについては、はしがきには訳の方針は記されていないため、本文での用例から訳出方針を探っていくこととする。

5. 『古今集遠鏡』本文での訳出と特徴

「2. 調査対象・調査方法」にて述べた方法により、『古今和歌集』の和歌内でのラシ・メリの用例数を確認したところ、ラシは16例、メリは4例であった。このうち、ラシの例である1077番歌は宣長訳が施されていないため、15首の和歌での訳を見てみると、はしがきでの記述通り、すべてサウナを用いて訳していることがわかった(該当句と対応する訳は、【表1】にて示す)。

メリについては、「ようすぢや」「やうに」を用いて訳し、4 例のみであることが懸念点ではあるものの、サウナを用いた訳はみられないことから、宣長は推定の助動詞ラシとメリの訳し方を分けている可能性が考えられる。

先行研究で、江戸期の推定・伝聞表現において主要な助動詞として挙げられていたゲナは、『古今集遠鏡』の推定の助動詞の訳には用いられていないことがわかった。また、Himawari 版を使用して、宣長訳におけるゲナの用例を検索したところ、0 例であった。

上記で収集した『古今集遠鏡』での推定の助動詞の訳の例について、現代の注釈書での訳と比較し、検討する。現代の訳は『新編日本古典文学全集』（以下、『新編全集』）を参照した。ラシ・メリを含む和歌の訳し方について、【表 1】【表 2】にそれぞれまとめる。紙幅の都合により、該当句と対応する訳の部分のみを掲載している。

【表 1】ラシを含む古今集の和歌の宣長訳と『新編全集』での訳

該当句（『古今集』内の歌番号）	宣長訳	新編全集での訳
夜はふけぬらし（192）	夜はいかうふけた もうとんと夜半になつたさうな	夜はまさに真夜中に更けてきたに相違ない。
寒からし（199）	寒いさうな	冷たいに相違ない。
時雨ふるらし（284）	時雨がして風がふくさうな	木の葉を散らしているに相違ない。
よわからし（291）	弱いさうな	さっと吹いてきた風が色さまざまに見えたが、それは秋の落葉が風の中で舞っているからだだよ。
み雪ふるらし（317）	雪がふつたさうな	吉野の山には雪が降っているにちがいない。
ふる雪はかつぞけぬらし（319）	ふるうちにはや片一方からさきえるさうな	それは片端から消えるにちがいない。
雪けの水ぞ今まさるらし（320）	水がさましたさうな	降った雪が解けて、水が増したのに違いない。
山のしら雪つもるらし（325）	吉野山の雪がいかうつもるさうな	吉野の山には雪が降り積んでいるらしい。
さほの川霧たちぬらし（361）	佐保川の霧がたつたさうな	佐保川の川霧は、今ごろ立ちこめているにちがいない。
みちぬらし（488）	一つはいにふさがつたさうな	私の恋はからっぽの空をいっぱいにしてしまったらしい。
こひしねとするわざならし（526）	恋で死んでしまへと云事さうな	恋のために死ねというやり方のようだ。
しほみちくらし（913）	しほがみちてくるさうな	潮が満ちてくるらしい。
人こそあるらし（923）	人がさあるさうな	糸から引き抜いて散らしている人があるのだな。
ほころびぬらし（1020）	ほころびたさうな	ほころびたらしい。
そま人は宮木ひくらし（1101）	杣人が材木をひくさうな	樵たちが宮殿を造るための材木を引っ張っているらしい。

【表2】 メリを含む古今集の和歌の宣長訳と新編全集での訳

該当句（『古今集』内の歌番号）	宣長訳	新編全集での訳
紅葉みだれて流るめり（283）	紅葉がちりみだれて今最中流れるやうすに思はれる	紅葉が乱れ流れているようだ。
散りくめり（459）	ちつてくるやうに見える	散ってくるようだ。
風ぞ頻くめる（946）	風が吹て（略）あんどのならぬやうすぢやぞや	風が吹き荒れているようなものなのですよ。
明けぬめり（1015）	夜があける様子ぢや	夜は明けてしまうようだ。

ラシについて、宣長訳と『新編全集』の訳を比較すると、『新編全集』では「相違ない」「ちがない」といった、より確定的な意味を持った訳が多くみられる。また、『新編全集』では現代語の助動詞ラシイが用いられている。Himawari 版で、宣長訳における「らしい」の用例を検索すると、「めづらしい」3 例、「あはうらしい（あほらしい）」2 例、「あいらしい」1 例、「いやらしい」1 例という結果であり、形容詞的接尾辞の用法のみがみられた。先行研究として示した金沢(1998)などで述べられているように、江戸期口語の推定表現では、助動詞ラシイはまだ定着していないと考えられているが、その傾向が『古今集遠鏡』からも窺い知ることができた。

現代の訳では、「ようだ」をラシでもメリでも共通して用いているが、『古今集遠鏡』では訳を区別しており、メリの視覚的要素を伴った推定という意識も含まれているように見受けられる。

6. 江戸時代口語資料との比較

『古今集遠鏡』の宣長訳内、ラシ・メリの訳に用いられていたサウナ・ヤウナは、当該助動詞の訳以外でも頻繁に用いられている。一方で、先述の通り、ゲナは、『古今集遠鏡』の推定の助動詞の訳には用いられていないだけでなく、そのほかの宣長訳でも用例がみられなかった。

参考として、『あゆひ抄』（1773 ごろ成立）でのゲナに関する記述を引用する（傍線筆者）。

里に『げな』といふ詞は「介隊」の言ひなれるなるべし「めり」によく当たれり。古く「何げなる」と言へりける詞より出で、二三百年の前までは、すぐに「めり」といふ詞に当つべく用ひたりけるを、このごろはたゞ聞ゝ伝へたることに限りて、歌によまば「てふとなん」などいふことに当つべきやうになりたれば、なか／＼まぎらはしくやとて、今は当てず

『あゆひ抄』によると、ゲナはメリに該当する語であったが、テフとナンに該当する語へと変化があったようである。『古今集遠鏡』のはしがきにはメリの訳出方針は示されていないが、宣長が上記のような意識を持っていた可能性も考えられる。

ゲナについて、同時期の口語資料である洒落本、幕末期江戸語の資料である人情本と比較してみたい。CHJ に収録されている、京都・大阪で出版された 20 作品の洒落本、8 作品の人情本でのゲナの用例数は、【表3】の通りである。

先行研究において、ゲナの衰退が江戸末期ごろからとされている通り、洒落本ではまだゲナが上方語として使用されている段階にある。時代が下り、江戸語の資料である人情

【表3】 近世口語資料のゲナの用例数

	用例数
洒落本（京都・大阪）	51
人情本	7

本でもわずかに用例がみられたことから、『古今集遠鏡』でもゲナの用例がみられてもおかしくはないと推察できるが、実際にはゲナは用いられていないことから、宣長が意識的に和歌の逐語訳にゲナを用いない判断を取った可能性も考えられる。

7. おわりに

本発表では、『古今集遠鏡』における推定の助動詞ラシ・メリの訳出方針を検討し、現代の『古今和歌集』の注釈書、『古今集遠鏡』と同時期の口語資料と比較してその傾向について考えた。その結果として、助動詞ラシは、はしがきの記述通りサウナを用いて訳していること、はしがきに訳の方針が示されていなかったメリは、ヤウナを用いてラシと区別して訳しているとみられることがわかった。また、現代の注釈書での訳と比較により、ラシイがまだ成立段階にないと考えられることや、現代のような「～に違いない」といった確信的な推定表現は『古今集遠鏡』ではみられないことがわかった。さらに、洒落本・人情本との比較により、『古今集遠鏡』ではゲナを用いていない可能性が示された。

今後の課題としては、特に最後の調査結果である『古今集遠鏡』にゲナの用例がないという点から、近世上方語の推定表現の調査によって、和歌の逐語訳で用いる上方語と洒落本などで用いられる上方語の差異を見出していくことができるか、さらに検討していきたいと考えている。また、今後『古今集遠鏡』の形態論情報を付与したコーパスが公開されれば、助動詞の用法に限らず、さらに調査の範囲が広まっていくことが期待できる。

参考資料

- ・使用データベース

市村太郎編 (2021) 『Himawari 版古今集遠鏡コーパス Ver.0.81』

<https://sites.google.com/view/ichimurat/%E5%B8%82%E6%9D%91%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%AE%A4>

国立国語研究所 (2023) 『日本語歴史コーパス 平安時代編 I 仮名文学』

<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku> (2024 年 9 月 17 日確認)

国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』

[https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share\(Ver.1.0\)](https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share(Ver.1.0)) (2024 年 9 月 17 日確認)

国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 江戸時代編 II 人情本』

[https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#ninjo\(Ver.0.8\)](https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#ninjo(Ver.0.8)) (2024 年 9 月 17 日確認)

【使用検索条件式】

キー: (語彙素="めり" AND 品詞 LIKE "助動詞%") IN subcorpusName="平安-仮名文学" AND 作品名="古今和歌集" AND 本文種別="歌" WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

キー: (語彙素="らし" AND 品詞 LIKE "助動詞%") IN subcorpusName="平安-仮名文学" AND 作品名="古今和歌集" AND 本文種別="歌" WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND

tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

キー: 語彙素="げな" IN (subcorpusName="江戸-人情本" AND (core="true" OR core="false")
OR subcorpusName="江戸-洒落本" AND (部="京都" OR 部="大坂"))
WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND
limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE"
AND endOfLine="CRLF"

『新編日本古典文学全集 古今和歌集』（ジャパナレッジ Lib）

<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=80110V00110015>

・引用文献

竹岡正夫（1961）『富士谷成章全集 語学編歌学編論注』、風間書房

金沢裕之（1998）『近代大阪語変遷の研究』、和泉書院

松本守（1998）「江戸語のソウダとヨウダについて」『専修国文』、第 63 卷

岡部嘉幸（2000）「江戸語における終止形承接のソウダについて」『国語と国文学』、77 卷 9 号

岡部嘉幸（2002）「江戸語におけるソウダとヨウダー推定表現の場合を中心に」『国語と国文学』、
79 卷 10 号

小田勝（2015）『実例詳解 古典文法総覧』、和泉書院

・参考資料

仙波光明（1972）「終止連体形接続の「げな」と「そうな」」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』、
表現社

市村太郎（2023）『『古今集遠鏡』に見られる程度副詞類とその周辺—洒落本での使用状況との比較—』岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信編『コーパスによる日本語史研究 近世編』

久保根子、市村太郎、小木曾智信（2023）『『古今集遠鏡』コーパスの設計・構築』『じんもんこん
2023 論文集』

謝辞

本研究は、JSPS 科研費（23KJ1822）、および国立国語研究所共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」による成果の一部である。

奈良時代から平安時代前半期の資料における「すなはち」と「即・則・便」

柳原恵津子（やなぎはらえつこ、国立国語研究所／日本女子大学）

一 先行研究の確認と本発表の目的

現代語で前の事柄の結果として後の事柄が起こることを示したり、後ろに述べる内容が先に述べた内容の言い換えであることを示したりする接続詞「すなはち」は、遡源的にはある動作が終わったその時という意の名詞であったものが「即座に」の意の副詞用法を経て接続詞へと派生して成立したもので、漢文訓読の場で「即・則・便」などの字に対する和訓として「すなはち」が用いられたことがこの派生の契機となったとされている。

和語「すなはち」の意味や用法の展開を詳細に観察した山崎（二〇〇三）は、上代変体漢文資料の『古事記』、『竹取物語』以降の中古和文、院政期和漢混交文の『今昔物語集』のいずれの資料においても、ある時間軸上の時点を示す名詞用法、もしくはある時点からの時間量の小を示す副詞用法が主であること、ただし『今昔物語集』には前の事柄を受けて後の事柄が起こることを示す接続詞用法への展開が見られること、和語「すなはち」との結びつきは指摘できないが、『日本書紀』の漢字表記の例には同様の接続詞用法が既に見られることを述べる。

一方漢文訓読の場での「すなはち」「即・則・便」の関わりに関しては、山田（一九五三）をはじめとした諸論考で早くから指摘され、「すなはち」は本来名詞用法で、接続副詞や条件の連詞などの用法が主な「即・則・便」とは隔たりがあること、このうち「すなはち」の副詞用法と「即・則・便」の接続副詞用法を接点として両者が結びつき、「すなはち」が接続詞用法持つに至ることが、おおむね修正を要しない議論とされてきた。しかし、近年小林（二〇一七）をはじめとする氏の諸論考によって、平安初期とりわけ前半期には後世ほど漢字の定訓化が進んでいなかったことが指摘され、「即・則・便」に関しても古くは不読とされた用法があったと論じられたことから、従来の議論をより精緻な方向へ書き改める必要が生じている。小林（二〇一七）が具体的に挙げるのは、「①条件の連詞用法の「則」が平安初期前半期には不読とされ、接続助詞「ば」、形式名詞「ときには」を直前の句末に読み添えていたが、平安初期後半から「則」に「チ」を加点する例が現われ、中期以降増加する。」「②接続副詞用法の「即」が平安初期前半には不読とされていたが、やはり平安初期後半から「即」に「チ」を加点する例が見えはじめ、中期以降は宗派によって「すなはち」と読む資料と不読とする資料に分かれるが、弟子・孫弟子と代を重ねる過程で不読を継承しないケースが見られる。」「③同じく接続副詞用法の「則」も平安初期前半には加点が見られず、平安初期後半期から「チ」を加点する例が見られはじめる。」の三点である。この小林の議論は、本来「その時」の意（名詞用法）であった「すなはち」が、接続副詞用法の「則」「即」・条件の連詞用法「則」への訓として初期後半に急速に使われるようになったことを示しており、訓読という行為のみならず和文体や変体漢文体が発展しつつあったこの時期の変化のあり方をさらに多角的に見直すことを要請していると思われる。このような観点から、本発表は上代から平安時代前半期にかけての資料を読み直し、和語「すなはち」と漢字「即・則・便」との間にどのような干渉があったのかを整理したい。

二 『万葉集』および平安時代和文資料、鎌倉期和漢混交文資料における用例

今日「すなはち」の初例とされているのは、つぎの『万葉集』の例である。

- (1) ほととぎす鳴きしすなはち（登時）君が家に行けと追ひしは至るらむかも（『万葉集』巻八・一五〇五、大神女郎）

「ほととぎすが鳴いたその時、あなたの家へ行けと追ったその鳥は着いたでしょうか」との歌意の「鳴いたその時」という時間上のある一点を指す名詞用法である。小島（一九六四）は後漢以後の俗語「登」が「即」と通用され、「登時」も「即時」と等しいことが『文語解』『雅俗漢語詳解』など近世漢文典その他によって知られ、敦煌変文にも例が多いこと（同書八二二頁）、「そのとき」との読みも想定できるが「すなはち」を退ける理由がないことを述べる。また、山崎（二〇〇三）は『万葉集』題詞・左注に

「即」四八例、「登時」四例が確認できると述べた上で、巻十六・三八二四歌左注の「此日会集衆諸、相誘駈使葛井連広成、言須作歌詞。登時広成、応声、即吟此歌。」の「登時」と「即」が、時間指示（「その時」）と時間量の小（「すぐに」）で書き分けられていると指摘する。題詞・左注に四八例見えながら、一五〇五番歌ではむしろ用例数が少ない「登時」の表記が選ばれていることには留意が必要であろう。

山崎（二〇〇三）は、この例を含めた和語「すなはち」の用法を以下のように整理する。

- 一、名詞として、連体形に承接して、従属節や副詞句を作るもの：「…するとすぐに」
- 二、名詞として、時の状況成分となるもの：「そのとき」
- 三、副詞として、時間関係を表すもの：「すぐに」
- 四、接続詞として、前文の結果であることを表すもの：「そこで」
- 五、接続詞として、前文または語のいいかえをあらわすもの：「いいかえと」

- (2) 集りて、とくおろさむとて、綱を引きすぐして綱絶ゆるすなはちに、やしまの鼎の上に、のけざまに落ちたまへり。（『竹取物語』 p.54）→ 一
- (3) 「ここには、すなはちより、『御夜中暁のことも知らでや』と嘆きはべりしかど、道頼が思ふ心侍りて、『しばし』と制しはべりしなり。（『落窪物語』 p.242）→ 二
- (4) そがもとにも、「かうかうのいそぎなむする。絹少し」と召しに、はしらせ、つかはしたりければ、すなはち、守は男君の御許に百疋奉り、妻は北の方の御許に、茜に染めたる絹二十疋奉れり。（『落窪物語』 p.270）→ 三
- (5) 阿修羅、いやますますに怒りていはく、「…天稚御子下りまして、三年掘れる谷に、天女、音声樂をして植ゑし木なり。さて、すなはち、天女のたまはく、『木は、阿修羅の万劫の罪なかつ過ぎむ世に、山より西にさしたる枝枯れむものぞ。…』」（『宇津保物語』（俊蔭）1 p.27¹）→ 四
- (6) そのほかに、近き世にその名聞えたる人は、すなはち、僧正遍照は、歌のさまは得たれども、まことすくなし。（『古今和歌集』 仮名序 p.26）→ 五

この分類法で、『日本語歴史コーパス（CHJ）平安時代編 I 仮名文学』で検索して得た平安時代前半期和文資料の用例を用法ごとにまとめると、以下のようになる。

表1 『万葉集』・平安時代前半期和文資料における「すなはち」用法

	名詞用法		副詞用法	接続詞用法		総計
	連用前接	左以外		条件	言い換え	
万葉集 (759)	1					1
竹取物語(900)	1		1			2
古今和歌集 (906)			1		1	2
伊勢物語 (920)						0
大和物語 (951)			4			4
平中物語(960)						0
後撰和歌集(955)			1			1
蜻蛉日記(974)	1	2	5			8
落窪物語(986)	2	1	4			7
枕草子(1001)	4		6			10
総計	8	3	22	0	1	35

詳細な分析は山崎（二〇〇三）に委ねたいが、(4)「すぐに」の意の副詞用法と、(5)「そこで」（条件）の意を持つ接続詞用法には時間的な、あるいは論理的な先後関係という連続性があり、境界を見極めることが難しい²。接続詞用法(4)の『宇津保物語』俊蔭巻・(5)の『古今集』仮名序共に漢文訓読語の影響が強いことで知られる資料で、その他の平安和文から(4)(5)の用例を確認することは困難で

¹ 本調査範囲に四の例がないため、山崎（二〇〇三）が挙例した例を挙げる。

² (5)の例を『新編全集』の口語訳は「そのとき天女が仰せになるには」とすることからも、このことがうかがえる。

あるため、和文体を見る限り、(4)(5)の用法間の干渉は目立たないが、次節で見る訓点資料では、どちらとも解釈できる例が散見される。だが和文体での用法は名詞用法・副詞用法の範囲で用法の幅は安定しており、接続詞用法は『今昔物語集』などの和漢混交文資料ではっきりと出現する。

三 平安初期訓点資料における加點例の再確認

つぎに、平安初期訓点資料での「即・則・便」の読みを見る。まず原本『玉篇』(五四三年成立)を抄録したものとされる空海撰『篆隸万象名義』(高山寺本)³を見ると、それぞれ「即^{子力反 就也 今也}」(第五帖

三才)、「則^{子懶反 法也 親也 常也 辭也 即也 式 則古文 則上文 則上文}」(第五帖四三才)⁴、「便^{婢反 辨也 利也 習也}」(第一帖五四ウ)のように記述さ

れており、「即」「則」は一部通じるとの認識が示されている。「便」についても小林(二〇一七)が指摘するように東大寺図書館蔵『大乘大集地藏十輪經』元慶七年(八八三)点に「是(の)如き六種の方便

(は)、入一出息一觀(を)ば修習し、^即便(ち)能(く)見(音)を^{(き)よ}淨(む)ルナリ。」(卷二・一八五行目)との字義を示す書き込みがあり、すくなくともこの時期には同義の認識があったとわかる。

先述のとおり、小林(二〇〇七)によって条件の連詞「則」、接続副詞「則」、接続副詞「即」に平安初期前半の加點例が見いだせず、平安初期後半期から散見され始める指摘されている。『訓点語彙集成』によって加點例を確認すると、西暦1000年以前の「すなはち」の加點例は「乃チ(08505014-8『大唐三藏玄奘法師表啓』⁵)」「乃(すなは)チ(09505020-151ほか三例『大唐西域記』)」「仍スナハチ(08505008『四分律行事鈔』)」「便(すなは)チ(09505020-126ほか三例『大唐西域記』)」「則チ(09505020-492『大唐西域記』)」「尋チ(08505014-103『大唐三藏玄奘法師表啓』)」「曾スナ(ハチ)(08505008『四分律行事鈔』)」「載則チ(08505014-11『大唐三藏玄奘法師表啓』)」といった十二例、および後述する西大寺本『金光明最勝王經』平安初期点の二例程度認められ、『最勝王經』の例以外はやはり八五〇年以降の資料で確認できる。

ここで加點が一般化する直前の西大寺本『金光明最勝王經』平安初期点における「即・則・便」への加點例と、加點のない例の訓法を整理したい。

(7) 是の諸の人王い、若(し)能ク至レル心を(もちて、)是の經を聽受せば、^{スナ(は)}則(ち)廣大希有の

供養をモチテ(、)[於]我釋迦牟尼應正等覺を供養するに爲りナむ」(卷六・六二)⁶

(8) 尔(の)時に彼の王[從]夢ヨリ覺(め)て大歡喜を生すこと身に充遍し(、)天の曉ケ已るに至(り)て王宮を出(で)て(、)苾芻僧伽の處に往キ詣り(、)聖衆を恭敬し供養し已

(り)て(、)即に便(ち)彼の諸の大衆に問(ひ)て(、)「頗シ法師の名{は}實積といふが

(、)功德成就して衆生を化する有(り)ヤ(。)」といひキ。(卷九・一七)

(7)の例は、「則」の右傍に抹消された(あるいは剥落した)大字白点で記されている。本点に(8)以外の加點例が見られないにもかかわらず全十巻を通じてこの例にのみ加點されているのが不審であるが、為政者にとって『最勝王經』を読むことは釈迦に皈依することと同じほど大事である、というこ

³ 『篆隸万象名義』は天長四(八二七)～承和二(八三五)年の間に成立かとされる。高山寺本は永久二年(一一一四)写。

⁴ 見出し字(「即」)上部に「𠂔」の書入れあり。

⁵ 用例後ろの数字は『訓点語彙集成』記載の資料番号および巻・行などの番号。なお資料番号の上四桁(この例では「0850」)は加點年代を示す。

⁶ 『最勝王經』平安初期点の調査および挙例は、巻一については『CHJ』所収『平安時代編Ⅱ訓点資料』、巻二以降は巻一に倣って新たに作成した独自の訓読文テキストファイルを使用した。訓読文の表記はフコト点加點部分を平仮名、仮名点加點部分を片仮名、作業者による補読部分を丸括弧付き平仮名で、不読とする字を〔 〕で括って示す。また、用例の後ろに巻と行数を記した。

の経の要諦が述べられる部分であるために、先後の論理関係を明示しなかった可能性が指摘できる。春日の述べるようにのちの接続詞的な「トリモナホサズ」の意と解するのが理解しやすいが、和語「すなはち」を読み添えることで当時の「すなはち」の第一義的な意味であった「そのとたん」という即時性が強調されたであろう⁸。(8)は「即」に本点で「に」のヲコト点が付されている。春日(一九四二)の訓読文ではこれを「ただちに」と読み⁹、『訓点語彙集成 第五巻 た〜と』の「ただちに」項目でも存義としながらこの例を挙げる。しかし(2)の『竹取物語』の例のように、名詞を副詞化した「すなはちに」の形とした可能性もある。

この二例以外の「即・則・便」が本資料においてどう読まれたか、不読とされたのか、すべてあるいは一部の用法が「すなはち」と読まれたのかはわからない。ただ、上記二例に限って加点があることから、これらの漢字と和訓「すなはち」の結びつきが十分でなかった様子が感受される。これらの字はいずれも多義だが、細かい意味の差異は割愛して分類すると、本資料においてはどの字もおおむね「①副詞用法 すると／すぐに」「②副詞用法 強意」「③連詞(接続詞) 用法 条件」の意味・用法が見られる。

表2 『最勝王経』における「即・則・便(・即便)」の用法と用例数

	副詞用法		連詞用法	計
	すると／すぐに	強意	条件	
即	88	46	8	142
則	2	15	17	34
便	12	6	3	21
即便	18	3	0	21
計	119	71	28	218

(9) 尔(の)時に天帝釋、佛の威力を承りて、即(ち)〔從〕座ヨリ起チ、偏に右(の)肩を祖にし
(、)右の膝を地に著ケ掌を合(せ)て(、)佛に向(ひ)たてまつりヌ(、)(卷三一一二) → 副詞用法「すると／すぐに」

(10) 魚い食^ヌを得已(り)て、悉ク皆飽足しにき(、)便(ち)是の念を作(し)シク、「我レ今食を施
して、魚に命^スを得令(め)つ。(卷九-三四〇) → 副詞用法「すると／すぐに」

(11) 若(し)有^ルうむ善男子善女人の此の呪を持(せ)むいは〔者〕、能ク無量無邊の福德の〔之〕聚
を生(せ)む(、)即(ち)是レ無數の諸佛を供養し恭敬し尊重し讃歎するになりヌ。(卷五一一
六) → 副詞用法 強意

(12) 若(し)如來の於に諍論の心を起(さ)むいは、是レのヒトは則(ち)〔於〕如來を見たてまつ
らむこと能(は)不^シ。(卷二一九六) → 副詞用法 強意

(13) 若(し)此の身を捨てば、則(ち)無量の癰疽と惡疾と百千の怖畏とをも捨てむ。(卷一〇-七
七) → 連詞用法 条件(仮定)

(14) 當に此の時の中に隨(ひ)て(、)〔於〕飲食を調息して(、)腹に入^スれて消散(せ)令(め)
ツルときには(、)衆の病則(ち)生(せ)不^ス。(卷九-二四三) → 連詞用法 条件(確定)

⁷ 春日(一九四二)二八三頁。

⁸ ただ本資料全体の加点状況からみるとやはり二十年ほど時代を先取りした読まれ方と言え、釘貫(一九九六)の本点にある「コ」の甲乙の書き分けが大字にはないとの指摘と同様に、大字が本点よりのちのものであることの例証となる可能性はある。

⁹ 同書本文篇一六四頁一七行目。

(14) 復(た) 是の念を作(さ) ク、虎い今羸^ヤ瘠^サせて我を食フこと能(は) 不^サとオモヒテ(、) 即

(ち) 起(ち) て刀を求(め) むとするに、竟に得ルこと能(は) 不^(サ)(り) しかば、即(ち) 乾
(れ) たる竹を以て、頸を刺(し) て血を出す。(巻一〇-九五) → 連詞用法 条件(確定)

(9)(10) は「すると座より立ちあがって」「皆満ち足りた。するとこのような思いをなして」の意だが、「即・便」が示しているのは前件と後件が時系列に沿って生じるということであって、「即座に」

「～したその時に」といった山崎の言う「時間量の小」ではない。先に挙げた『篆隸万象名義』「即」項に「今也」とあるように時間量を指すこともあるが、実際には(9)(10)のように即座であるか否かはわからない例がほとんどである。意味が極めて似ているように思われる「すなはち」と「即・則・便」の間にはこのような決定的な違いがある。そのため定訓として固定するのに時間を要した可能性がある。

(11) から(14) はさらに和語「すなはち」とは距離がある用法である。このような和語と古代漢語との異なりと向き合いながら文意に即した読みを付与する試行錯誤を経て、八五〇年ごろから「即・則・便」全般を「すなはち」と読む方向へ動きだしたものと思われる。

四、変体漢文における「即・則・便」の用法

山崎(二〇〇三)によると、『日本書紀』『古事記』で用いられる「即」は副詞用法(「1、動作・状況がすぐ行われたり、発生したりすることを示す」「2、のちの一つの動作・状況が、前の動作・状況の発生や出現に緊接している」「3、人・人物・動作行為について、肯定・強調・事実の説明がその通りであることを表す」)のみで、仮設条件・譲歩条件を示す連詞や動作行為の発生・出現する場所・時間を表す介詞の用法は見られないとのことである。漢文訓読という行為での読みが今日に伝わる形で記される以前の漢文体であるが、『最勝王経』に見られる条件の連詞用法は書記には使われず、強意の表現が採用されている。中古和文資料の中では例が限られるものの『古今集』仮名序に既に例が見え((6))、『最勝王経』に異例の加点の形跡が見られた((7)) ことと合わせて考察すると、上代からすでに強意の副詞用法は強く意識され、和語「すなはち」と関連付けて把握されたことが指摘できる。

さらに実用漢文の方へ目を移すと、上代以降、古文書で見られる例の大半は「件書了、即奉送」(天平十八年四月正倉院文書)のように職務上の作業、政務・儀式の手順を時系列に沿って述べる副詞用法(すると/すぐに)である。この状況は十世紀古記録の『貞信公記』¹⁰『九暦』¹¹にもさらに顕著にあらわれる。

表3 『貞信公記』『九暦』の「即・則・便」

	即	則	便	計
貞信公記	43	1	17	61
九暦	82	2	10	94
計	125	3	27	155

(15) 廿六日、行幸神泉、至暮小雨、即止、(『貞信公記抄』延喜一三(九一三)年五月二六日)

(16) 未一点、中納言平伊望参進御所、令藏人奏御馬解文、則返給、(『九暦』承平七(九三七)年八月二八日)

(17) 義方経公卿座東南、候 御帳巽角、伊尹便進西、候御帳東頭、(『九暦』天曆四(九五〇)年一〇月八日)

¹⁰ 調査対象は九条家本『貞信公記抄』(記事の期間は延喜七(九〇七)年から天曆二(九四八)年)。

¹¹ 調査対象は内閣文庫蔵『九暦抄』(記事の期間は天曆元(九四七)年から天徳四(九六〇)年)および九条家本『九条殿記』(記事の期間は承平二(九三二)年から天徳四年)。

これらの例は「～するとすぐに」というほど時間量の小ささに重きがあるわけではないが、前の行為のあとそのまま後の行為が行われる点では和語「すなはち」の本来の意味に近い。記録体が成熟し、様式としての古記録が成立すると漢文色の強い用法を用いる文脈もあらわれるであろうが、実用漢文の骨格として早くから定着した用法がある点に注意される。

五、まとめ

本発表で見た上代から平安初期にかけての資料からわかることをまとめると、記紀以来の実用漢文を含めた漢字文執筆の場で頻用された用法の幅は和語「すなはち」が本来持っていた「時間量の小」の意と漢文の語法が持っていた「すると」という意味の交わる部分にある、さらに強意の副詞用法も記紀や平安初期訓点資料、『古今集』仮名序などに見受けられ、用法として意識されていた、ということになる。『最勝王経』平安初期点には和語「すなはち」と本質的に異なる「即・則・便」の読みを模索する中で、より正確な解釈を助けるために「すなはち」が加えられたように見える形跡も見られた。山崎（二〇〇三）の指摘する中古和文での用法が手紙や対話のやり取りに偏るという点にも、『貞信公記』『九暦』との類似が認められる。このように、和文体の側も漢文訓読での言語や実用漢文の側も、他の文体からの影響や干渉を受けながら用法の幅や訓法のあり方を固め、流動させていったことが窺える。今回取り上げなかった資料群も視野に入れ、本発表で得られた素描をさらに精緻にすることを今後の課題としたい。

〈参考文献〉

- 大島正二（一九九八）『中国言語学史 増訂版』（汲古書院、初版は一九九七年刊）
春日政治（一九四二）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』（勉誠社）本発表は『春日政治著作集』別巻（一九八五年、勉誠社刊）による。
釘貫亨（一九九六）『古代日本語の形態変化』（和泉書院）第二部第三章
小島憲之（一九六四）『上代日本文学と中国文学：出典論を中心とする比較文学的考察 中』（塙書房）
小林芳規（二〇一七）『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究Ⅶ 変遷の原理』（汲古書院）第三章
総本山西大寺（二〇一三）『国宝西大寺本金光明最勝王経 天平宝字六年百済豊虫願経』（勉誠出版）
中田祝夫（一九五八）『古点本の国語学的研究 訳文篇』（講談社）
山崎貞子（二〇〇三）「古代語の副詞「すなはち」の考察——「即」との比較から——」（『横浜国大言語研究』二五）
山田孝雄（一九五三）『漢文の訓読によりて伝えられたる語法』（宝文館）pp.164-180

〈底本等〉

- 『大乘大衆地藏十輪経』（東大寺図書館本）：中田（一九五八）による。
『貞信公記』（九条家本『貞信公記』：『大日本古記録』）
『篆隸万象名義』：高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺古辞書資料第一』高山寺資料叢書第六冊、一九七七年、東京大学出版会

〈web上のデータベース等〉 ※二〇二四年九月一七日確認

- 国立国語研究所『日本語歴史コーパス』平安時代編Ⅰ 仮名文学・平安時代編Ⅱ 訓点資料
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search>
東京大学史料編纂所『古記録フルテキストデータベース』『奈良時代古文書フルテキストデータベース』
<https://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>

〈付記〉

本研究は広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」国語研ユニット「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷」、科学研究費基盤研究（C）「記録体における助字類の用法の形成過程に関する記述的研究」（24K03936）の助成によって行われたものである。

古文書における「候」字形の変化

やまもと ひろし
山本 久(東京大学学生)

はじめに

本発表は、古文書の文体の一つ「候文」の成立過程を、表記史の観点から検討するものである。なお、「候文」とは、近世文書に画一的に使用された文体を指すことが多いが、中世文書において「丁寧語」候」を使用する文体も、近世候文への連続性を前提として、本発表では候文と呼ぶ。

候文における「候」字は、「ㄣ」字のように極端に簡略化されて表記される場合があることが知られている(『日本語学大辞典』五八三頁・例1)。このように簡略化された「候」字については、近世候文において、節ごとに必ず出現するという文法上の特徴も含めて句読点のように機能することが明らかにされている(矢田(二〇一二)第四編第三章)。本発表では、(1)極端な簡略化はいつ生じたのか、(2)その背景は何か、という未検討の問題を検討していく。

【例1】国立歴史民俗博物館蔵『頼資卿熊野詣記』紙背文書

「上洛候」



第一節 分析の枠組み

まず、(1)の検討のために、中世文書の「候」字を集め、極端に簡略化された「候」がいつ現れるのかを調べる。分析の枠組みとして、「人偏の払い先に相当する左中央部の頂点がある」A型、「左中央部の頂点はないが、偏の下部から旁の上部へ向かう右斜上方向への運筆がある」B型、「右斜上方向への運筆もない」C型という枠組みを立てる(注二)。

A型―【例2】東京大学史料編纂所蔵『扶桑古文集』紙背文書

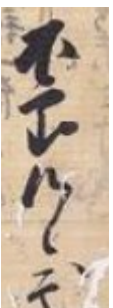
「女房候也」



B型―【例3】東京大学史料編纂所蔵『扶桑古文集』紙背文書

(注二) 斎藤達哉(二〇二二)は、国会図書館本『百二十句本平家物語』と龍門文庫本『宇治拾遺物語』に見られる「候」の字形について検討するうえで、「草化字体」と「省略字体」を区別している(二五八頁)。斎藤氏の命名からは、これらが「草化」と「省略」という異なる方法によって生み出されたことを示唆しているようにも読めるが、本発表では、「草化字体」がさらに簡略化されて「省略字体」が生まれたと考え、両字形を連続的なものと捉えた。両字形の違いや、それが持つ意味については、今後の課題である。

「不審候之(処)」



C型―【例4】国立歴史民俗博物館蔵『頼資卿熊野詣記』紙背文書

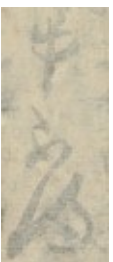
「如此執申候」



さて、これらの「候」字形のうち、「極端に簡略化された」と言えるのは、どの段階だろうか？ここで注意されるのは、「候」の前代に使用された敬語「侍」字も、B型相当の簡略化は確認できるという点である(【例5】)。よって、C型の成立を以て、「候」字の簡略化が完了したとみなす。

【例5】東京国立博物館蔵九条本『延喜式』巻二八紙背文書

「牛不侍」



第二節 利用資料

前節で述べた枠組のもと、書写年代がほぼ特定可能かつ、字形の確認できる文書群を選定し、字形の変化を検討する。本発表では、時期を1期(一二世紀後半)・2期(一二世紀後半)・3期(一二世紀前半)・中盤と分けたうえで、次の文書群を用いる。利用した写真(影印・複製)、参照した翻刻は、稿末に掲げている。

1期…①青蓮院蔵『諸仏菩薩釈義』紙背文書／②東寺蔵『東征伝』紙背文書／③京都大学蔵『兵範記』仁平二年正月二月記紙背文書／④石山寺蔵『伝法記』紙背文書

2期…⑤国立歴史民俗博物館蔵「六曲屏風貼付」高山寺文書／⑥東京大学史料編纂所蔵『扶桑古文集』紙背文書

3期…⑦冷泉家蔵定家自筆本『明月記』寛喜元年三月四月記紙背文書／⑧国立歴史民俗博物館蔵『頼資卿記』熊野詣記・後鳥羽院熊野詣記紙背文書

第三節 検討の結果

第一項 集計結果

第一節で述べた枠組みに基づいて、各期の「候」字形の集計を行う。この際、平仮名書部分の量を全体的に判断し、平仮名が中心に使用されているもの(平仮名主体文書)は集計から除き、漢字が中心に使用されているもの(漢字主体文書)のみを集計する。結果は次のようになった。

1期(二三四例)―A型:二七八例／B型:四六例／C型:〇例／(不明:一〇例)

2期(三〇八例)―A型:一三八例/B型:一六八例/C型:〇例/(不明:二例)

3期(三五二例)―A型:七八例/B型:一五四例/C型:八六例/(不明:三四例)

1期にはA型が中心であるが、2期にはB型が増え、3期にはC型が出現することがわかる。「候」字形の簡略化は、段階的に進行し、一二世紀後半―一三世紀前半頃に完了したと言える。

第二項 「候」認定の問題点

前項の結果への補足を行う。「候」の字形の認定の問題点として、「也」「歟」「了」の上部にみられる点のような形をどう認定するか、という点がある。【例6】の「歟」は、構文上「候歟」とは解釈できないが、構文によっては、上部の点のような形がC型「候」と解釈できる例がある。

【例6】東京大学史料編纂所蔵『扶桑古文集』紙背文書

「聞食候覧歟」

このような形は、1期から見られ、参照した翻刻には「候」と翻刻されているものもある。ただし、基本的には「也」「歟」「了」の一部とみるのが妥当と考える。

この他にも、一見するとC型「候」のようにも見えるが、「之」字と迷うもの、「日」字と迷うもの、などもある。これらの判定については、なお検討を要する。ただし、確実な例がまとまって見られるのが、3期からであることは確かである。一二世紀後半から一三世紀前半までの間に簡略化が完了したという見通しを立てることは、誤りではないと考えている。

第四節 「候」簡略化の背景

第二項 「仮名文書から漢字文書への影響」

本節では、(1)の検討結果を踏まえて、(2)の問題を検討する。

なぜ、C型のような簡略化字形が漢字主体文書に使用されるようになったのだろうか？(2)で注意されるのは、C型字形は、3期の平仮名主体文書にも確認されるという点である(【例7】)。「候」字形の変化は、平仮名主体文書と漢字主体文書に共通の現象であることがわかる。

【例7】国立歴史民俗博物館蔵『修明門院熊野詣記』紙背文書

「うれしく候」



中世前期時点で、平仮名主体文書と漢字主体文書が共通する現象を持つことは、すでに指摘がある。矢田勉(二〇一一)は、古文書に使用される丁寧語「候」の使用頻度を検討し、一一世紀末期以前には、「候」は「多種の文末形式の中の一つに過ぎず、かつその中で優勢なものでもない」

一方、一一世紀末期以降になると、「消息・書状の分野に於いて：仮名消息・変体漢文書状共に「きふらふ」乃至「候」を多用した例が一般化する」ことを指摘する（七九頁）。また、「消息・書状以外の文書に於いての「候」字の多用は、鎌倉時代に入って、まず変体漢文文書に先んじて仮名文書から生ずること（八二頁）や、「候者」「候也」といった「候」の接続形式に仮名文書と漢字文書との共通点が見てとれること等を根拠に、矢田氏は、「変体漢文史の一つの到達点となった候文について、その成立に対する仮名文書の影響の介在」（九〇頁）がみられることを指摘する。

矢田氏の指摘した「候」の多用という文法現象は一一世紀末期、本発表で指摘した「候」字の簡略化という表記現象は一二世紀後半～一三世紀前半と、約一〇〇年の差がある。この差の意味を検討することも重要だが、本発表では、近世候文にも認められるこれらの特徴が、いずれも中世前期という時期にはすでに成立していたことを重視し、これらを、中世前期に「平仮名主体文書から漢字主体文書への影響」が起ったという一連の流れに位置するものとして把握したい。そのうえで、このような流れが生じた歴史的背景について考えることを目指す。

なお、本発表では、「平仮名主体文書から漢字主体文書への影響」という概念を、より具体的には、「使用字種という相違を持つ平仮名主体文書と漢字主体文書の間で、類似する言語的特徴の使用を許容する意識が生じ、平仮名主体文書の言語的特徴が漢字主体文書にも使用されるようになること」という意味で用いる。両者に共通してみられる言語的特徴が、平仮名主体文書↓漢字主体文書という一方向的に成立したかどうかは、実際にはわからないことも多い。ただし、矢田氏論文には譲状における「候」の多用が平仮名主体文書において先行することの指摘もあり、平仮名主体文書↓漢字主体文書という方向で生じた現象が多いと考える^{〔注二〕}。

第二項 書状の字種と役割

さて、中世文書には公式様文書、下文様文書、書札様文書、証書類といった多様な様式があるが、「候」使用そのものが書札様文書、特に書状に多い以上、「候」の多用、簡略化された「候」の使用といった特徴も書状に多くみられる。よって、中世前期において、「平仮名主体文書から漢字主体文書への影響」を引き起こすような何らかの変化が、書状に生じたことが想定できる。

以下で注目されるのは、日本史学の成果で、一一～一二世紀にかけて書状が新たな役割を発

〔注一〕斎藤達哉（二〇二二）は、平仮名資料である国会図書館本『百二十句本平家物語』と龍門文庫本『宇治拾遺物語』に見られる「省略字体」が、片仮名資料である斯道文庫本『百二十句本平家物語』や鈴鹿本『今昔物語集』には見られないことを根拠に、「候」の省略字体は、仮名の文字列の中で用いられるためのものであることを意味しているのではないだろうか」と指摘する（二七七頁）。本発表は古文書を対象としているが、「候」の簡略化と平仮名表記とに関連を見出す点で、斎藤氏の見解を支持する。

達させたことが指摘されている点である。この前提となる社会状況として、一一世紀には、在京国司を差出人、各国の国衙を宛先とする文書である国司庁宣が、実際には文書による権利を得る荘園領主に届けられるなど、文書の宛先と実際の届先が分離する状況が生じるようになる（佐藤進一（一九九〇）一一七～一二一頁）。これを踏まえて、上杉和彦（一九九六）は、実際の届先に対して権利文書の説明を行う文書が必要となり、「庁宣による権利付与とそれに関する経過の説明を行う書状様式の文書」（三三六頁）である「副状」が成立したことを指摘する。

さらに、このような書状に、仮名を含む文書も使用されたという点が重要である。高橋一樹（二〇一九）は、他種の文書と書状とをセットで使用する事例が、国司庁宣だけでなく下文や訴状といった文書にもあてはまることを述べる中で、宗像大社の応永一六（一四〇九）年四月一日社家文書惣目録写から、源頼朝の下文と仮名書状のセットが保存されていた事例、『明月記』建保元年九月五日条の記述から、家領内で起こった紛争の解決にあたって、御家人から漢文文書と仮名書状のセットが定家に送られてきた事例を指摘している（二六～二七頁）。

これらの書状における、平仮名の多寡、平仮名主体文書の特徴の現れの有無などは、発受給者の位相などにも左右されると思われる、一律に規定できるものではない。ただし、程度の差はあれ仮名が使用されたことの結果として想定されるのは、「漢字専用Ⅱ公的／仮名使用Ⅱ私的」とは必ずしも意識されなくなった、ということである。下文などの権利文書のレベルでは漢字専用を正統とする意識が強かったと思われる一方、「権利文書をはじめ種々の文書の発給・授与についての事情を説明する」という意味での「公的」な手続きの中では、字種を厳密に規定しない文書のやり取りが行われていた。こうした字種に対する意識の変化が一一～一二世紀にかけて徐々に起こると、平仮名使用と結びついて成立した文法・表記等の言語的特徴も、漢字主体文書の言語的特徴と対立するものとしては認識されず、漢字主体文書にも自然に使用されるようになった現象が、「平仮名主体文書から漢字主体文書への影響」の内実だったと考えたい。

以上の点について、補足となる調査結果を示す。『平安遺文』所収文書を対象に、大書平仮名が使用されている書札様文書を集めたうえで、そのうち何らかの文書とセットで使用されたことが文面などからわかる文書を探してみる。結果、承暦三（一〇七九）年一〇月一四日の書入を持つ東大寺文書の某書状（三卷一一七〇号）を初見として、二二通が確認できた。

この結果は、一一世紀以前には大書平仮名を含む文書はセットとして使用されなかったことを証明するものではない。しかし、特に一二世紀後半以降に、セット使用という役割において字種を厳密に規定しない文書のやり取りがなされたこと、かつ、それらの一部に保存の価値が認められるようになったこと、は確かだろう。なお、大書平仮名を含む書札様文書そのものは、一〇

七五年以前に一通、一〇七六年以降は八九通が確認できる。他文書とのセット使用が現存文書の全てを説明できるわけではないが、現存文書の比較的目的立つ特徴であることは確かであり、字種に対する意識の変化の一因であるとは言えそうである。このような文書史上の変化によって、字種、さらには字種と結びついた言語的特徴に対する意識も変化し、平仮名主体文書の特徴が漢字主体文書にも使用されるようになったというのが、②に対する本発表の結論である。

利用資料

青蓮院蔵『諸仏菩薩釈義』紙背文書…**影印・翻刻**：久曾神昇（一九九二）『平安時代仮名書状の研究 増補改訂版』風間書房／東寺蔵『東征伝』紙背文書…**複製**：『古典保存会』、**翻刻**：『平安遺文』（二部のみ）／京都大学蔵『兵範記』仁平二年正月二月記紙背文書…**写真**：『京都大学貴重資料デジタルアーカイブ』、**翻刻**：『平安遺文』（一部のみ）／石山寺蔵『伝法記』紙背文書…**影印・翻刻**：石山寺（企画）・林屋辰三郎（編）（一九九一）『伝法記とその紙背文書 石山寺蔵』法蔵館／国立歴史民俗博物館蔵『六曲屏風貼付』高山寺文書…**写真**：『国立歴史民俗博物館蔵資料画像データベース』、**翻刻**：山本信吉（一九七六）『文化庁保管高山寺文書（六曲屏風貼付）』『古文書研究』二〇／東京大学史料編纂所蔵『扶桑古文集』紙背文書…**写真**：『東京大学史料編纂所蔵史料目録データベース』、**翻刻**：藤原重雄・末柄豊（二〇〇七）『東京大学史料編纂所蔵『和歌真字序集（扶桑古文集）』紙背文書』『東京大学史料編纂所研究紀要』一七／冷泉家蔵定家自筆本『明月記』寛喜元年三月四月記紙背文書…**影印**：冷泉家時雨亭文庫（編）（二〇〇〇）『明月記 四』（冷泉家時雨亭叢書『五九』朝日新聞社、**翻刻**：冷泉家時雨亭文庫（編）（二〇一〇）『翻刻明月記紙背文書』（冷泉家時雨亭叢書『別巻一』朝日新聞社／国立歴史民俗博物館蔵『頼資卿記』熊野詣記・後鳥羽院熊野詣記）紙背文書…**写真**：『国立歴史民俗博物館蔵資料画像データベース』、**翻刻**：遠藤珠紀・尾上陽介・宮崎肇（二〇一〇）『頼資卿熊野詣記』後鳥羽院修明門院熊野御幸記』『修明門院熊野御幸記』紙背文書の紹介『鎌倉遺文研究』二六※掲載図版は、国立歴史民俗博物館（『頼資卿熊野詣記』紙背文書、『修明門院熊野詣記』紙背文書、東京大学史料編纂所（『扶桑古文集』紙背文書、東京国立博物館（九条本『延喜式』紙背文書）により提供された画像データによる。

文献

上杉和彦（一九九六）『日本中世法体系成立史論（歴史科学叢書）校倉書房／斎藤達哉（二〇二二）『国語仮名表記史の研究』武蔵野書院／佐藤進一（一九九〇）『日本中世史論集』岩波書店／高橋一樹（二〇一九）『中世前期における書状のコミュニケーション論的考察』矢田俊文（編）『戦国期文書論』高志書院／日本語学会（編）（二〇一八）『日本語学大辞典』東京堂出版／矢田勉（二〇一一）『表記体間の干渉と新表記体の創出―候文の成立に対する仮名文書の関与について―』『文学』一一・三／同（二〇一一）『国語文字・表記史の研究』汲古書院

呉語系中国資料にみる日本語のモーラについて —陰声韻と入声韻の転換に着目して—

おう しゅんらい
王 竣磊 (東京大学学生)

1. はじめに

呉語によって日本語を音写する際には、音節単位で日本語音を捉えて書き表すことが一般的である。以下にいくつかの例を挙げる。

『日本国考略』 (1523)	「十」	多陰＝トオ	(331)
	「曉得」	失入＝シッ 大陰＝タ	(179)
	「香」	宣陽＝セン 哥陰＝カウ	(264)
『海外奇談』 (18 世紀)	「十」	妥陰＝トオ	(719)
	「散」	赤入＝チッ 搭入＝タ	(864)
	「蘿蔔」	代陰＝ダイ 工陽＝コン	(433)
『東語簡要』 (1884)	「十」	拖陰＝トオ	(203)
	「動身」	塔入＝タッ 搭入＝タ	(758)
	「買一半」	夯陽＝ハン 蓬陽＝ブン 卡陰＝カ 汚陰＝ウ	(898)

日本語の CVN 音節は「宣」「工」「夯」「蓬」といった陽声韻(＝鼻音韻尾を持つ音節)で写され、CVQ 音節は「失」「赤」「塔」といった入声韻(＝無開放閉鎖音韻尾を持つ音節)で写されている。CVV 音節^{注1}には、「多」「妥」「拖」「哥」「代」といった陰声韻(＝i 韻尾・u 韻尾を持つか、韻尾のない音節)、あるいは「卡汚」のような漢字二字表記が用いられている。このような対応関係は、必ずしもすべての項目に当てはまるわけではないが^{注2}、いずれの呉語系中国資料においても確認できる。しかし、最も無標だと考えられる CV 音節を音写するにあたって、陰声韻のほか、音声的にやや離れている入声韻も使われており、文献内・文献間における音訳漢字の使用状況はかなり複雑にみえる。以下にいくつかの例を挙げる。

『日本国考略』 (1523)	「眼」	眉陰＝メ	(225)
	「珠」	他陰＝タ 賣陰＝マ	(47)
『海外奇談』 (18 世紀)	「眼睛」	米陰＝メ	(125)
	「偶然」	搭入＝タ 麦入＝マ	(926)
『東語簡要』 (1884)	「目」	密入＝メ	(345)
	「打彈子」	搭入＝タ 埋陰＝マ	(963)

呉語の入声韻は、末尾の閉鎖と持続時間の短さ^{注3}が特徴だとされており(朱ほか 2008)、語中では閉鎖が弱まり、単なる短音で現れることもあると報告されている(趙 1928)。陰陽声韻と入声韻にある持続時間の違いは、音韻論的な長短対立と解釈されず、韻尾に伴う副次的な音声上の差異だとされている^{注4}。通時的にみれば、入声韻は、中古音の段階から現代にかけて、調音点の変化-p, t, k>-ʔを遂げているが、陰陽声韻との間に存在する長短の対比は一貫して維持されていると考えられる^{注5}。このような長短の対比は音訳漢字の選択に影響を及ぼしたかもしれない。

以上を踏まえ、本発表では、呉語系中国資料を詳細に調査し、日本語 CV 音節の音写における陰声韻と入声韻の使用状況を明らかにする。その上で、入声韻の使用に焦点を当て、その背後にある音声実現を考察する。

注1 本発表でいう「CVV 音節」には、二重母音のほか、母音連接と長母音も含まれる。厳密には三者を区別して扱う必要があるが、その認定が研究者によって異なることや、通時の変化が絡んでいること、音訳側にそれほど区別がつかないことなどを勘案し、本発表では一括して扱うことにした。

注2 例えば『東語簡要』830「當心 用情 ヨウジン」とあるように、CVV 音節「ヨウ」に「用」という陽声韻字が当てられている。これは「ジン」の鼻音の響きに影響されたためだと考えられる。このような音写は 2 で述べる語句型音写の特徴であり、音訳者が、日本語の音声に接したその場の感覚に忠実であることの現れとも言えよう。

注3 現代上海方言の実験音声学データによると、男性話者の T1 陰平が平均 219ms であるのに対し、T4 陰入が平均 77ms である。朱ほか (2008) は、現代諸方言を全体的にみて、陰陽声韻が平均 300ms であるのに対し、入声韻が平均 100ms であるとまとめている。

注4 共時的な分析では、持続時間と閉鎖の関係について、(1)短さを副次的に捉える説、(2)閉鎖を副次的に捉える説、(3)両者を互いに独立した特徴とする説がある。(2)(3)を採ると、現代呉語の音韻体系に母音の長短対立を認めることになる。本発表では、この問題に深入りせず、通説に従い、短さを副次的な要素と解釈する。

注5 入声韻韻尾の変化と並行して、陽声韻韻尾もまた-m, -n, -ŋの統合を遂げている。遊 (2018) は明成化本『白兔記』の誤字を分析し、陽入声韻韻尾の変化について、15 世紀中頃にすでに完了した可能性があると述べている。

2. 資料調査

本発表では、14 世紀後期から 19 世紀後期までの呉語系中国資料 8 点を用い、以下に示す 3 つの角度から、CV 音節に当たる陰声韻と入声韻の使用状況を把握する^{注6}。

- ①字母型音写資料 3 点（『書史会要』1376, 『日本一鑑』1565, 『東語入門』1895）^{注7}において、陰声韻と入声韻がどれほど使用されたかを概観する（附表 1）。
- ②語句型音写資料 5 点（『日本国考略』1523, 『日本図纂』1561, 『日本風土記』1592, 『海外奇談』18 世紀, 『東語簡要』1884）^{注8}において、音節ごとに陰声韻と入声韻の使用回数を統計し、両者の変動を観察する（附表 2, 紙幅の制限でオ段のみ）。
- ③一拍語・二拍語を一定の規模で収録している語句型音写資料 3 点（『日本国考略』1523, 『日本風土記』1592, 『海外奇談』18 世紀）^{注9}において、陰声韻か入声韻かの選択と出現位置との関連を観察する（附表 3, 紙幅の制限で統計結果のみ）。

以下では、各角度からみた入声韻の使用状況を中心に述べ、関連する陰声韻と呉語の状況をも確認しておく。

3. 字母型音写における入声韻の使用

『書史会要』では、ベ＝「別」、ヨ＝「簍」以外に、入声韻の使用がみられない。この 2 例についても、「平声」の細注が施されており、本来の入声ではなく、長く伸ばして平声の音調で発音するようにと指示されている。『日本一鑑』では、延べ 11 箇所に入声韻が用いられており、エ段音（全 11 箇所中 5 箇所）とマ行・ラ行音（全 11 箇所中 6 箇所）に集中している。『東語入門』では、入声韻の使用がさらに 20 箇所まで拡大し、エ段のほかに、ア段・オ段も全体にわたって入声韻が使われている。

蔣（2010）は『書史会要』と同じ編纂者による『南村輟耕録』「射字法」を考察し、「陶宗儀にしてみれば、字母、韻目たるものは平声で表さなければならないという意識があった」と述べている。これは、現代の普通話ピンイン学習表がすべて第 1 声（陰平）で発音されていることにも通じており、中国語で字母表を挙げる時には緩やかで平らかな音調が好まれると考えられる。本発表の調査でも同じ傾向が認められ、『書史会要』では平声のみ選択され、平声でない字に対して「（作）平声」の指示が施されている^{注10}。『日本一鑑』では主に去声が選択されている（全 39 箇所中 21 箇所）。これは、基礎音系である徽語の去声が、例えば現代查済方言 44, 雁翅方言 55 とあるように、高平調で現れることが多いためだと考えられる。いずれにせよ、字母型音写においては緩やかな陰声韻を使用することが原則だと考えられる。

そうすると、『東語入門』では、ア＝「矮」パ＝「派」とあるように、現在入声韻が使われたア段音、ガ・サ・ザ・ダ・バ・マ・ラ・ワについても、それぞれ「崖」「洒」「柴」「大」「排」「買」「頼」「歪」といった蟹撰一二等の陰声韻が期待される。それにもかかわらず、音訳者はあえてこれらの陰声韻を排し、入声韻を選択している。このような姿勢は『書史会要』の入声韻不用とはだいぶ異なり、『日本一鑑』の状態からさらに発展したものだと考えられる。

もちろん、いろは歌と五十音図の違いや詠唱法の違いも音写に影響を与えるわけで、時間に関きのある三者を連続的に捉えることができるかどうか、慎重を期さなければならない。しかし、次項に述べる語句型と比べて、音の吟味や漢字の選択がより規範的だと考えられる字母型音写において、「陰声韻よりも入声韻」という姿勢が看取されること自体、極めて示唆的である。

注6 ハ行音に当たる音訳漢字は日本語のハ行子音の脱唇音化と連動しており、文献によって声母音類の選択が異なり、一つの文献においても複数の声母音類を跨いでいる場合がある（王 2022）。本発表では、韻母の状況を中心に観察するため、声母が一定しないハ行音の音訳漢字を考察から除外した。

注7 『日本一鑑』の基礎音系は馬（2023）の研究により、徽語であると判明されている。徽語は呉語の下位方言とみなせるかどうかで議論を呼ぶが、陰声韻と入声韻の区別に関しては呉語と同様である。

注8 『日本風土記』の調査範囲は「野草」までとする。それ以降の「鳥獸類」「人事類」は『籌海図編』のものあるいは『日本国考略』のものをそのまま転載したもので、『日本風土記』のものとは認められない。『東語簡要』の調査範囲は「二字門」から「成句門」までとする。それ以外の「一字門」までの部分は『海外奇談』の採録語彙を踏襲したものとされる。改訂を施した項目や、新たに補った項目もあるが、本発表ではそれらを扱わない。

注9 ②で挙げた語句型音写資料 5 種のうち、『日本図纂』は地名のみで、収録語数もそれほど多くない。『東語簡要』は文節あるいは文単位で採録しているため、一拍語と二拍語の項目はほとんどみられない。

注10 当時の河朔方言を忠実に反映したとされる『中原音韻』（1324）においても、「入声作平声／上声／去声」の注記がみられる。このような発音指示から当時の北方方言で入声が消滅したと判断できるかどうかについては議論を呼ぶが、呉語について言えば、『書史会要』の当該注記は前述した<ṗ, ṑ, ṑ̌>-<ṑ̌>-<ṑ̌>の変化がすでに完成したことを示唆している。

4. 語句型音写における入声韻の変動

ここでは、調査結果をさらに整理し、入声韻が占める割合によって、不用（≤10%）、劣勢（＜50%）、優勢（≥50%）の三段階に分け、音写されている日本語の音節を分類する（表1～3）。

表1 ア段・オ段の変動

入声韻	日本国考略(1523)	日本図纂(1561)	日本風土記(1592)	海外奇談(18世紀)	東語簡要(1884)
不用	アサナマヤワ オコソボ	アナマヤラ ソトノヨ	アナヤ オノヨ	ア ノ	ナ ノ
劣勢	カタラ トノヨロ	カタワ オコモロ	タマラワ コソト	ナマヤワ オコソト	アカヤ コ
優勢	バ モ	サバ	サカバ ボモロ	カサタバ ボモヨロ	サタバマ オソトボモヨロ

表2 イ段・エ段の変動

入声韻	日本国考略(1523)	日本図纂(1561)	日本風土記(1592)	海外奇談(18世紀)	東語簡要(1884)
不用	ニビミ ネレ	キニビリ ケテネ	チ レ		キシチビ セネ
劣勢	イキシチリ ケテメ	チミ	キビリ エネ	キチニビミ ケメネレ	イリニミ エケメ
優勢	セベ	イシ エセベメ	イシニミ ケセテベメ	イシリ エセテベ	テレ

表3 ウ段の変動

入声韻	日本国考略(1523)	日本図纂(1561)	日本風土記(1592)	海外奇談(18世紀)	東語簡要(1884)
不用	ウユ	ウスヌユル	ウツヌブユル	ウスツユ	スツブユ
劣勢	クスツヌブル	ツム	クス	クブ	ウクル
優勢	ム	クブ	ム	ムル	ム

ア段・オ段においては、16世紀末期を境に、陰声韻と入声韻の勢力が逆転したとみられる。16世紀初頭の段階では入声韻は不用か劣勢の状態にあるが、時代が下るにつれ、その使用が漸次的に増加していき、19世紀末期になると、半分以上の音節で入声韻が主な選択となっている。

このような入声韻への転換は、陰声韻も使えた状態のもとで発生したことを注意されたい。例えば、トドを音写するにあたって、『日本風土記』『海外奇談』『東語簡要』いずれも果摂字を中心とする陰声韻と、通摂字を中心とする入声韻が使われている。両方とも選べる中で、音訳者の選択は、18世紀を過ぎると、陰声韻から入声韻に転じたとみられる。オ・ソゾ・ロについても、転換の時期に多少のずれがあるが、同様なことが言えよう。また、転換とは言えないが、コゴ・ヨの音写では、陰入両方が選べる中で、入声韻の使用が増えていくとみられる。

イ段・エ段においては、16世紀初頭から末期にかけて、入声韻の使用が増加しており、16世紀末期から18世紀にかけて、入声韻が陰声韻と拮抗している。しかし、18世紀から19世紀末期にかけては、イ段を中心に逆に陰声韻の優勢に退行しているようにみえる。これは呉語側の変化によるものだと考えられる。当該時期では、知章組が庄精組へ合流したこと（*ʃi->ts-*）や口蓋化（*ki-,tsi->tei-*）が起これ、キギ・シジ・チ(ヂ)には止蟹撰三四等の牙喉音字しか対応できなくなったと推測される。また、エ段音については、ほかの段と比べて出現回数が少ない上、イ段に当たる音訳漢字との重なりが多い。よって、エ段の退行はイ段に牽引された結果だと考えられる。

ウ段においては、16世紀初頭の段階から不用か劣勢の状態が続いている。これは、呉語にそもそも[u]を主母音とする入声韻がないためだと考えられる。

総じて、語句型音写では、入声韻の使用が増加し、やがて陰声韻を上回っていく趨勢が看取される。このような変動は陰声韻とも入声韻とも関連しており、「入声韻が多用されるようになった＝陰声韻が忌避されるようになった」ということになる。このような陰入両方ともかかわる判断は、そもそも両方とも使えた呉語側に起因するとは考えがたく、被写体側すなわち日本語側の通時の変化に対応したものだと考えられる。

5. 出現位置との関連

一拍語に関しては、入声韻の使用が増え続けており、16世紀末期から18世紀にかけて陰声韻を上回っている。二拍語に関しては、16世紀初頭から末期にかけて、文字列中・末ともに入声韻の使用が増加している。16世紀末期から18世紀にかけては、文字列中は少し減っているものの、ほぼ同じ水準を保っている。文字列末はさらに増加し、全体の半分近くまで上ってきている。

『日本国考略』所収二拍語を用いて呉語の声調を考察した木津（1994）は、当該資料における入声韻が文字列末よりも文字列中のほうに多く出現していることについて、声門閉鎖音韻尾[ʔ]

の性質, すなわち 1 で述べた, 語中における閉鎖の弱まりによるものだと判断している。しかし, 本発表の調査では, 時代が下るにつれ, 文字列末における入声韻の使用が増加する一方であり, 18 世紀に至ると, 文字列中よりも多くなっているとみられる。これは, 上述の韻尾の性質からだと説明しがたく, やはり日本語側の通時的変化に対応したものだと考えられる。

6. まとめ・考察

以上, 3 つの角度から, 陰声韻と入声韻の使用状況をみてきた。全体的にみれば, 16 世紀末期を境に, 日本語 CV 音節に当たる音訳漢字の選択は, 陰声韻中心から入声韻中心に転換したと看取される。このような選択の転換は, 陰声韻と入声韻が対比され, かつ両方とも選べる中で発生したとみられる。日本語 CV 音節を音写する場において, 陰入対比から取り出された特徴は, やはり持続時間の長さにみられる相対関係であろう。1 で既に述べたように, 日本語の CVN・CVV 音節には陽声韻と陰声韻が当てられている。入声韻と比べると, 陰陽声韻は持続時間にほとんど差がなく, 共に<長>の範疇に入ると考えられる。CV 音節を写すにあたって, 音韻論的な長短対立を持たない呉語話者にとっては, 必ずしも意図的とは言えないが, 陰声韻が選ばれば, 結果的に, 写された CV 音節が CVN・CVV 音節と同等の長さを有することになる。逆に入声韻が選ばれば, 結果的に, CVQ 音節との区別が付かなくなるが, CVN・CVV 音節との距離が広がると考えられる。中国人音訳者にとって, 促音 Q は無声音なので, CVQ 音節の持続時間に関しては有声部分である CV だけが認識されていた可能性が高いと考えられる。以上より, 呉語系中国資料にみられる CV 音節の陰入転換は以下のようにまとめられるのではないかと考えられる。

《16 世紀末期を境に, 中国人音訳者が, これまで区別しなかった, 日本語 CV 音節と CVN・CVV 音節との間に存在する持続時間の差異を, とりわけ重視するようになった。》

言うまでもなく, CVN・CVV 音節は有声の 2 モーラで, CV 音節は有声の 1 モーラである。よって, 上述の変化は, 日本語におけるモーラの等時性表示機能の強化を示唆していると考えられる。16 世紀末期を境に, 日本語 1 モーラ音節と 2 モーラ音節との持続時間の差異がより明確になっていき, このような差異を無視できなくなる中国人音訳者は, 陰声韻より持続時間の短い入声韻を音写に用いる方法で対応したと考えられる。このようなモーラの等時性表示機能の強化は, 仏教声楽譜を考察した浅田 (2004) がすでに指摘した, 中世から近世にかけて字音の後位モーラが独立したことともよく符合している。

本発表の調査では, 音訳漢字の変動がア段・オ段を中心に確認された。これより, 上述したモーラの等時性表示機能の強化は, 中世末期から近世初期にかけて進んだオ段長音の開合の統合 (/au/, /ou/ > /or/) によって, 日本語における長短対立 (例えば /or/ : /o/ など) の機能が強化されたことと関連している可能性が窺われる。また, 沼本 (1992) が既に指摘したように, 字音直読資料には, 陰声韻に当たる仮名表記が近世唐音あたりを境に 1 字表記から 2 字表記へ転換したことがみられ, 本発表で提示された陰入転換と並行しているように見える。これらについてはさらなる調査・考察が必要であり, 今後の課題とする。

【参考文献】浅田健太郎 (2004) 「漢字音における後位モーラの独立性について—仏教声楽譜から見た日本語の音節構造の推移—」『音声研究』8(2)/王峻磊 (2022) 「『吾妻鏡補』所載『海外奇談』にみるハ行子音—喉音合口字に着目して—」『日本語の研究』18(2)/木津祐子 (1994) 「『日本寄語』所反映の明代呉語声調」李壬癸他編『中国境内語言暨語言学第二輯』中央研究院歴史語言研究所/朱曉農, 焦磊, 嚴至誠, 洪英 (2008) 「入声演化三途」『中国語文』325/蔣垂東 (2010) 「『南村輟耕錄』所載「射字法」から見た『書史会要』の「いろは」音注」月本雅幸ほか編『古典語研究の焦点』武蔵野書院/趙元任 (1928) 『現代呉語の研究』清華学校研究院 (商務印書館 2017 再版)/沼本克明 (1992) 「字音直読資料の長音表記の変遷—音節構造との関係—」『訓点語と訓点資料』88/馬之濤 (2023) 『「日本国考略」から見た室町時代の日本語音』武漢大学出版社/遊汝傑 (2018) 『呉語方言学』上海教育出版社 【資料文献】『方言声調データ』安徽雁翅=沈明 (2016) 『安徽宣城 (雁翅) 方言』中国社会科学出版社/安徽查濟=劉祥柏, 陳麗 (2017) 『安徽涇縣查濟方言』中国社会科学出版社/上海=朱曉農 (2020) 『上海声調実験録 (第二版)』上海教育出版社 [文献テキスト] 書史会要=東京大学東洋文化研究所蔵武進陶氏逸園景刊洪武本 (請求記号子:藝術:書畫:10) /日本国考略・日本図纂=京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1965) 『日本寄語の研究』京都大学国文学会/日本一鑑=東京大学総合図書館蔵民国二十八年影印本 (請求記号 J30:1177) /日本風土記=京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1961) 『全浙兵制考 日本風土記』京都大学国文学会/海外奇談・東語簡要・東語入門=京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1968) 『纂輯 日本歌語』京都大学国文学会 [解説参考資料] 日本国考略=京大 (1965), 馬 (2023) /日本図纂=大友信一 (1963) 『室町時代の国語音声の研究—中国資料による—』至文堂, 京大 (1965) /日本風土記=大友 (1963), 京大 (1961) /海外奇談=高山倫明 (1998-2001) 『翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(一)四』『文学研究』95-98 /東語簡要=大友信一・木村晟 (1972) 『吾妻鏡補所載 海外奇談国語解 本文と索引』小林印刷株式会社出版部

※本研究は, JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2108 の支援を受けたものです。

附表 1 字母型音写における陰声韻と入声韻の使用

		書史会要	日本一鑑	東語入門	書史会要	日本一鑑	東語入門	書史会要	日本一鑑	東語入門	書史会要	日本一鑑	東語入門	書史会要	日本一鑑	東語入門
		ア段			イ段			ウ段			エ段			オ段		
陰入	ア行	挨 作喉音呼		矮阿	以移伊	異易	以伊	烏	為	烏	繫 平声 奚	耶	賢	和窩	阿 音窩 塢	啞
			押													
陰入	カガ行	楷 作喉音呼	佳	卡	欺其	氣	克以 𪛗以	枯	固	苦餓	茄		開呆	軻	課	誇
				額								傑	𪛗乙			岳
陰入	サザ行	篩柴	腮		尸時	世	希其	䟽徂	自	司是	蛇奢	射		座 平声 莎	梭	沙
				殺若									息席			孰
陰入	タダ行	大 平声	太	他	啼低	致	氣	土屠	茲	之治	悌 平声縮舌呼		退	多馱	大 音舵	
				達								迭	鉄笛			託独
陰入	ナ行	乃 平声	奈	那	宜	乂	泥	奴	怒	奴	尼 縮舌呼		内	那	懦	
												業				諾
陰入	パバ行	排		派			皮披	蒲		捕普部			培配	婆		
				拔							別 平声		別			撲薄簿
陰入	マ行	埋	邁		皮眉		米	謨	慕	磨	乚		美	摩		
				麦		密						蔑			目	木
陰入	ヤ行	爺 作喉音呼	耀	耶				由	右	油						揺
														𪛗 平声	欲	欲
陰入	ラ行	頼 作平声彈舌			梨	利	利	盧	路	路	徠			羅		
			刺 音辣	辣								列	立		六	洛
陰入	ワ行	懷	歪													
				滑												

※仮名「ヰ」「ヱ」「ヲ」に当たる音訳漢字はそれぞれ「イ」「エ」「オ」の欄に示した。

※『東語入門』では、2字で1音を表す反切式の音訳がみられ、下線でこれを示す。陰声韻か入声韻かは反切下字によって判断した。

※細注は当該漢字に続いて示した。ただし、『書史会要』にみられる「又近～」は細注として処理せず、挙げられた漢字を直接当該欄に示した。

※細注の指示をも考慮し、確実に入声韻が使われた箇所に網掛けを施した。

附表2 語句型音写における陰声韻と入声韻の変動【才段】

		日本国考略		日本図纂		日本風土記		海外奇談		東語簡要	
オ	陰	100%	何12阿10河3 倭2 鳥2	89%	倭5 和3	96%	和32何12河6	78%	鳥14河5 和3 倭3	47%	唾7 委7
	入			11%	屋*	4%	屋2	22%	屋3 活2 沃2	53%	屋14喔2
コゴ	陰	93%	哥10个7 科4 姑2 高2	58%	哥5 我2	84%	哥15箇14俄13 我6 科5 娥4 過4 古2 哦2 蛾2	77%	可23古10戈9 科2 哦2 五2	61%	苛9 夸3 梧3 吾3 咂2
	入	7%	骨2	42%	谷5	16%	谷10各3	23%	哭10谷4	39%	哭8 角3 谷2
ソゾ	陰	100%	梭3	100%	坐*	57%	所6 酥2	60%	酥6	14%	沙*
	入					43%	宿6	40%	速4	86%	索4 速2
トド	陰	89%	多14陀2	100%	多6 陀2 拖2	79%	多65頭4 陀3	86%	多24徒4 拖4 妥3 駝2	14%	土4 多2
	入	11%	達2			21%	独10禿9	14%	独4 托2	86%	篤13托10独7 督7
ノ	陰	87%	奴4 那3	100%	倂19	100%	那95奴7 孺5	90%	奴14拿12	100%	拿10那2
	入	13%	納*					10%	捺3		
ポボ	陰	100%	婆*			50%	婆2	50%	婆3		
	入					50%	白2	50%	僕* 薄* 箔*	100%	箔*
モ	陰	25%	暮*	75%	麼3	5%	麻* 磨*	13%	馬* 摸* 麻* 婆*	14%	母* 磨*
	入	75%	没* 末* 木*	25%	木*	95%	木28目4 末3	87%	木26	86%	木12
ヨ	陰	80%	姚2 揺2	100%	腰* 右*	100%	揺19	44%	要3 揺2 遙2	22%	尤2
	入	20%	月*					56%	郁5 学2 玉2	78%	育7
ロ	陰	60%	路3	67%	羅2	40%	類9 羅3	16%	羅4		
	入	40%	禄2	33%	六*	60%	六15緑3	84%	六19落2	100%	六8

※統計にあたって、解説が不確かな項目（例えば『日本国考略』第126項「看 覓見 ミ△」）と、訂字が行われた項目（例えば『海外奇談』第422項「笋 太吉奴吉」，「吉」を「古」と改めて「タケノコ」）を除外した。また、1回しか出現していない音訳漢字も除いたが、当該箇所2回以上のものがない場合、「*」を付けて示した。

附表3 出現位置にみる陰声韻と入声韻の使用

	一拍語				二拍語							
					文字列中				文字列末			
	陰		入		陰		入		陰		入	
日本国考略	5	83%	1	17%	52	81%	12	19%	77	96%	3	4%
日本風土記	16	57%	12	43%	108	60%	73	40%	147	68%	68	32%
海外奇談	6	35%	11	65%	82	63%	48	37%	87	55%	70	45%
入声韻例示	(略214)手 鉄 テ (記184)田 塔 タ (談174)毛 結 ケ				(略 8)霧 吉利 キリ (記11)霜 失麻 シモ (談44)夏 咽子 ナツ				(略14)夜 揺落 ヨル (記67)曉 阿壺 アサ (談29)寅 拖辣 トラ			

※陽声韻とハ行音に当たる音訳漢字は、その位置の統計に算入しない。

勧誘文の類型化をめぐる
—「さあ」「ねえ」との共起を中心に—

ケイ リツチュウ
邢 立 中（岡山大学学生）

1. はじめに

勧誘文は、命令文や依頼文と並ぶ、働きかけ文の下位タイプの一つである。命令文や依頼文とく聞き手に動作の実行を求める>という特徴を共有しつつ、聞き手だけではなく、話し手も一緒に動作を実行する点で区別される。日本語の勧誘文については、モダリティの研究において、シヨウやシナイカといった形式を対象とする意味や用法の記述が進められてきているが、勧誘文の類型化をめぐる議論はまだ十分になされていないように思われる。

小説や『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の会話文に現れる勧誘文の用例（1202 例）を調査したところ、感動詞「ねえ」（男性語「なあ」を含む）を伴うものが 97 例（8.07%）、感動詞「さあ」を伴うものが、292 例（24.29%）存在することがわかった。本発表では、特にこれらの感動詞と共起した勧誘文に注目し、8つの観点からそれらの特徴を記述し（2 節）、「ねえ」を伴う勧誘文と「さあ」を伴う勧誘文が対照的な特徴をもつことを明らかにしたうえで（3 節）、樋口（1992）を踏まえながら「ねえ」「さあ」との共起が勧誘文の類型化とどのように関係するかについて検討する（4 節）ことにしたい。

（1）ねえ、映画を見に行こうよ。

（2）さあ、食べましょう。

2. 「ねえ」「さあ」と共起した勧誘文の特徴

この節では、「ねえ」を伴う勧誘文と「さあ」を伴う勧誘文が対照的な特徴をもつことを 8 項目にわたって指摘していく。

i 人称性：「ねえ」を伴う勧誘文の動作主体は、1・2 人称である場合（87 例）もあれば、2 人称である場合（10 例）もある。それに対して、「さあ」を伴う勧誘文の動作主体は必ず 1・2 人称であり、「あなたも」のような主語をとることができない。

（3）「ねえ、ワタナベ君、わたしたち下の食堂にご飯食べに行かない？」と緑が言った。

いいよ、と僕は言ったが、正直なところ何かを食べたいという気にはあまりなれなかった。（ノルウェイの森）

（4）「ああ、悪い悪い。情けないところを見せちゃったな」うつむきがちにはにかむ広

瀬を、諏訪野は「気にしないでください」と、慎重にベンチに腰掛けさせる。「ありがとう。なあ、良太先生も座らないか？」広瀬に促された諏訪野は数瞬迷ったあと、「それじゃあ……」と広瀬の隣に座った。(祈りのカルテ)

- (5)「祖母は絶対降るって。祖母の予想って天気予報より当たるんですね。さあ、行きましょう」渡部君にせかされ、俺たちは足早に公民館に向かった。(その扉をたたく音)

ii 述語形式：「ねえ」を伴う勧誘文と「さあ」を伴う勧誘文の述語には、「シヨウ」(59例：222例)「シヨウカ」(6例：34例)が共通して現れるが、「シナイカ」(32例)は前者のみに、「スルカ」(9例)、「スルゾ」(17例)、「動名詞ダ」(10例)は後者のみに現れる。

- (6)「ねえ、俺たち二人でチームを組まないか？きっと何もかも上手くいくぞ」(風の歌を聴け)

- (7)「さあ、やるか」(卵の緒)

- (8)ウォーミングアップを終えて観覧席に戻った清瀬は、集まった面々を見渡して力強く告げた。「さあ、行くぞ。思いきり走れ!」「おう!」とめずらしく全員が声を合わせて叫んだ。(風が強く吹いている)

- (9)「当たり前や。さあ、出発」(天国はまだ遠く)

iii 単語数：「ねえ」を伴う勧誘文は相対的に単語の数が多いのに対して、「さあ」を伴う勧誘文はそれに比べて少ない(手拾いの用例を調査すると、感動詞を除く単語数は、「ねえ」と共起したものは平均値が約3.2であるのに対して、「さあ」と共起したものは約1.7である)。「行く」という動詞が述語になる場合では、「ねえ」を伴う勧誘文には行き先を表す文の成分がよく現れるのに対して、「さあ」を伴う勧誘文では省略されやすい。

- (10)「ねえ、明日どっか行こうよ」司が金曜の夕方そんなふうに出てきた。(スーツの玩具)

- (11)「さあ、行きましょうか」最終の飛行機に間に合うように、北原先生が車を走らせる。(汝、星のごとく)

iv 終助詞「よ」：シヨウを述語にする勧誘文は、「ねえ」と共起した場合、終助詞「よ」(59例中29例)が付加されやすいのに対して、「さあ」と共起した場合には終助詞「よ」は現れない。

- (12)「ねえ、帰りどっかでデザート食べて帰ろうよ」(そして、バトンは渡された)

- (13)「さあ、ご飯にしよう」(そして、バトンは渡された)

v 配慮表現：「ねえ」を伴う勧誘文には「もしよかったら」「せっかくだから」などの相手や状況に配慮した表現が共起しやすい(4例)のに対して、「さあ」を伴う勧誘文にはそれらの表現が共起しない。

(14) 「ねえ、もしよかったら、一緒に食事しないか」(風の歌を聴け)

(15) 「ねえ、折角ここまで来たんだから、神社にお参りしていきましょか」(北都物語)

vi 実行のタイミング：「さあ」を伴う勧誘文の動作実行のタイミングは発話直後であるが、「ねえ」を伴う勧誘文は特に時間的制限がない。

(16) 「浅香さん、さあ、行きましょ」朝妻に促されて、夏美はビルの中に入った。(背後霊は殺しがお好き)

(17) 大皿三皿に盛られた餃子を食卓に並べると、「さあ、あつあつ食べよう」と森宮さんは手を合わせた。(そしてバトンが渡された)

(18) 「ねえ、折角ここまで来たんだから、神社にお参りしていきましょか」「今日は止そう」(北都物語)

(19) 「ねえ、遠山くん。今年の夏休み、海へ行かない？」「えっ？」思いもよらない、榎崎からの誘い。(君、私の頭上で輝けり)

vii 先行文脈：「ねえ」を伴う勧誘文の先行文脈は勧誘の内容にあまり関係がないのに対して、「さあ」を伴う勧誘文の方は勧誘の内容に関係し、当該動作を実行しようとしている様子(二人が勧誘の対象となる動作へ向かっていること)が描写される傾向がある。

(20) 僕はポケットからタバコを出して火をつけ、彼女の作業をしばらく眺めた。「ねえ、もしよかったら、一緒に食事しないか？」「一人で食事するのが好きなの」(風の歌を聴け)

(21) 「夏バテが治るまで、餃子を食べまくるよ。ざっと五十個作ったんだ。」「うそでしょう。っていうか、私ばててないし」大皿三皿に盛られた餃子を食卓に並べると、「さあ、あつあつ食べよう」と森宮さんは手を合わせた。(そしてバトンは渡された)

viii 応答：「ねえ」を伴う勧誘文の後続文脈には聞き手の同意・不同意の応答が続くのに対して、「さあ」を伴う勧誘文の後続文脈には、地の文が続いて、話し手と聞き手の動作の実行が描かれる傾向がある。

(22) 「ねえ、ワタナベ君、わたしたち下の食堂にご飯食べに行かない？」と緑が言った。いいよ、と僕が言ったが、正直なところ何かを食べたいという気にはあまりなれなかった。(ノルウェイの森)

(23) 「浅香さん、さあ、行きましょ」朝妻に促されて、夏美はビルの中に入った。(背後霊は殺しがお好き)

3. 「ねえ」を伴う勧誘文と「さあ」を伴う勧誘文の対照性

3. 1 「ねえ」を伴う勧誘文

すでに見たように、「ねえ」を伴う勧誘文には、聞き手の同意・不同意の応答が続く。これは、話し手は聞き手が受け入れるかどうかかわからずに誘いかけているということである。

「ねえ」を伴う勧誘文は、聞き手にとって必要かどうかということよりも、自分にとっての望ましさを中心にしていると考えられる。そこに提示されているのは、新たな提案であり、勧誘の前提としての状況の共有を必要としない。逆に、提案の内容をある程度詳細に伝える必要があることから、単語数は相対的に多くなる。「もしよかったら」「せっかくだから」や終助詞「よ」と共起する傾向があるのも、自分にとっての望ましさを中心とした新たな提案を行う際には配慮や積極性が必要になるためである。2人称が動作主体となり、話し手が決意した行動の中に聞き手を引き入れようとするような勧誘が成立することも、そうした見方で説明できる。

3. 2 「さあ」を伴う勧誘文

「さあ」を伴う勧誘文は、自分と同じ目的に向かって行動しようとしている人に動作のきっかけを与えるものである。つまり、動作を実行すること自体は話し手と聞き手にすでに共有されていて、今がそのタイミングであることを伝えるのが「さあ」を伴う勧誘文である。したがって、配慮表現や終助詞「よ」は必要としない。また、動作の内容を詳細に知らせる必要もなく（相対的に単語数は少なく）、聞き手はわざわざ同意する必要もない（小説ではそのまま実行に移されたことが描写される）。話し手と聞き手に意向のずれはないから、動作主体は常に1・2人称であり、2人称のみを動作主体とするようなことはありえない。

なお、2節において、述語形式の違いとして、「ねえ」を伴う勧誘文には否定疑問の「シナイカ」が、「さあ」を伴う勧誘文には肯定疑問の「スルカ」が使用されることを指摘した。この違いも上に述べた基本的な性質の違いから説明できる。肯定疑問による勧誘文と否定疑問による勧誘文の違いについて、井上（2013）は次のように述べている。

「飲みに行くか？」と「飲みに行かないか？」は、どちらも勧誘として使えるが、やはり、前者は「飲みに行く可能性があると思うが」という気持ちの勧誘、後者は「あなたは飲みに行くことは考えていないだろうが、私としては行ってほしい」という気持ちの勧誘である。（井上 2013: 75）

なお、形式の使い分けについては、安達（1995）がグループ型の勧誘には「しようか」は使えるが、引き込み型の勧誘には使えないという重要な指摘を行っている。これは「ねえ」を伴う勧誘文がさらに下位分類できることを示唆しているが、ここでは立ち入らない。

4. 樋口（1992）の分類との関係

感動詞と勧誘文の共起に言及するものではないが、樋口（1992）では、「しよう」「しまし

よう」を述語とする勧誘文を以下の4つのタイプに分類しており（分類番号Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳは便宜上、筆者がつけたもの）、「ねえ」「さあ」を伴う勧誘文の位置づけを検討するにあたって大変参考になる。

Ⅰ 話し手が自分の行動の中に聞き手を引き入れようとするもの

Ⅱ 動作の主導権が話し手にあるもの

Ⅲ 状況から判断して自分たちが行った方がいいと思われる動作をさしだすもの

Ⅳ あい手を動作へとむかわせる、うながしの、きっかけ的なたらきをはたすもの

樋口(1992)は、タイプⅠについて、「話し手は聞き手に向かって、いっしょに行動することを働きかけて、自分が中心となっておこなわれる動作のなかに聞き手を引き入れようとする。(中略)この種の文では、その動作が聞き手にとってのぞましいものであるかどうか、というものには無関心である」と述べ、次のような例を挙げている。

(24) 「私もうたいたいわ」「どうぞ。ぜひおねがいしたいところです」万里子は退場しようとする忠一と光枝をつかまえて、「いっしょにうたいましょう。南国土佐はどう？」「知っちゃいます」「じゃ、一、二、三」(私は忘れない)

これまで見てきた「ねえ」を伴う勧誘文の性格は、樋口(1992)のタイプⅠのそれと完全に一致していると言ってよいと思われる。「ねえ」を伴うことによって、勧誘文はタイプⅠであることが明示されるのである。もちろん、すべてのタイプⅠに「ねえ」が共起可能というわけではなく、待遇性に関する制限がある。一例挙げておく。

(25) 「ねえ、ワタナベ君、わたしたち下の食堂にご飯食べに行かない？」と緑が言った。

いいよ、と僕が言ったが、正直なところ何かを食べたいという気にはあまりなれなかった。(ノルウェイの森)

また、樋口(1992)では、タイプⅣについて、「話し手が決心のなかにさしだす動作の方向が、そこにいる人たちが向かっている方向と同じであれば、それはあい手を動作へとむかわせる、うながしの、きっかけ的なたらきをはたすことになる」と述べている。樋口が挙げるタイプⅣの用例には、「さあ」を伴うものが複数見られる。

(26) 開襟シャツにショートパンツの信一は、ずいぶん心細さを味わっていたようである。

そこで幾子とおちあう約束であった。「よっぽどまった？」「ううん」と、少年は構内をふりかえった。「十七分半まった」「ごめんなさい。さあ、買い物にいきましょう」幾子は、三丁目にむけてあるきはじめた。(日日の背信)

タイプⅣのすべてが「さあ」を伴うわけではないが、「さあ」を伴うものはタイプⅣの典型的なものと思えることができると思われる。

では、残るタイプⅡ、Ⅲと「ねえ」「さあ」の関係はどうだろうか。樋口のタイプⅡ、Ⅲは「ねえ」も「さあ」も共起しないと思われる。樋口の挙げているⅡ、Ⅲの用例を引用する。

(27) (前略) 竪琴の音はもうずっと遠くになっていました。「でよう!」と隊長はいいました。それでわれわれはこの寺をでました。(ビルマの竪琴)

(28) 徳用マッチは万里子の機転で宿舎から校舎にもってきてあったが、雨もりはふせいだのに、校舎内はいつかじめついて、マッチがなかなかつかない。「文明の利器をつかいましょう」校長は机のひきだしから、ライターをとりだしてきた。(私は忘れない)

5. おわりに―勧誘文の類型化にむけて

従来のモダリティの研究では、人称性への注目はあったものの、基本的には述語形式の意味・用法の記述が重視されてきた。その意味では、形態論的なレベルにとどまっていたといえよう。だが、モダリティの研究には構文論的・談話論的アプローチが不可欠である。

本発表では、感動詞「ねえ」「さあ」と共起した勧誘文を対象として、述語形式だけでなく、構文・談話的な特徴をトータルに記述した。その結果、これらの感動詞との共起は、述語形式では区別できないような種類の違いを明示する働きをしていることが明らかになった。「ねえ」と「さあ」は、感動詞としてそれぞれ固有の意味・機能をもっているが(村木(2010)では、両者は<聞き手の存在を前提とする感動詞>の中の<話し手から聞き手への対応>に分類され、「ねえ」は<(聞き手に対する話し手からの)よびかけ>に、「さあ」は<(聞き手に対する話し手からの)はたらきかけ(さそいかけ)>に位置づけられている)、感動詞と勧誘文の関係は足し算的ではなく、相互規定的であろう。

しかし、本発表が取り出したのは、勧誘文の類型の両極(タイプⅠ、Ⅳの典型)にすぎない。樋口のタイプⅡ、Ⅲについても、構文論的・談話論的アプローチによって、その存在が証明されなければならない。

参考文献

安達太郎(1995)「シナイカとショウとショウカー―勧誘文―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版／井上優(1993)「発話における「矛盾考慮」と「タイミング考慮」―命令文・依頼文を例に―」『国立国語研究所報告 105 研究報告集 14』秀英出版／井上優(2013)『相席で黙ってられるか―日中言語行動比較論』岩波書店／樋口文彦(1992)「勧誘文―しよう、しましう―」言語学研究会編『ことばの科学 5』むぎ書房／姫野伴子(1998)「勧誘表現の位置―「しよう」「しようか」「しないか」―」『日本語教育』96号／宮崎和人(2009)「談話における意志の形成」『岡山大学文学部紀要』52号／村木新次郎(2010)「意味・機能にもとづく日本語の感動詞の分類」『対照言語学研究』20

滋賀県における若年層の素材待遇語の使用実態

—第三者待遇偏用から「関係者待遇」へ—

つばいなお
坪井菜央（関西大学大学院生）

1 はじめに

宮治(1987)より、滋賀県では複数の素材待遇語（広義の素材敬語）が使われ、またその運用は第三者待遇場面を中心に使用される傾向が強いことが指摘されている。本発表では、滋賀県の高校生へのアンケート調査をもとに、使用される素材待遇語の種類が減少していること、第三者待遇偏用の傾向だけでなく、対者待遇/第三者待遇、目上/目下を問わず幅広い対象を待遇する運用が存在することを述べる。

2 先行研究と問題の所在

2.1 滋賀県におけるこれまでの素材待遇語の分布状況

滋賀県で用いられる素材待遇語については、寛(1962)や宮治(1987)に記述がある。まず、滋賀県の老年層への聞き取り調査と高校生へのアンケート調査を行った宮治(1987)によると、高校生の間でよく使用されている素材待遇語は、ア段ハル¹、(ヤ)アル、(ヤ)ル、(ヤ)ンス、ヤル、ヨルである。このうち、ヨルは軽卑の用法を持ち（岸江 1998）、他の素材待遇語とは機能が異なるため本発表では調査対象としない。

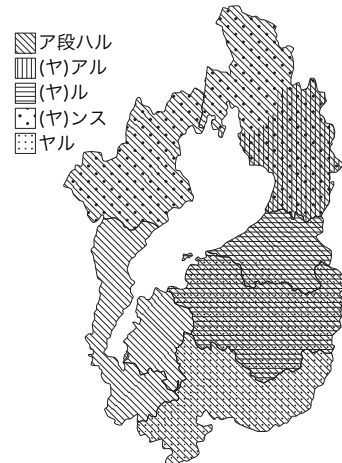


図 1 滋賀県における素材待遇語の分布（寛 1962）

これらの素材待遇語について、寛(1962)を元に使用地域を確認

認する。図 1²は寛(1962)の記述から発表者が作成した当時の素材待遇語の分布図である。詳細は 2.2 節にて後述するが、ア段ハル、(ヤ)アル、(ヤ)ルは目上に、(ヤ)ンス、ヤルは目下に多く使用される。これを踏まえて図 1 を見ると、滋賀県全域で使用されるア段ハルを除き、待遇対象が近い(ヤ)アルと(ヤ)ルや(ヤ)ンスとヤルは地域ごとに棲み分けられている。

表 1 各語形は誰に対して用いられるか(滋賀県)
(宮治 1987 : 45)

語形 人物		(行 か) ハル	(行 き) ハル	アル	ル・ ヤル	ンス	ヤル
老年層	近所の年上 (上・疎)	172 (69・103)		16 (4・12)	5 (0・5)	21 (11・10)	2 (0・2)
	父親 (上・親)	66 (15・51)		10 (2・8)	9 (0・9)	40 (15・25)	4 (0・4)
	近所の年下 (下・疎)	78 (23・55)		8 (1・7)	3 (0・3)	26 (9・17)	8 (0・8)
	孫 (下・親)	1 (0・1)			1 (0・1)	10 (1・9)	20 (0・20)
高校生	近所の年上 (上・疎)	139 (35・104)	1 (0・1)	83 (20・63)	42 (0・42)	2 (0・2)	7 (0・7)
	父親 (上・親)	43 (0・43)		39 (0・39)	46 (0・46)	24 (0・24)	10 (0・10)
	近所の年下 (下・疎)	12 (1・11)		7 (0・7)	26 (0・26)	41 (0・41)	28 (0・28)
	弟か妹 (下・親)			3 (0・3)	14 (0・14)	24 (0・24)	22 (0・22)

注：(・)内の数字は待遇ごとの用例数を示す。左が話し相手待遇の場合、右が第三者待遇の場合。

2.2 滋賀県におけるこれまでの素材待遇語の運用方法

表 1 は宮治(1987)の表を一部抜き出して引用したもので、滋賀県内の老年層 200 人と高校生 256 人に対して「(○○は)どこへ行くのか」と言うときに普通

¹ 本稿では以下、五段活用動詞に未然形接続するハルをア段ハル、連用形接続するハルをイ段ハルとする。

² 図は 7 地域に区分しているが、これは寛(1962)当時の地域区分ではなく 2024 年現在の区分(詳細は 3 節)である。

どのように言うかを対者待遇場面・第三者待遇場面で尋ね、その用例数を表にしている。

表1を見ると、いずれの素材待遇語も第三者待遇場面に用例数が偏っている。特に若年層では(ヤ)ル(表1ではル・ヤル)、(ヤ)ンス(表1ではンス)、ヤルは対者待遇場面では使用が見られず、第三者待遇場面偏用の傾向が顕著である。また、ア段ハル(表1では(行か)ハル)、(ヤ)アル(表1ではアル)、(ヤ)ルは目上に、(ヤ)ンス、ヤルは目下に用例数が偏る傾向がある。

2.3 問題の所在

以上、滋賀県の素材待遇語について先行研究を確認したが、これらの記述は発表者が滋賀県長浜市で高校生に行ったアンケート調査(坪井 2022,2024)の結果とは異なるものであった。

2.1 節より、長浜市の位置する湖北ではア段ハル、(ヤ)アル、(ヤ)ンスが使用されると推定できる。しかし、坪井(2022)では調査対象者 173 人中 88.4%の人が(ヤ)アルを「よく言う」と回答したのに対して、ア段ハルと(ヤ)ンスはともに 14.5%しか「よく言う」という回答が見られなかった。また、宮治(1987)ではア段ハルと(ヤ)アルは第三者待遇場面の目上を、(ヤ)ンスは第三者待遇場面の目下を待遇するという運用方法であった。しかし、坪井(2022,2024)では第三者待遇場面、対者待遇場面ともに、目上から目下まで全ての待遇対象に使用できるという話者が多く見られ、新たに見られたこの運用方法を「全待遇型」と名付けた。

このように、長浜市では分布、運用方法ともにこれまでの研究とは異なる状況が見られる。そこで、本研究では長浜市以外の状況についても調査を行うことで、坪井(2022,2024)で見られた現象の地理的範囲を把握する。

3 研究方法

滋賀県の地域区分に対応する公立高校 5 校³の高校生計 618 人に対して Google forms を用いた自記入式のアンケートを実施した。回答者は最も長く住んでいる地域が滋賀県内であるものとした。筧(1962)は滋賀県の方言区画を湖東、湖西、湖南、湖北の 4 つに大きく分けているが、本調査では詳細な地域差を調べるため、図 2 のような 7 つの地域⁴に分けて回答者に長く住んだ地域を尋ねた⁵。

大問 1 は各素材待遇語の分布状況を確認するための問いである。具体的な設問は以下の通りで、各設問に「よく言う」「たまに言う」「言わないが聞いたことがある」「言わないし聞いたことがない」という 4 つの選択肢を設けた。

(1) 各素材待遇語の分布状況を確認する調査項目

1-1 先生が【イカハル(行かはる)】

1-2 先生が【イキハル(行きはる)】

1-3 先生が【イカール(行かーる/行かある)】

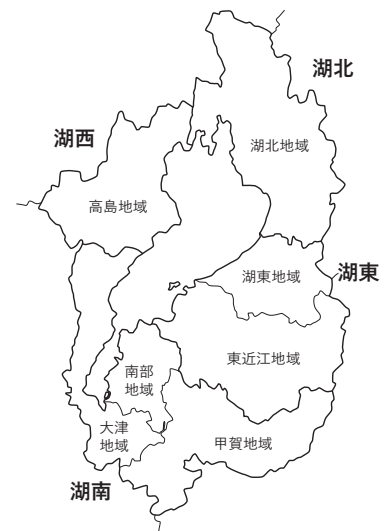


図 2 本調査での地域区分

³ 調査は滋賀県立彦根東高等学校、滋賀県立八幡高等学校、滋賀県立水口高等学校、滋賀県立石山高等学校、滋賀県立高島高等学校の協力を得て実施した。

⁴ 滋賀県ホームページの「県内の市町一覧」の区分を参考にした。高島地域：高島市、湖北地域：長浜市・米原市、湖東地域：彦根市・愛荘町・甲良町・多賀町・豊郷町、東近江地域：東近江市・近江八幡市・日野町・竜王町、甲賀地域：湖南市・甲賀市、南部地域：草津市・守山市・栗東市・野洲市、大津地域：大津市

⁵ 湖東など、東西南北に分けた時の大きな地域区分とその下の 7 つの区分の地域名が同じ地域がある。本発表では、大区分：「湖東」、小区分：「湖東地域」のように 7 つの下位区分にのみ「地域」をつける形で名称を区別する。

1-4 先生が【イカル（行かる）】

1-5 近所の子どもが【イカンス（行かんす）】

1-6 近所の子どもが【イキヤル（行きやる）】

大問2は、素材待遇語の運用方法を確認する問いである。ここではア段ハルの質問文のみをあげるが、(ヤ)アル、(ヤ)ル、(ヤ)ンス、ヤルについても同内容の設問を作成した。ただし、最も長く住んだ地域が湖北、湖西の回答者はア段ハル、(ヤ)アル、(ヤ)ンスについて、湖南、湖東の回答者はア段ハル、(ヤ)アル、(ヤ)ル、ヤルについて回答するように設定している。回答の選択肢は「言う」「言わないがおかしい」「言わないしおかしい」「わからない」である。

(2) ア段ハルの運用方法を確認するための調査項目

2-1 対者待遇場面

あなたは【 】内の人物と話しています。【 】内の人物本人に「買い物に行く？」とたずねる時、「イカハル（行かはる）」と言いますか。

→【 】本人に「買い物イカハル？」

2-2 第三者待遇場面

あなたは友達のAさんと【 】内の人物について話しています。「【 】内の人物はよく買い物に行く」と言う時、「イカハル（行かはる）」と言いますか。

→【 】はよく買い物にイカハル

【 】内の人物は表2のように設定した。

表2 調査項目(2)の人物設定

身内		非身内		
目上	目下	目上	対等	目下
父/母	弟/妹	先生	友達 (第三者待遇場面では友達B)	後輩

4 調査結果

4.1 滋賀県における素材待遇語の分布状況

図3は大問1の回答結果を素材待遇語ごとに集計したものである。「よく言う」「たまに言う」の回答者の割合（以下「使用割合」）が高いのはア段ハルと(ヤ)アルである。ア段ハルはどの地域でも使用割合が高いが、県北部に行くにつれて徐々に使用割合が下がり、湖北地域では大きく低下している。反対に(ヤ)アルは湖北地域とその周辺では使用割合が非常に高いが、南部では顕著に割合が下がっている。つまり、滋賀県南部ではア段ハルが、北部では(ヤ)アルがよく使用され、その間に位置する湖西の高島地域や湖東の湖東地域ではこの2つの形式の使用割合が同程度となっている。

また、ア段ハルや(ヤ)アルと比べ、その他の素材待遇語は使用割合が低く、あまり使用されていない。宮治(1987)では(ヤ)ルのように老年層よりも高校生でよく使用される形式も存在したが、宮治(1987)の調査以降使用者が増加することはなく、減少したと考えられる。しかし、甲賀地域のみはイ段ハル、(ヤ)ル、ヤルといった他の地域では使用割合が低い素材待遇語の使用割合が高く、複数の素材待遇語が使用されることが甲賀地域の特徴と言える。

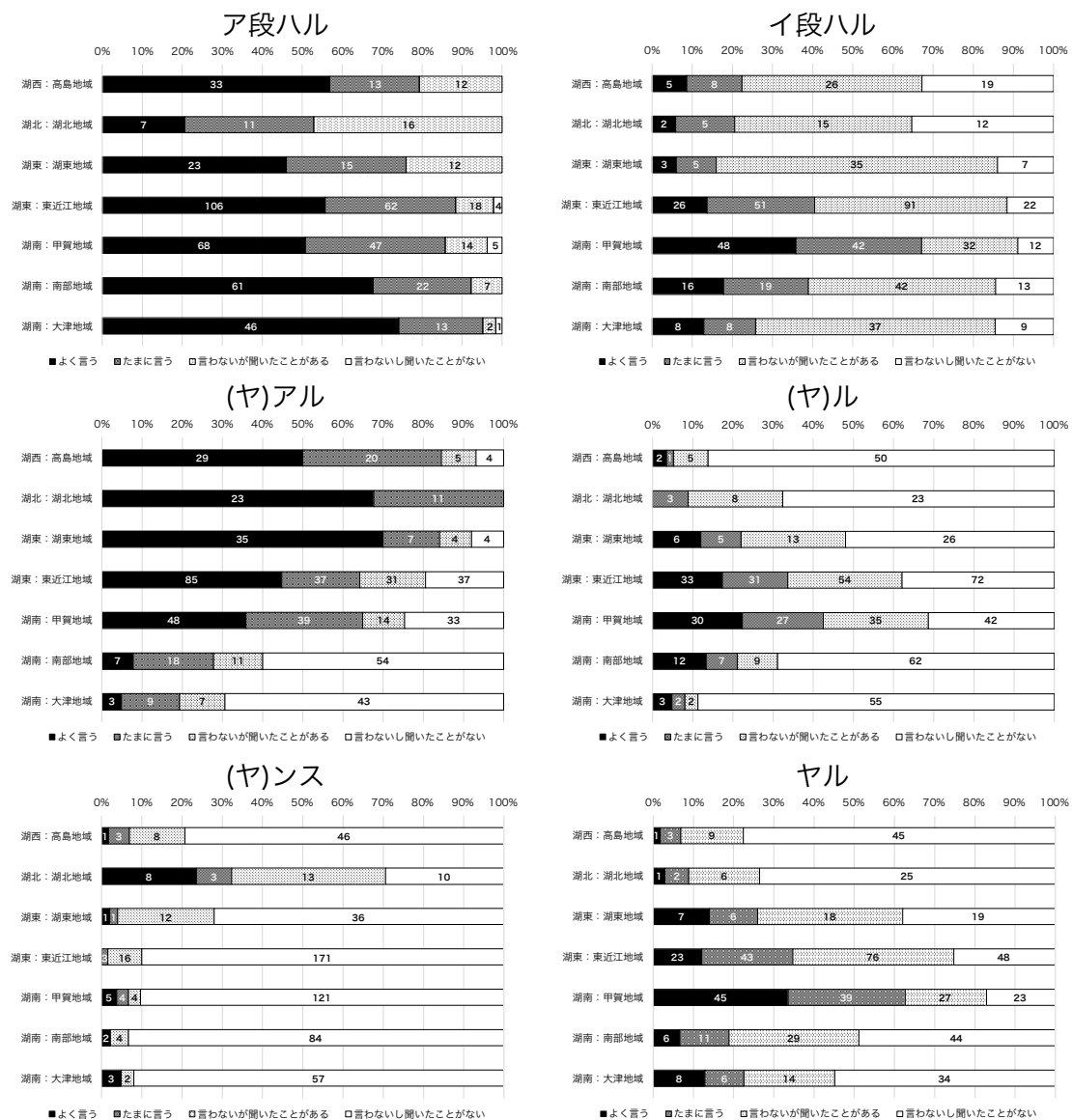


図 3 各素材待遇語の分布状況

4.2 滋賀県における素材待遇語の運用方法

本節では大問2で尋ねた素材待遇語の運用方法を確認する。本発表では、大問1においてどの地域でも使用割合が高かったア段ハルと(ヤ)アルを取り上げる。分析に際しては、図4のように回答者一人ひとりの回答パターンをいくつかの「待遇型」に分類した。また、図5では各待遇型の回答割合を地域ごと、素材待遇語ごとに示した。具体的な回答者数は表3に挙げている。

図表の「準第三者待遇型」「準全待遇型」は第三者待遇型や全待遇型に準ずるものとして設定した。準第三者待遇型は、対者待遇場面が全て×かつ第三者待遇場面に1つ以上●があるもののうち第三者待遇型以外のもの、準全待遇型は×が1つのものか、×が2つで対者待遇場面と第三者待遇場面で×になる待遇対象が一致しているものとした。以下では第三者待遇型と準第三者待遇型をまとめたものを「第三者待遇型類」、全待遇型と準全待遇型をまとめたものを「全待遇型類」と呼称する。また、「不使用」とは、全ての項目が×の回答を指す。

(A)	対者待遇		第三者待遇	
	身内	非身内	身内	非身内
上	×	×	●	●
下	×	×	●	●

(A) 第三者待遇型

(B)	対者待遇		第三者待遇	
	身内	非身内	身内	非身内
上	●	●	●	●
下	●	●	●	●

(B) 全待遇型

●：言う／言わないがおかしい
 ×：言わないしおかしい／わからない

図 4 調査で見られた運用方法

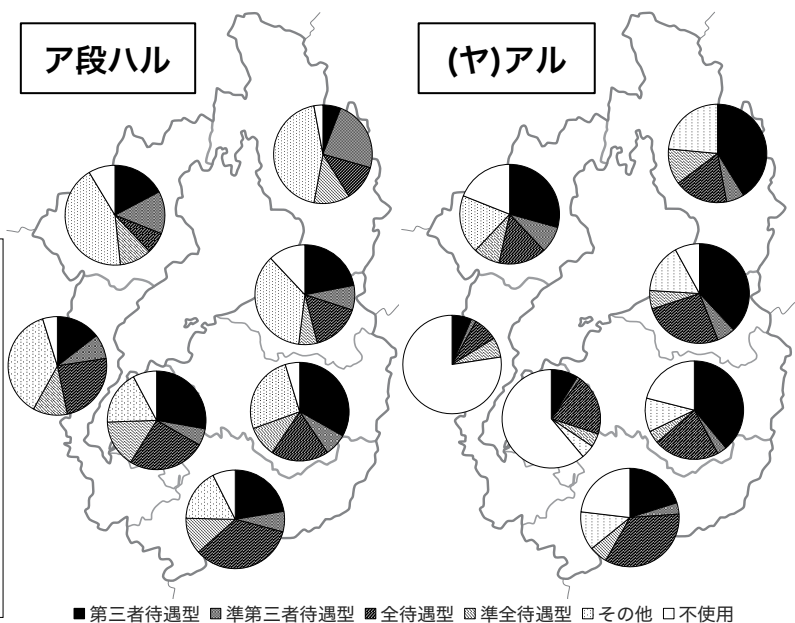


図 5 ア段ハルと(ヤ)アルの地域別運用方法

表 3 ア段ハルと(ヤ)アルの運用方法の回答件数

		ア段ハル							(ヤ)アル						
		第三者	準第三者	全	準全	その他	不使用	総計	第三者	準第三者	全	準全	その他	不使用	総計
湖西	高島地域	10	8	4	6	25	5	58	17	5	9	5	11	11	58
湖北	湖北地域	2	8	4	4	15	1	34	14	2	6	4	8	0	34
湖東	湖東地域	11	4	8	3	18	6	50	19	3	13	3	8	4	50
	東近江地域	63	14	36	19	49	9	190	74	6	41	8	21	40	190
湖南	甲賀地域	30	9	46	16	23	10	134	27	5	46	8	17	31	134
	南部地域	25	5	23	14	16	7	90	8	1	18	4	4	55	90
	大津地域	9	5	15	7	23	3	62	4	1	5	0	4	48	62
総計		150	53	136	69	169	41	618	163	23	138	32	73	189	618

図 5 を見ると、割合にばらつきはあるが、本調査で回答された運用方法の多くが第三者待遇型類と全待遇型類に分類されている。ここから、長浜市で見られた全待遇型は滋賀県全域でも見られるものであることが確認できる。また、表 3 では「その他」と「不使用」を除くと第三者待遇型が最も多く見られる。宮治(1987)では第三者待遇偏用の傾向が指摘されつつも第三者待遇場面での待遇対象が目上に偏っている(表 1)のに対し、本発表の第三者待遇型は目上から目下まで広い範囲の待遇対象を待遇できる。ここから、ア段ハルや(ヤ)アルが目上を待遇する形式であるという意識が薄れ、幅広い待遇対象に使用できるように変化したことが窺える。

なお、ア段ハルは滋賀県北部で「その他」の回答が多く、(ヤ)アルは南部で「不使用」の回答が多い。これは、4.1 節で述べた滋賀県南部ではア段ハルが、北部では(ヤ)アルがよく使用される傾向が反映された結果と言える。特に北部ではア段ハルは聞いたことがあるがあまり使わない形式であり、安定した運用方法が共有されず「その他」の回答が多くなっていると考えられる。

5 全待遇型の機能について

本節では、新たに見られた全待遇型の機能について考察を行う。全待遇型の特徴は①目上から目下まで待遇できること、②第三者待遇場面だけでなく対者待遇場面でも使えることである。

まず①について、滋賀県長浜市出身の10~20代8人に聞き取り調査を行った。7人は第三者待遇型類、1人は全待遇型で(ヤ)アルを使うと回答したが、対者待遇場面での使用の可否以外は使用意識に大きな差はなかった。よって、①の特徴が第三者待遇型・全待遇型共通のものであると捉え、聞き取り調査の結果を全待遇型の考察に用いた。

聞き取り調査では、(ヤ)アルは自分以外の人を広く上向きに待遇すること、通りすがりの人のように、知り合いでなくとも自分が直接見た人であれば待遇できることは調査対象者全員に共通していたが、歴史上の人物など実際に見ることができない人も待遇できると答えた人は半分以下であった。ここから、発話者と関わりがあったり、物理的に空間を共有したりする人を自分に関係がある人としてプラス(配慮的)に待遇する機能の存在が考えられる。この機能を「関係者待遇」機能とする。この機能は辻(2009)で指摘される「第三者指標機能」(待遇対象を話し手や話し相手と対峙する三人称として少し隔て、同時に話し手と何らかの関わりをもつ「人」であることを示す機能)と似ている。しかし、全待遇型は対者待遇場面でも使用できる点で三人称として隔てる機能は持たず、辻(2009)の「第三者指標機能」よりも話し手が待遇対象と関係を持つことを示す機能に重点が置かれたものだと考察できる。

次に②について、まず、第三者待遇型はア段ハルや(ヤ)アルが目上を待遇する形式であるという意識が薄れて幅広い待遇対象に使用可能になったことで生まれ(4.2節)、第三者待遇場面において「関係者待遇」の機能を持つようになった。ア段ハルや(ヤ)アルが目上を待遇している段階では、対者待遇場面对等以下の人物が待遇されることはないが、「関係者待遇」として運用されるのであれば、対者待遇場面であっても目上/目下関係なく待遇できるようになる。こうして対者待遇場面でも待遇できるようになり生まれたのが全待遇型であると考えられる。

6 まとめと今後の課題

本発表では、滋賀県で用いられる素材待遇語が南部ではア段ハル、北部では(ヤ)アルという分布になっていること、これらの素材待遇語の運用方法には第三者待遇型や全待遇型が見られ、「関係者待遇」という機能を持つことを述べた。しかし、本発表はアンケート調査による現在の若年層の使用意識について大きな傾向を述べたものに過ぎない。実際の発話場面ではどのように運用されるのか、地域差はあるのかといった問題は今後の課題としたい。

参考文献

- 寛大城(1962)「滋賀県方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂
岸江信介(1998)「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」『日本語科学』3,国立国語研究所
滋賀県庁(2021)「県内の市町一覧」滋賀県ホームページ,
<https://www.pref.shiga.lg.jp/kensei/gaiyou/shicyou/20959.html> (閲覧日 2024年8月27日)
辻加代子(2009)『ハル敬語考—京都語の社会言語史—』ひつじ書房
坪井菜央(2022)「滋賀県長浜市若年層の素材待遇形式の使用実態と運用方法の変遷について—(ヤ)アルの待遇型に注目して—」『日本方言研究会第115回研究発表会発表原稿集』2022年11月5日,オンライン
坪井菜央(2024)「滋賀県長浜市方言における素材待遇語(ヤ)ンスの通時的考察」『国文学』108,関西大学国文学会
宮治弘明(1987)「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151,国語学会

日本語における「無」ではじまる語の特殊な意味についての研究

チャン クオック ヒエップ
TRAN QUOC HIEP (大阪大学大学院生)

1. 研究の背景と目的

影山 (1993) によれば、造語は、接辞と語基の本来の意味を足しても造語全体の意味が理解できない場合、意味が特殊化した造語と言える (p.8)。先行研究では、接頭辞「無」は (1)「～ない」、または「～しない」と解釈されており、あくまでも「存在性の否定」が典型的な意味であると見なされている (相原 1986、久保 2016)。しかし、以下の (2) に示すように、王 (2006) は影山 (1993) が指摘している「特殊化の現象」にも注目し、「無口」や「無闇」などの少数の語において、「無」で始まる語には特殊な意味があると指摘している。さらに、チャン (2022) は「無」が (3) のように強調の機能を持つこともあり、(3a) の「良い」、(3b) の「多い」、(3c) の「甚だしい」に発展すると述べている。

- (1) あの映画を見て泣かないなんて、君は無感動なんだね。(感動がない、感動しない) (久保 2016 : 36)
- (2) a. 無口 (??口がない→口数が少ない) (王 2006 : 35)
b. 無闇 (??闇がない→いい加減に、良くない) (王 2006 : 35)
- (3) a. 言葉は無数の意味を持つ。(??数がない→数が多い) (チャン 2022 : 185)
b. 何物にも変えがたい無価の家宝 (??価値がない→貴重だ) (チャン 2022 : 188)
c. 無駄遣い (??駄目がない→非常に駄目) (チャン 2022 : 190)

本発表の目的は、二字漢語を中心に「無」ではじまる語の特殊な意味の種類、体系、意味形成プロセスを明確にし、三字漢語や混種語との相違点を指摘することである。これを通じて、現代日本語における「無」の特殊な意味について再評価することを目指している。

2. 研究概要

本発表は認知意味論の視点から、否定の観点と CONTAINER イメージ・スキーマの理論を基に、日本語の「無-」の特殊な意味を探究する。研究手順は、以下の五つである。第一段階としては、「無」ではじまる語の特殊な意味を認定する。第二段階では、語義全体から見る意味特徴を基準にし、「無-」ではじまる語を分類し、特殊な意味の体系を明らかにする。第三段階としては、Johnson (1987) の CONTAINER イメージ・スキーマの理論に基づいて、「無-」ではじまる語の分類各グループとその特殊な意味の形成メカニズムを解説する。第四段階は、二字漢語で見られる特殊な意味を三字漢語と混種語に照らし、現代日本語における特殊な意味の事情を明確にする。最後に、Langacker (1999) の否定理論をもって否定的な接辞である「無-」なぜ特殊な意味を形成できるか、そして有光 (2013) が指摘した東洋思想を文化背景とした「無」は英語の「-less」と比較することで、独自な点を説明し、「無」の意味を再考する。

3. 結果および考察

3.1 特殊な意味の認定

「無」ではじまる二字漢語を国語辞典 8 冊¹およびインターネットから 305 語を収集し、3.1.1 の節で特殊な意味のある代表語とその実例を紹介する。また、この特殊な意味は 3.1.2 の節で、その反義語を通じて反映されている。

¹ 『学研現代新国語辞典 [改訂第六版]』(2017)、『明鏡国語辞典 [第三版]』(2020)、『新辞林』(1999)、『広辞苑 [第七版]』(2018)、『日本国語大辞典 [第二版]』(2003)、『大辞林 [第四版]』(2019)、『大辞泉 第二版』(2012)、『新明解国語辞典 [第八版]』(2020)。

3.1.1 量的価値・質的価値の定義と实例の分析

量的価値とは量の多さを表し、代表的なものとして「多い」と「少ない」がある。特殊な意味で「多い」は(4a,b)の「無数」や「無量」で見られ、語基が数量を示す語で見られる。一方で、特殊な意味で「少ない」は(4c)の「無二」の他、(4d)の「無勢」で見られる。さらに、(4e)の「無学」などのように「足りない」から発展した語もある。

- (4) a. 森には無数の切り株がある。(BCCWJ)² (「多い」)
b. 私は正直な話、感慨無量でした。(BCCWJ) (「多い」)
c. 無二の親友ではあるが、性格は対照的だ。(BCCWJ) (「1」または「少ない」)
d. 多勢の凶賊に無勢だ。(BCCWJ) (「少ない」)
e. 無学でも大財を成した。(BCCWJ) (「足りない」)

質的価値とは、良し悪しの評価を意味する。「無-」の代表的な意味は「良くない」である。反対に「良い」は「無価」と読まれるように、「非常に価値があり、貴重だ」と意味する。また、その他に「悪くない」という意味も存在する。

- (5) a. 宴会で飲んで無礼なふるまいをしている (BCCWJ) (「良くない」)
b. 深い心の底には(中略) 無価の宝石も潜んで居る。(YOUREI)³ (「良い」)
c. 使ったことのある会計ソフトを選ぶのが無難でしょう。(BCCWJ) (「悪くない」)

量的価値と質的価値以外に、「甚だしい」という意味は「無限、無辺、無尽、無終」(限界がない→甚だしい)などで見られる。この「甚だしい」が発展すると量的価値「多い」になるが、質的価値は(6)の文脈で見られるように、結合する語の性質によって異なる。

- (6) a. 人間は自分を変えて行く無限の可能性がある。(YOUREI) (「多い、良い」)
b. 自然世界の資源は有限であるため、無限の欲望は満たされることがない。(YOUREI) (「多い、良くない」)

3.1.2 「無-」ではじまる二字漢語の反義関係からの分析

一般的に、「無-」ではじまる二字漢語の反義語は「有-」ではじまる語と対応できると考えられる。(7a)では、語基が実世界の概念を示すため、「有る・無し」の矛盾関係で立つ「無」ではじまる語には特殊な意味を確認することはできない。しかし、(7b)の心的世界の概念を示す場合、「無-」は「全くない」ではなく、「不足」を表現する。これは、「無-」が心的な属性や状態において期待に応えられないことがあり、対立関係で「足りない」「少ない」「良くない」の意味で使われるためである。また、(7c)では、空間・時間・数量の概念を表す際に、「無-」は「甚だしい」と「多い」を表すことがある。

- (7) a. 無塩 - 有塩、無頭 - 有頭、無害 - 有害、無人 - 有人、無機 - 有機など
b. 無能 - 有能、無名 - 有名、無識 - 有識、無用 - 有用、無力 - 有力など
c. 無限 - 有限、無期 - 有期、無極 - 有極、無界 - 有界、無数 - 有数など

(8)で見られるように、「無-」は「有-」以外にも様々な反義語と対応することがある。存在性の否定が明確でない語基においては、「無-」が「有-」以外の接辞と対応する場合がある。ここでは、語基が人間の品行や心的概念を表すため、「無-」が対立関係で「少ない」「良くない」の意味を表すことが可能である。

- (8) a. 無芸 - 多芸、無才 - 多才、無言 - 多言など
b. 無学 - 博学、無視 - 重視、無謀 - 深謀、無味 - 好味など

² 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)からの例を示す。

³ インターネットの用例収録サイト (<https://yourei.jp/>)から抽出した例を示す。

3.2 分類と特殊な意味の体系

本節では、第 3.1 節で明らかになった「無-」ではじまる語の特殊な意味を体系化するために、語義全体から見られる①「Non-Existent（存在性の否定）」、②「Boundless（有界性の否定）」、③「Negative（価値性の否定）」の基準を設け、表 1 のように「無-」ではじまる二字漢語を 6 グループに分類した結果を述べる。なお、語数の合計が 301 語となっているが、「無駄、無茶、無残、無価」の 4 語は上記のグループに区分できないため除外した。これら 4 語は特殊な意味が深化した例外だと考えられる。

表 1 「無」ではじまる二字漢語の分類に基づく特殊な意味

Group	代表	語数	[Non-Existent]	[Boundless]	[Negative]	量的価値	質的価値
A1	無糖	101	[+]	[-]	[-]	∅	∅
A2	無職	59	[+]	[-]	[+]	∅	良くない
B1	無限	25	[-]	[+]	[-]	多い	甚だしい
B2	無双	6	[-]	[+]	[-]	少ない	良い
C1	無礼	71	[-]	[-]	[+]	少ない	良くない
C2	無難	39	[-]	[-]	[-]	少ない	悪くない

まずグループ A は [+Non-Existent] [-Boundless] の基準に基づき分類したが、「無」ではじまる二字漢語の半分以上（160 語）が含まれる。ここでは、語基が実際に存在する対象（実世界の概念）を示しているため、「無」は典型的に「存在しない」ことを意味する。その不在はさらに、A1（特になし）と A2（望ましくない）の 2 つの小グループに分けられる。グループ B は [-Non-Existent] [+Boundless] の基準で分類したが、31 語しかなく、語数が最も少ないが、特殊な意味が多く見られる。ここでは、語基が対象や行動の「限界」や「境界線」を表しており、「限界」の否定に注目している。B1 では「限界」が無限に取り除かれることで、意味が「甚だしく多い」と発展している。一方、B2 では「限界」を除くことで、「比較できない」として「少ない」と「良い」の意味が形成されている。グループ C は [-Non-Existent] [-Boundless] で分類した 110 語があり、「人間が考えている世界」（心的世界）の内容について言及している。ここでは、基準を設け、その基準に達すれば「ある」とされ、基準に達しないと「足りない」「少ない」と認知されている。語基の性質によって、良いものであれば B1 で「良くない」、悪いものであれば C2 で「悪くない」と区別されている。

3.3 特殊な意味の形成

次に、「無」ではじまる語の特殊な意味についての追究において、CONTAINER イメージ・スキーマに基づいて機能したことが明らかにした。

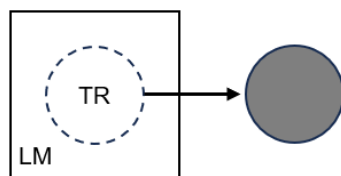


図 1 A のスキーマ

図 1 A のスキーマは、A グループでは、「IN-OUT」に基づいて意味が形成される。A グループは、TR（着目点）が LM（認知面）から逸脱するため、「不在」を表し、量的価値は存在しない。しかし、その「不在」は望ましいかどうかによって、質的価値が異なり、中立的な語群が A1、マイナスの意味合いを持つ語群が A2 である。A1 は特定の意味合いを持たない中立的な語（例：無形、無音、無声）である。A2 は主にマイナス

の意味合いを持つ語（例：無職、無給、無実）である。もちろん、「無料、無害、無痛、無鉛」などの語では、語基の内容の不在が肯定的な評価を受けることがあるが、同類と対比すると「悪い」イメージが払拭できない場合がある。時代や認識の変化により、A グループの語の質的価値が変わることがある。

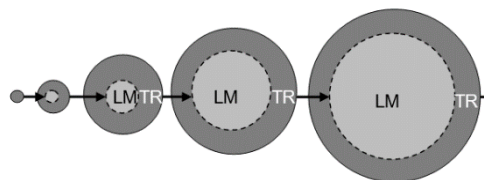


図2 B1のスキーマ

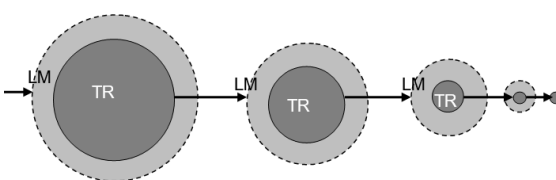


図3 B2のスキーマ

Bグループの意味は、CENTER-PERIPHERYのスキーマに基づいて形成される。Bグループでは、有界性と無界性に関連している。B1は無界性を示し、無限に拡大する範囲や無限に続く数列などを通じて認知される。B1では「無限」「無数」「無期」などが「限界」や「境界」を否定することで、量的に「多い」として、程度評価として「甚だしい」を形成する。一方で、B2では、範囲の中にただ一つの優れたものが存在することになるので、「無一」が語基の内容を否定している。B1が有限性を否定し外方向へ拡大する方向に向かうのに対し、B2では限定の方向に向かう。例えば「無二」、「無類」のように、他を否定し、対象を限定することでその存在をより際立たせる働きをする。そのため、最終的に量的価値として「少ない、むしろ稀」を持ち、質的価値は常に「良い」とされる。

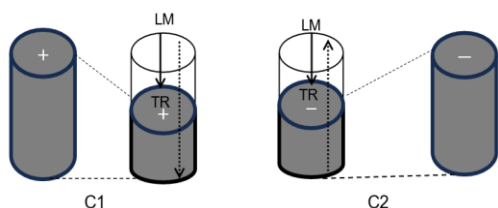


図4 Cのスキーマ

Cグループの意味では、心的世界の概念を示すため、FULL-EMPTYのスキーマを採用する。これらCグループの語群は特殊な意味を形成している。Cグループの語は「満（LM）」の状態と比べて常に「足りない（TR）」状態を示す。しかし、C1とC2の内容が異なるため、評価も異なる。C1は量の減少が直接的に質の低下に

繋がるのに対し、C2は量が少ないが質的に「悪くない」（「良い」ではない）状態が維持される。それは、人間がC2に対して悲観的な見方を持っているためである。

3.4 現代日本語における「無」の特殊な意味

さらに、「無」ではじまる三字漢語や混種語を二字漢語と比較することで、特殊な意味が弱まっていることが明らかになった。まず、二字漢語と同様に国語辞典8冊およびインターネットから三字漢語254を抽出し、それらについて調査したところ、特殊な意味、特に量的価値があまり確認されない。三字漢語では、(8a)のように「無-」が主に文法的な意味を追加するため、語基の内容に深く干渉できなくなり、特殊な意味を形成することが難しいと考えられる。[甚だしい]や「多い」といった意味は(8b)ではあまり感じられない。それは、語基が客観的に把握され、数量を表す語基と結合しないからであると考えられる。(8c)では、三字漢語においては語基が心的世界で把握されると、「完全にない」ではなく「非常に少ない」となる。

- (8) a. 無条件、無意識、無価値、無関係、無根拠など (Ø)
b. 無制限、無辺際、無期限、無際限など (Øまたは「甚だしい」)
c. 無愛想、無責任、無能力、無教養など (Ø又は極「少ない」)

混種語（二字漢語と同じデータから、和語語基の31語と外来語語基の22語を抽出した）では、(9a)で見られるように、古い語の語基が比喩的な意味で「少ない」や「良くない」と解釈される場合が多い。例えば、「無口（口数が少ない）」や「無様（格好が悪い）」などが該当する。だが、(9b)で示されるように、新造された語、特に(9c)の外来語が語基である場合、「無」は三字漢語と同様に「存在性の否定」を示す。

- (9) a. 無口、無手、無闇、無印、無傷、無様（「少ない」、「良くない」）
 b. 無割引、無手当、無届け、無締り、無歪みなど (Ø)
 c. 無リスク、無アクセント、無センス、無コレステロール、無ダイヤなど (Ø)

現代日本語では、「無-」ではじまる語の特殊な意味が「二字漢語」→「混種語（和語語基）」→「三字漢語、混種語（外来語）」の順に減少する傾向が見られる。このように、現代日本語では「無」が接頭辞として主に機能し、生産性と規則性が強調されるため、単純な否定の意味で解釈されることが多い。現代語では特殊な意味が衰退していることが確認されており、この傾向は「無価＝価値が無い」のように、二字漢語の意味を侵食している。

3.5 「無」の意味についての再考

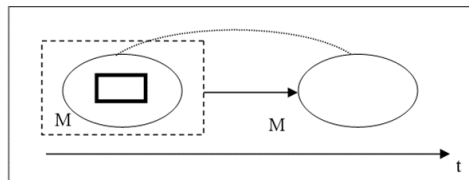


図5 否定の認知構造
 (山梨 2016 : 136)

Langacker (1991) は否定を「存在の不在や非存在」として概念化し、否定は肯定的な状況との対比を通じて心的空間内での存在と非存在の対立を明確にすると述べている。山梨 (2016) は図5でこのモデルを時間軸に沿ったプロセスとして捉え、「不在」や「欠如」を否定の本質とする。「無-」は「存在性の否定」を表しながら

も、存在との対比によって非存在を強調する認知的な役割を持っている。日本語の「無-」は「存在性の否定」を示すが、(9)で示されるように「重要な要素の欠如」を強調する。

- (9) a. ブラックタイガーなどの場合、販売時には下処理の方法によって有頭エビと無頭エビに分けて表示されることが多い。(YOUREI) (→エビは必ず頭があるが、加工で取られた。)
 b. 糖분을加えていないものは無糖練乳と呼ばれるが、単に練乳と呼ぶ場合はこちらの加糖練乳を指すことが多い。(YOUREI) (本来と異なって、砂糖を加えられない)
 c. 無血クーデターにより政権を掌握した。(BCCWJ) (クーデターのイメージと異なって、血を流さない)

次に、「無」は「多い」や「良い」といった積極的な特殊な意味形成において、「甚だしい」を通じて二重否定による強調が関与している。論理学では、二重否定 ($\neg(\neg P)$) は肯定 (P) と同等である（無害、無罪など）が、言語では二重否定が強調の効果を持つ。「無駄」（駄目が無い→役に立たない）などでは、余剰否定が強調の役割を果たし、単なる否定を超えた意味を持つ。この「否定の強調」は「無数（非常に多い）」や「無価（非常に良い）」のように、「無-」が語基の意味を強調する際に機能している。これらの要素が組み合わさることで、「無-」は本来の否定的意味を超えて、「良い」や「多い」といった強い意味を形成することがある。

しかし、これらの特殊な意味は日本語に限らず、英語の否定的な接尾辞「-less」でも「甚だしい」「多い」と「良い」の意味を形成している。

- (10) a. boundless, limitless, endless, timeless など (→「甚だしい」)
 b. countless, numberless, measureless など (→「多い」)

c. matchless, peerless, priceless など (→「良い」)

(10) で見られるように、英語の「-less」は語源で「欠いている」を示すが、存在性の否定を示せるのは物事の存在を前提している(西川 2006: 257)。そのうち、「無」は原義で「ない、存在しない」から、存在の欠如や否定的側面として扱われる(チャン 2023: 215)。ここでは、理性的な西洋哲学に基づいた「-less」と比べて、「無-」の認知文化背景は、仏教をはじめとする「無」の概念と深く関係していると考えられる(有光 2013: 168)。東洋哲学・宗教では「無」は存在の本質や宇宙の原理を示す重要な概念とされ、物事の本源的な力や空性を強調する。例を挙げると、「無為(因果の関係を離れ、生滅変化しない永遠絶対の真実)」がある。さらに、仏教で提唱した「無我、無欲、無念、無執」などでの「ない」は「完全がない」状態になるのではなく、煩惱から解脱し、「空」という最高の状態に達する。この「空」は、「無」でありながら「有」でもある(有光 2013: 176)。「無-」はこの仏教の「空性」を背景に持ち、物事の背後にある超越的な原理や宇宙の根本的な状態を理解するための手段となる。そのため、「無-」ではじまる語は言葉の表面よりも抽象的な理解を促進し、本研究で提唱した特殊な意味を形成するきっかけとなる。

4. 結論と今後の課題

本研究では「無」ではじまる語の特殊な意味について次の3点を明確にすることができた。一つ目は、特殊な意味の認定と体系化である。「無」ではじまる語には、量的価値、質的価値、程度評価を表す特殊な意味が存在することが、表1で示したようにグループによって特殊な意味ペアに分類できることである。二つ目は、「無」の特殊な意味は認知言語学の視点で見ると「ある」を前提に多少、良し悪し、そして事実・期待/想定との対比から形成されることである。それは「無」の本質が否定を間接的に表し、認識レベルで「絶対無ではなく、不在、欠如」を示すからである。特に、Bグループの「甚だしい」が二重否定による強調意で「良い」と「多い」の意味を発生させるように、「無」は意味に有標性、拡張性、多義性がある。三つ目は、現代日本語の変化である。現代日本語において、「無」は主に文法的な意味しか表さず、特殊な意味が衰弱していることが確認された。これは、「無-」が日本語で否定的な接頭辞として機能し、語形成における規則性と生産性によるものである。要するに、語形成における「無」は規則性と生産性を持ち、意味が単純化することは事実だが、特殊な意味の存在やその多様性を否定することはできない。今後の研究では、認知言語学の理論で日本語に限らず、漢字文化圏での「無-」の特殊な意味のより詳細な分析を行い、その多様性をより深く理解することが必要である。

参考文献: 相原林司 (1986) 「不- 無- 非- 未-」『日本語学』5(3), 明治書院, pp.67-72 / 有光奈美 (2011) 『日・英語の対比表現と否定のメカニズム: 認知言語学と語用論の接点』、開拓社 / 有光奈美 (2013) 「「無」と「空」の関連表現と広告表現における“fill the void”の位置付け: John Cage 「4分33秒」の世界観との接点」『経営論集』(81), pp.161-177 / 王淑琴 (2006) 「日本語における否定接頭辞『不-』『無-』『非-』の語形成: 語基に課される意味的な制約」『東吳外語學報』(23), pp.125-147 / 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』、ひつじ書房 / 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版 / 久保圭 (2016) 「日本語接辞にみられる否定の意味的多様性とその体系的分類」、京都大学大学院人間・環境研究科土論文 / 西川盛雄 (2006) 『英語接辞研究』、開拓社 / チャン クォック ヒエップ (2022) 「日本語における『無』の意味についての研究: 『無』ではじまる二字漢語を中心に」『日本語・日本文化研究』(32), pp.182-196 / チャン クォック ヒエップ (2023) 「日本語における『無』ではじまる二字漢語の意味についての研究: 『無』と結合する語基の意味を中心に」『ハノイ大学日本語学部第4回国際シンポジウム紀要〜日本語教育と日本研究〜世界の潮流とベトナムの実践』, pp.200-218 / 山梨正明 (2016) 『自然論理と日常言語』ひつじ書房 / Johnson, M. (1987) *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason.* University of Chicago Press / Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.2, Stanford University Press.

「ダイエット」・「ダイエッター」の和製的意味用法の変遷

呉^ご文^{ぶん}傑^{けつ}（関西大学大学院生）

1 はじめに

英語圏で「Generation X」の若者たちを「Xer」と呼ぶように、接尾辞「-er」（…する人、…の性質を持つ人）を用いて、ある生活様式を共有する人々を分類して名指す造語法が日本語にも転用され、多くの和製英語が現れ、その一部は広く定着もしている（難波 2006）。

その中で、英語本来の意味とは異なる日本独自の意味や文脈で使用されている特殊な外来語もある。本発表では、その「日本独自の意味」を「和製義」と称する。従って、それに属する「ダイエット」と派生形の「ダイエッター」がある。

「ダイエッター」は現れた当初では「様々なダイエット法で繰り返し挑戦するダイエット中毒者」という和製義で用いられたが、現在では「ダイエットしている人」という意味で用いられている。つまり、現在の「ダイエッター」に「中毒者」の嫌味が含まれず、「ダイエッター」と称する条件も「様々な方法で繰り返しダイエットを行う人」から、英語と同様に単に「ダイエットをしている人」だけと変わってきた。これは一般的な「まずは英語の本義で用いられ、後に和製義が生じる」という他の「-er」派生形の意味変化の流れと異なっている。

一方、日本語における「ダイエット」の和製義も確認された。英語「diet」は「日常的な食事・規定食・痩せるための減食」などの意味を持ち、外来語の「ダイエット」も、最初は英語と同様な用法であったが、現在では「5キロのダイエットに成功した」のように「減量・痩せること」という和製義で多く用いられている。つまり、本来は「過程」を指していた「ダイエット」は現在では「結果」も指すようになった。さらに、「ダイエット」の範囲も「食事制限」に関係なく「運動」、「サプリ・薬」、「グッズ」などを利用する減量行為を指すようになった。

2 先行研究

木佐（1996）では「ダイエット」の意味について、辞書では「規定食」と書かれているが、これは英語にある用法であり、日本語では稀な用法であると述べ、本来の「健康や美容のために、食事の量や種類に制限すること」という意味から、最近では「ダンベル・ダイエット」「マラソン・ダイエット」のような食事制限に関係なしに、単に「スマートにやせる法」「痩身法」の意味に用いられていると指摘している。

呉（2023）では、外来語「クレーム」と「クレマー」の和製義を扱い、「原形の意味拡張が派生形に影響を与える」という従来の意味拡張と異なり、「クレーム」と「クレマー」が相互に影響を与えながら意味拡張していく現象を明らかにした。

本発表では、辞典、言語コーパス、新聞記事データベースなどを用いて、外来語「ダイエット」とその「-er」派生形である「ダイエッター」の和製的意味用法の変遷をたどり、一般的な「まずは英語の本義で用いられ、後に和製義が生じる」という意味拡張のプロセスとは異なり、「まずは和製義で用いられ、後に「ダイエット」の「-er」形としての派生義と英語の本義が加わって、和製義が衰弱した」という特殊な意味拡張のプロセスを明らかにする。

3 「ダイエッター」の意味用法の変遷

3.1 「ダイエッター」の語釈

まず、「ダイエッター」は『日本国語大辞典』に収録されていないため、初出と語義を確認するために、『外辞苑——平成新語・流行語辞典』(2000)(以下、『外辞苑』)、『日本語俗語辞書』(2018)、『知恵蔵 2004-2007』を調査した。それぞれの記述を以下に示す。

(1) 「ダイエッター」 一九九五年の言葉。新種のダイエット法が紹介されるたびに、繰り返し挑戦を行うダイエット中毒者。ダイエッターにとっては、食事は味わって食べるものではなく、単なる燃料として口に入れる存在でしかない。*こうしたダイエット中毒者がけっこういることは知られているが、言葉としてこのようなく「ダイエッター」というものがあるということはあまり知られていない。やはり言葉遊びに過ぎないのかもしれない。(『外辞苑——平成新語・流行語辞典』2000年)

(2) ダイエッターとは、ダイエットをする人、様々なダイエットグッズに手を出す人。

【年代】 1995年 【種類】 若者言葉

ダイエッターとはダイエットに英語で人化する接尾語「-er」をつけたもので、文字通りダイエットをする人のことである。「今日から私もダイエッター」といったように、始めたばかりの人を含め、ダイエットをしているあらゆる人を対象に使われる。ただし、ダイエッターという言葉が使われ始めた1990年代には単にダイエットをする人のことではなく、通販番組で話題のダイエットグッズ(運動器具)やダイエットサプリをいろいろ持っている人、雑誌やTVで新たなダイエット法が紹介される度に試すような人を嘲う言葉であった。当時の意味合いで認識している人には嫌味言葉になるので使用に注意が必要。(『日本語俗語辞書』最終更新:2018/12/4)

(3) ダイエッター[dieter](やせるために)ダイエットをしている人。

(『知恵蔵』2004年-2007年)

(1)と(2)を見れば、「ダイエッター」は現れた当初では「様々なダイエット法で繰り返し挑戦するダイエット中毒者」(以下、「本義」とする)という嫌味言葉であったが、(3)の記述と合わせて見れば、現在では他の「-er」派生語と同じように単に「ダイエットをしている人」という意味になったと分かる。

従って、英語「dieter」の意味と比較するために、代表的な『オックスフォード現代英英辞典』(以下、『OALD』)(2020)で述べられている「dieter」に関する記述を考察したところ、英語「dieter」は日本語「ダイエッター」の現在の意味と一致している。

3.2 新聞データベースにおける「ダイエッター」の意味用法

次に、「ダイエッター」の「本義」と「転義」の使用実態を明らかにするために、検索キー:「ダイエッター」で、『朝日新聞クロスサーチ』(以下、『朝日』)、『日経』、『毎日』、『読売』、『産経』を通じて用例採取を行った。

本研究において「ダイエッター」の意味の判断基準について、「様々な方法で繰り返しダイエットを行う人」、「ダイエット中毒者」のいずれを満足すれば、「本義」と判断する。また、英語と同様に単に「ダイエットしている人」を意味する用例を「転義」とする。

その中で、ダイエット・健康茶の名前である「ダイエッターズ」、生ごみ処理小型機の商品名などの記事を除き、総計47件となる。「本義」と「転義」の代表的な用例を(4)～(7)に挙げ、結果を表1で示す。

(4) 新種のダイエット法に繰り返し挑戦するダイエット中毒者、「ダイエッター」について、医師

から興味深い話を聞いた。(本義)

(日経/「食事はエサ！？悲しきダイエット (ヤングヤング)」1995/1/23)

(5) ダイエットが用いる方法は、水だけを飲む「水ダイエット」、「ヨーグルトダイエット」、「こんにゃくダイエット」、「リンダ」と呼ばれる「リンゴダイエット」などがある。(本義)

(朝日/「ダイエットー 高山勉 (青春譜)【大阪】」1996/4/20)

(6) 忙しいダイエットにお勧めしたいのは、お雑煮。それも和風シチューといった〈石狩雑煮〉のように、野菜をたっぷり入れたものがいいんです。(転義)

(産経/「(略) 石狩雑煮 忙しくてもバランス考えて」1996/6/24)

(7) ・やせられずビキニの着れないいつもの夏 (上野学園大2年女・ダイエット) (転義)

(毎日/「[キャンパル] 考事現場 去りゆく「夏」を川柳に」1997/8/29)

表1 新聞データベースにおける「ダイエット」の「本義・転義」(単位: 件)

年代	本義	転義	計
1995-1999	6	2	8
2000-2004	5	6	11
2005-2009	1	9	10
2010-2014	1	5	6
2015-2019	1	7	8
2020-2022		4	4
計	14	33	47

表1の時間に注目すると分かるように、新聞記事に見られる「ダイエット」の最初の用例は『日経』の(4)であり、『外辞苑』と『日本語俗語辞書』の記述と一致している。また、「ダイエット」の本義の用例はほぼ2004年以前の用例で、2004年以降の「ダイエット」は「転義」の「ダイエットをしている人」で多く用いられるようになった。これは、『知恵蔵2004-2007』での記述とも一致している。

3.3 『BCCWJ』とX(旧Twitter)における「ダイエット」の意味用法

次に、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、『BCCWJ』)を用いて、検索キー:「ダイエット」で用例採取を行った。検索結果は「Yahoo!知恵袋」と「Yahoo!ブログ」の僅かな3例である。よって、用例をより多く考察するために、同じく話し言葉の性質の強いコーパス「X(旧Twitter)」の高度な検索¹⁾を使用し、2007年-2023年に渡ってサンプリング調査を行った。その中の代表的な例を(8)～(11)のように示す。

(8) ダイエットの皆さんにお聞きしたいのですが、今までトータルで最高何キロ落ちましたか？男女不問です。リバウンド前でも構いません。私は十代の時に過食症に悩み、あれこれ試行錯誤しながら(運動、エステ、食事療法、ありとあらゆる方法…) (本義) (Yahoo!知恵袋2005年)

(9) そのすぐ近くにできたミニケーキのお店もチェックしに寄ったけど、ダイエットの私には買うことも食べることも許されない…指をくわえてお店を去りました。(転義)

(Yahoo!ブログ2008年)

(10) オカルトダイエット: 炭酸水には、疲労回復、整腸作用、血行促進、美肌効果、満腹感などの効用があるんですよ。

一般的なダイエット: 水素水に飽きたら、今度は炭酸水? (本義)

(筋肉太りなんて存在しませんっ!!@kinnikubutori 2016/12/30)

(11) 一駅分歩いた。ダイエット☆ (転義)

(ねもたつ@nemotatsu 2007/7/19)

X（旧 Twitter）において「ダイエッター」は主に自分のことを指すように用いられ、「自称ダイエッターだけど多く食べた」、「ダイエット仲間探し」などの「転義」の投稿が多く見られる。X（旧 Twitter）のデータのある 2007 年から、(10) 以外「本義」の用例はほぼ見当たらず、「転義」で多く用いられている。

4 「ダイエット」の意味用法の変遷

4.1 「ダイエット」の語釈

「ダイエット」の初出と語義を確認するために、用語雑誌『現代用語の基礎知識』（以下、『現基知』）と『岩波』、『新明解』、『三省堂』、『明鏡』などの国語辞典を考察し、「ダイエット」の和製義に関する記述のある『現基知』と『三省堂』を取り上げ、表 2 のようにまとめる。（大きく変化していない版の記述を略し、重複している記述を「…」で示す）

表 2 「ダイエット」に関する語釈

1972 年	現代用語の基礎知識	議会。定食。
1973-1987 年	現代用語の基礎知識	食物。治療、体重調節のための規定食。（やせる食事法。）
1988-2006 年	現代用語の基礎知識	体重調節のための規定食。やせる食事法。低カロリー食。
2007-2019 年	現代用語の基礎知識	…②（～する）減量。
1974 年	三省堂国語辞典第二版	〔名〕治療や美容のための、特別食。
2001 年	三省堂国語辞典第五版	〔名・自サ〕（健康や美容のための）減食。…
2014 年 （-2022 年）	三省堂国語辞典第七版 （-第八版）	…①（健康や美容のために）食事を制限すること。「トマトー・低炭水化物ー」②（食事を制限して）体重を減らすこと。「五キロのーに成功・自転車ー」

『現基知』の記述によれば、「ダイエット」は 1972 年にすでに英語と同様な意味を持つ外来語として存在し、1988 年に「食物」、「治療のための規定食」など一部の英語本義が使用されなくなった。また、2007 年を境にし、「結果」を表す「減量・痩せること」という和製義に関する記述が現れた。それは同じく 2014 年の『三省堂』第七版の②からも見られる。さらに、『三省堂』第七版の「自転車ダイエット」という用例の記述から、日本語の「ダイエット」の範囲が拡張したことが明らかとなった。

従って、英語「diet」の意味と比較するために、3.1 節と同様に『OALD』（2020）で「diet」に関する記述を確認したところ、英語「diet」には「食事によって健康になる・痩せる」という意味が記述されているが、日本語「ダイエット」のように、運動も範囲に含まれ、「結果」を表す「減量・痩せること」のような意味用法はない。

4.2 『朝日』における「ダイエット」の意味用法

「ダイエット」の意味に関する日本語内に定着した段階でのデータを得るために、新聞紙として代表的な『朝日』を用いて用例収集を行った。まず、「朝日新聞縮刷版 1879～1999」で「ダイエット」という表記での最初の用例を考察したところ、1973 年 6 月 8 日の「高くつく美容と健康 太らない食品 ダイエット・フード」というタイトルで現れた。次に、『朝日』で収録されている新聞記事の中で、朝日新聞本紙のデータは 1984 年から

順次収録のため、1984 年から 2023 年に渡ってサンプリング調査を行った。

分類方法について、食事・特定食品・飲料（ダイエット食品も含め）の制限と摂取を①、ダイエットサプリメントや薬など食品とは呼べないものを②、運動・エステ・サウナ・何か運動量を増加する活動などを③、ダイエットグッズを④、ニックネームや人の属性を表すなど文脈でダイエット方法が明確に提示されていない用例を「その他」とする。また、英語本来の意味である「食事」に当たる用例を「英語」、「ごみのダイエット」などのようなメタファー表現を用いる用例を「比喩」とする。その結果を表 3 で示す。一部用法の最初の用例を（12）－（16）のようにあげる

表 3 「朝日」における「ダイエット」に関する使用（単位：件）

年代	①	①③	②	②③	③	③④	④	その他	比喩	英語	計
1984-1988	16		1				1	8		2	29
1989-1993	19				5			6			30
1994-1998	15	1	1		4		1	6	2		30
1999-2003	12	2	1		2		2	9	2		30
2004-2008	15	2	3		1		3	5	1		30
2009-2013	12		2	1	5		3	5	2		30
2014-2018	16	2	2		7	1		2			30
2019-2023	10	4	2		10			3	1		30
計	115	11	12	1	34	1	10	44	8	2	239

①	食事制限・摂取
②	サプリ・薬
③	運動類・エステ
④	グッズ

（12）一方、阪本さんは、ラジコンとハンググライダーで操縦のカンを養い、毎日 80 キロの自転車走行訓練を欠かさなかった。「より軽い体重でより強い体力」をつけるために栄養学の本を十数冊買い込み、「理想的なダイエット」に悪戦苦闘したという。（①③）

（朝日/「ふわり人力飛行機、1717 メートル（略）」1989/1/5）

（13）ダイエット食品として売られていた錠剤に多量の利尿剤が含まれ、福岡県などに苦情が相次いでいたが、（略）薬事法違反（無許可医薬品販売）の疑いで捜索、芦刈、阿部両社長を任意で取り調べた。（②）（朝日/「多量の利尿剤入りダイエット食品 厚生省が販売停止指示」1984/8/31）

（14）潜在知覚テープが国内で売り出されたのは昭和 61 年夏から。（中略）テープの内容は、（中略）禁煙、ダイエット、安眠、速読、ストレス解消、恋人獲得などの目的をかかげている。（④）

（朝日/「潜在知覚テープ、流行のきざし だまって聞けばピタリヤル気？」1988/1/4）

（15）九二年七月はずばり「お金の節約法」、九三年三月は題して「暮しのダイエット」。「はっきりいって、両方とも売れました」（比喩）

（朝日/「節約ゲーム」を楽しむ 3 大誌にみる読者の生活観（略）」1994/1/3）

（16）正統派の王子に対してダイアナ妃は、（略）チャールズ殿下を若づくりにし、テレビ映画「ダラス」を見せたり、赤身の肉は食べないというダイエットを持ち込んだといわれる。（英語）

（朝日/「英皇太子ご夫妻の来日 自らを主張する開かれた王室（略）」1986/5/8）

表 3 と用例を見れば分かるように、「朝日」における③「運動」という意味の「ダイエット」は 1989 年から現れた。②「サプリ・薬」の例はより早い 1984 年、④「グッズ」の例は③「運動」と同じぐらい 1988 年から現れた。また、③「運動」の用例数が徐々に増加に、2019-2023 年の段階で①「食事制限」と同じ使用率となった。全体的に見ても、「ダイエット」の用法が①「食事制限」から②「サプリ・薬」、③「運動」、④「グッズ」などに移行する現象が見られ、「ダイエット」が指す範囲の意味拡張が確認された。

次に、（14）の「ダイエット」はテープの目的となっており、「痩せるために食事制限する」という「過程」の意味用法と解釈されにくいと、「結果」を表す「減量する」とい

う意味用法だと考えられる。よって、「ダイエット」には1990年頃から「結果」を表す「減量する」という和製義が現れつつあると考えられる。さらに、この和製義を活用し、メタファー表現として「暮しのダイエット」(1994)、「日本経済のダイエット」(1995)、「CO2 ダイエット」(2000・2008)、「ごみダイエット」(2001・2010・2020)、「交通のサブウェイダイエット」(2013)などの用例も1994年から確認された。

5. まとめ

本稿では、以下のことを述べた。

- ① 「ダイエッター」は1995年に、最初は「様々なダイエット法を繰り返し挑戦する中毒者」という和製義を持つ言葉として現れ、2004年前後から現在にわたって「中毒者」という否定性が含まれず、「ダイエッター」と称する条件も「様々なダイエット法で繰り返し挑戦を行う人」から英語と同様に単に「ダイエットをしている人」となった。これは一般的な「まずは英語の本義で用いられ、後に和製義が生じる」という他の「-er」派生形の意味拡張の流れと異なっている。
- ② 「ダイエット」は最初英語と同様に「健康・美容のための食事制限」の意味で用いられたが、1980年代中ごろから現在に渡って「サプリ・薬」、「運動」、「グッズ」のような食事制限と関係なしに減量行為を指すように意味拡張した。
- ③ 「ダイエット」に「過程」を表す「痩せるために食事制限する」の意味以外、1990年頃に「5キロのダイエットに成功した」のような英語にない「結果」を表す「減量する」という和製義が現れた。さらに「ごみのダイエット」のような和製義をメタファー表現とする用法が現れ、ある程度の生産性を持っていると言える。

つまり、「ダイエッター」の意味は、まず和製義で用いられ、後に「ダイエット」の「-er」形としての派生義と英語の本義が加わって、和製義が衰弱したという特殊な意味拡張であった。

参考資料

朝日新聞クロスサーチ <https://xsearch.asahi.com/> (2024年5月1日確認) / 現代日本語書き言葉均衡コーパス <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> (2024年5月13日確認) / 産経新聞データベース https://opac.lib.kansai-u.ac.jp/?page_id=36088 (2023年10月1日確認) / 日経テレコン <http://t21.nikkei.co.jp/g3/CMN0F11.do> (2023年10月1日確認) / 日本語俗語辞書 <http://zokugo-dict.com/16ta/dietter.htm> (2023年10月1日確認) / 毎索 https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/WMAI_ipcu_login.html (2023年10月1日確認) / ヨミダス歴史館 <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/> (2023年10月1日確認) / 『オックスフォード現代英英辞典』第10版、旺文社、2020年 / 『外辞苑——平成新語・流行語辞典』平凡社、2000年 / 『現代用語の基礎知識』1972-2020年版、自由国民社、1972年-2020年 / 『三省堂国語辞典』初版-第八版、三省堂、1960-2022年 / 『新明解国語辞典』初版-第八版、三省堂、1972-2020年 / 『知恵蔵』2004-2007年版、朝日新聞社、2004-2007年

参考文献

木佐敬久 (1996) 「日本語の変化を辞書はどう反映しているか『こだわる』から『ダイエット』まで」『放送研究と調査』46-05、NHK 放送文化研究所/呉文傑 (2023) 『『クレーム』と『クレーマー』の相互作用』『国語語彙史の研究』42、国語語彙史研究会/難波功士 (2006) 「“-er”の系譜：サブカルチュラル・アイデンティティの現在」関西学院大学社会学部紀要 100、西宮：関西学院大学社会学部研究会

無標実現と有標実現の使い分けについて

—意志と潜在意図—

おう 王 鏡霖(神戸市外国語大学大学院博士課程)

1. 先行研究

渋谷 (1993)、尾上 (1998)、川村 (2012) は、「きのうやっと手紙の返事が書^けk-e た」「今朝は目覚ましなしでも起きられた」のような「動詞+{-e-/~/-られ-/}+タ」の形を、「実現(系)可能」「意図成就」を表すものとしている。

渋谷 (1993) は、「実現系の可能は、様々な条件によって、ある動作を実現することが可能・不可能である・あったことを表わす」(p. 14) と説明している。川村 (2012) は、「[ラレル]形述語に限らず、日本語で「可能」を表すとされる形式には、通常異質な二種類の意味が現れる。一つは本来の意味での<可能>、もう一つは<意図成就>である」と述べており、上記の「書けた」「起きられた」のような表現を「意図成就用法」として、「行為者が実現を目指して仕掛けた行為が、行為者の意図どおり実現する」(p. 187)を表すと解釈している。

一方、林 (2007) は、1a と 1b における「会えた」「聞けた」は、意図的行為とは言えないため、実現可能表現は意図的でない偶発的な行為を表すことができるとして、実現可能表現は、「事象が主体にとって好ましく、かつ得難い」(p. 43) という意味特徴、および、1c のような否定の場合に「動作や変化が実際に生じたが、事象の達成点に到達しなかったため、途中で終わってしまい、結果的に完遂されなかった」(p. 37) という「事象の未成立」が表せる(無標動詞文と比較して) という意味特徴をもつと指摘している。

1a. 「旅行中に思いがけず中田英寿選手に会えた」

1b. 「先月行われたスピッツのコンサートで、思いがけず新曲の初披露が聞けた」

1c. 「子供達が雪だるまを作り始めたが、結局 {*作らなかった/作れなかった}」

2. 先行研究における問題点及び本稿の立場

林 (2017) が提示した「事象が主体にとって好ましく、かつ得難い」という意味特徴は川村 (2012) の「意図成就用法」を包摂するのに対して、林 (2017) が挙げた 1a、1b のような偶発的行為の例は確かに意図成就用法では説明しにくい。林 (2007) は 1a、1b を「全く予想しないというような、主体の意図の外での偶発的な行為の実現」(p. 34) を表す例と解釈している。しかしながら、実現可能で表わされる偶発的行為は、行為者の意図と全く無関係なのであろうか。1a' は、発話時における行為者 (= 話者) にとって好ましい事象を表わしているにもかかわらず、そこで実現可能は用いられない。「好まし (い)」という評価と行為者の意図との関係について、より詳しく考察・分析する必要があると考える。

1a'. 「旅行中に有名人らしき人に {会った/?会えた}。日本代表の中田英寿選手だった」

また、林 (2007) では、否定の実現可能は「事象の未成立」を表せるが、無標の動詞文と同じ

ように 1d のような「事象の未生起」を表すこともできるとされる。しかし、「事象の未生起」（動作や変化が最初から全く生起しなかった）を表す場合、実現可能文と無標動詞文にどのような意味的相違があるのかについては検討されていない。

1d. 「大雨が降ったので、ジムに {行かなかった／行けなかった}」

本稿では、過去に実現した動的事態を表す「動詞+{/e-/~/-られ-/}+タ」の形（「書^けk-e-た」「起き-られ-た」等）を「有標実現（形）」と呼ぶことにし、それに対して、過去に実現した動的事態を表す「動詞+φ+タ」の形（「書^いk-φ-た」「起き-φ-た」等）を「無標実現（形）」と呼ぶことにする¹。林（2007）と川村（2012）の立場を踏まえて、偶発的行為と「意図成就」を関連づけ、有標実現と無標実現の用法について、より適切な説明を探る。

3. 無標実現と有標実現

3.1. 意志と行為

無標実現と有標実現の使い分けを分析するにあたり、既実現事態における「意志」のあり方について考察したい。

日本語動詞においては、「意志動詞」と「無意志動詞」の分類が認められ、仁田（1988）は、「自己制御性」という意味的な特性を提出し、「自己制御性とは、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質である。自己制御性を持った動詞が、いわゆる意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞が、いわゆる無意志動詞である」（p. 35）と規定している。つまり、意志動詞は行為者の意志がコントロールする行為を表し、無意志動詞は行為者の意志がコントロールできない行為を表している。一つの基準として、意向表明を表す接辞 {/-o う/~/-/よう/} を伴いうる動詞を意志動詞（「書^こk-o う」「<朝> 起きよう」）、伴いえない動詞を無意志動詞（「*失^おw-o う」「*乗り合わせよう」）とすると、有標実現は意志動詞からのみ作られ、無意志動詞からは作られない（「書けた」「起きられた」「*失えた」「*乗り合わせられた」）²。一方、林（2007）が有標実現の意味特徴として提示した「事象が主体にとって好ましく、かつ得難い」は、行為者の意志あるいは意図を全く排除している。

3.2. 意志と潜在意図

現代日本語における無標実現は意志と強く繋がる。客観的結果（行為が実現した）が出るまで、行為者は、意志が出てから、意志が制御する行為を行い、行なった行為が結果になるという流れが見られる。

2a. 「昨日ジムに {行った／行けた}」

2b. 「昨日ルアーを {買った／買えた}」

通常、意志行為が実現するまで、行為者の行為を行う意志が対象行為を制御し、行為が行われ、

¹ 無標実現と有標実現がそれぞれ表す動的事態は、客観的には同一の結果に至る。

² ただし、有標形は無意志的である。e.g. 「*書けよう」「*起きられよう」

行為が実現したという結果に至るという流れがある。2a、2b において、無標実現が用いられる場合、行為者は行為時（の直前）において、行為への意志に抵抗を受けておらず、行為の実現を確信していた。話者の認識において、「行った」「買った」のいずれも行為者の意志で制御した結果である。それに対して、2a、2b において、有標実現が用いられる場合は、行為者（基本的には話者）は行為時において、行為への意志に対する何らかの抵抗を受けており、行為の実現を確信していなかった。話者の認識において、「行けた」「買えた」は行為者の意志だけで制御した結果ではなく、他の要素とも関わる。前者の無標実現における自己制御的な意志に対して、後者の有標実現に見られる、行為への意志が何らかの抵抗を受けた際に初めて行為者に意識されうる非自己制御的な意図を、本稿では「潜在意図」と呼ぶ。川村（2012）は後者の場合の用法を、「もっぱら「行為の実現」如何に注目しており、「行為者が意図をもって行為を仕掛けた」こと自体は背景に押しやっている」（p. 187）と説明している。行為者の（直前的）意志に基づく行為は無標実現で表わされ、行為者の潜在意図に基づく行為は有標実現で表わされる。

2a'、2b'のように、行為者が行為時において、行為への意志に対し何らかの抵抗（例えば「体調不良」「忙しくて、ジムに行く時間がない」「欲しいルアーがほとんどの店で売られていない」等が想定される）を受けていたことが明らかな文脈では、無標実現は用いられにくく、有標実現で表現する方が自然である。ただし、2a'、2b'のような状況が実際にあった場合でも、行為が実現したか否かのみが問題になっている文脈（「行ったのか、行かなかったのか」「買ったのか、買わなかったのか」）においては、無標実現「行った」「買った」が用いられることもある。

2a'. 「昨日 3 か月ぶりにやっとジムに {?行った／行けた}」

2b'. 「昨日、店を何軒も回って、どうにかそのルアーを {?買った／買えた}」

3.3. 通常の潜在意図と仮想的潜在意図

有標実現が用いられる場合、通常は行為者が行為時において潜在意図を意識していた。「きのうやっと手紙の返事が書けた」「今朝は目覚ましなしでも起きられた」、2a'、2b'はそのような例であり、川村（2012）で提示された「意図成就用法」に該当する。

一方、1a、1b は、行為者が行為時において、実際には潜在意図を意識していなかった例である。

1a. 「旅行中に思いがけず中田英寿選手に会えた」

1b. 「先月行われたスピッツのコンサートで、思いがけず新曲の初披露が聞けた」

林（2007）はこれらを偶発的な行為と見なしている。1a、1b について、行為者が中田英寿選手に会う意志、スピッツの新曲の初披露を聞く意志はもともとなく、意図成就用法では説明しにくい。3a-c も偶発的な行為とされる例であろう。

3a. 「燃料コントロールはキー・テクノロジー 永野は当時を振り返って、こういつている「いや、偶然にもウッドワードにめぐり会えてよかった。本当に運がよかったよ。もし、あのままだったら、J3 全体がどうなったことやら」」（BCCWJ: LBd5_00004）

3b.「ちなみにカツオノエボシを食べるのがアサガオガイです。偶然にも潮目にたどり着いてクラゲにありつけたから、この種族が残っているのです」(BCCWJ: PB54_00094)

3c.「マーチャンが大阪から帰る時、飛驒に寄って松茸を買ってきてくれた。松茸ご飯を作ってくれた。とてもおいしかった。今年は食べられないと思っていたのに思いがけなく食べられた」(BCCWJ: LBm7_00032)

林(2007)は「事象が主体にとって好ましく、かつ得難い」という意味特徴を、すべての有標実現の例を説明するためのものとして示した。ところが、1a'、1b'、3a'、3c'は、「行為者=話者」であり、事象が発話時における話者にとって好まし(くかつ得難)いと解釈される例であるが、これらにおいて有標実現は用いられない。

1a'.「旅行中に有名人らしき人に {会った/?会えた}。日本代表の中田英寿選手だった」

1b'.「ラジオで偶然スピッツの新曲を {聞いた/?聞けた}」

3a'.「その時ウッドワード社のある技術に {めぐり会った/?めぐり会えた}。それは全く新しい製品を生み出すことになった」

3c'.「ふだん料理などしない父が作った松茸ご飯を {食べた/?食べられた}。とてもおいしかった」

1a'、1b'、3a'、3c'から、偶発的な行為を表すとされる有標実現が用いられるためには、過去の行為時における行為者にとって、事象が好ましかった必要があることがわかる。1a、1b、3a-cでは、「仮に行為時より前に行為の機会があると行為者が知っていたら、行為への意志をもたず(ただし機会の少なさは意志への抵抗となった)」と話者が設定したために、有標実現が用いられていると考えられる。このように設定される意図を、本稿では「仮想的潜在意図」と呼ぶことにする。他方、1a'、1b'、3a'、3c'については、そのような意図が設定できない。

有標実現が用いられる例について、行為者は行為時(直前)において、1b:「[スピッツのコンサートを聞きに行った話者が] 特別な演奏を聞こう」、3a:「ジェットエンジンの燃料制御の問題について、解決策を見つけよう」、3b:「[アサガオガイが] 何らかの餌にありつこう」、3c:「松茸ご飯を食べることは実現しないだろうが、もし食べられるものなら食べたい」といった意志をもっていた。そして、1bでは特別な演奏の一つが「新曲の初披露」に、3aでは解決策の一つが「ウッドワード社の技術にめぐり会うこと」に、3bでは何らかの餌の一つが「カツオノエボシというクラゲ」に当たる。1aはサッカーのファンが発話すれば自然に受け取れるが、サッカーにあまり興味がなく、かろうじて中田選手の名前を知っているだけの人が発話すると不自然である。以上の観察から、仮想的潜在意図が設定できるのは、行為者が行為時において、有標実現の表す行為自体への潜在意図は意識していなくても、当該行為に関わる何らかの行為への意志をもっていた場合であるといえる。

林(2007)が偶発的な行為を表すとした有標実現の例は、仮想的潜在意図に基づくものと解釈できる。「好まし(い)」とされた意味特徴は、仮想的潜在意図の目指す行為として当然といえる。

「偶然」「思いがけず」等の語句と共起する有標実現の例は、BCCWJによると少なく、有標実

現の周辺的な用法と見られる。有標実現が偶発的行為、すなわち、仮想的潜在意図に基づく行為を表す用法は、潜在意図に基づく行為を表す意図成就用法うちの周辺的なものと理解すべきであろう。

4. 否定の場合

4.1. 否定の無標実現と否定の有標実現

否定の無標実現（「動詞+ ϕ + $\{-a$ な $\sim$ / $\sim$ - $\}$ + $-$ カット」）と否定の有標実現（「動詞+ $\{-e$ / $\sim$ / $\sim$ - $\}$ + $-$ ナ+ $-$ カット」）について、林（2007）は、「動作または変化が実際に生じたか否かということと、動作が生じた場合には結果的に事象の達成点に到達したかどうかということに基づき、事象のあり方に《成立》、《未成立》、《未生起》の三つのパターンがある」（p. 36）としたうえで、「実現可能文は……事象の《成立》・《未生起》以外に「生じた行為が結果的に完遂されなかった」という事象の《未成立》を表わすことも可能であるのに対し、無標の動詞文は、主体の行為が実際に生じたかどうかという意味を表わす構文であるため、事象の《成立》と《未生起》しか表わすことができない」（p. 43）と述べている。4aでは、動作が一旦発動、生起すると否定無標実現が用いられないのに対して、否定有標実現は動作が発動した後でも用いられる。しかし、4bにおける「行かなかった」と「行けなかった」はいずれも未生起の事象であり、否定無標実現と否定有標実現が未生起の事象を表す場合、どのような意味的相違があるのかについて、林（2007）では考察されていない。

4a. 「子供達が雪だるまを作り始めたが、結局 {*作らなかった／作れなかった}」

4b. 「大雨が降ったので、ジムに {行かなかった／行けなかった}」

4.2. 未生起の事象を表す否定有標実現

現代日本語の否定辞 $\{-a$ な $\sim$ / $\sim$ - $\}$ 、 $\{-i$ ません $\sim$ / $\sim$ - $\}$ は、動作動詞に後接する場合、行為が起きる可能性がありながら、開始せずに終わることを表す。4aでは「作り始めた」とあるように、「作る」行為が既に開始しており、否定無標実現は用いられない。また特に、動詞が意志動詞で、かつ行為者が話者自身である場合は、話者が行為を始めない方を選択することを表す。意志動詞の否定無標実現が用いられる場合、当該行為がこれから実現するかもしれないが、話者は事象の終了時点を設定し、その時点までのことを過去時で表現している。5a'、5b'はそのような例であり、設定された事象の過去の終了時点まで、行為者が否定的な意志で「行く」「買う」行為を始めないことを表す。否定的な意志が存在しなかった場合は、5a''、5b''のように「～ていない」で表現する。

5a'. 「昨日ジムに行かなかった」

5b'. 「昨日ルアーを買わなかった」

5a''. 「昨日ジムの近くで君を見かけたけど、ジムに行ったの?」「いや、{*行かなかった／行っていない} よ」「おかしいな。見間違いかな」

5b''. 「ルアーを {?買わなかった／買ってない}。釣りに行くとは思わなかった³」

未生起の事象を表す否定無標実現と否定有標実現の意味的相違を明らかにするために、6a の文脈を導入する。6a では、行為者がジムに行ってトレーニングしようと思ったが、大雨の影響でトレーニングをしないことにし、結果としてジムに行かなかった。否定有標実現は、4b では未生起の事象を表すことができるが、6a においては用いられない。つまり、否定有標実現は行為者の意志が否定的であれば、未生起の事象を表わしえないといえる。

6a. 「大雨が降ったので、トレーニングをやめることにして、ジムに {行かなかった／*行けなかった}」

4b は、行為者（＝話者）が否定的な意志によって行為を始めない方を選択したとも、あるいは、行為への潜在意図が行為者に意識され、抵抗（「大雨」）によって行為が実現しなかったとも解釈できる例である。

6b のように、行為者（＝話者）が行為時において、行為への意志に対し何らかの抵抗を受け、潜在意図を意識し、抵抗によって行為が実現しなかったということが明らかな文脈では、否定無標実現は用いられにくく、否定有標実現で表現する方が自然である。ただし 6c のように、「行為者≠話者」で、かつ、行為が実現したか否かのみが問題になっている文脈（「作ったのか、作らなかったのか」）においては、否定無標実現「作らなかった」が用いられることもある。

6b. 「ジムに行きたかったが、忙しくて {?行かなかった／行けなかった}」

6c. 「子供達は雪だるまを作りたかったが、あいにく雪が降らなかったため、結局 {作らなかった／作れなかった}」（林 2007: 36）

5. 結論

同じ客観的結果を生じた行為を、行為者が意志で制御したものであると話者が認識した場合、無標実現で表現するのに対して、行為者が意志で制御したものではなく、行為者の潜在意図に由来するものであると話者が認識した場合、有標実現で表現する。また、行為時において、行為者が潜在意図を意識していた場合と意識していなかった場合とがある。意識していなかった場合も、行為者の行為時における仮想的潜在意図を話者が設定しうるなら、有標実現を用いることができる。

参考文献

渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33（1）、pp. 1-262。

川村大（2012）『ラル形述語文の研究』くろしお出版。

尾上圭介（1998）「文法を考える-5-出来文(1)」『日本語学』17（7）、pp. 76-83、明治書院。

林青樺（2007）「現代日本語における実現可能文の意味機能：無標の動詞文との対比を通して」『日本語の研究』3（2）、pp. 31-46、日本語学会。

³ この「思う」は意志動詞ではない。e.g. 「(釣りに行くと)?思おう」

テシマッタの意味に関する一考察

三好 優花 (筑波大学)

1. はじめに

本発表では、実現済みの事態について述べる「テシマッタ¹」の基本的意味とそれに付随する使用条件、コミュニケーション上の効果について論じる。

「テシマウ」について、従来、完了を表すアスペクト的意味と、「残念」「意外性」といった話者の評価を表す心理的意味の 2 つの意味があるとされてきた。しかし、実際には、以下のように、「完了」を意図して「テシマウ」を使った文が純粋なアスペクト的意味としては捉えられず、不自然に感じられる場合も多いことが報告されている (近藤 2016)。

(1) 日本語教師：卒業おめでとう。この 2 年間はどうか。

学生：沢山の楽しかったこと、みんないい思い出になってしまいました。

(近藤 2016 : 51)

このことから、近藤 (2016) では、既に起こったことについて述べる「テシマッタ」について、「純粋なアスペクト的な用法」は存在せず、事態が望ましいか望ましくないかにかかわらず、「事態は想定と異なる」という文脈で用いられる表現であると結論付けられている。

一方、評価的意味で用いて誤用になった場合についてはあまり報告がないが、以下のように、評価的意味を読み取ることができる状況であるにもかかわらず不自然になる場合もある。次の例は、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』のストーリーライティングタスク 1「ピクニック」(図 1 の漫画のストーリーを書くタスク)で、学習者が 4 コマ目を描写した文である。

(2) サンドイッチを食べようと思ってバスケットの蓋を開けた途端、犬ちゃんはその中から飛び出してしまいました。二人はすごく驚きました。(I-JAS, TTR53)

上の例では、犬が飛び出てきたことについて、「驚きました」と書かれているように、「想定とは異なる」事態であると言える。また、この学習者は、犬が飛び出したことを残念だと捉えてテシマウ

を使用した可能性もある。それにもかかわらず、母語話者で同場面にテシマウを使用した者はおらず、違和感のある使用になっている。このような例について、なぜ不自然に感じられるのか、従来の先行研究では説明がなされていない。そこで、本発表では、この例の不自然さについて考えつつ、テシマッタの意味と使用条件について考察する。なお、近藤 (2016) で既に実現したことについて述べるテシマッタと、それ以外のテシマウは異なる意味特徴があると指摘されている。これを受け、本発表でも、既に実現したことについて述べるテシマッタに絞って考察する。

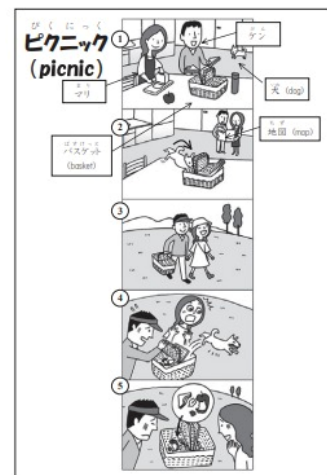


図 1 「ピクニック」
(迫田他 2020 : 35)

¹ 本発表では、カタカナで「テシマッタ」と表記する場合、「ちゃった」等の形態的バリエーションを含めるものとする。

2. 先行研究

本節では、テシマッタに限らず、テシマウに関する研究も含め、先行研究を概観する。

金田一（1955）では、テシマウは「ある動作・作用が完全に行われる」ことを表すとされている。さらに、高橋（1969）、吉川（1971）では用法の分類がなされている。両者の分類数は異なるが、大別すると、「終わりまで行われる」という完了・完結のアスペクト的意味を表すものと、「取り返しがつかない」「残念」「想定外」といった心理的意味を表すものとに分けられる。これらの研究では、アスペクト的意味と心理的意味との関係については考察されていなかった。その後、杉本（1991）では、動作が過程性を持つ場合は完結相（アスペクト的意味）を表すのに対し、非過程的動作の場合は「無意志化」を表し、さらに、無意志動詞に「無意志化」のテシマウが付くと「予想外の事態が実現する」（杉本 1991：121）という心理的意味が生じると分析されており、心理的意味が派生的なものとされている。それに対し、藤井（1992）や鈴木（1998）では、心理的意味こそがテシマウの中心的な意味であるとされている。しかし、梁井（2009）において、歴史的には、テシマウの意味はアスペクト的な意味から話者の感情・評価的な意味を表す用法へと拡張したことが示されている。その一方で、前節で見た近藤（2016）で指摘されているように、特に既実現のことについて述べる場合、心理的意味が感じられるのもまた事実である。この問題を解決する説として、丸谷他（1998）を取り上げる。丸谷他（1998）では、「「～てしまった」は、単に事態の完了のみを表すのではなく、事態の完了に伴う発話者のさまざまな気持ちをも表している」（丸谷他 1998：122）、「「てしまう」文がアスペクト的側面と「心的側面」の両面をあわせ持つ表現である」（丸谷他 1998：130）と述べられている。本発表でも、テシマッタは、事態の完了を表すアスペクト表現であるが、それを話者の評価を伴って述べるものであると捉える。

以上のように、テシマウについては多くの研究がなされてきているが、これらの説では、(2)の違和感の理由は説明することができない。

3. テシマッタの意味

本節では、テシマッタの表す意味について考察する。本発表では、テシマッタは、「事態の実現・完了について、話者（または視点が置かれている人物）にとって想定・期待とは異なるという評価とともに述べる」ものであると考える。以下、具体例を挙げつつ、「事態の実現・完了」および「想定・期待と異なるという評価」の意味するところについて述べる。

3.1. テシマッタが表す「事態の実現・完了」

丸谷他（1998）では、テシマッタが表す事態は、「それ以前の事態が完了する、つまり、「事態の変化が完了する」という意味の完了である」（丸谷他 1998：128）と述べられている。これはつまり、テシマッタが表すのは、「前の状態から事態の完了後の状態への変化」であるということができる。ただし、ここで「完了」という語を用いると、テシマッタが表すのは完了だけではないという批判が出るかもしれない。この点について、鈴木（1998）では、テシマウについて、「事態をひとまとまりにとらえ、その事態の実現を表す」（鈴木 1998：50）のものであると説明されている。鈴木（1998）はその根拠として、(3)のように事態の展開の局面を取り出すことのできな

い動詞とも共起すること、(4) のように変化が起こらない場合にテシマッタが不自然になることなどを挙げている。

(3) 現場にいてシマッタ。(「いる」は存在する状態を表す) (鈴木 1998 : 51)

(4) ?忙しかったので、昼ごはんを食べないでシマッタ。(鈴木 1998 : 52)

以上の先行研究を踏まえ、本発表では、テシマッタは、「事態が実現・完了する前の状態から事態が実現・完了した後の状態への変化」を表すものであると考える。これはつまり、テシマッタが用いられるためには、「事態が実現・完了する前の状態」から「事態の実現・完了後の状態」への遷移を捉える必要があることを意味する。

さらに、この事態の実現・完了が話者（あるいは視点を置いている人物）にとって想定外であると述べるのだから、事態が実現・完了する前の状態は、話者にとって想定内の状態でなければならない。まさにこの点が、(2) の不自然さの要因であると考えられる。

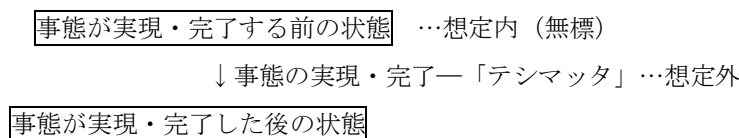


図2 テシマッタが表す事態の実現・完了

(5) サンドイッチを食べようと思ってバスケットの蓋を開けた途端、犬ちゃんはその中から飛び出してしまいました。二人はすごく驚きました。(TTR53) (= (2) 再掲)

(5) では、話者が視点を置いている人物、すなわち登場人物のケンとマリは、犬が出てくるまで、犬がバスケットの中に入っていることに気が付いていない。そのため、〈犬がバスケットの中にいる状態→犬が飛び出すという事態の実現→犬がバスケットの外にいる状態〉という変化を捉えることができないのである。このような場合には、テシマッタを用いることができず、以下の例（同タスクの母語話者の用例）のようにタで述べられるのが自然である。

(6) 公園についてバスケットを開けてみると、バスケットから犬が飛び出しました。

(I-JAS, JJ12)

これに対し、例えば、犬をキャリーケージに入れて移動している時に犬が飛び出したという状態であれば、〈犬がキャリーケージの中にいる状態→犬が飛び出すという事態の実現→犬がキャリーケージの外にいる状態〉という変化を捉えることができ、テシマッタが用いられ得る。

(7) 大きな音に驚いた犬がキャリーケージから飛び出してしまいました。(作例)

また、例えば、研究室で勉強をしている時に天井から急に蜘蛛が降ってきた場合にも、「天井に蜘蛛がいる」という直前の状態を話者が知らず、「天井に蜘蛛がいる状態」→「天井から蜘蛛が降ってくる」という事態の遷移を捉えることができず、テシマッタよりもタが自然となる。

(8) 「わ、蜘蛛が（降ってきた／??降ってきちゃった）！」(作例)

なお、事態の実現・完了の直前の状態は、必ずしも話者が知っている状態でなければならないわけではなく、話者が容易に想定できる状態であればテシマッタが用いられ得る。

(9) (状況：母親がテーブルの上に用意しておいた果物を犬のポチに食べられた。テーブルの

上には食い散らかされた後の果物と皿がある。)

「あれ、ポチ、食べちゃったの。」(作例)

この場合、話者は、「テーブルの上に果物があった」という、事態の実現前の状態を知らなくとも、この状態が容易に想定できるため、テシマッタを用いることができる。

以上、テシマッタは、「事態が実現・完了する前の状態から事態が実現・完了した後の状態への変化」を表すものであることを見た。そして、「事態の実現・完了前の状態」から、隣接する「事態の実現・完了後の状態」への遷移を捉えるものであるために実現・完了の直前の状態が話者にとって無標である必要があるという点こそが、タの表す完了との違いであると考えられる。

3.2. テシマッタが表す「想定・期待とは異なる」という評価

第2節までで、近藤(2016)の指摘を踏まえ、テシマッタは「想定・期待とは異なる」という評価を述べるものであると捉えると述べた。ただし、近藤(2016)では、テシマッタによって表される事態が想定と異なることがどのように文脈から読み取れるのかを論じること主眼が置かれており、想定と異なるとはどういうことなのか、また、それを述べることによってどのようなコミュニケーション上の効果が生じるのかというところまでは論じられていない。

また、「想定・期待とは異なる」という評価について、それが誰による評価なのか、また、誰にとって想定外なのかという点についても考える必要がある。評価者に関して、藤井(1992)では、話者の評価だと述べられている。ここで重要なのは、テシマウ文の主語と評価者は必ずしも一致しないという点である。さらに、小説の地の文を分析した迫田(2018)では、地の文では語り手が登場人物の視点から評価を述べるのが指摘されており、(2)の例もまさにこの小説の地の文に相当する例だと言えよう。しかし、話者が評価を述べているとしても、誰にとって想定外なのかについては、話し言葉であっても、必ずしもそれが話者にとってだとは限らない。

そこで、本節では、誰にとって想定外であるのかと会話におけるコミュニケーション上の機能について、以下、シナリオおよび『日本語日常会話コーパス²』(CEJC)から採取した用例を用いて、話者が関わる事態と話者が関わらない事態に分けて考察する。

①話者が関わる事態の場合

話者が関わる事態の場合、話者にとっての想定・期待とは異なることを表す。

テシマウの意味について、杉本(1991)では「非意図化」とされていた。そこで、ここでは、事態の実現・完了が話者にとってコントロール可能な場合と、コントロール不可能な場合に分けて用例を見る。まず、話者にとってコントロール不可能な場合、テシマッタは、想定・期待とは異なることを明示的に示す働きをし、先行研究で言われている、残念な気持ちや、嬉しい気持ちを伝えることにつながる。次の例は、CEJCにおける料理中の発話である。

(10) IC02_翔子「あれちょっと生地が重なっちゃった」(S001_011, 57260)

一方、コントロール可能な場合に、行為自体は意図的に行っているが、予定されてはいない場

² 多様な場面における日常会話を録音・文字化したコーパス。詳しくは小磯他(2023)参照。また、以後、CEJCの用例には括弧内に会話IDと開始位置をカンマで区切って示す。

合がある。次の例は、「言う」行為は意図的行為であるが、そのつもりがあったわけではない。

(11) 西山「匿ってるんだと思って問い詰めたら、急に上役の男に代わってね。失礼ですが、どのようなご関係ですか、って。咄嗟に私、彼女ですって言っちゃった」(「影裏」)

さらに、明確な意志を持って事態を実現させたにもかかわらずあたかもコントロールができなかったかのように言う場合もある。それは、例えば次のような謝罪場面で見られる。

(12) 小屋の脇に止めた車に戻ってくる今野。と、小屋から井上が出てくる。声をかける今野。
今野「すみません、勝手に止めてしまって」(「影裏」)

②話者が関わらない事態の場合

話者が関わらない場合、話者にとって想定外の場合と、事態に関わる人物にとって想定外の場合(話者がその人物に視点を寄せて述べる場合)がある。

まず、話者が「テシマッタ」を用いて述べることで、話者には関連がないものの、それが想定外であるという評価を伝える場合がある。これは、例えば以下のような噂話に見られる。

(13) 安田「部活って言えばさ、茶道部全国大会行くんだよ」

宮下「え!!」

田宮「顧問は?」

安田「厚木先生」

田宮「えー」

安田「最初は茶道なんて全然知らなかったはずなのにね。それで全国行っちゃうんだもんなー」(「アルプススタンドのはしの方」)

さらに、次の例のように、話者にとっての想定外・期待とは異なるという評価と、その事態に関わる人物の評価が一致しない場合、批判・非難するといった表現効果が生じる。

(14) IC01_平沢「まさにそう今もそのほら異能なんとかってサイノベーションと異能をかけちゃう時点でもうほんとセンスねえなってもうすごい思うんだけどさ」(K012_002d, 37490)

以上の例は、話者にとっての評価を述べるものであるが、次のように、事態に関わる人物の立場に立って想定外であると述べることで、同情の気持ちを示す場合もある。

(15) 豪太「このオリーブビーチって、遠いですか?」

係りの男「(さぬき弁) バスで十分くらいかねえ。今さっき出ちゃったとこだから、次のまで一時間以上待つけど」(「喜劇 愛妻物語」)

4. おわりに

本発表では、テシマッタは事態の実現・完了を想定外であるという評価とともに述べるものであるとし、この「事態の実現・完了」とは、「事態が実現・完了する前の状態から実現・完了した後の状態への変化」を表すものであり、テシマッタが用いられるためには、「事態が実現・完了する前の状態」が話者がにとって想定内のものであることが必要であることを述べた。

次に、「想定・期待とは異なるという評価」については、話者が関わる事態の場合、その評価は話者にとってのものであり、残念さ・嬉しさといった感情を表したり、意図的行為をあえて想

定外であったかのように述べることで後悔・謝罪の意を表したりすることができることが分かった。一方、話者が関わらない事態の場合、話者にとっての想定外である場合と、事態に関わる人物にとっての場合があることを見た。前者の例としては、噂話について話す場合や、聞き手を責める場面等がある。後者の例としては、聞き手の立場に立って同情の意を示す例が観察された。

以上、本発表では、テシマッタが表す完了の特殊性（「タ」との違い）と、「想定外であるという評価」が誰にとっての評価であるのかについて論じた。しかし、会話における表現効果についてはすべてを明らかにしたとはいえず、考察の余地がある。さらに、書き言葉における使用や、未実現の事態について述べるテシマウについても考察をしていきたい。

付記：本研究は JSPS 科研費 JP24K22756 の助成を受けたものです。

参考文献

- 金田一春彦（1955）「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』10（金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 所収）
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香（2023）『日本語日常会話コーパス』設計と特徴『国立国語研究所論集』24
- 近藤優美子（2016）「テシマッタの使用制約—なぜ「目的地に到着してしまいました」とカーナビは言わないのか—」『日本語教育』164
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬（編著）（2020）『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか—』くろしお出版
- 迫田幸栄（2018）『現代日本語における分析的な構造をもつ派生動詞—「してある」「しておく」「してしまう」について—』ひつじ書房
- 杉本武（1991）「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要 人文・社会科学篇』4
- 鈴木智美（1998）「「～てしまう」の意味」『日本語教育』97
- 高橋太郎（1969）「すがたともくろみ」（金田一春彦（編）（1976）所収）
- 藤井由美（1992）「「てしまう」の意味」言語学研究会（編）『ことばの科学』5，むぎ書房
- 丸谷しのぶ・和栗雅子・寺内弘子・菊池周子・法貴則子・梅岡巳香（1998）「「てしまう」はどのような表現か—その「心理側面」について—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24
- 梁井久江（2009）「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5(1)
- 吉川武時（1971）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」（金田一春彦（編）（1976）所収）

資料

- 国立国語研究所『日本語日常会話コーパス』（CEJC）中納言 2.7.2 Ver. 2023.03
- 国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（I-JAS）中納言 2.7.2 Ver. 2024.03
- 日本シナリオ作家協会編（2021）『'20 年鑑代表シナリオ集』（澤井香織「影裏」、奥村徹也「アルプススタンドのはしの方」、足立紳「喜劇 愛妻物語」）

陳述副詞における陳述的意味発生の類型性

—漢語副詞を中心に—

姚 堯 (東北大学)

1. はじめに

現代語における陳述副詞¹は、出現当初から陳述副詞として使用されていたものがごく少数であり、その多くは属性副詞の段階を経て陳述副詞へと展開してきた。例えば、「折角」は〈力・心を尽くして〉行動する様子を表す様態副詞、「多分」は〈多く〉を意味する量副詞、「一旦」は〈一時的に〉を意味する時間副詞であった。また、類似した意味機能を持つ陳述副詞が歴史的にも類似した変化の経路を辿ってきた例が多く見られる。例えば、「多分」「大抵」「大概」はいずれも物事の大部分を指す名詞的意味から、〈多く、ほとんど〉という量程度的意味、さらに〈おそらく〉という推量を表す陳述的意味を発生させた。このように、陳述的意味の発生過程においては、一定の傾向性と規則性が存在することが推測される。

近年、副詞の通時的変化を類型的に捉える研究(趙 2013、鳴海 2015、田和 2017、市村 2018、林 2018、深津 2022 など)が活発に行われている一方、陳述副詞に着目した研究は依然として少ない状況である。特に、陳述的意味が一般にどのように出現・展開するかについては、十分な検討が行われていない。そこで本発表では、漢語陳述副詞の具体的事例に基づき、どのような意味からどのような陳述的意味へと変化し得るか、変化の起点側と終点側にどのような共通点が見られるか、といった陳述的意味発生の類型及びそのプロセスについて考察を試みる。

本発表では、工藤(1982)、前田(1983)を参考に、対象とする漢語陳述副詞を選出する(表1)²。これらの副詞の中には、陳述的意味のみでなく、様態・時間・量程度などという属性的な意味を持っている(または歴史上のある時期に持っていた)ものが多く見られる。したがって、陳述的意味の発生を検討する際には、属性的意味との通時的な関係、すなわち、どのような属性的意味が陳述的意味へと展開し得るのかを明らかにする必要がある。以下では、各種の属性副詞がどのようにして陳述的意味を発生させたのかを考察した上で、その過程に見られる陳述的意味発生の類型性を提示したい。

表1 本発表で取り扱う漢語陳述副詞

希望・当為	是非
質問・疑念	一体
現実認識	勿論、無論、当然、絶対(に)
推測	多分、大抵、大概、精々
習慣・確率	大抵、大概、不斷(普段)
否定	一切、一概(に)、一向(に)、全然、到底、所詮
仮定条件	万一、一旦
譲歩・理由	折角
うちあげ	本当は、正直
証拠だて	事実、実際、第一
説き起こし	一体、大体、本来、元来、一般(に)
まとめ	結局、結果、畢竟、所詮

2. 様態的意味から陳述的意味へ

まずは様態的意味をもとにして陳述的意味が発生した例を取り上げる。姚(2022a)では「折角」の意味変遷を次のようにまとめている。

- (1) 折角：角を折る〔動〕>多大な労力を要する〔形動〕>力を尽くして、つとめて〔様態副詞〕>ありがたく〔陳述副詞：見越し評価〕

¹ 本発表では、比較的広義に陳述副詞を捉え、①話し手の主観的態度を述べる機能と、②これから述べる内容を導き出す機能を有するものを陳述副詞の枠組みに入れることにする。

² ここでは便宜上、各副詞を現代語における主な意味機能に基づいて分類する。「希望・当為」「質問・疑念」などの枠組みは工藤(1982)に準拠している。語基に後接成分のない型漢語副詞を中心に取り上げるが、二型・ト型副詞も含める。ただし、「総じて、概して」のような漢語サ変動詞に由来するものや、「なにに」「実の所」のような混種語は除外する。また、「せっかく」「せいぜい」のように現代語で主に仮名表記される一部の副詞は、漢語副詞としての特徴を示すため、漢字表記に統一する。

- a ある人、十二三なる子をてうあひして、つねにうたひをゝしへけるが、せつかくならへ、やかて、十月十三日に成ぞ、百はたごくいにつれてゆかふぞ、よくおほえて其時うたへと云。

(噺本 昨日は今日の物語 (整版九行本) 下)

- b 扱々こなたはむさとした。折角取て参た真を、其様に引むしつて捨させらるゝと申事が有る物で御ざるか。

(虎寛本狂言 真奪)

- c せつかく花がさいても、十月は神様のお留守だから、御らんなさる事がならぬからさ。

(噺本 笑長者)

動詞句「角を折る」に由来する「折角」が連用修飾機能を獲得した後、最初は(1a)のように〈つとめて〉という様態の意味を表していた。その後、(1b)のように価値のある行動を修飾することにより、「全力で励む様子は称賛に値する」という評価の意味が醸し出され、話者の認識に依存した主観的な意味が前面に出る。その評価の意味が行動への評価から事態全体への評価に拡張されると、(1c)のように〈ありがたく〉という陳述の意味が現れるようになった。

「折角」のほか、次の語も様態の意味から陳述の意味へと変化した例として挙げられる。

- (2) a 一向：ひたすら(ある行動をとる)〔様態副詞〕>もっぱら(ある状況にある)〔陳述性を帯びる量副詞〕>まったく(+打消)〔陳述副詞：否定〕
 b 絶対(に)：なにものにも制限されず、何の条件にもよらず〔様態副詞〕>断じて、なにがなんでも〔陳述副詞：現実認識〕
 c 不断(普段)：物事が絶えない〔動〕>いつも同じように、初めから少しも変わらず〔様態副詞〕>通常〔時間副詞／陳述副詞：習慣・確率〕
 d 正直：素直で正しい〔形動〕>嘘をつかずに、見せかけをせずに〔様態副詞〕>本当のところ、実は〔陳述副詞：うちあけ〕
 e 精々：力の及ぶかぎり、つとめて〔様態副詞〕>多くは〔量程度副詞〕>十分多く見積もっても、たかだか〔陳述副詞：推測〕

変化の起点側における様態の意味は、いずれも〈最大限に(～する)〉という意味要素を含意している。そして、変化の結果側においては、次の3種類の陳述の意味が観察される。①「事実確認」に関わる意味。「一向」「絶対」「不断」「正直」の場合、修飾対象が動作から出来事に移行することにより、〈最大限に(～する)〉の意味から〈間違いなく(ある状況にある)〉、すなわち事実を最大限に承認する意味が発生する。また、「折角」の場合、「のに」や「から」従属節での使用により、〈最大限に(～する)〉の意味から〈最大限にしたのに、～〉や〈最大限にしたから、～〉という承認を伴う見越し評価の意味が発生する。②「完全否定」に関わる意味。

「一向」の場合、打消表現と共起することにより、最大限の事実確認から最大限の否定の意味が発生する。③「最大可能性」に関わる意味。「精々」の場合、修飾対象が動作から数量表現に移行することにより、〈最大限に(～する)〉の意味から〈多くは〉という量程度的意味、さらに〈多く見積もってもこの程度であろう〉という最大可能性を推測する意味が発生する。

こうした変化の過程において、視覚などの知覚認識に基づき、物事の具体的な様子を以て人や事柄の状態・変化を理解するという〔様態性→論理性〕のメタファーが作用している。上記の副詞の場合、動作の力強さや激しさを以て事象の発生確率の高さを理解するメカニズムが働いており、陳述の意味を紡ぎ出した。〔**極端な様態>最大限の事実確認・完全否定・最大可能性**〕という変化は、陳述の意味発生の一類型として位置づけられる。

3. 時間的意味意味から陳述の意味へ

次に、時間的意味をもとにして陳述の意味が発生した例を取り上げる。姚(2020)では「一旦」の意味変遷を次のようにまとめている。

(3) 一旦：ひと朝 [名] > 一時、短期間 [名] > 一時的に [時間副詞] > もし [陳述副詞：仮定条件]

- a 人ノ世間ノ栄花ハ只一旦ノ夢幻ノ如シ。(今昔物語集 十七・二十一)
- b いかに況や、汝等は一旦したがひつく門客にあらず、累祖相伝の家人なり。(平家物語 七)
- c 薬を飲んで汗を求むるには、しるしなきことあれども、一旦恥ぢ恐るることあれば、必ず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。(徒然草 一二九)
- d 一旦菌悉く死滅すれば、復た腐敗の憂なきものなり。

(矢部規矩治 本邦の氣候と作物の分配 太陽<1895-1>)

「一旦」は〈ひと朝〉という本義から (3a) のような〈一時、短期間〉の意味を発生させた。この意味の「一旦」が (3b) のように用言の前に置かれると、〈一時的に〉を意味する時間副詞用法が生じた。(3c) の場合、接続助詞「ば」と共起することで、「一旦」は時間的意味を表すと同時に、仮定条件を導くというテクニカルな意味を持つようになった。この意味が定着した結果、(3d) のように「一定の条件下で一定の結果が必ず起こる」という一般論を述べる例が見られた。この場合、時間的意味が薄れ、仮定条件を導くという陳述の意味が前面に出ている。

「一旦」のほか、次の語も時間的意味から陳述の意味へと変化した例として挙げられる。

- (4) a 元来：もともと、はじめから [時間副詞] > そもそも [陳述副詞：説き起こし]
- b 結局：終わり [名] > 最終的に [時間副詞] > つまり [陳述副詞：まとめ]
- c 到底：奥底に届く、終点に至る [動] > 最終的に [時間副詞／陳述副詞：まとめ] > 結局 (+打消) [陳述副詞：否定]

変化の起点側における時間的意味は、いずれも極端な時量や時点を示すものである。そして、変化の結果側においては、次の3種類の陳述の意味が観察される。①「最小可能性」に関わる意味。「一旦」の場合、〈極端に短い時間〉を示す意味が〈一時的に〉という時間副詞の意味を経由し、低確率で発生する事態を想定する意味へと展開する。②「完全否定」に関わる意味。「到底」の場合、否定表現と共起することにより、〈最終的に〉という時間副詞の意味から〈最後までやってみても消極的な事態になってしまう〉という完全否定の意味が生じる。③「事柄の始末」に関わる意味。最初の時点を目指す「元来」は、時間副詞用法を経由し、〈そもそも〉という事柄の根源・由来を述べる意味を発生させる。一方、最後の時点を目指す「結局」は、時間副詞用法を経由し、〈つまり〉という事柄の結果をまとめて報告する意味を発生させる。

こうした変化の過程において、時間軸に沿って展開することを以て論理の流れに沿って展開することを理解するという [時間性→論理性] のメタファーが作用している。上記の副詞の場合、時間というイメージしやすい線形概念が出来事的首尾という抽象的な概念に写像され、極端な時量や時点を示す事柄の発生可能性や始末を理解するメカニズムが働いており、陳述の意味を紡ぎ出した。[極端な時間>最小可能性・完全否定・事柄の始末] という変化は、陳述の意味発生の一類型として位置づけられる。

4. 量程度的意味から陳述の意味へ

最後に、量程度的意味をもとにして陳述の意味が発生した例を取り上げる³。姚 (2022b) では「一体」の意味変遷を次のようにまとめている。

- (5) 一体：一つの体 [名] > 一まとまり [名] > 全体 [名] > 全体的に [量程度副詞] > そ

³ 数量的意味と程度的意味とは深く繋がっており、前者から後者を発生させることが多い。仁田 (2002: 145) では、「いわゆる程度副詞と、およびそれに隣接する量副詞と呼ばれることのある存在を、副詞的修飾成分という立場から、〈程度量の副詞〉として関連づけて扱う」とし、それを〈純粹程度の副詞〉〈量程度の副詞〉〈量の副詞〉という下位のタイプに分けている。両者を峻別することが難しいため、ここではまとめて扱うことにする。

もそも〔陳述副詞：説き起こし〕>はたして〔陳述副詞：詰問追究〕

- a 弁才、妙音二天の名は、各別なりといへども、本地一体にして衆生を済度し給ふ。(平家物語 七)
- b 別れたは十四の年、見忘れさんしたも尤、斯いふ髭類になったもの、いったいがちいさい時くらいいけずであって、(浄瑠璃集 新版歌祭文)
- c 酒呑子の仰の通り。一躰俳気か薄て、是ぞといふ秀逸も出ませぬ。(嘶本 稚獅子)
- d 一体やくそくはわしが五十両。跡五十両を婆とアとおまへ方ト三人へ割分する筈じやが。ハテかふなつたら是非がない。(人情本 明鳥後の正夢 初編三)
- e いったいきさまは、何病ひじや。(東海道中膝栗毛 五編追加)

本来〈一つの体〉を示す「一体」は(5a)のような〈一まとまり〉という派生義を経由し、(5b)のように〈全体〉を指す名詞として用いられるようになった。格助詞「が」の脱落により、「一体」が(5c)のように文の修飾語の位置に立つことになり、〈全体的に〉を意味する量程度副詞用法を発生させた。さらに、後続文が(5d)のように人や物の属性を指すものから出来事を指すものに変化することにより、〈そもそも〉という出来事の根源・由来を説き起こす意味が生起し、陳述性が前面に出る。最後に、(5e)のように疑問文に用いられると、〈はたして〉という出来事の根源を追究する意味が生じ、「一体」が詰問追究の副詞として成立するに至った。

「一体」のほか、次の語も量程度的意味から陳述的意味へと変化した例として挙げられる。

- (6) a 万一：万分の一〔名〕>極めて少ない数〔名〕>まれに、たまに〔量程度副詞〕>ひょっとして〔陳述副詞：推測〕>もし〔陳述副詞：仮定条件〕
- b 第一：順序の最初〔名〕>最も主要なこと、最も優れていること〔名〕>最も〔程度副詞〕>他のことはともかくとして、まず〔陳述副詞：証拠立て〕
- c 多分：大多数〔名〕>多くは〔量程度副詞〕>おそらく〔陳述副詞：推測〕
- d 大抵：事柄の主要な部分、あらまし〔名〕>ほとんど全部〔量程度副詞〕>通常〔陳述副詞：習慣・確率〕>おそらく、多分〔陳述副詞：推測〕
- e 一切：物事のすべて〔名〕>あらゆる、すべて〔量程度副詞〕>まったく(+打消)〔陳述副詞：否定〕

変化の起点側における量程度的意味は、いずれも〈極端な値〉という意味要素を含意している。そして、変化の結果側においては、次の4種類の陳述的意味が観察される。①「完全否定」に関わる意味。全量を示す「一切」は、打消表現と共に起することにより、全量を否定する意味から、あらゆる可能性を否定する意味を発生させる。②「事実確認」に関わる意味。極小数を表す「第一」は、〈最も主要なこと〉という派生義を経由し、〈最も〉という程度的意味を持つようになり、さらに確実に発生したことを確認するという証拠立ての意味を発生させる。③「最小可能性」に関わる意味。極端に少ないことを示す「万一」は、〈まれに、たまに〉という量程度的意味を経由し、〈ひょっとして〉という発生可能性が極めて低いことを推測する意味、さらに稀に起こりうる条件を想定する意味を発生させる。④「最大可能性」に関わる意味。全量を示す「一体」は、〈全体的に〉という量程度副詞的意味を経由し、〈そもそも〉という説き起こしの意味を発生させ、さらに疑問文における使用により、〈はたして〉という回答を最大限に追究する意味を発生させる。また、極大量を示す「多分」「大抵」は、〈ほとんど全部〉という量程度副詞的意味を経由し、発生可能性がかなり高いことを想定する意味を発生させる。

こうした変化の過程において、数量の多少を以て事柄の程度・状態・実現可能性を理解するという〔数量性→程度性→論理性〕のメタファーが作用している。このようなメタファーは頻度や程度に関連する意味を紡ぎ出し、その一部はさらに「実現可能性に関する推測」といった陳述的意味へと展開する。〔極端な値>完全否定・最大限事実確認・最小／最大可能性〕という変化は、陳述的意味発生の一類型として位置づけられる。

5. 〈極端〉という意味要素と陳述的意味の発生

5.1 陳述的意味発生の類型

以上考察してきた3つのタイプの起点側においては、〈極端〉という意味要素が共通して見られる。表1に示した語の本義や語源を吟味すると、「勿論」や「実際」のように、様態・時間・値のいずれにも当てはまらない

語も、ある側面では極端性に関連していると考えられる⁴。これらの語を「その他の「極端」」とする。

一方、変化の結果側における陳述副詞は、いずれも話し手の認識や態度を強く表出し、強調効果を生み出すものである。これらの陳述的意味には強意性、すなわち抽象化された〈極端〉という意味要素が生かされているともいえる。

このように、陳述的意味発生の類型としては、現時点で表2のように示すことができる。

表2 陳述的意味発生の類型性

	変化の起点側		変化の終点側
極端な様態	一向 (に)	⇒ 否定	[最大限事実確認>完全否定]
	折角、絶対 (に)、不断、正直	⇒ 譲歩理由・現実認識・習慣確率・うちあげ	[最大限事実確認]
	精々	⇒ 推測	[最大可能性]
極端な時間	一旦	⇒	[最小可能性]
	元来、本来	⇒ 説き起こし	[事柄の始末]
	結局、結果、畢竟、所詮	⇒ まとめ	
	到底、所詮	⇒ 否定	[完全否定]
極端な値	万一	⇒ 仮定	[最小可能性]
	第一	⇒ 証拠立て	[最大限事実確認]
	一切、一概に、全然	⇒ 否定	[完全否定]
	多分、大抵、大概	⇒ 推測	[最大可能性]
	大抵、大概	⇒ 習慣確率	[最大限事実確認]
	一体、大体、一般(に)	⇒ 説き起こし	[事柄の始末]
その他の「極端」	勿論、無論、当然、本当、事実、実際	⇒ 現実認識・証拠立て・うちあげ	[最大限事実確認]
	是非	⇒ 希望当為	[最大可能性]

5.2 陳述的意味発生のプロセス

〈極端〉という意味要素はどのように陳述的意味へと展開したのか。個別語の史的研究に基づき、その変化のプロセスを図1のように整理することができる。

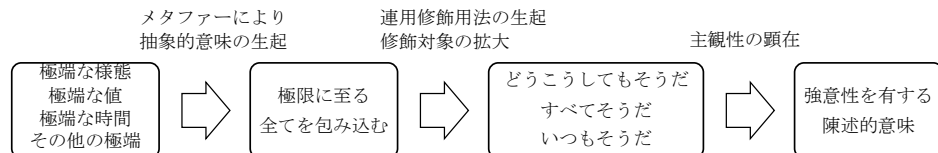


図1 〈極端〉の意味から陳述的意味を発生させるプロセス

まず、本発表で取り上げる語は、いずれももともと知覚・空間・時間・数といった具象的な領域で具体的な極端を表すものであった。抽象的な領域における極端な様子（「つとめて、ひたすら、絶えずに、まっすぐ、精一杯」など）や程度・範囲（「まれに、最も、ほとんど、多く、すべて」など）をわかりやすく表現するために、これらの語はメタファー的に使用されるようになる。こうしたメタファー的な意味には〈極限に至る、全てを包み込む〉という意味要素が共通して含まれている。

次に、統語の面から見ると、副詞には、名詞や動詞など他の品詞から転成されたものが多い。これらの語は、用言の前に生起することや格助詞が脱落することにより、連用修飾機能を獲得し、副詞としての統語的特徴を備えるようになる⁵。一方、意味の抽象化が進むにつれて、これ

⁴ 「無論」「勿論」は〈論議する必要が全くない〉、「当然」は〈疑問の余地が全くない〉という意味であり、他の可能性や論議の余地を完全に排除する点で極端性を含んでいる。「本当」「事実」「実際」は〈嘘や虚構でなく真実である〉という意味であり、他の不確実な情報を徹底的に排除する点で極端性を含んでいる。また、「是非」は〈是と非〉という極端な対立を背景に、全体を網羅的に表現する意味を発生させ、極端な値に繋がっている。

⁵ 本発表は陳述副詞の成立過程における意味面の変化を考察するものであり、統語面の変化については別稿に譲る。

らの副詞は従来のように動作動詞を修飾するだけでなく、抽象的な用言や述語全体を修飾することも可能になる。特に、一まとまりの出来事を述べる述語にかかる場合、〈どうこうしてもそうだ、いつもそうだ、すべてそうだ〉といった「物事を一括して語る」意味が読み取れる。

最後に、〈どうこうしてもそうだ、いつもそうだ、すべてそうだ〉などは話し手の主観的な面の価値尺度に基づく認識であるため、主観性が強い。主観性の顕在により、話し手の認識や判断、発話の意図、聞き手に対する態度伝達などがより明確に表出されるようになる。また、当初〈極端〉に関わる属性的な意味の面影が残っており、話し手の認識・主張を強調したり、聞き手に対して強調されたメッセージを送ったりする役割へと展開する。この時点で、話し手の認識・意図・態度を強めて表現するという陳述の意味が成り立つことになる。

このように、変化の起点側における〈極端〉という意味要素は、メタファーの生起、修飾対象の拡大、主観性の顕在により、様々な形で終点側に生かされており、「強意性」に関わる各種の陳述の意味へと展開すると考えられる。

6. おわりに

以上、本発表では、陳述副詞における陳述の意味の発生を4種類に分類し、そこから〈極端〉という共通する意味要素を抽出し、この意味要素がどのように陳述の意味へと展開するのかについて検討した。以上の分析から、〈極端〉の意味要素を持つ語が陳述の意味を発生させるという変化には何らかの必然性があることが示唆されている。なぜこういった必然性が存在するのか。前述のように、陳述副詞には、話し手の認識や態度を強く表出し、強調効果を生み出すという強意性を有するものが多い。これは属性副詞と区別される陳述副詞の意味的特徴の一つでもある。そこで、話し手の認識・態度・意図を明確に表出して聞き手に効果的に伝達するためには、簡潔で強いインパクトを与える表現が望ましいと考えられる。陳述副詞の「強意性」は〈極端〉の意味要素と共通しているため、〈極端〉の意味要素を持つ語は陳述副詞の候補になりやすいと推測される。この点については、今後さらに詳細な検討をする必要がある。

使用テキスト

新版歌祭文（岩波書店 日本古典文学大系）今昔物語集・平家物語・徒然草・東海道中膝栗毛（小学館 新編日本古典文学全集）昨日は今日の物語（整版九行本）・笑長者・稚獅子（東京堂出版 嘶本大系）真奪（岩波書店『能狂言：大蔵虎寛本』）国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03）

参考文献

- 市村太郎（2018）「近代初期における「じつに」「まことに」「ほんとうに」の用法」『近代語研究』20，武蔵野書院，pp.61-80.
- 林禊映（2018）「評価副詞の成立と展開に見られる変化の特徴」『近代語研究』20，武蔵野書院，pp.45-59.
- 工藤浩（2014）（1982）「叙法副詞の意味と機能：その記述方法をもとめて」国立国語研究所『研究報告集』3，国立国語研究所，pp.45-92.
- 田和真紀子（2017）『日本語程度副詞体系の変遷-古代語から近代語へ-』勉誠出版
- 趙英姫（2013）「近現代の漢語副詞の成立」野村雅昭編『現代日本漢語の探求』東京堂出版，pp.214-233.
- 鳴海伸一（2015）『日本語における漢語の変容の研究-副詞化を中心として-』ひつじ書房
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 深津周太（2022）「様態副詞の程度副詞化-「ちっと／そっと」の対照から-」静岡大学言語学研究会『静言論叢』5, pp.111-124.
- 前田富祺（1983）「漢語副詞の種々相」渡辺実編『副用語の研究』明治書院，pp.360-378.
- 姚尧（2020）「「一旦」の意味用法と歴史的変遷」『国語学研究』59，pp.430-444.
- 姚尧（2022a）「「折角」の歴史的変遷と変化の類型性」『訓点語と訓点資料』148，訓点語学会，pp.19-50.
- 姚尧（2022b）「「一体」の歴史的変遷と変化の類型性」『国語学研究』61，pp.182-196.

四コマ漫画における連点の表現機能

たかはし あいこ

高橋 愛子 早稲田大学大学院生

1.はじめに

黒点を連ねた「…」の符号（以下、連点と呼ぶ）には、「…だが、」や「分かりました…」など、文頭や文末に置くものの他に、会話のやり取りの途中で「…」（以下、独立連点と呼ぶ）のみで示され、【教師「宿題は持ってきたか？」生徒「…」教師「忘れたのか。」】のように、会話途中の無音を表すものがある。

漫画を分析対象とするのは、絵と文字化された会話によって構成される作品であり、ほとんど地の文が無く、会話の表し方そのものが作品の成立に重要な役割を果たしているからである。また四コマ漫画の完結性により他作品との比較に有益であるという理由である。

漫画の会話に出現する符号として連点があるのに対し、連点と近い「-」（ダッシュ）はなぜ出現しないのかなど、連点とダッシュとの違いにも着目しながら、連点表現には、どのような機能があるのかを明らかにすることを本発表の目的とする。

2.研究対象

澤村(2020)によると、新聞に毎日連載された初めての作品は、朝日新聞朝刊掲載の『正ちゃんのぼうけん』とされる。掲載開始の大正 12 年(1923 年)10 月 20 日付から調査したところ、同作品の同年 11 月 3 日付けには吹き出しに「ハクシヨ……」と書かれており、連点表現が確認できた。

大正時代の漫画で文に続く連点表現を確認できたが、吹き出しに「…」のみが記された独立連点の出現時期も確認するため、本発表では昭和時代の新聞に長期連載された、以下の作品を分析対象とする。

- ・朝日新聞 『サザエさん』昭和 26 年(1951 年)4/16～昭和 49 年(1974 年)2/21
『フジ三太郎』昭和 54 年(1979 年)1/1～平成 3 年(1991 年)9/30
『となりのやまだ君(改題「のちゃん」)』平成 2 年(1991 年)10/10～現在継続中
- ・読売新聞 『轟先生』昭和 26 年(1951 年)9/1～昭和 48 年(1973 年)2/27
『コボちゃん』昭和 57 年(1982 年)4/1～現在継続中
- ・毎日新聞 『フクちゃん』昭和 31 年(1956 年)1/1～昭和 46 年(1971 年)5/31
『アサッテ君』昭和 49 年(1974 年)6/16～平成 26 年(2014 年)12/31
『桜田です!』平成 27 年(2015 年)2/1～現在継続中

以上、新聞三社の東京版朝刊に掲載された長期連載の計 8 作品である。

3.独立連点の出現時期

以下の表 1 では、分析対象作品を連載開始時と連載終了時に分け、年代別に約二か月分となる 60 作分ずつ（例えば、『サザエさん』の連載開始時 1951 年 4/16 からの 60 作分と、

連載終了時 1974 年 2/21 から遡って 60 作分)に加え、連載の中間点として 1965 年及び、最新のものとして 2024 年の、それぞれ二か月（共に 3/31 から遡って 60 作分）から調査を行った。表 1 には吹き出しの総数(【全「吹き出し」】)、連点が使用された全ての吹き出し(【全「連点」】)、独立連点のみ示された吹き出し(【独立連点】)の数を示した。なお、1 つの吹き出しに複数の連点表現が確認される場合は 1 つ目の連点を調査対象とした。

表 1 独立連点の出現時期

年数	タイトル 開始/終了	全「吹き出し」	全「連点」	独立連点
1951年	①朝日『サザエさん』開始	252	16/252	—
1951年	②読売『轟先生』開始	267	30/267	—
1956年	③毎日『フクちゃん』開始	192	1/192	—
[1965年]	④『サザエさん』	208	18/208	—
[1965年]	⑤『轟先生』	300	19/300	—
[1965年]	⑥『フクちゃん』	285	7/285	—
1971年	⑦毎日『フクちゃん』終了	336	5/336	—
1973年	⑧読売『轟先生』終了	223	1/223	—
1974年	⑨朝日『サザエさん』終了	226	22/226	2/226
1974年	⑩毎日『アサッテ君』開始	213	9/213	1/213
1979年	⑪朝日『フジ三太郎』開始	74	—	—
1982年	⑫読売『コボちゃん』開始	302	16/302	8/302
1991年	⑬朝日『フジ三太郎』終了	153	8/153	2/153
1991年	⑭朝日『となりのやまだ君』開始	377	1/377	—
2014年	⑮毎日『アサッテ君』終了	217	4/217	—
2015年	⑯毎日『桜田です！』開始	397	108/397	19/397
[2024年]	⑰『ののちゃん（となり～改題）』	386	4/386	3/386
[2024年]	⑱『桜田です！』	431	119/431	17/431
[2024年]	⑲『コボちゃん』	313	31/313	—

表 1 で着目したいのは、独立連点が「⑨朝日『サザエさん』終了」の 1974 年以降で出現している点である。表 1 の①～⑧と⑨～⑲とで独立連点の出現以前と以後の 2 グループに分け、独立連点の出現率から t 検定 (welch) を行った。「p 値 0.025」という結果から、独立連点の出現率に有意差があることを確認した。

次に、1970 年代以前から出現している文に付随した連点（以下、文内連点）と、1970 年代以降で出現したと推察される独立連点の違いを見ていく。

4.文内連点の用法

文内連点には、【文頭連点、文末連点】と【省略】を示すものがある。また、文部省(1946)で【つなぎ】とされる文内連点の用法があるが、本調査では確認されなかった。

4.1 文頭連点

文頭連点は「…そうですね。」のように文の頭に付く連点で、「言い出しの躊躇」が示される。全連点の総数 419 の吹き出しのうち、3 例のみであった。

4.2 文末連点

文末連点は文を広義に捉え、「えーと…」などのフィラーや、「分かりました…」のように述語を伴う終止用法文末まで、様々な文に付く接尾連点である。本調査の全連点 419 の吹き出しのうち、文末連点は約 86%にあたる。以下、主にふたつの用法が考えられる。

4.2.1「言いよどみの間（ポーズ）」を表す文末連点

「あの…」「だけど…」など、フィラーや言い掛けて文として成立していないものに後

続し、「言いよどみの間（ポーズ）」を連点によって視覚的に示している。

【用例①：『サザエさん』1974年1月16日朝日新聞掲載】

- 1 コマ目 医者「タバコはいけません」
- 2 コマ目 マスオ「アノ…一本も？」
医者「一本も！」
- 3 コマ目 看護師「おだいじに」（マスオ、うなだれて帰る。）
- 4 コマ目 （消防署にて電話での会話）
医者「わたしなりに防火に協力していますゾ」
消防署長「たすかります」

4.2.2 「言い切れない心理」を表す文末連点

文として成立した文や意味的に完結した言いさし表現などに付く連点である。森山（2013）では、夏目漱石の『こゝろ』に出現する「何うして……、何うして……」という台詞を例にあげ、『『……』には、会話文末での言い切れないもやもやとした思いが存在することを表すとも言える。思いがあって、単純には言い切らないといったことが示される』と述べている。先述の「言いよどみの間（ポーズ）」とは異なり、先行する文が示す内容（またはその対象）をそのまま心理的に引きずっている様子を連点で表している。

【用例②『サザエさん』1974年1月12日朝日新聞掲載】

- 1 コマ目 （台所で母親が息子のためにステーキを焼いている。）
- 2 コマ目 サザエ「アラー奥さまみんな同じものいただきますようよ！」
- 3 コマ目 母親「スミマセン……………（10 連点）」
- 4 コマ目 母親「もうじき入試なもので……………（12 連点）」（勘違いのサザエ、大焦り）

4.3 省略の用法

連点表現には発話内容の「省略」を表す連点表現がある。

【用例③『サザエさん』1974年2月6日朝日新聞掲載】

- 1 コマ目 （台所でサザエが料理を作っている）
- 2 コマ目 カツオ「地球のかい転が早くなったンだってサ!!」
サザエ（驚く表情）
- 3 コマ目 サザエ「おくさま！……………（22 連点）」（夫人に駆け寄る）
カツオ（独り言）「頭のかい転はにぶいンだから」
- 4 コマ目 カツオ（独り言）「二つよけいいただきだ（台所からおかずを持ち去る）」

3 コマ目にある「おくさま！」に続く 22 連点は省略された発話の長さを示していると思われる。本調査で抽出した全連点 419 の吹き出し中、省略の連点は 3 例のみであった。

5. 独立連点の用法

独立連点は、独立連点の吹き出しが付く発話者以外の他者の言動など、何らかの外的

要因を受けての「静かなりアクション」を視覚的に符号化したもので、意味用法としては外的要因を受けての「呆然」「思案」「動揺」などが挙げられる。

【用例④『サザエさん』1973年12月18日朝日新聞掲載】

- 1 コマ目 (波平とマスオに給仕していたサザエ、お尻から「PU～」)
- 2 コマ目 サザエ「アラ」
- 3 コマ目 波平「…………… (11 連点)」
マスオ「…………… (12 連点)」
サザエ「(心内発話) (きこえなかったんだ)」
- 4 コマ目 マスオ「あのガスを石油にかわるエネルギー源として使えないものか」
波平「ワシもいまそれを考えとったんだ」(サザエ、頭を抱えて走り去る)

3 コマ目で波平とマスオに付けられた独立連点の吹き出しは、「PU～」というサザエのおならという外的要因を受けての、静かなりアクションを表している。それは文部省(1946)の準則にある通り「無言」を示すものではあるが、決して「無」の状態ではない。4 コマ目ではマスオと波平によって「あのガス」に対する利用法について話し合われており、直前の独立連点が「動揺」や「思案」などといった心の内を示しているとみることができる。つまり、独立連点は符号による<心内表現>と言えるのではないだろうか。また独立連点は自然な会話に出現するポーズを視覚的に表すものと推察される。

6.独立連点、心内発話、符号表現の時代的変遷

6.1 独立連点と心内発話との関連性

表 2 独立連点と心内発話、「?」「!」との関連性

年数	タイトル 開始/終了	全「吹き出し」	全「連点」	独り言	心内(絵)	心内(発話)	独立連点	?	!
1951年	①朝日『サザエさん』開始	252	16/252	21/252	5/252	—	—	3	—
1951年	②読売『轟先生』開始	267	30/267	12/267	—	—	—	5	—
1956年	③毎日『フクちゃん』開始	192	1/192	2/192	3/192	—	—	2	—
[1965年]	④『サザエさん』	208	18/208	19/208	2/208	—	—	4	—
[1965年]	⑤『轟先生』	300	19/300	23/300	2/300	—	—	4	—
[1965年]	⑥『フクちゃん』	285	7/285	35/285	5/285	—	—	2	—
1971年	⑦毎日『フクちゃん』終了	336	5/336	16/336	2/336	—	—	6	—
1973年	⑧読売『轟先生』終了	223	1/223	25/223	14/223	2/223	—	11	1
1974年	⑨朝日『サザエさん』終了	226	22/226	28/226	1/226	2/226	2/226	3	—
1974年	⑩毎日『アサッテ君』開始	213	9/213	29/213	6/213	5/213	1/213	1	—
1979年	⑪朝日『フジ三太郎』開始	74	—	8/74	18/74	—	—	—	—
1982年	⑫読売『コボちゃん』開始	302	16/302	7/302	6/302	6/302	8/302	2 [2]	—
1991年	⑬朝日『フジ三太郎』終了	153	8/153	8/153	19/153	1/153	2/153	[1]	—
1991年	⑭朝日『となりのやまだ君』開始	377	1/377	21/377	3/377	3/377	—	2 [1]	—
2014年	⑮毎日『アサッテ君』終了	217	4/217	34/217	8/217	6/217	—	—	1
2015年	⑯毎日『桜田です!』開始	397	108/397	16/397	4/397	3/397	19/397	—	—
[2024年]	⑰『ののちゃん(となり～改題)』	386	4/386	19/386	1/386	—	3/386	2	—
[2024年]	⑱『桜田です!』	431	119/431	13/431	—	—	17/431	—	—
[2024年]	⑲『コボちゃん』	313	31/313	21/313	—	25/313	—	[1]	—

表 2 は、表 1 と同じ調査対象から、通常の発話で示される吹き出しとは形状の異なる吹き出し(雲のような形をし、煙突から出る煙のように断続的な小さな丸がいくつか連なり、人物の頭に向かっていくなど)の【心内(発話)】と、登場人物の【独り言】、そして、頭に浮かんだ「絵」のみを吹き出しに表したものの【心内(絵)】を抽出した数を示したもので

ある。表 2 で表すように、「心内（絵）」は 1951 年から確認できたが、「心内（発話）」は 1973 年の『轟先生』以降に出現していた。表 2 で①～⑦と⑧～⑯の 2 グループに分け、心内発話の出現率から t 検定（welch）を行ったところ「p 値 0.029」の有意差有りという結果により、心内発話と独立連点の出現時期が共に 1970 年代以降であると推察される。

6.2 符号の時代的変遷

本調査の対象作品で符号（特に「？」）が単体で登場人物の顔付近に示される例が見られた。表 2 で表したように、「？」は 1970 年代前半まで全ての作品に出現していたのに対し、心内発話や独立連点が登場した 1970 年代後半以降から減少傾向であることが分かった。これは「？」で示していた心の内（疑問）を心内発話でより具体的に述べられるようになった、もしくは独立連点で「思案」として表されるようになったことが減少の理由として考えられる。また 1980 年代からは「？」を吹き出しの中に入れて示す例が出現している（数を〔○〕で示した）。心内発話と独立連点同様に「疑問」という心の内を吹き出しで表すようになった例と見ることができるだろう。

加えて、2015 年から連載中の『桜田です！』では資産家の夫人（村田）が登場するが、会話内の吹き出しが全て独立連点で表されている。独立連点の吹き出しをパターン化させることで「寡黙な人」という特徴付けがなされている。このように、四コマ漫画では「？」単体の使用が減少すると反比例して独立連点が登場し、独立連点のみで登場人物の特徴付けがなされるなど、符号の使われ方にも時代的な変化が生じているものと推察される。

7. 連点とダッシュとの違い

本発表で行った四コマ漫画の調査では、台詞の吹き出し内に「ー（ダッシュ）」が付くものは確認されていない。しかし、文部省（1946）では連点とダッシュに共通する準則が多く見られる。本調査で 2000 年以降の文末連点に「！」や「？」などの符号が付くものが確認されていることに着目し、書籍の表記で「ー（ダッシュ）」に「！」や「？」が付く例が出現しているのかを確かめるため、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）を使って調査を行った。掲載書籍の出版期間が長い図書館コーパスで分析を行った結果、「ー！」87 例、「ー？」28 例、「ー。」108 例（他に「ー！」110 例、「ー？」95 例、「ー。」1351 例）であった。しかし、国立国語研究所 H P 内「第 2 章『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の設計」（p.25）に記載されているように、ダッシュ、ハイフン、特に長音符号が多く混在しているため、正確な数値を出すことが出来なかった。対して、連点では「…！」453 例、「…？」704 例、「…。」7558 例であることから、「！」や「？」との共起性はダッシュよりも連点が高いことは明らかであった。文部省（1946）では「！」は「感動の気持ち」を表し、「？」は「疑問」を表すと明記されていることから、こうした心的符号と連点との共起性が漫画の台詞で多く使用されていることと関係しているのではないだろうか。

一方で、文部省（1946）の準則には「二、語句を言ひさして余韻をもたせる場合に用ひる」の例文に「まあ、ほんとうにおかはいさうにー。」という文でダッシュに句点が付く例

が掲載されている。しかし、BCCWJ の調査ではダッシュに句点が付く用例は（長音の用例を除くと）少数であると推察される。この結果には、図書館コーパスが 1986 年～2005 年の用例を示すものであるという性質や、調査対象とした 1951 年以降の漫画の台詞にダッシュが出現していないという結果からも鑑みるに、文部省の準則が作成された 1946 年から近年にかけて、連点とダッシュの用法に何らかの変化が生じているものと考えられる（ダッシュの現在の用途についての詳しい検証は後稿に記す）。

9. おわりに

昭和期の新聞に掲載された四コマ漫画では、文頭連点や文末連点のような文内連点が見られたが、1970 年代以降からは独立連点が登場していた。文内連点は付随する文の解釈を補助する機能があるが、独立連点は外的要因を受けての「静かなリアクション」を符号化した表現であると考えられる。発話を伴わない「静かなリアクション」とはつまり、符号による心内表現であると言える。また、連点表現は発話における「ポーズ」を漫画上で視覚的に表す機能を担っていると見られる。さらに通常の発話とは異なる吹き出しで示された心内発話もまた独立連点と同じく 1970 年代以降に漫画に出現しており、共に「心の内」を漫画上に描くための重要な要素となっている。また近年、独立連点による登場人物の特徴付けや、「!」「?」との共起性によりダッシュに比べて有用性が高いことから、漫画における連点の表現機能がさらに広がっていることが分かった。

漫画の発展はアニメの発展とも関わりを持っていると澤村(2020)が述べているように、アニメでは平成期頃から心内吐露表現が増えている（高橋（2022））ことから、相乗的な経緯についても、今後分析を行っていきたい。

参考文献

澤村修治（2020）『日本マンガ全史』平凡社

高橋愛子（2023）「アニメの心内吐露表現における時代的变化」『文学研究科紀要』68 早稲田大学

森山卓郎（2013）「句読点、補助符号とその表現効果」『日本語学』32（5）明治書院

文部省教科書局調査課国語調査室（1946）「くぎり符号の使ひ方」文部省

山崎誠「第 2 章『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の設計」国立国語研究所

http://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/doc/manual/BCCWJ_Manual_02.pdf



参考資料 左から、『サザエさん』**用例①**1974 年 1 月 16 日掲載、**用例②**1974 年 1 月 12 日掲載、**用例③**1974 年 2 月 6 日掲載、**用例④**1973 年 12 月 18 日掲載、いずれも朝日新聞東京版朝刊。

調査資料 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（中納言 2.7.2, データバージョン 2021.03, 国立国語研究所）

単語ベクトルを用いた『天草版平家物語』と原拠本『平家物語』の対応付け

きたざき ゆう 帆 (大阪大学)

1 はじめに

- 『天草版平家物語』(1592 刊、不干ハビアンによる『平家物語』の口語訳(以下、〈天草版〉))は、それ自体が持つ資料価値はもちろんのこと、その口語訳の原拠本『平家物語』との比較によっても多くのことが明らかにされてきた。例えば、以下のような事象がよく知られている。
 - 山口(2003)…近代的な助動詞類の発達について
 - 金水(2005)…〈天草版〉の「ござる」が、尊敬語であるか丁寧語であるかの根拠として
 - 山田(2010)…格助詞ガの発達について
- 本発表では、この対照作業の効率化を図るため、両本の平行コーパス化を試みる。

2 アライメント

- 〈天草版〉の口語訳の底本は、〈天草版〉巻 1～巻 2 第 1 は、龍谷大学本、高野本、西教寺本などが近く、〈天草版〉巻 2 第 2 以降は、斯道文庫本(斯道文庫本が欠く巻 8 は竹柏園本)などが近いと推定されている(近藤 2008, 2012)。国立国語研究所編『日本語歴史コーパス』(以下、CHJ)のうち、『室町時代編Ⅱキリシタン資料』には〈天草版〉が、『鎌倉時代編Ⅲ軍記』には『平家物語』として〈高野本〉が収録されている。本節ではこれらの内部データを用い、対応付けを行う¹。
- 両本の語順が概ね一致することを前提として、各章の冒頭から末尾までを、動的計画法によって対応付ける。北崎(2015)では、語彙素の編集距離を用いた対応付けを提案したことがあるが、この方法では、置き換え関係にある(≒意味に近い)別の語を対応付けることができない。ここでは、語の類似度を求められる単語ベクトル²のモデルである、Word2Vec を使用することを試みる。
- Word2Vec のモデルを作成する元データとして、以下の $2 \times 3 = 6$ 種の組み合わせを試行した。
 - コーパス：
 - A. CHJ『奈良時代編』～『室町時代編』
 - B. CHJ『奈良時代編』～『明治・大正編』(Ⅰ～Ⅳ、雑誌はコアデータのみ)
 - 形態論情報：

¹ 事前処理として、章段同士の対応関係をリスト化し、〈天草版〉の独自部分(喜一検校・右馬の允の問いかけ・応答部や、序文、章題など)は除いた。

² 単語ベクトル(単語分散表現)は、周辺の語(文脈)との共起関係から語が持つ意味を獲得し、ベクトルで表現する手法であり(岡崎ほか 2022: 第 3 章)、CHJ を用いた研究事例もある(相田ほか 2021, 相田ほか 2023 など)。Word2Vec の実装にあたっては Python のオープンソースライブラリである gensim(ver. 4.3.2)を用い、Google Colabotory 上で実行した。(Skip-Gram, 次元数: 100, 文脈窓幅: 5, 最小頻度: 2, エポック数: 200)

1. 語彙素のみ
 2. 語彙素・品詞
 3. 語彙素・品詞・活用形
- それぞれの Word2Vec モデルにおいて、ある語との類似度が高い語を示すと以下の通り。「有る」からは A, B 間の時代差、「ども」からは活用形の有無による 1, 2 と 3 の間の異なりが、モデルに現れていることが窺える。
 - 動詞「有る」(終止形-一般):
 - ・ A-1: 侍る(0.551), 神矢(0.546), 無い(0.514), おわす(0.497), 貧乏(0.489)
 - ・ A-2: 侍る-動詞-非自立可能(0.548), 無い-形容詞-非自立可能(0.517), おわす-動詞-非自立可能(0.495), 神矢-名詞-普通名詞-一般(0.489), 見える-動詞-一般(0.478)
 - ・ A-3: 有る-動詞-非自立可能-連用形-一般(0.615), 無い-形容詞-非自立可能-終止形-一般(0.603), 有る-動詞-非自立可能-連体形-一般(0.579), 有る-動詞-非自立可能-已然形-一般(0.534), 侍る-動詞-非自立可能-終止形-一般(0.486)
 - ・ B-1: 無い(0.606), 御座無い(0.525), おりない(0.505), 要る(0.500), トする(0.496)
 - ・ B-2: 無い-形容詞-非自立可能(0.595), 侍る-動詞-非自立可能(0.507), 誣言-名詞-普通名詞-一般(0.503), 神矢-名詞-普通名詞-一般(0.487), 御座る-動詞-非自立可能(0.487)
 - ・ B-3: 多い-形容詞-一般-終止形-一般(0.679), 無い-形容詞-非自立可能-終止形-一般(0.652), 有る-動詞-非自立可能-連体形-一般(0.649), 有る-動詞-非自立可能-連用形-一般(0.621), 有る-動詞-非自立可能-連用形-促音便(0.605)
 - 接続助詞「ども」:
 - ・ A-1: ど(0.629), ば(0.564), とも(0.539), 具縛(0.538), 猶(0.498)
 - ・ A-2: ど-助詞-接続助詞(0.634), ば-助詞-接続助詞(0.571), に-助詞-接続助詞(0.563), とも-助詞-接続助詞(0.559), 間-名詞-普通名詞-副詞可能(0.506)
 - ・ A-3: ど-助詞-接続助詞-0(0.742), ば-助詞-接続助詞-0(0.642), 睦まじい-形容詞-一般-終止形-一般(0.581), 具縛-名詞-普通名詞-一般-0(0.574), 程無い-形容詞-一般-終止形-一般(0.546)
 - ・ B-1: ど(0.791), ば(0.696), とも(0.608), こそ(0.538), 雖も(0.534)
 - ・ B-2: ど-助詞-接続助詞(0.776), ば-助詞-接続助詞(0.689), に-助詞-接続助詞(0.642), とも-助詞-接続助詞(0.599), こそ-助詞-係助詞(0.523)
 - ・ B-3: ど-助詞-接続助詞-0(0.842), ば-助詞-接続助詞-0(0.712), 酒好み-名詞-普通名詞-一般-0(0.599), 言う-動詞-一般-已然形-一般(0.572), 然る-動詞-一般-已然形-一般(0.567)
 - 〈高野本〉〈天草版〉の各要素の持つベクトルをこれらのモデルから取得し、〈高野本〉と〈天草版〉の要素同士のベクトルのコサイン距離をコストの行列として与える。そのコストが最も低くなる経路を動的計画法によって求め、語同士の対応付けを行った。
 - 以下のデータをサンプルとしてモデルごとの正答数を比較すると³、表1の通り。比較のため、出現形と語彙素の編集距離も加えた。
 - ・ 〈高野本〉「西光被斬」と〈天草版〉巻1第3の一部
 - ・ 〈高野本〉「祇王」と〈天草版〉巻2第1

³ 手修正後のデータにおいて、〈高野本〉に対して〈天草版〉に対応する語があり(空でない)、かつ、補助記号でない語を対象とした。

- 次節で後述する対応付け自体の課題があるものの、概ね、以下のように評価できる。

2 点目は、意味・機能が近くても活用形は一致しない場合があること(例えば、逆接の接続助詞の「ども」と「が」など)に起因するものと思われる。

1. 単語ベクトルを用いると、単純な編集距離よりも精度が上がる。

2. 活用形をモデルに加えると精度が若干下がる。
- 人手修正を行ったデータの一部を表 2 に示す。このうち、〈高野本〉のサンプル ID・開始位置と〈天草版〉のサンプル ID・開始位置の対応関係のデータを『平家物語』『天草版平家物語』アライメントデータ⁴として発表者の researchmap に公開した⁴。

	西光被斬		祇王	
	正答数	正答率 (/1303)	正答数	正答率 (/3020)
出現形	1077	82.66%	2579	85.40%
語彙素	1122	86.11%	2697	89.30%
A-1	1190	91.33%	2847	94.27%
A-2	1186	91.02%	2850	94.37%
A-3	1155	88.64%	2800	92.72%
B-1	1196	91.79%	2855	94.54%
B-2	1195	91.71%	2850	94.37%
B-3	1163	89.26%	2822	93.44%

表 2 〈高野本〉〈天草版〉のアライメント例

〈高野本〉				〈天草版〉			
サンプル ID	開始位置	キー	語彙素	サンプル ID	開始位置	キー	語彙素
30-平家 1250_01006	6500	昔	昔	40-天平 1592_02001	6190	昔	昔
30-平家 1250_01006	6510	より	より	40-天平 1592_02001	6200	から	から
30-平家 1250_01006	6530	おほく	多く				
30-平家 1250_01006	6560	の	の				
30-平家 1250_01006	6570	白	白	40-天平 1592_02001	6220	白	白
30-平家 1250_01006	6580	拍子	拍子	40-天平 1592_02001	6230	拍子	拍子
				40-天平 1592_02001	6250	も	も
30-平家 1250_01006	6600	あり	有る	40-天平 1592_02001	6260	有っ	有る
30-平家 1250_01006	6620	し	き	40-天平 1592_02001	6280	たれ	たり
30-平家 1250_01006	6630	が ⁴	が	40-天平 1592_02001	6300	ども	ども
30-平家 1250_01006	6640	、	、	40-天平 1592_02001	6320	、	、
30-平家 1250_01006	6650	かかる	斯かる	40-天平 1592_02001	6330	この	此の
				40-天平 1592_02001	6350	様	様
				40-天平 1592_02001	6360	な	なり
30-平家 1250_01006	6680	舞	舞	40-天平 1592_02001	6370	舞	舞
30-平家 1250_01006	6690	は	は	40-天平 1592_02001	6380	は	は
30-平家 1250_01006	6700	いまだ	未だ	40-天平 1592_02001	6390	未だ	未だ
30-平家 1250_01006	6730	見	見る	40-天平 1592_02001	6410	見	見る
30-平家 1250_01006	6740	ず	ず	40-天平 1592_02001	6420	ぬ	ず

⁴ 発表者 researchmap (<https://researchmap.jp/ufo>) の「資料公開」(https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/254554/7c1cae3ae9affc4f7317a727cf50d55f) 参照。対応箇所がない場合に 0 を入力したファイルと、直前の対応する箇所を入力したファイルの 2 種類を用意した。なお、CHJ に対して追加情報を付与して共有する試みには小木曾(2019)がある。

3 パラレルコーパス・対応表を使う

- Heike_feiqe.csv には、カンマ区切りで以下の情報が格納されている。
 - A 列: H_ID…〈高野本〉のサンプル ID⁵
 - B 列: H_start…〈高野本〉の開始位置
 - C 列: F_ID…〈天草版〉のサンプル ID
 - D 列: F_start…〈天草版〉の開始位置
- Excel 上で対応箇所を求める手順の一例を示す。(〈天草版〉→〈高野本〉の検索の場合)
 - 対応箇所を得たい〈天草版〉のサンプル ID&開始位置を取得する
 - 中納言で「検索結果をダウンロード」
 - それと同じ行にある〈高野本〉のサンプル ID&開始位置を求める
 - サンプル ID(C 列)、開始位置(D 列)を、Sheet2 の A,B 列に貼り付け
 - Sheet2 の C2 に、以下の関数を入力し、最終行までオートフィル
 - =XLOOKUP(A2&B2,Sheet1!C:C&Sheet1!D:D,Sheet1!A:B,0,0,1)⁶
 - 得られた〈高野本〉のサンプル ID(C 列)&開始位置(D 列)を、中納言の「位置検索」に貼り付けて検索する
- 以上の手順により、以下の図 1、図 2 のようなデータを得ることができる。

サンプル ID	開始位置	前文脈	キー	後文脈	巻名等	ページ番号
40-天平1592_01001	6350	「書」に仕えよと言ふ本文の「有るぞ」	と	「言うて」予てその用意を「せられた	巻第一・第一	5
40-天平1592_01001	9700	に、その「成ら」れず「様」を見届「け」	とて	「断くて」罷り居る「程」に、えにそ「出で	巻第一・第一	5
40-天平1592_01001	9940	罷り居る「程」に、えにそ「出で」申す「ま」いけれ	とて	「随」揺り座った「これ等」を「詮無」い事	巻第一・第一	5
40-天平1592_01001	12580	「面目」無さ「に」密か「に」罷り出で「らるる」	とて	「横たえ」て「差さ」れた「刀」を「袈裟	巻第一・第一	6
40-天平1592_01001	24210	尤もぢや「先づ」然ら「ま」その「刀」を「取り」寄せよ	と	「仰せられ」て、「御覧」為さる「れ」ま、上「は	巻第一・第一	9
40-天平1592_01001	25950	なれ「ば」、忠盛が「科」で「は」無いぞ	と	「仰せられ」、以ての外「敵」感「為」され「たれ」ま、罪科	巻第一・第一	9
40-天平1592_01002	10660	の「恥辱」でも「御座ら」うずれ、「重盛」が「子」供	とて	「有ら」うする「者」の「閑白」殿の「御出」に「参り」合	巻第一・第二	16
40-天平1592_01002	11040	で、「乗」り物は「り」下りぬにそ「尾籠」に「御座れ	と	「言うて」その「時」刻に「会」うた「侍」共	巻第一・第二	16
40-天平1592_01002	11600	へ「無礼」の「由」を「申さ」うずれ「と」にそ「思え	と	「言うて」返ら「れ」た「れ」ま、その「後	巻第一・第二	16
40-天平1592_01002	18390	至りぢや「この」誤り「は」汝一人「に」帰する	と	「言うて」、「舊く」伊勢の「国」へ「追」い下され	巻第一・第二	17
40-天平1592_01003	8050	「西光法師」首「を取」るに「は」ぬかぬ	と	「言」い「様」に、「瓶」子の「首」を取「つて	巻第一・第三	20
40-天平1592_01003	9570	所望「に」任せ「うず」先づ「弓袋」の「料」に	と	「言うて」、「白布」五十「反」贈ら「れた」	巻第一・第三	20

図 1 〈高野本〉の「とて」に対する〈天草版〉の対応箇所

サンプル ID	開始位置	前文脈	キー	後文脈	語彙素	活用形	巻名等	ページ番号	
30-平家1250_01001	5110	しか「り」ども、「殿上」の「仙鶴」を「ば」まだ「ゆるさ」れ	ず	「は」	ず	終止形一般 祇園精舎		20	
30-平家1250_01002	8400	様も「なく」して、「御道」も「まだ」終ら	ざる	「に」、「儼か」に「罷」出で「らるる」とて、「横」だへ	ず	連体形補助 殿上聞付		22	
30-平家1250_01002	13340	に「は」様「に」ありしか「り」ども事「い」で「に	ず	「は」末代「い」か「か」あら「んず」らむ、「お」ぼつか「な」し」	ず	終止形一般 殿上聞付		24	
30-平家1250_01004	6130	とい「へど」、「詞」に「あら」は「れ」て「申す」者	なし	「は」六波羅「殿」の「虎」とい「ひ」て「ん」しか「り」ま	無い	終止形一般 禿髪		30	
30-平家1250_01006	1600	も、「世」の「人」もて「なす」事「な」のめ「なら	ず	「は」母「と」ぢ「に」も「は」き「屋」につ「つて」とら	ず	終止形一般 祇王		34	
30-平家1250_01006	23780	問ひ「なれ」ども、「と」かうの「返事」に「も」及「ば	ず	「は」供「したる」女「に」尋ね「て」ぞ、「さる	ず	終止形一般 祇王		39	
30-平家1250_01006	30680	ず」	とて	「なほ」御「返事」を「も」申さ	ざり	「ける」を、「母」と「ぢ」重「而」教訓「し」る	ず	連用形補助 祇王	41
30-平家1250_01006	37650	まじ」	とて	「と」宣ふ「間」、「力」あ「よ」ば「て」出で	ざり	「ナリ」。	ず	連用形補助 祇王	43
30-平家1250_01006	57110	其「後」は「在所」を「い」づく「とも」参ら「せ	ざり	「つる」に、「ゆ」やう「に」様「を」かへ「て」	ず	連用形補助 祇王		48	
30-平家1250_01006	57710	申ししか「り」ども、「入道」殿「さ」に「御用」い「ま」しま	ず	「は」つ「つ」く「物」を「案」する「に」、「娑婆」の「栄花	ず	終止形一般 祇王		48	
30-平家1250_01011	20810	し「給ふ」ども、「など」重盛「に」夢「を」ば「み」せ	ざり	「ける」ぞ。「凡そ」は「演盛」奇「怪」なり」。	ず	連用形補助 殿下乗合		66	
30-平家1250_01012	21420	の「あ」ま「し」は「に」、「つ」や「つ」や物「も」申され	ず	「は」返す返す「も」あ「ろ」ろし「事」ども「なり」。	ず	終止形一般 鹿谷		72	
30-平家1250_02003	5260	「まかり」で「は」、「此」誤「反」ゆ「な」ふ「べう」も「見え	ざり	「し」かり「は」、「さ」し「も」たの「まれ」た「り」ける「多田	ず	連用形補助 西光被斬		107	
30-平家1250_02003	23490	の「心」地「して」、「つ」や「つ」や物「も」お「ほえ」給は	ず	「は」供「なり」つる「侍」共、「あ」し「へ」だ「て」られ	ず	終止形一般 西光被斬		111	

図 2 〈天草版〉の「なんだ」に対する〈高野本〉の対応箇所

⁵ CHJ の各短単位は、サンプル ID と開始位置で一意に決定される。次頁以降の用例には、このサンプル ID、開始位置と、permalink を付した。

⁶ 計算に時間がかかる場合、検索範囲を列全体とせず、列の 1 行目～最終行までの範囲指定とするとよい。

4 パラレルコーパス化の問題点・課題

- 以下、技術的な問題を数点述べる。本手法では〈高野本〉と〈天草版〉の基本的な語順が一致することを前提として、先頭から末尾にかけての経路を探索して対応付けを行った。以下(1)(2)のような場合には語順が一致しないので、(計量的に扱えるような)対応関係を取得することはできない。また、一対一の対応付けのみを行ったため、(3)のような一対多(多対多)の対応関係も扱えていない。
 - (1) 既に召しおかれぬる上は、いそぎうしなはれずとも、 なんの苦しみか候べき。
既にこの様に召し置かれた上は、急ぎ失わせられずとも、 苦しゅうも無い儀ぢや：
(30-平家 1250_02004,22720 | 40-天平 1592_01004,9200)
 - (2) 是に 御文 給はって参って候」とて
その 御文 は これ へ 持って参って御座ると言うて
(30-平家 1250_03009,4590 | 40-天平 1592_01012,26800)
 - (3) 此 一門 に あら ざら む 人は、皆 人非人 なる べし」とぞ 宣ひ ける。
この一門 で 無い 人は 皆 人非人 ぢや と 申し れた 。
(30-平家 1250_01004,2110 | 40-天平 1592_01001,32700)
- 多対多の対応については、『鎌倉時代編』『室町時代編』間の、時代差に起因する規程の異なりが対応付けを困難にしている場合もある。
 - ・ 例えば、複合語の扱いについて、語彙的複合動詞と解釈される動詞の接続を『鎌倉時代編』は分け、『室町時代編』は複合動詞として処理する。自動対応付けの際には、この「V₁+V₂」と「V₁V₂」の類似度がそれほど高くない場合に、他の動詞と対応付いてしまうこともしばしばある。
 - ・ 「代名詞+格助詞」(そ+の、わ+が)と連体詞(その、わが)、「動詞+接続助詞」(され+ば)と接続詞(されば)、「未然形+む」と「意志推量形」の関係なども同様。
- こうした一対多・多対多の対応には、学校文法的な活用観から離れることで解決可能なものもある。例えば以下の(4)は、「渡す」の連用形同士が対応して(□囲みの部分)、〈天草版〉に接続助詞「て」が追加されていると見ざるを得ないが、それぞれを watas-i (pass-接続) / wata-ite (pass-接続)と見て、等位節の構成において、-i と -ite が対応付くと考えerほうが整合的である⁷。(5)もやはり、「見る」の未然形と命令形が対応するのではなく、助動詞「ばや」と命令形の接辞が対応するものと見たい。
 - (4) 葦 を 結び 、 けたはり に わたし
葦 を 結い , 桁 , 梁 に 渡い て
(30-平家 1250_03008,21560 | 40-天平 1592_01012,20870)
 - (5) 今 一 度 見 ばや
今 一 度 見せい (30-平家 1250_02009,4630 | 40-天平 1592_01007,18420)

⁷ 古代日本語のグロスの検討については Zisk (2024a, 2024b)も参照。こうした記述に基づいて、CHJ の外部で解決可能であるように思われる。

5 おわりに

- 原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との対照は、手間はかかるものの、人力でも十分可能なレベルの作業であり、また、一例一例の対照作業や通読によってこそ新たに得られる課題があるのも確かである。一方で、パラレルコーパスは既に定まった課題における対照調査の効率化のみならず、「ちょっと見てみる」こと、「ざっくり傾向を把握する」ことを可能にするので、探索的な問題発見にも繋がり得る(北崎 2024 予定)。
- データの整備については、前節で述べた構築上の問題以外に、主に〈斯道本〉と対応する後半部の構築が大きなタスクとして残っている。〈天草版〉前半部にも〈斯道本〉を中心とする他本の影響が指摘されているので(近藤 2008: 第 3 章, 近藤 2012)、単に前半を〈高野本〉、後半を〈斯道本〉(巻 8 を〈竹柏本〉)とするような取り合わせ的なデータだけでなく、原拠本研究へのフィードバックが得られるようなデータが構築できることが、より望ましい。

参考文献

- 相田太一・小町守・小木曾智信・高村大也・持橋大地(2021)「単語ベクトルの結合学習を用いた近現代語の意味変化の分析」『じんもんこん 2021 論文集』, pp.110-115.
- 相田太一・小町守・小木曾智信・高村大也・持橋大地(2023)「異なる時期での意味の違いを捉える単語分散表現の結合学習」『自然言語処理』30(2), pp.275-303.
- 岡崎直観・荒瀬由紀・鈴木潤・鶴岡慶雅・宮尾祐介(2022)『IT Text 自然言語処理の基礎』オーム社.
- 小木曾智信(2019)「CHJ 中古「る」「らる」用法分類アノテーションデータ」https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/228595/1af08dfb08f421f4d6e0a39f528fed96.
- 北崎勇帆(2015)「動的計画法を用いた狂言台本の語の自動対応付け」『じんもんこん 2015 論文集』, pp.99-104.
- 北崎勇帆(2024 予定)「平家物語の対照コーパスを通して見る中世日本語」『計量国語学』34(7).
- 金水敏(2005)「日本語敬語の文法化と意味変化」『日本語の研究』1(3), pp.18-31.
- 近藤政美(2008)『天草版『平家物語』の原拠本、および語彙・語法の研究』和泉書院.
- 近藤政美(2012)「天草版『平家物語』の原拠本の研究—研究史と本文の検証—」『説林』60, pp.1-62.
- 山口堯二(2003)『助動詞史を探る』和泉書院.
- 山田昌裕(2010)『格助詞「ガ」の通時的研究』ひつじ書房.
- Zisk, Matthew. 2024a. Classical and Modern Japanese Glossing Rules [古代日本語と現代日本語のグロス規範]. <https://researchmap.jp/mzisk/misc/47645766>.
- Zisk Matthew. 2024b. List of Japanese Functional Morphemes [古代日本語と現代日本語の機能形態素リスト]. <https://researchmap.jp/mzisk/misc/47645778>.

付記

本発表は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」ならびに、JSPS 科研費(JP23K12192)の成果の一部です。

現代語書き言葉コーパスと著作権処理 —BCCWJ2 の構築に向けて—

おぎそ としのぶ (国立国語研究所)
やまざき まこと
山崎 誠 (国立国語研究所)

1. はじめに

国立国語研究所では、文化庁からの委託事業として「信頼できる言語資源としての現代日本語の保存・活用のためのデジタル基盤整備事業」を 2024 年度から 5 年計画で実施することになった(山崎ほか 2024)。この事業の目的は、国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を現在の倍の規模に拡張することである。本発表では、現代日本語の書き言葉コーパスの構築・公開に関わる現行の著作権法について整理して示し、この拡張計画(BCCWJ2)について、著作権法上許容される公開形態と著作権処理に伴うコストを踏まえてどのようなコーパスの設計・構築を行うべきか、聴衆との意見交換を行い今後の方針決定の参考としたい。

2. 現代語コーパスと著作権法

2.1 BCCWJ の著作権処理

BCCWJ の設計・構築が行われた 2000 年代前半には、コーパス構築・公開を行うためには収録資料の著者(原著者)の許諾を得るほかなく、書籍だけで約 25,000 件もの著作権処理を行う必要があり、「この業務に、常勤研究員 1 名と週 40~30 時間勤務の非常勤職員 4 名とアルバイト数名を当てて」、「単年度で 1000 万円を大幅に超える」(前川 2009)というきわめて高いコストを払って権利処理を行った。2005 年に個人情報保護法が完全実施されたことで、著作者の連絡先の情報を入手することが困難になったこともこの高コスト化の要因となっている。

2.2 2018 年著作権法改正

平成 30(2018)年の著作権法の改正の「柔軟な権利制限規定」により、コーパス構築や公開に関わる次のような権利制限規定が設けられた(文化庁著作権課 2019)。

30 条の 4: 著作物に表現された思想又は感情の享受を目的としない利用

47 条の 4: 電子計算機における著作物の利用に付随する利用等

47 条の 5: 電子計算機による情報処理及びその結果の提供に付随する軽微利用等

コーパス構築のための著作物利用は上記 47 条の 4 に当てはまることから、収集した資料の機械可読テキスト化等は原著者の許諾なく行うことが可能になった。また、コーパスの通常の利用目的は 30 条の 4 に当てはまることから、構築したコーパスの利用・分析等も許諾なく行えるようになった。さらに、検索アプリケーション「中納言」のようなコーパス公開に関する検索サービスも 47 条の 5 の「軽微利用」の範囲であれば、許諾がなくとも適法に行えることとなった。

2.3 著作権処理なしで作るコーパスの制限

著作権法が改正されたことにより、BCCWJ2 の構築を進めていくに際しては、拡張分の著作権処理を行うのか（行う場合どれだけの量（割合）に対して行うのか）が重要な選択となる。著作権処理なしであれば、そのぶんのコストをデータ構築に振り向け、コーパスサイズを大きくしたり、形態素解析の精度を向上させたりすることも可能になる。一方で、その場合には検索サービスの文脈の長さは「軽微利用」の範囲に収める必要がある。

『昭和・平成書き言葉コーパス』では著作権処理を行わないことで、低いコストでコーパスを構築し、軽微利用の範囲でコーパスの構築・公開を行っている（小木曾ほか 2024）。弁護士に相談したうえで、軽微利用と認められるよう文脈の長さを前後 30 語以内に制限して「中納言」で公開している。著作権処理済みの BCCWJ では「中納言」で前後 500 語以内まで文脈長が指定できることと比較すると極めて短い文脈長しか利用できないことになる。

なお、軽微利用の範囲で行う必要があるのは、オンライン検索サービスなどが想定される「電子計算機による情報処理及びその結果の提供」（47 条の 5）の場合であって、BCCWJ の DVD 等による有償データ提供のように契約に基づいてコーパス利用を許諾する場合には該当しない。この場合には別途、利用目的が「著作物に表現された思想又は感情の享受を目的としない利用」（30 条の 4）であることを条件として著作権者の権利を侵害しないようにする必要がある。

3 BCCWJ「中納言」の利用状況と文脈長

上記を踏まえ、権利未処理データを公開することを念頭に、オンラインでの BCCWJ 利用者が、どの程度の文脈の長さで検索を行っているのか、「中納言」の検索ログのデータを示して検証する。

3.1 検索方法・文脈長別の検索回数

2021 年 4 月～2024 年 8 月にかけて「中納言」を用いて BCCWJ を検索した全ユーザーの履歴データ（ログファイル）をもとに、ユーザーがどのような検索をどれだけの文脈長を指定して行っているのかを調査した。この期間中の BCCWJ 検索回数は、短単位検索・長単位検索・文字列検索を合わせて約 322 万回であった。このうち、検索履歴（検索条件式）に文脈長の情報があるものは約 278 万回分であった。なお、「中納言」では、検索条件式を直接指定しないで画面上のコントロールを使って指定した場合にも、検索履歴として式が記録されておりここから指定した文脈長が確認できる。文脈長が含まれないのは検索条件式で文脈長を指定せず、画面上で選ばれている文脈長による場合である。そのため、文脈長指定なしの多くは標準（デフォルト設定）の 20 語での検索になっていると思われるが、今回は集計対象から外した。

この約 278 万回分の検索履歴を、検索方法・文脈長別に集計したのが表 1・図 1 である。ただし、10 語未満の文脈長は集約し、ほとんど用いられていない指定回数（たとえば 60 語を指定した 1 回、250 語を指定した 4 回など）のものは集計から除外した。

表 1 検索方法・文脈長別の BCCWJ 検索回数

文脈長	<10	10	20	30	50	100	200	300	500
短単位検索	3,143	18,554	1,463,731	46,075	100,345	56,482	12,369	16,763	8,163
長単位検索	0	3,317	230,558	6,532	13,290	10,191	1,022	23,843	1,354
文字列検索	2	4,283	565,016	21,993	71,711	61,760	22,264	7,680	13,791
全体	3,145	26,154	2,259,305	74,600	185,346	128,433	35,655	48,286	23,308

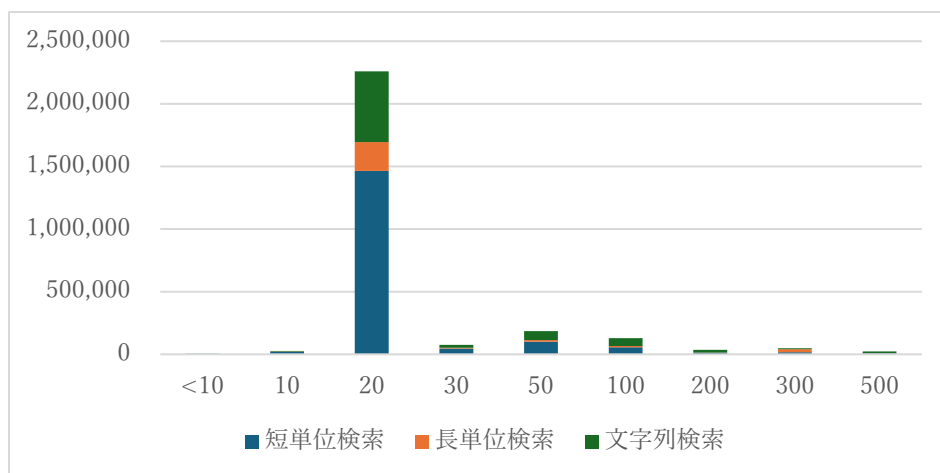


図 1 文脈長別の BCCWJ 検索回数

この図・表から、BCCWJ「中納言」の検索は、ほとんどが標準（デフォルト設定）の 20 語のままで利用されていることがわかる。このなかにはとりあえずヒットするかどうか検索してみるような用途もあると考えられるが、それにしても圧倒的な割合である。

3.2 検索方法・文脈長別の検索数累積構成比

図 2 は同じデータから、何語あれば全てのユーザー検索の需要を十分に満たせるか確認するために各検索の累積構成比を示したものである。もっとも検索回数の多い短単位は、文脈長が 20 である割合が高く 86%にのぼる。長単位検索は 81%、文字列検索は 74%である。短単位でデフォルト値の 20 が多いのは、短単位検索自体が「中納言」の標準の検索方法なので、ほとんど条件設定を変えずに検索を行う場合が多いためかもしれない。検索方法別に見ると、短単位よりも長単位・文字列検索のほうが長い文脈指定が多い。とはいえ、50 語で短単位検索・長単位検索・文字列検索それぞれで 95%・86%・87%を占め、100 語ではそれぞれ 98%・91%・97%となる。100 語以上の文脈長を必要とするのは全体の 5%以下である。

ダウンロードした検索結果を表計算ソフト等で分析することを考えると、文脈は長ければ長いほどいいというものではない。データサイズが大きくなり処理速度が下がることを避けるために、不必要に長い文脈は避けられる傾向にあると考えられる。

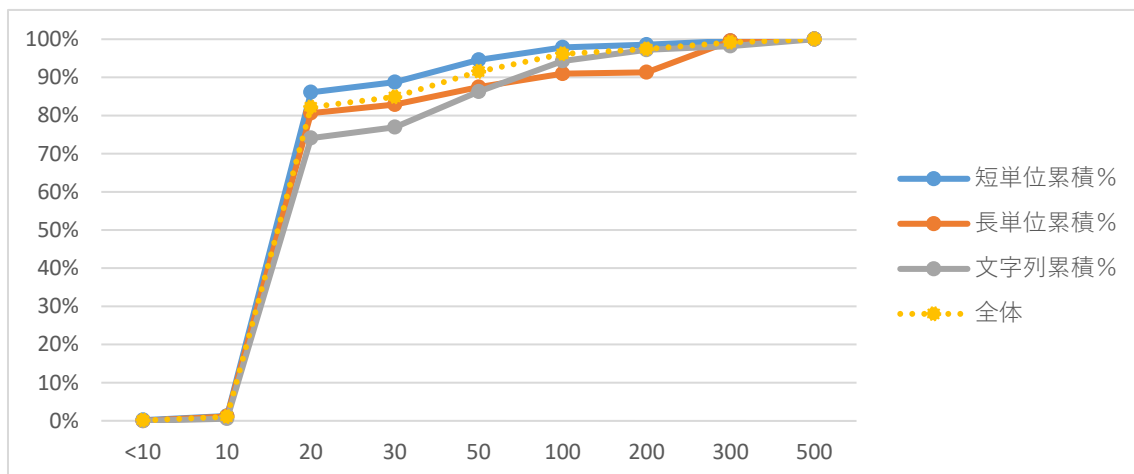


図 2 文脈長別の検索数累積構成比

4. おわりに：研究者にはどれほどの文脈がいるか？

SHC で軽微利用の範囲とした 30 語で全体の 85%、50 語だと全体の 92%の需要を満たす。現状、軽微利用といえる文脈長に定まった基準はなく、SHC の公開時には保守的に長さを設定した。こうしてみると、日本語研究のためのコーパス検索の大部分は軽微利用の範囲に収まりそうである。もちろん、研究目的によって必要とされる文脈の長さは異なり、より長い文脈を必要とする場合もあるが、そのときには有償契約などのオンライン以外の利用形態のほうがふさわしいだろう。

コーパスや大規模データは日本語研究に欠かせないものとなり、研究者自身がデータ構築・公開を行いたい場面も増えている。そのためにはコーパスと著作権に関する情報は重要である。本発表と会場での議論が、BCCWJ2 に限らず、コーパス等の作成・公開を検討する多くの研究者の参考になることを期待する。

参考文献・参考 URL

- 小木曾智信・近藤明日子・高橋雄太・間淵洋子 (2024) 『『昭和・平成書き言葉コーパス』の設計・構築・公開』『情報処理学会誌』 65(2), pp. 278-291. https://clrd.ninjal.ac.jp/shc/doc/IPSJ_SHC.pdf
- 文化庁著作権課 (2019) 「デジタル化・ネットワーク化の進展に対応した柔軟な権利制限規定に関する基本的な考え方 (著作権法第 30 条の 4, 第 47 条の 4 及び第 47 条の 5 関係)」 https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/hokaisei/h30_hokaisei/pdf/r1406693_17.pdf (2024 年 9 月 16 日最終閲覧)
- 前川喜久雄 (2009) 「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築」『人工知能学会誌』 24(5), pp. 616-622. https://doi.org/10.11517/jjsai.24.5_616
- 山崎誠・小木曾智信・高田智和 (2024) 『『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の拡張計画について —BCCWJ2 の構築に向けて—』日本語学会 2024 年度春季大会予稿集 pp.161-166. https://www.jpling.gr.jp/taikai/platform/2024a/2024a_all.pdf

統合型日本語語彙データベース J-CLID の開発と展望

ろ けんき
呂 建輝 (岡山大学)

かたやま あゆ こ
片 山 鮎 子 (沖縄工業高等専門学校)

1. 本研究開発の目的

1-1. データベース間連携の必要性

近年、日本語語彙データベースの開発が盛んになっている。データベースによってさまざまな語彙情報が含まれており、日本語の教育・研究に役立っている。一方、これらのデータベースは作成基準がそれぞれ異なるため、語彙の同定作業を行わなければ横断的検索ができない。このような事情もあり、個別語を複数のデータベースにかけて考察する研究、または単体のデータベースに収録されている語彙の特徴を考察する研究（一次元的な考察）は多く見られるものの、データベースによって収録される語彙の違いや語彙の体系性を考察する研究（二次元的な考察）となると難しい現状である。また、作成者はデータの正確性を確保するために最善を尽くしたつもりでも、データベースは人によって作られたものである以上、作成者の主観的判断がどうしても避けられないものである。データの正確性を検証するためには、さらに複数のデータベース（異なる手法で構築されたもの）に照合して語彙情報を吟味する必要があるのだが、この二次的検証作業を行った日本語語彙データベースは管見の限りほとんど見られない。このように、現在多くの日本語語彙データベースが開発されているものの、互いに孤立していて横断的連携ができていないという課題が残っている。

1-2. 現行の日本語語彙データベースの概観

本研究では、日本語非母語話者を対象とする日本語教育のための日本語語彙データベースの開発をしている。日本語教育のための語彙表としてよく知られるのは旧日本語能力試験出題基準（以下「旧基準」とよぶ）で、計 8,009 語を語彙レベル別に 4 級～1 級に整理されていた。しかし、2010 年の新試験（JLPT）への改定に伴い、旧基準は非公開となった。

そして 2015 年、日本語学習辞書支援グループが開発した「日本語教育語彙表」（以下「N 表」）が公開された。旧基準を上回る計 17,920 語を収録し、語彙レベルとして「初級前半」「初級後半」「中級前半」「中級後半」「上級前半」「上級後半」の 6 段階に分類している。語彙情報について、ダウンロード版では表記、読み、品詞、語種、難易度にとどまるが、WEB 版では日本語読解学習支援システム「リーディングチュウ太」との連携で語義や用例といった語彙情報を得ることができる。一方、本研究で他データベースに照合し検証してみたところ、語彙情報の誤りを複数確認した（例：「誕生日」タンジョウヒなど）。また、表記・読み・品詞ともに一致する見出し語が複数収録され、その違いが明示されていないことがある（例：「掃除機」など）。さらに、収録語彙数は旧基準より大幅に増えたとはいえ、日本語教育に必要と思われる言葉で未収録のものも多い（例：わたくし、みんな、バス、メールなど）。以上から、日本語教育で N 表のみを頼りにするのは不十分であり、他の語彙データベース

も参考にして、より大規模な語彙データベースを構築する必要があると考えた。

同じ日本語教育のための語彙データベースといえば、松下達彦氏が 2011 年に開発した「日本語を読むための語彙データベース VDRJ」(以下「V 表」)がある。現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)をベースにして計 141,949 語を網羅した大規模データベースで、旧基準語彙レベルのほか、語彙ランクや使用分野といった語彙情報も豊富に取り入れられている。さらに、同氏の研究チームが 2020 年に開発した「日中対照漢字語データベース JKVC」(計 10,053 語を収録、以下 J 表)は、漢字語彙に絞り中国語母語話者による意味推測のしやすさを考察したもので、中国語母語話者の日本語教育に役立つものと思われる。

他方、日本語母語話者対象の語彙データベースとしてよく知られているのは国立国語研究所が 2011 年に公開した「教科書コーパス語彙表」(計 50,329 語を収録、以下「K 表」)である。2005 年度に日本の小中高校で使用された各教科の教科書をテキスト構造化した「教科書コーパス」があり、K 表はその中に出現した語彙を網羅したデータベースである。日本人にとっての語彙レベルの参考にできる「初出学年」のほか、どの教科によく出現するかを示す「特徴度」といった語彙情報が含まれている。日本語非母語話者と母語話者の間の対照分析ができるという意味で、日本語教育の参考になるデータベースであると考えられる。

以上で紹介した N 表・V 表・J 表・K 表の 4 表を一表に統合できれば、日本語教育用語彙についてさらに深い知見が得られるのではないかと考え、統合型日本語語彙データベース J-CLID¹の開発に至った。4 表を統合した J-CLID:C4 を土台にして、さらに日本国内で定番の日本語教科書として用いられることの多い『みんなの日本語』の翻訳・文法解説本(以下 M 本)に掲載された語彙(以下「M 表」)、JLPT 対策用の語彙参考書である『日本語能力試験問題集 語彙スピードマスター』(以下 S 本)に収録のある語彙(以下「S 表」)、および中国で幅広く使用されている日本語教科書『新経典日本語基礎教程』(以下「C 本」)に収録のある語彙(以下「C 表」)を取り入れ、計 7 つのコンテンツの横断検索を可能にした J-CLID:C7 まで開発が進んでいる。

2. データベース構築の手順

2-1. 語彙の収録方針

一語一音 本研究では、読みを持つ語のみを収録対象とし、安定した読みを持たない記号類(V 表: ヲ など)や読み情報が示されていない字音形態素(V 表: 甫など)等は除外する。なお、複数の読みをもつ語は、読みごとに見出し語を分割する(V 表: 他 タ/ホカ など)。

一語一義 J-CLID:C4 対象 4 表には意味による使い分けはほとんど見られないが、J-CLID:C7 所収の M 表・S 表・C 表は M 本・S 本・C 本に当て意味用法の確認ができる。そのうち、複数の意味を持つ多義語については、意味用法のパターン数だけ当該語彙項目を分割する(できる: 能力がある | 新しく誕生する | 準備が整う など)。なお、意味用法のパタ

¹ Cross-Lexical Integrated Database (Japanese-based version)。N 表・V 表・J 表・K 表の 4 表を統合したバージョンは J-CLID:C4 とよぶ。後述するさらに M 表・S 表・C 表を取り入れたバージョンは J-CLID:C7 とよぶ。

ーンを考察する際、M 本・S 本・C 本のほか、英語や中国語といった外国語による訳語も参考にした。

有効語彙 J-CLID:C4 対象 4 表には、意味用法の確認ができず意味不明の見出し語が散見される(V 表:ティイ など)。こういった語は、収録対象にすべきかどうかの判断が難しく、仮に明らかに収録対象にすべきでないと判ったところで、膨大なデータベースから見出し語を一つ一つ確認して除外処理をするのは非効率的である。本研究では、一先ず対象語彙表の全データを取り入れ、統合作業終了後、2 表以上に掲載のある語彙のみをピックアップして有効語彙とする、という手法を用いた。

2-2. 第一期 : J-CLID:C4 の開発

まず、N 表・V 表・J 表・K 表に対してデータの標準化を行う。V 表では人名・地名の表記は基本的にカタカナになっているので、漢字で表記できかつ揺れがほぼ見られないものは漢字表記に改めた(トウキョウ→東京、シャンハイ→上海 など)。また、V 表の「見出し語彙素」欄には「𨳊」「𨳋」「𨳌」「𨳍」「𨳎」「𨳏」「𨳐」「𨳑」といった文字を使用した注記またはマークの代用が見られるが、必要に応じて注記欄に移動させる処理をした(バス𨳊 bus→表記:バス、注:bus など)。さらに、「一語一音」の原則の下、V 表で「語彙素読み」欄が空欄、もしくは「0」表記、「#N/A」表記の見出し語を削除した。但し、他データベース等から容易に読みが判明できるものについては、その読み情報を追加することで収録対象とする(ipod:アイポッド など)。J 表に関しては、「一語一音」の原則の下、複数の読みをもつ見出し語に対して分割処理をした(年:ネン/トシ など)。また、V 表も含め、読みの誤りと見られる箇所があったため、これを修正した(図形:ガンメン→ズケイ など)。

次に、表記、読み、品詞、活用型情報を基に、4 表の間で語彙の同定を行う。表記については、N 表は「標準的な表記」欄、V 表と J 表は「見出し語彙素」欄、K 表は「語彙素」欄を基準とする。読みについては、N 表は「読み」欄、V 表と J 表は「標準的読み方」欄、K 表は「語彙素読み」欄を基準とする。基本的には、表記・読み・品詞・活用型ともに一致する語を同一項目として認定する。但し、送り仮名や漢字・仮名表記の違い等で表記が完全に一致しない場合も、読み・品詞・活用型が一致していれば、考察の上、同一項目に認定する場合がある(マツリ V 表:祭り、J 表:祭)。また、N 表には活用型に該当する語彙情報がないため、語彙同定の際、他表に記された情報を参考にして、現代日本語に有り得る活用型をもつ見出し語のみに統合する(消す:五段-サ行 | 下一段-サ行)。なお、J 表では「留学生用語彙ランク (VDRJ=松下 2011)」欄の番号で V 表との対応関係を示しているそうだが、本研究で検証してみたところ、ほとんどの番号が V 表に対応していないことがわかった。したがって、語彙同定の際はこの対応番号を用いずに、独自で語彙の同定作業を行った。

最終の出力ファイルには、語彙を特定するための「表記」「綴り」「注」「品詞」「活用型」欄を設けた。さらに N 表・V 表・J 表・K 表に対応する見出し語の番号を記した(N 表は「No」欄、V 表・J 表は「ID」欄、K 表は「ID_教科書」欄を基準にしている)。

2-3. 第二期 : J-CLID:C7 の開発

まず、M 本、S 本、C 本からそれぞれ所収語彙を採集し、M 表・S 表・C 表を作成する。大量のデータの入力作業を伴うため、効率化を図るべく、呂が開発したデータベース構築ツール「CSV Carpenter」を使用した。J-CLID:C4 対象 4 表とは違い、M 表・S 表・C 表を作成する際は M 本・S 本・C 本に参照して当該語の意味用法が確認できるため、「一語一義」の原則の下、表記・読みが同じでも、意味用法が異なれば別の語彙項目にする（S 表：落とす drop | remove | lower など）。反対に、同じ意味用法だが複数の表記がなされている場合は、同一項目にする（M 表：見る／診る check など）。なお、当該見出し語が M 本・S 本・C 本の何冊目の何課に出現したかの情報も M 表・S 表・C 表に反映した。

次に、J-CLID:C4 に M 表・S 表・C 表を取り入れるため、語彙の同定を行う。同定作業の流れは基本的に 2-2 節で述べた手順と変わらないが、このフェーズでは M 表・S 表・C 表から多義語が発生するため、意味用法のパターン分だけ J-CLID:C4 所収語彙に対して分割を行い、さらに意味用法を特定するための注記をしておいた。

最終の出力ファイルには、J-CLID:C4 で設けた語彙情報欄のほか、M 表・S 表・C 表においてそれぞれ何冊目の何課に出現したかの情報を記した。

3. 考察

3-1. 統計結果

以上の手順により、日本語母語話者の理解語彙数に相当する計 46,019 語（有効語彙）を収録した J-CLID:C7 が完成した。そのうち、N 表より延べ 16,719 語（異なり語数：16,285）、V 表より延べ 44,162 語（異なり語数：43,755）、J 表より延べ 10,177 語（異なり語数：10,053）、K 表より延べ 42,390 語（異なり語数：41,949）、M 表より延べ 4,694 語（異なり語数：4,684）、S 表より延べ 5,794 語（異なり語数：5,769）、C 表より延べ 4,776 語（異なり語数：4,623）を網羅した。

また、M 表・S 表・C 表のうち少なくとも 1 表に収録のある見出し語は 9,416 語であり、M 表・S 表・C 表のみに収録のある見出し語は 318 語である。同じ表記・綴り・品詞・活用型をもつ多義語は 321 語である。

見出し 番号	表記	綴り	注	品詞	活用型	日本語教育 語彙表_No	VDRJ日本語を読むための 語彙データベース_ID	日中対照漢字語 コーパスJKVC_ID	教科書コーパス 語彙表_ID教科書	みんなの 日本語	スピード マスター	新経典日本語 基礎教程	整理番号
1	亜	ア		接頭辞		3	6548	3201	2				6621
2	あ	ア	感動詞（気付き）	感動詞一般						初級1_2	N4_31		134159
3	ああ	アア	感動詞（oh）	感動詞一般		5	824		4	初級1_9		第一冊_2	337
4	ああ	アア	like that	副詞		6			5		N4_4		124329
5	愛	アイ		名詞・普通名詞一般		15	1093	696	66				1929

〈図 1〉 J-CLID:C7 本体（一部）

3-2. 現行の語彙データベースに見られる諸問題

複合語や派生語が少ない J-CLID:C4 対象 4 表、特に V 表、K 表には複合語や派生語の類が少ない（横断歩道、アイスコーヒーなど）。これはデータベース作成時、二表とも UniDic に基づく形態素解析を行ったからである。UniDic という「短単位」「長単位」は必ずしも言語学という「単純語」「複合語」と一致しないことは理解している。しかし、「アイスクリー

ム」は「短単位」ではなく「長単位」に認定されること、また、「イチゴ味」は「短単位」に認定されるのに対して「レモン味」は「長単位」に認定されることなどを考えれば、少なくとも日本語教育のためのデータベースを構築する際には、UniDic 基準の見直しが必要かもしれない。J-CLID では、データベース類のほか図書類からも語彙の取入をしているため、この問題はある程度解消できている。

「～ズル」と「～ジル」の分断 「信ずる」「通ずる」といったサ行変格活用動詞（濁音形）は、日本語教育では基本的に「信じる」「通じる」の形で、上一段活用動詞として扱われている。しかし、V 表、K 表、N 表²には前者「信ずる」「通ずる」のみが収録されており、後者「信じる」「通じる」は収録されていない。「～ズル」と「～ジル」を同一項目に認定するのは難しいと考えるため J-CLID では別項目にしているが、この事象から日本語母語話者のための国語教育と非母語話者のための日本語教育の間の分断が垣間見える。

意味用法による見出し語の細分類 現行の語彙データベースでは意味用法による見出し語の細分類がほとんどなされていないため、語義の特定が難しい。この状態で、N 表、V 表、K 表で語彙レベルの分類をしているわけだが、同じ「CD」という見出し語でも、コンパクトディスクを指すこともでき、数学では点 C と点 D の間の線分を指すこともでき、これらは同一レベルの語彙であるとは考えられない。J-CLID:C7 で意味用法に基づき見出し語を細分類することにより、同じ表記で同じ読みを持つ語の内部においても、意味用法による語彙レベルの違いを明らかにすることができた。例えば 2-1 で取り上げた「できる」の例についていえば、「能力がある」（M 表：初級 I、S 表：N5）よりも「新しく誕生する」（M 表：初級 II、S 表：N4）のほうが語彙レベルが高く、「準備が整う」（S 表：N3）になるとさらに語彙レベルが高いことがわかった。このように、意味用法で語彙レベルの細分類をすることで、「やさしい日本語」の基準がより明確になるものと考えられる。

定型表現の不足 J-CLID:C4 所収 4 表には「お帰りなさい」「行ってらっしゃい」といった定型表現が非常に少ない。そもそもこういった定型表現は文レベルのもので語彙ではないという考え方もあるが、「お帰りなさい≠帰ってください」という意味関係から、「お帰りなさい」は単純に「お」「帰る」「なさい」からなる文であるとは考えられにくい。「語彙」という素材がなければ文を組み立てることはできないという観点から、「お帰りなさい」を一つの見出し語として語彙データベースに取り入れたほうが良いと考える。こういった定型表現を、J-CLID:C7 において M 表、S 表、C 表より数多く取り入れることができた。

3-3. 今後の課題

品詞体系の見直し J-CLID:C7 の開発においては、「気を付ける」「相談に乗る」といった慣用表現が数多く出現してくる。これらは、日本語母語話者にとっては「語彙」ではないと考えられるかもしれないが、日本語非母語話者にとっては全体を一つの言葉として考えられることが多い。こういった言葉は品詞上、どのように定めるべきか検討する必要がある。

² N 表では、「感ずる」「感じる」、「応ずる」「応じる」のように「～ズル」形と「～ジル」形が両方掲載されるパターンも見られる。

自立性体系の再考 接頭辞と連体詞の線引き（本～、約～ など）、接尾辞と副助詞の線引き（～ごろ、～ぐらい など）、その他生産性がありかつ形式が決まった表現など（～分の～、台風～号 など）、自立性を欠く表現の扱い方について要検討である。

4. 展望

J-CLID 所収コンテンツによって、下掲のように、今後さまざまな活用法が考えられる。

- ・ K 表×N 表：日本語母語話者と非母語話者の語彙レベルの違いの調査
- ・ V 表×K 表：語彙の専門性の調査（専門教育用）
- ・ M 表×C 表：日本と中国の日本語教科書の所収語彙の対照研究
- ・ J 表× α ：中国語母語話者の漢字語彙転移の傾向についての研究

このように、J-CLID 所収コンテンツが増えれば、日本語の基礎研究のみならず、様々な国際的研究や学際的研究が可能になると考えられる。J-CLID:C7 所収 7 表のほか、分類語彙表や 2020 年以降の日本の小中高教科書の収録語彙など、今後さらにコンテンツを充実させていこうと考えている。

参考文献

国際交流基金・日本国際教育支援協会（2007）『日本語能力試験出題基準 改訂版』凡人社
『新経典日本語基礎教程』第一冊第 2 版（2021）、第二冊第 1 版（2014）、第三冊第 2 版
（2021）、第四冊第 2 版（2019） 劉利国・宮偉ほか総主編 外語教学与研究出版社
『日本語能力試験問題集 語彙スピードマスター』N5 初版 森本智子・高橋尚子・松本知恵・
黒岩しず可（2019）、N4 初版 森本智子・高橋尚子・松本知恵・黒岩しず可（2023）、
N3 初版 中島智子・松田佳子・高橋尚子（2014）、N2 初版 中島智子・高橋尚子・松本
知恵（2016）、N1 初版 中島智子・高橋尚子・松本知恵（2017） J リサーチ出版
『みんなの日本語 翻訳・文法解説』初級 I 英語版第 2 版（2012）、初級 II 英語版第 2 版
（2019）、中級 I 中国語版初版（2018）、中級 II 英語版初版（2016） スリーエーネット
ワーク

国立国語研究所（2011）「教科書コーパス語彙表 Ver 1.0」「特定領域研究『日本語コーパス』
言語政策班最終成果 CD-ROM」所収

<https://repository.ninjal.ac.jp/records/3301>（参照日：2019 年 7 月 5 日）

日本語学習辞書支援グループ（2015）「日本語教育語彙表」ダウンロード版（Ver 2.8.3）

<https://jreadability.net/jev/>（参照日：2022 年 4 月 13 日）

松下達彦（2011）「日本語を読むための語彙データベース（VDRJ）（研究用）」（Ver. 1.1）

<http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/database.html>（参照日：2024 年 4 月 3 日）

松下達彦・陳夢夏・王雪竹・陳林柯（2017）「日中対照漢字語データベース」（Version 2.00）

<http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/database.html>（参照日：2024 年 5 月 30 日）

謝辞 本研究は科研費挑戦的研究（萌芽）23K17595 の成果の一部である。

慣習から逸脱した表記に見る文字の修辭的機能 —現代短歌を資料として—

ごんだ き ら
権田彩良（大阪大学院生）

1. はじめに

日本語には正書法がないと言われるが、漢語は漢字、和語や機能語はひらがな、外来語はカタカナで表記するという慣習は存在している。主に公的な文書ではこの慣習に則った表記が選択されるが、日常的な文字使用や創作においてはその限りではない。文字体系の選択が書き手に委ねられる場面では、漢字、ひらがな、カタカナ、時には数字やアルファベットをも用い、それらを組み合わせた多様な表記、いわば慣習から逸脱した表記が許容されている。慣習から逸脱した表記を対象とする先行研究においては、特にカタカナの新用法や当て字が関心を集めてきた。しかし慣習から逸脱した表記にはどの文字体系も選択されうるため、慣習から逸脱した表記に用いる文字体系はどのように選択され、そこにはどのような修辭的機能が関わっているのかという観点からの分析も必要とされる。

本発表は、短い定型のなかで修辭を駆使する現代短歌を調査対象とし、その多様な表記の試みのなかでも、同一の語句を複数回使用するという点で一見経済性が低いように思われる反復法に用いられた表記に着目する。反復法が用いられかつ反復に異なる表記が選択された短歌の観察を通して、慣習から逸脱した表記における文字の修辭的機能を明らかにすることが本発表の目的である。

2. 先行研究

2.1 各文字体系の機能

漢字、ひらがな、カタカナの機能として第一に言及されるものは、漢字の表語機能と仮名の表音機能である。表語文字である漢字の機能として、野村（1982）は、字音・字訓を表すこと、同音語の区別や多義語の意味の差に対応することを挙げている。阪倉（1998）によると、表音文字であるひらがなは、現代仮名遣いにおける「を」「は」「へ」のように、助詞を示すという表語的機能や、「おうさか」における「う」が「おおさか」との違いを示すような示差的機能も果たす。岩淵（1982）はカタカナの機能を、表音性・特殊効果性（強調性）・表意性の3つに分類している。表音性はカタカナが外来語や擬声語の表記、漢字表記に対する振り仮名として用いられる際の機能、特殊効果性（強調性）は同一語を漢字、ひらがな、カタカナで書き分けることによる表現効果、表意性は植物名などにおいて語としての意識を明確化させる機能である。

2.2 慣習から逸脱した表記の表現内容

慣習から逸脱した表記は、慣習的な表記とは異なる表現内容を持つことがある。中村（2007）は、「非慣用的な漢字の選定、意表をつくカタカナやひらがなによる表記〔中略〕などにより、ことばの意義をふくらませる修辭技法」（中村 2007：169）として「字装法」

という術語を提案している。ここで中村（2007）は、表記が修辭的な機能を持つとき、慣習的な表記との対比によって慣習から逸脱した表記が特別な表現内容を持つと説明している。加藤（2019）は、「人」と「ひと」のように同一語に複数の表記が見られる場合、表記の違いによって表現内容が異なると指摘し、コーパスの用例から、対象が特定されうる場合に漢字表記の「人」が、対象を特定しない場合にひらがな表記の「ひと」が選択される可能性に言及している。

創作における慣習から逸脱した表記の機能を分析した先行研究として、金水（2021）は、台詞の文字体系の選択がキャラクター造形に深く関わることを指摘している。その登場人物がコミュニケーション能力に障害を持っている場合や、読み書きの能力が低い場合に台詞のなかの漢語の一部がカタカナ表記されている例が挙げられ、文字の選択が作者の意図するキャラクター造形全体に関わっていることが示されている。同様の例として、富樫（2021）においても、カタカナ表記の多用は外国人属性やロボット属性を、ひらがな表記の多用は子供・幼児属性を想起させやすいと述べている。松田（2021）は、カタカナ表記と特定の属性の結びつきについて、読者が「ウチ」の視点で捉えられないキャラクターにカタカナ表記が使用され、読者にとって感情移入や共感が可能か否かという観点が表記に影響を及ぼすことを示している。

短歌においても表記と表現内容についての言及がなされている。生沼（2020）は、「爪の先まで酒あると思うにパチパチと伯父はツメを切る」（高瀬一誌）（太字は発表者による）を取り上げ、意図的なカタカナの使用が異化を起こすとしている。切られる前のまだ人体の一部である「爪」は漢字で、切られることで単なる物体となった「ツメ」はカタカナで表記され、表記の違いによって異なる表現内容を伝達しようとする試みが短歌にも存在していることが分かる。

3. 調査の対象と方法

本調査は、現代新人歌人の第一歌集として2013年より刊行されている「新鋭短歌シリーズ」を用例収集の対象とした。既刊60巻という量の面と、直近10年の新人歌人の歌集であるという質の点から、本シリーズに収録された短歌を現代短歌の用例として適当であると判断した。

慣習から逸脱した表記の分析を行うにあたり、「新鋭短歌シリーズ」に収録された短歌のうち、反復法が用いられ、かつ反復に異なる表記が選択されている短歌を収集した。反復法とは「何らかの単位の言語要素を何らかの基準でくりかえす表現技法の総称」（中村2007：337）である。現代短歌では多様な表記の試みが観察されるなか、本調査では、ひとつのテキストにおいて同一語には同じ表記を用いるという慣習的な表記法からの逸脱であるといえる、同一語の反復に異なる表記が用いられた用例に着目した。反復法の下位分類には畳語も属しているが、畳語は創作以外の場面でも用例が多く見られるため別途コーパス等で調査を行うこととし、今回の分析対象からは除外した。分析対象となった短歌と、その反復法部分の表記を適宜改変したものの表現内容の違いを示すことで、表現内容の違いをもたら

す文字の修辭的機能进行分析した。

4. 文字の修辭的機能

以下、各短歌の強調は発表者による。

4.1 対比を示す文字体系の使い分け

中村（2007）においては、表記が修辭的な機能を持つとき、慣習的な表記との対比によって慣習から逸脱した表記が特別な表現内容を持つと説明されている。しかし、反復法において同一の語句に異なる表記が選択された場合、ひとつのテキスト内で同一の語句に異なる表記を用いることそのものが慣習的な表記法からの逸脱であり、そこでは慣習的な表記／慣習から逸脱した表記という区別にかかわらず、それぞれの表記が特別な意味を持ちうる。

(1) ランボルギーニらんぼるぎーにランボルギーニ **Lamborghini** 男はバカだ（陣崎草子）

(1') ランボルギーニランボルギーニランボルギーニランボルギーニ男はバカだ

（発表者による一部改変）

(1) では、ランボルギーニというイタリアの高級スポーツカーの名前が、ひらがな、カタカナ、アルファベットで表記されている。この短歌において、ひらがなとカタカナの対比によって日本人の年少者と年長者の姿が立ち上る。それらとアルファベットの対比によって、日本的な発音に対する原語の発音が想起される。それによって、「年齢や国籍を問わずさまざまな男がランボルギーニを良い男の象徴であると思ひ込み、しきりにランボルギーニの話をしている。そんな男ばかりではかばかしい」という解釈が可能になる。(1a) のように「ランボルギーニ」の表記をすべてカタカナにしてしまった場合、特に「年齢や国籍を問わないさまざまな男」という表現内容を読み取ることは困難である(1) では、ひらがな、カタカナ、アルファベットいずれの表記も特別な表現内容を伝達しているといえる。

(2) 教える手おしえられる手が重なってここに確かに心臓がある（鈴木晴香）

(2) では、「教える」に漢字表記とひらがな表記が用いられることで、登場人物が2人であることが表現されている。「教える」は慣習的には漢字で表記されるが、この短歌においてもひらがな表記の「おしえる」のみが特別な表現内容を持つわけではない。漢字表記とひらがな表記の対比によって、2つの異なる表現内容を読み取ることができる。ひとつは、「教える」者が年長あるいはこの場面で知識や経験が豊富であり、「おしえられる」者が年少あるいはこの場面では知識や経験が少ないというものである。この解釈は、漢字には権威が伴っていたという歴史と、現代日本の国語教育ではまずひらがなを学習し、その後漢字を学ぶという現代日本人の共通認識に基づく。もうひとつは、「教える」者が男性であり「おしえられる」者が女性だということである。これは、漢字はかつて主に男性が用いていた文字であり、ひらがなは女性も読み書きできる文字として発展してきたという歴史的経緯から生

じたものである。「おしえる」におけるひらがなには、富樫（2021）の指摘にあるように、より年少あるいは未熟な者を表す機能がある。そして表記の対比によって、「教える」における漢字がより年長あるいは成熟した人物像を連想させる機能を持つようになっている。

(3) かえろうか（帰るわけには）そこは森、そして知らない花の花^{はなばな}晶（井上法子）

(4) 病院は白き匂いで満ちているヒトのにおいをかき消すために（二三川練）

(3) では丸括弧が使用され、「帰るわけには」は短歌内の語り手の内なる声であることが示されている。さらに、内なる声である「帰るわけには」が漢字表記されていることで、内なる声がより理性的であり、「かえろうか」と促す自身の感情を咎めているようなニュアンスが生じている。ここでは、漢字が理性を、ひらがなが感情を表す機能を果たし、表記の対立が語り手のなかの葛藤を効果的に表現している。

(4) では、「病院」という語から想起される消毒液などの人工的な「匂い」は漢字で、人間が発する生物的な生々しさを感じさせる「におい」はひらがなで表記されている。人工的な匂いと人間が自然に発する匂いの対比が表記によって示され、ここでは漢字が人工物を示す機能を、ひらがながそのもの本来の様子を示す機能を担っている。また、ここでの「ヒト」というカタカナ表記は、人間の生物的な側面を強調するものであり、ありのままの様子や叙情の側面との関係が深いひらがな表記の「におい」と結びつく。

4.2 特定のものと結びつくひらがな表記

今回の調査では、ひらがな表記が特定のものと結びつくと考えられる用例が見られた。

(5) きみが発音するああるぐれいほどアールグレイであるものはない（笹川諒）

(5') きみが発音するアールグレイほどアールグレイであるものはない

（発表者による一部改変）

(5) は、アールグレイという単語を「きみ」という特定の人物が発音した際の音声¹がひらがなで表記されている。「ああるぐれい」という表記は外来語をカタカナ表記するという慣習から逸脱し、それゆえに「きみ」の発音の固有性を強調している。(5') のように表記を改変した場合、アールグレイという単語を目にして想像する発音と「きみ」の発音に差はないように捉えられ、特定の「きみ」の発音という表現内容が捨象されてしまう。

(6) 初めての小籠包の食べ方を教えてくれた人になるひと（千原こはぎ）

(7) 国よりもきみが好きだよいつまでも君死にたまふことなかれ主義（水野葵以）

（筆者による一部改変）

(6) (7) においても、ひらがな表記の「ひと」「きみ」が特定の人物を指している。2.2 で

言及した加藤（2019）は、対象が特定される場合には「人」が、特定されない場合には「ひと」が用いられることを指摘しているが、今回の調査対象となった短歌では、加藤の指摘とは反対に、ひらがな表記が特定の人物を指すために用いられる傾向が見られた。

4.3 音声や文字を強調するひらがな表記

ここまで表記と表現内容の対比について例を挙げてきた。ここでは、実際の音声や意味との乖離を示すひらがな表記の例を挙げる。

- (8) 一念発起いちねんほっきと唱えつつ「ほっき」で体を起こす腹筋（西村曜）
- (9) 感覚的な人になりたくてまず辞書でかんかく-てきを引いている夜（上坂あゆ美）
- (10) ひかりながら死にたいという友達にあわせて君はしにたいと打つ（中家奈津子）

(8) では、反復された「いちねんほっき」がひらがな表記されることで、腹筋を繰り返す疲労が溜まるなかで、語り手の決意の表れである「一念発起」という四字熟語からその意味やそこに込められた決意が失われ、この四字熟語が単なる腹筋の掛け声になる様子が示されている。(9) では国語辞典の見出し語の表記がそのまま用いられ、(10) では「打つ」との共起によってスマートフォンなどの電子機器に文字をひらがなで打ち込んでいる様子が想起される。これらの例におけるひらがな表記は、ある語句の音声や文字の側面を強調するものであり、ある種メタ言語的な機能を持っていると考えられる。

5. おわりに

本発表は、現代短歌を資料とし、なかでも反復法が用いられかつ反復に異なる表記が選択された短歌の観察を通して、慣習から逸脱した表記における文字の修辭的機能の分析を試みた。今回の調査では、特にひらがなが持つ修辭的機能に言及する結果となった。今回は分析対象としなかった畳語の表記や、反復法以外の修辭技法と表記の関わりは今後の課題である。加えて今後は調査対象を広げ、文字の機能の体系化を目指したい。

参考文献

- 岩淵匡（1982）「片仮名の機能の歴史」『講座日本語学 6 現代表記との史的対照』p.112-134、明治書院
- 生沼義朗（2020）「表記という突破口」『歌壇』34（4）、pp.40,41、本阿弥書店
- 加藤祥（2019）「表記によって異なる語義を読み取るのか—多表記多義語実態調査の試み—」『ことばと文字』12、pp.86-94、くろしお出版
- 金水敏（2021）「近・現代小説の片仮名の用法一斑—村上春樹『海辺のカフカ』を中心に」加藤重弘・岡墻裕剛〔編〕『日本語文字論の挑戦—表記・文字・文献を考えるための17章』pp.26-58、勉誠出版
- 阪倉篤義（1988）「漢字と仮名の機能」佐藤喜代治〔編〕『漢字講座第4巻 漢字と仮名』pp.1-13、明治書院
- 富樫純一（2021）「役割語の先へ—役割語的表現への広がり—」『日本語学』40（1）、pp.26-36、明治書院
- 中村明（2007）『日本語の文体・レトリック辞典』東京堂出版
- 野村雅昭（1982）「漢字の機能の歴史」『講座日本語学 6 現代表記との史的対照』pp.135-158、明治書院
- 松田結貴（2021）「日本語の文字とポップカルチャー—文字が表現する多言語性について—」『日本語学』40（1）、pp.102-111、明治書院

資料

井上法子（2016）『永遠でないほうの火』書肆侃侃房
上坂あゆ美（2022）『老人ホームで死ぬほどモテたい』書肆侃侃房
笹川諒（2021）『水の聖歌隊』書肆侃侃房
陣崎草子（2013）『春戦争』書肆侃侃房
鈴木晴香（2016）『夜にあやまってくれ』書肆侃侃房
千原こはぎ（2018）『ちるとしふと』書肆侃侃房
中家菜津子（2015）『うずく、まる』書肆侃侃房
西村曜（2018）『コンビニに生まれかわってしまっても』書肆侃侃房
二三川練（2018）『惑星ジンタ』書肆侃侃房
水野葵以（2022）『ショート・ショート・ヘアー』書肆侃侃房

実例から見られる代行指示の「その」の四つの特殊タイプについて

鞠 恩^{きく おんとう} 彰（一橋大学大学院）

1. はじめに

「その」の文脈照応用法には、(1) と (2) で示す二種類説（田中 1981、庵 2019 など）と、天野（1993）を代表とする二種類廃棄説がある。本発表では、文脈指示の「この」と「その」の使い分けを検討する立場から、二種類説を採用する。便宜上、庵（2019）での名称「指定指示」と「代行指示」を用いることにする。しかし、実例観察のうち、「代行指示」の例はいつも先行研究で挙げられているような好都合¹なものだけではないことがわかった。そこで、実際の言語の使用場面（本発表では小説の地の文に限定する）では、「代行指示」の「その」は一体どのような形で現れるかという疑問が生じた。

- (1) 門の前に一人の男が立っていた。その男はわたしが出て行くと近づいてきた。
- (2) A くんが奥さんとわかれたという話はいろいろの人から聞いて知っていた。たまたま先日、A くんに会ったのできいてみたが、その理由はどうしても教えてくれなかった。(1) と (2) は田中 1981 より。引用に際して、前の実線を破線にした。)

この課題を解決するために、『夜のピクニック』（本文 450 ページ）という三人称小説を用い、地の文における文脈指示の「その」の全用例を抽出し、それぞれに「指定指示」もしくは「代行指示」のラベルを付けた。「指定指示」と「代行指示」の線引きは難しいところがあるが、筆者は先行研究に基づき、実例観察により得た知見と合わせて一定のルールで分類を試みた。その上で「代行指示」とラベル付けた例を詳しく分析し、先行研究では明確に指摘されていないものを抽出し、分類を試みた。

具体的には、(3) (4) (5) (6) で示す四つのタイプがあり、それぞれ、(T1) 先行文脈が意味する命題「により生じた」もの ((3))、(T2) 先行文脈にある述語（動詞、形容詞、名詞）の繰り返し ((4))、(T3) 「それらの」もの ((5))、(T4) 1 項名詞の「ラベル貼り」((6)) と便宜的に読んでおく。本発表では、この四つのタイプの特徴と、それらを別の小説からの実例での検証結果について論じる。

- (3) 後ろから思い切り肩をどつかれ、その痛みに多少腹を立てつつ振り返った融は、たった今自分がした予想通り、すっかり天気のことなど忘れてしまった。
(『夜のピクニック』: 6)
- (4) 融は一瞬躊躇した。母親が出るところを想像したのだ。その躊躇を、彼女は別の意味に取ったらしかった。(『夜のピクニック』: 227)
- (5) 昼は海の世界で、夜は陸の世界だ。融はそんなことを思った。そして、自分たちはまさにその境界線に座っている。(『夜のピクニック』: 119)
- (6) なんで？ 融が聞き返すと、杏奈は笑みを浮かべたまま答えた。だって、近くにいないければ、忘れられるのが当然でしょう。その口調にシビアなものを感じて、融は彼女の顔をじっと見ていた。(『夜のピクニック』: 89)

¹ ここでいう「好都合」とは、先行文脈には形の整った名詞句か文が容易に読み取れるもののことで、しかも、このような例はほとんどの場合、「その」＝「そのの」という形で解釈できる。先行するものがちゃんとした形で現れたため、「それ」の部分は何を指しているかも明確である。

2. 先行研究

2.1 田中 (1981) と庵 (2019)

「その」の文脈照応用法を二分類する先行研究として田中 (1981) と庵 (2019) を取り上げる。田中 (1981) は、指示詞の照応用法を「典型的照応」と「変則的照応」のようにわけた。前者を「照応 I 類」、後者を「照応 II 類」と呼んだ。I 類では照応関係が先行詞と照応詞の指示対象が同一であること、すなわち先行詞と照応詞が同一指示的 co-referential であることによって成立するのに対し、II 類では先行詞と照応詞が同一指示的であるほかに、聞き手の側にある種の意味論的知識が前提とされるという点にある、と指摘している。(1) と (2) はそれぞれ I 類と II 類の該当例だが、本発表では代行指示 (II 類) について詳しく論じるため、ここでは II 類の例を二個追加する。

(7) 事件が起こったのは午後三時のことである。しかし、九時現在、いまだその犯人はとらえられていない。

(8) この道をまっすぐ行くと郵便局があつて、そのとなりに交番がありますから、そこできいてください。

((7) と (8) は田中 1981 より。引用に際して、前の実線を破線にした。)

庵 (2019) では、「この」と「その」には指定指示と代行指示という二つの用法があると指摘し、指定指示と代行指示について、指定指示は「この/その/ゼロ+NP」全体で先行詞と照応する場合で、代行指示は「この/その/ゼロ+NP」の中の「こ/そ」の部分だけが先行詞と照応する、のように解釈している。

(9) 先日銀座ですしを食べた。{この/その/φ}すしはおいしかった。(指定指示)

(10) 先日銀座ですしを食べた。{この/その/φ}味はなかなか良かった。(代行指示)

(庵 2019 : 141)

また、指定指示と代行指示の違いの由来を説明するため、統語論的な観点から、(指示詞に後続する) 名詞を「1 項名詞」と「0 項名詞」のように分類している。(9) にある照応詞の「すし」は「0 項名詞」であり、(10) にある照応詞の「味」は「1 項名詞」である。後続詞が「1 項名詞」の場合、限定詞の「その」は「代行指示」の用法がデフォルトで、「指定指示」として認定されるのは個人の解釈レベルの問題だと指摘している。

2.2 天野 (1993)

「その」の文脈指示用法を二分類する田中 (1981) と庵 (2019) とは反対に、天野 (1993) は自然な言語理解の面から、実際の言語使用の際には、「その」は指定指示であろうと、代行指示であろうと、話し手 (書き手) の伝えたい意味は、聞き手 (読み手) に伝わっているし、そもそも両者の判別が困難な例も存在しているため、「指定指示」と「代行指示」を区別する必要がないと主張している²。例えば、

(11) 兼子がすすり泣くと、弥生は、祖母を、固く抱き寄せた。晴美と、ホームズは、じっとその光景を眺めていた…。(三毛)

(12) 梶原はかすかに口をとがらせる。その様子は、奈々子が初めて目にするものであつ

² 天野 (1993) では、田中 (1981) での名称「照応の I 類」と「照応の II 類」を用い、それは庵 (2019) でいう「指定指示」と「代行指示」と大体同じ用法である。本発表では庵 (2019) の用語を採用する。

た。(戦争)

- (13) 母の日。佐藤由祈子ちゃんと、東京のファン箕輪君より、カーネーションを贈られる。子供のいない私にとって、そのやさしい心遣いはひどく身に沁みる。(北国)

((11) (12) (13) は天野 1993 より。引用に際して、二重線を単線にした。破線は筆者より。)

(11) (12) は、あるコトガラに当然付随することが推測されるモノの一つとして、そのコトガラの様態を表す名詞が「ソノ」の後続の名詞となっていると見れば、II 類(代行)の照応ということになる。一方、あるコトガラ全体を、様態の面で要約して表していると考えれば、I 類(指定)の用法ということになると、解釈している(天野 1993 : 756)。

(13) も同様に、「佐藤由祈子と箕輪君が母の日にカーネーションを贈ってくれる」という部分を「やさしい心遣い」で言い換える照応の I 類(指定指示)と、「佐藤由祈子・箕輪君」の「やさしい心遣い」という照応の II 類(代行指示)と、両方の解釈は可能である。

3. 調査方法と結果

『夜のピクニック』(本文 450 ページ) という三人称小説を用い、地の文における文脈指示の「その」の全用例(113 個)を抽出し、先行するものは名詞句(43 個)と文(70 個)のように分けて、それぞれに「指定指示」もしくは「代行指示」のラベルを付けた。先行するものが名詞句の代行指示である例は 12 個あり、それらは a 類「N1→その N2」、b 類「N1→その+修飾成分+N2」、c 類「修飾成分+N1→その N2」という三つのタイプに分けられる³。本発表では(3)(4)(5)(6)で示した、先行するものが文の代行指示である特殊なタイプについて詳しく論じる。先行するものが文の代行指示である例は 26 個ある。

(2) のような典型的な例(6 個)を除いて、残りの 20 個の例は四つのタイプに分けられる。

- (14) 一面のススキ。どことなく空に滲んだ、遠い記憶を騒がすような風景。

その風景を見ながら、融も榊杏奈のことを考えていた。

(『夜のピクニック』: 88)

- (15) 二十メートルほど先の三叉路の脇に白い RV 車が停まていてその天井に広げた毛布の上で、野球帽をかぶった少年が大きく手を振っていた。

(『夜のピクニック』: 371)

- (16) 一年生の女子に暑さで貧血を起こした生徒がいて、本日最初の救護バスの乗客が出た。

その噂は、あつというまに列の後ろまで伝わっていった。(『夜のピクニック』: 53)

- (17) 忍が密かな愛校心を吐露したのと違って、融の感情は複雑だった。もちろん高校生活は楽しかったが、先を急いでいる彼にとって、この二年半は、じりじりとしか

³ 実は「修飾成分+N1」→「その+修飾成分+N2」のような例も存在しているが、ここでは一例を提示する。ただ、このようなタイプはとてもまれで、しかも「代行指示」の読みは「N1→その+修飾成分+N2」とほとんど一緒のため、単独のタイプに入れないことにする。

例: 「でも、うーん好きになって、流されちゃうほど好きになれる相手にこの歳であうっていうのも、ちょっと懂れるな。実際問題としては、傷つくのは女の子の方だから、凄く大変なことだけ」千秋が例によってふわりとした口調で続けた。

ふと、貴子は彼女の顔を見た。

のっぼの千秋は、ちょっと見上げるようになる。その優しい柔らかな表情を見た時、千秋にはいるんだな、と思った。(『夜のピクニック』: 80)

進まない、まどろっこしい歳月だった。早く大学へ。早く就職して会社へ。早く独立して自分だけの世界へ。融はいつも先を望んでいた。その理由が母親と二人きりの窮屈な家庭環境にあることは自分でも承知していた。（『夜のピクニック』：25）

(14)と(15)は、それぞれ先行するものが名詞句の「指定指示」と「代行指示」の例であり、(16)と(17)は、それぞれ先行するものが文の「指定指示」と「代行指示」の例である。また、ここで挙げた(15)と(17)は典型的な「代行指示」の例であり、つまり、(15)の「その天井」は「それ（＝白いRV車）の天井」、(17)の「その理由」は「それ（＝早く大学へ。早く就職して会社へ。早く独立して自分だけの世界へ。融はいつも先を望んでいた。）の理由」という解釈で済む。本発表では、先行するものが名詞句の場合の代行指示については深く検討しないが、以下では具体例とその分類だけ提示する。

- (15) 二十メートルほど先の三叉路の脇に白いRV車が停まていてその天井に広げた毛布の上で、野球帽をかぶった少年が大きく手を振っていた。

（『夜のピクニック』：371）

- (18) 「よかった、もう会えないかと思っちゃった」

内堀亮子は、勝ち誇ったような声で言った。

その嬉しそうな顔を見て、融は悪態をつきたくなるのを必死に我慢した。

（『夜のピクニック』：403）

- (19) 貴子は前を歩く融と忍に目をやった。

楽しげに話している融の横顔が見える。

美和子に言われたせいかもしれないが、確かにその目は和やかになっていた。リラックスしているのか、気が晴れたのか、彼を覆っていたびりびりしたものがすっかり消えているように思えた。気の持ちようとは不思議なものだ。

（『夜のピクニック』：436）

『夜のピクニック』から得られた先行するものが名詞句の代行指示の例は、主に三つのタイプに分けられる。a類「N1→そのN2」（例(15)）は、その中でいちばん典型的なもので、b類「N1→その＋修飾成分＋N2」（例(18)）は「N1→そのN2」と比べて、N1が先行文脈で述べられている情報に依存する色彩が強くなる。つまり、(18)の「その嬉しそうな顔」は「内堀亮子の顔」より、「勝ち誇ったような声で「よかった、もう会えないと思っちゃった」と言った内堀亮子の顔」という解釈がより相応しい。当然、(15)も、「二十メートルほど先の三叉路の脇に停まっている白いRV車の天井」という解釈も可能だが、(18)と比べると、その必要性がかなり低くなるだろう。c類「修飾成分＋N1→そのN2」（例(19)）は「N1→その＋修飾成分＋N2」（例(18)）と同じく、N2と照応しているのは、純粋なN1より、先行文脈より提示された情報に依存しているN1のほうが解釈されやすい。

次は、先行するものが文の場合の代行指示について述べる。2.1節で述べたように、先行研究で挙げられた代行指示の例は、全て(2)「Aくんと奥さんと分かれた…その理由」、(7)「事件…その犯人」、(8)「郵便局…そのとなり」、(10)「すし…その味」、のような好都合なものだが、事例観察においては、先行する文は非言い切りだったり、「そのN2」を「それ（＝先行する文が意味する命題）のN2」で言い換えにくい例も少ないながらも存在している。『夜のピクニック』の例を用い、これらの例を再分類してみた。(3)、(4)、(5)、(6)を代表として、四つのタイプに分けている。以下では(3)、(4)、(5)、(6)を再掲する。

- (3) 後ろから思い切り肩をどつかれ、その痛みに多少腹を立てつつ振り返った融は、たった今自分がした予想通り、すっかり天気のことなど忘れてしまった。

(『夜のピクニック』: 6)

- (4) 融は一瞬躊躇した。母親が出るところを想像したのだ。その躊躇を、彼女は別の意味に取ったらしかった。(『夜のピクニック』: 227)
- (5) 昼は海の世界で、夜は陸の世界だ。融はそんなことを思った。そして、自分たちはまさにその境界線に座っている。(『夜のピクニック』: 119)
- (6) なんで？ 融が聞き返すと、杏奈は笑みを浮かべたまま答えた。だって、近くにいなければ、忘られるのが当然でしょう。その口調にシビアなものを感じて、融は彼女の顔をじっと見ていた。(『夜のピクニック』: 89)

(3)の「その痛み」は、先行する「後ろから思い切り肩をどつかれ(た/ている)」という部分が意味する命題「ノ」痛みではなく、むしろ、命題「により生じた」痛みであり、このように解釈できるタイプの例は、わずかではあるが観察される。便宜上(T1)「先行文脈が意味する命題「により生じた」もの」、と読んでおこう。以下『マチネの終わりに』から、このタイプの例を三つ挙げる。統計はとっていないが、筆者これまでの観察では、このタイプは、本発表で論じる四つの特殊タイプの中、一番多いように見られる。

- (20) 洋子は、なぜかそれを軽く受け流すように、
「それじゃあ、今日は、立派に“闘牛場の観衆”に耐えてみせたんですね。」と、彼の目を数秒間見つめた。

蒔野は、その問いかけるような、それでいて、既に彼を十分に理解しているようなふしぎな眼差しに、それまでの社交的な笑顔を、つい落っことしてしまった。

(『マチネの終わりに』: 19)

- (21) 蒔野は、しばらく無言で彼女の目を見ていた。そして、通行人にぶつかりそうになった彼女を手で庇うと、雑居ビルの入口の小脇に場所を見つけて、改めて向かい合った。咄嗟に二の腕を掴んだのだったが、コート越しのその触感が、意外な柔らかさで、彼を少し戸惑わせた。(『マチネの終わりに』: 39)

- (22) 車で目的地へと直行する途中で、車窓から、瓦礫の山や弾痕だらけの壁を眺める。行政サービスの多くが停止しているのに、溢れ出したゴミを、みんな通りで焼いている。その臭いから、何とか生活の実感を掴もうとする。

(『マチネの終わりに』: 63)

(4)の「その躊躇」も同じく、先行する「融は一瞬躊躇した」という部分が意味する命題を「それ」で言い換えると、「その躊躇」は「それ(＝融は一瞬躊躇した)の躊躇」となってしまう、意味解釈が不明瞭になる。実は、(4)も(T1)に属するものだが、ただ、このような照応詞は先行文脈にある述語の繰り返しや、同義語のケースはかなり見られたため、一つ独立なタイプに分けた。仮に、(T2)「先行文脈にある述語(動詞、形容詞、名詞)の繰り返し」と読んでおこう。以下(T2)の例をさらに三つ挙げておく。

- (23) 「やっぱ、自分のことっていうのは分からないもんだな」
「だな」

二人は実感を込めて頷きあい、沈黙して足元を見つめて歩き続けた。

けれど、その沈黙はいつになく雄弁で、親密で、ちょっと暖かい感じがした。

(『夜のピクニック』: 199)

- (24) 世界は少しずつ色彩を失い、波の音はいよいよ大きく、神経を逆撫でするように押し寄せてくる。みんなの不安と不機嫌さが殺気のように空中に漂い、じわじわと重くのしかかってくる。その重さにもうこれ以上耐えられない、と思った時、今や懐かしく感じるほどありがたい笛の音が鳴った。(『夜のピクニック』: 118)

- (25) 千秋と梨香がそう話しているのを聞くと、貴子はなんだか急に不安な心地になった。...

その不安に一人、闇の中で動揺する。(『夜のピクニック』: 215)

また、この (T2) は、『夜のピクニック』の中でよく見かけるが、他の小説では、それほどよく見られないものとなる。そのため、(T2) はおそらく一種の個人的な癖のような使い方の可能性が高い。

次は (5) の「その境界線」だが、これはかなり稀なタイプで、普通、先行文脈にある二つ以上の先行詞があって、「それらのN2」というようなものである。(5) で言えば、「その境界線」は先行する「昼は海の世界で、夜は陸の世界だ。」という部分に現れた「海」と「陸」の「境界線」(「昼」と「夜」の「境界線」という読み、また、この二種類の「境界線」という読みも可能) となり、先行研究で指摘されている「それの」という解釈は「それ」の部分が認定しにくいため、このような例を (T3) 「それらの」ものと読んでおくことにする。

最後に (6) の「その口調」だが、これは、先行研究では後続詞(「口調」)が「1 項名詞」であるため、「代行指示」としての認識はデフォルトで、解釈の面では人により「指定指示」としての認定も可能だというケースである。筆者の観察では、このような後続詞が「1 項名詞」であるにもかかわらず、先行文脈にはそれと相応をなしている明確な文が存在する事例は多く存在しているため、このような場合、やはり、「1 項名詞」の部分は単なる「ラベル」として、先行するものを要約するという形の「指定指示」として認定しやいと思われる。ただし、筆者は後続詞が「1 項名詞」の場合、デフォルトの認識は「代行指示」だという主張に同意するため、このような例を特殊例として取り上げ、仮に (T4) 「1 項名詞の「ラベル貼り」」と呼んでおく。なお、紙幅の都合により、(T3)、(T4) の具体例は割愛する。

4. まとめと今後の課題

本発表では、「代行指示」の特殊例を四つのタイプに分けることを試みた。その中、(T1) と (T4) は実例観察の内よく見られ、(T2) は個人差が見られ、(T3) は稀である。今後の課題としては、(T2) は他の小説において、どれくらい見られるかを検証していく。

参考文献：

天野みどり (1993) 「文脈照応「その」の名詞句解釈に果たす役割」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂

庵功雄 (2019) 『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』ひつじ書房

田中望 (1981) 「『コソア』をめぐる諸問題」『日本語の指示詞』国立国語研究所

書誌情報：

恩田陸. 2004. 『夜のピクニック』東京：新潮社

平野啓一郎. 2016. 『マチネの終わりに』東京：文藝春秋

日本語学会 2024 年度秋季大会 ワークショップ

帝国議会議事速記録のコーパス構築に向けた

翻刻・文字起こし支援システムの開発

いとう たかゆき 伊藤 孝行* やました ともひさ 山下 倫央* よこやま そういちろう 横山 想一郎* かわむら ひでのり 川村 秀憲*
きたの ゆうた 北野 勇太** ひらま ゆうだい 平間 友大*** おぎそ としのぶ 小木曾 智信****

*北海道大学 **北海道大学学生 ***平間 AI ラボ ****国立国語研究所

本ワークショップの主旨

いとう たかゆき 伊藤 孝行（北海道大学）

本ワークショップでは 1890 年から 1947 年までに作成・公開された帝国議会議事速記録のコーパス構築に向けた文理協働型研究プロジェクトを紹介し、下記の内容を話題提供する。帝国議会議事速記録テキスト化の経緯、帝国議会議事速記録翻刻・文字起こし支援システム開発にかかる報告および分析結果の報告を通じ、近代語資料として帝国議会議事速記録の持つ可能性について参加者のみなさまと情報共有・意見交換を行いたい。

- 帝国議会議事速記録のコーパス構築に向けたプロジェクトの紹介
- 帝国議会議事速記録翻刻・文字起こし支援システムにかかる概要
- 帝国議会議事速記録翻刻・文字起こし支援システムの紹介
- 帝国議会議事速記録翻刻・文字起こし支援システムを用いた分析結果の報告

謝辞

本研究は、科学研究費基盤研究（B）23K25329「帝国議会議事速記録のコーパス化とテキストマイニングによる近代日本語史の解明」¹の成果の一部である。

帝国議会議事速記録のコーパス構築に向けたプロジェクトの紹介

いとう たかゆき 伊藤 孝行（北海道大学）、おぎそ としのぶ 小木曾 智信（国立国語研究所）

1. プロジェクトの概要

話題提供者らは『帝国議会議事速記録集』（1890-1947 年）を資料とし、国立国会図書館が 2022 年 4 月に公開した OCR（光学的文字認識）処理プログラム（以降、NDLOCR）²によ

¹ <https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-23K25329/>（参照 2024-09-16）

² https://github.com/ndl-lab/ndlocr_cli（参照 2024-09-16）

る認識結果を援用し、『日本語歴史コーパス明治・大正編』（以降、CHJ）³を増強・補完するコーパスの作成・一般公開を目指している。また、作成したコーパスを使用し、テキストマイニングを用いることでこれまで明らかにされてこなかった明治～戦中期の言語変化を解明し、現代語の形成過程の解明につながる知見を抽出することを目指している。

2. 言語資料としての帝国議会議事速記録

帝国議会議事速記録は 1890 年から 1947 年まで 57 年間にわたる発言記録であり量的に申し分ない。帝国議会議事速記録を公開してきた官報の体裁は時期によって段組の段数に違いはあるもののほぼ決まった形である。また、訓練を受けた速記士による記録であり、開催年月日・開会時間・閉会時間・発言者・発言者以外による不規則発言まで適宜記載されており質的にもじゅうぶんである。帝国議会議事速記録を言語資料として扱う際留意すべき点⁴はさまざまあるものの、CHJ を念頭においたコーパス作成に値する一級の近代～現代語資料と言える。現在、帝国議会議事速記録は国立国会図書館から公開されている「帝国議会議事録検索システム⁵」により閲覧可能である。長らく一部を除き画像 pdf による公開であったため帝国議会議事速記録の発言部分の検索性にやや難がある状態が続いていたが、2024 年 8 月 23 日、1890 年 11 月～1945 年 8 月の本会議・委員会の速記録のテキストデータが公開された⁶。これにより 1890 年から 1947 年まで 57 年間にわたる発言を検索することが可能となった。すでに公開されている「国会議事録検索システム⁷」とつなげれば 134 年(2024 年現在)にわたる調査が可能となった。長期・一定・高品質という特徴をもつ帝国議会議事速記録もまた今後なじみのある資料となってゆくことは言を俟たない。

明治～戦中期の言語変化を解明し、現代語の形成過程の解明につながる知見を得るためには帝国議会議事速記録本文への検索性をさらに高め、CHJ を増強すべくコーパス化することが課題である。

3. CHJ「明治・大正編」と帝国議会議事速記録

現在、CHJ では「明治・大正編」として下記の資料群を公開している。

³ https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html (参照 2024-09-16)

公開されている『日本語歴史コーパス』バージョン 2024. 03 によると、明治・大正編の語数は短単位 1673. 9 万語。

⁴ 帝国議会議事速記録を主な言語資料として使用した先行研究に下記がある。「一 資料の検討」に帝国議会議事速記録を言語資料として扱う際の留意点が言及されている。「帝国議会議事録検索システム」の検索性が劇的に高まった現在、確認しておきたい。

諸星美智直 (1985) 「国語資料としての帝国議会議事速記録―当為表現の場合」、『国学院大学大学院紀要―文学研究科―』(17)、pp. 217-251、<https://doi.org/10.11501/4422018> (参照 2024-09-16)

*国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能 (要ユーザー登録。送信サービスで閲覧可能)。

また、帝国議会議事速記録等について網羅的かつ詳細にまとめられている先行研究に下記がある。こちらも「帝国議会議事録検索システム」の検索性が劇的に高まった現在、確認しておきたい。

葦名ふみ (2013) 「『国会議事録』前史：帝国議会議事録・委員会の議事録・速記録・決議録の成立と展開 (資料)」、『レファレンス』(744)、pp. 53-83、<https://doi.org/10.11501/6019127> (参照 2024-09-16)

*国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能 (ログインなしで閲覧可能)。

⁵ <https://teikokugikai-i.ndl.go.jp/#/> (参照 2024-09-16)

⁶ https://ndl.go.jp/jp/news/fy2024/240823_01.html (参照 2024-09-16)

⁷ <https://kokkai.ndl.go.jp/#/> (参照 2024-09-16)

- ・ **I 雑誌**：明六雑誌・東洋学芸雑誌・国民之友・太陽・女性雑誌 3 種、計 1418 万短単位
- ・ **II 教科書**：国定読本・明治初期理科教科書・布哇日本語教科書、計 105.8 万短単位
- ・ **III 明治初期口語資料**：啓蒙書 9 資料・安愚楽鍋・春秋雑誌会話篇、計 21.1 万短単位
- ・ **IV 近代小説**：小説 21 作品、計 77.9 万短単位
- ・ **V 新聞**：読売新聞、計 40.7 万単位
- ・ **VI 落語 SP 盤**：東京 76 作品、大坂 51 作品、計 10.4 万短単位

これらの資料群と比較したとき、帝国議会議事速記録は当時の実際の発話をもとにした資料として高い価値をもっている。一つ目は当時の口頭語を反映した資料としての価値である。圧倒的に文語資料が多いなか、CHJ では口頭語を反映した資料として「明治初期口語資料」や「落語 SP 盤」、会話文を含む「近代小説」などを積極的にコーパスに収録してきたが、いまだ談話資料が大きく欠けている。この点、帝国議会議事速記録は、発話者・発話の日時・場所までが明確な資料である点で価値が高い。また発話者が政治家であるため、年齢や出身地、履歴までを追うことが可能であり、話者情報を活用した研究も期待できる。二つ目は、そのテキスト量と時代の幅である。コーパスを活用した研究では言うまでもなく、テキスト量が極めて重要である。帝国議会議事速記録は、比較的均質な内容の大量のテキストが半世紀以上にわたって記録されていることから、近年盛んになってきた自然言語処理技術を活用した言語変化の研究資料としても活用可能であると思われる。

一方、この資料をコーパス化することを考えたときには課題もある。最大のものはテキスト化の精度である。NDLOCR⁸によって大幅に精度が向上したものの、現状ではこの時代のテキストの OCR 精度は不十分であり、コーパスとして利用できる程度まで校正を行うには多くのコストを要する。全データに高精度の校正を施すことは難しく、一部のデータに限りてコアデータとして高精度化する方法をとる必要がある。一方、テキストの整備さえ済めば形態素解析については比較的解析しやすいテキストでもある。談話資料ゆえに語彙は比較的限られており、文法的にも困難が少ない。試行結果から見ても、これまでに開発してきた旧仮名口語 UniDic⁹等を活用することで十分に対応可能だと思われる。ただし、テキストにおけるエラーは当然解析結果にも影響することから全データに対して高い精度を保証することは困難である。

最後に、将来的に帝国議会議事速記録を CHJ に収録する際の公開形態について触れておく。国語研「通時コーパス」プロジェクトでは、現在公開中の CHJ に加えて、国語研以外で作成されたデータを受け入れて公開する OpenCHJ という構想を進めている。本資料はよりオープンな、しかし限定的な付加情報をもったコーパスとして、後者の形態で公開することも検討している。

⁸ https://github.com/ndl-lab/ndlocr_cli (参照 2024-09-16)

⁹ https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/back_number.html#unidic_qkana (参照 2024-09-16)

帝国議会議事速記録翻刻・文字起こし支援システムの概要

やました ともひさ
山下 倫央（北海道大学）

1. テキストマイニングまでの道のり

本章では、帝国議会議事速記録にテキストマイニングを適用するために必要な処理を説明して、我々が開発する帝国議会議事速記録翻刻・文字起こし支援システム「ハルニレ」の位置づけを説明する。また、2024 年 8 月に公開された帝国議会議事速記録の全文のテキストデータに対するハルニレの新たな利用方法を説明する。

2. 帝国議会議事速記録の分析手順

各ページが画像化されて PDF ファイルで公開されている帝国議会議事速記録に対してテキストマイニングを行うまでの分析手順の概要を説明する。図 1 には帝国議会議事速記録の PDF データに対する処理の概要が示されている。最初に、議事速記録の 1 ページ分の PDF ファイルに対してテキスト化処理を行い、速記録本文や見出しといった各部分が分かれたテキストが得られる。次にこのテキストに対してコーパス化を行い、形態素解析の適用や、議会参加者の氏名や専門用語にアノテーションの付与をおこない、コーパスが得られる。最後に、コーパスに対して、言語変化や語彙の使用頻度を解析するテキストマイニングを適用する。我々が開発する帝国議会議事速記録翻刻・文字起こし支援システム「ハルニレ」は複数のオペレータがテキスト化処理におけるテキストの整形・修正作業とコーパス化処理におけるメタデータの付与作業の効率的に行うためのツールである。

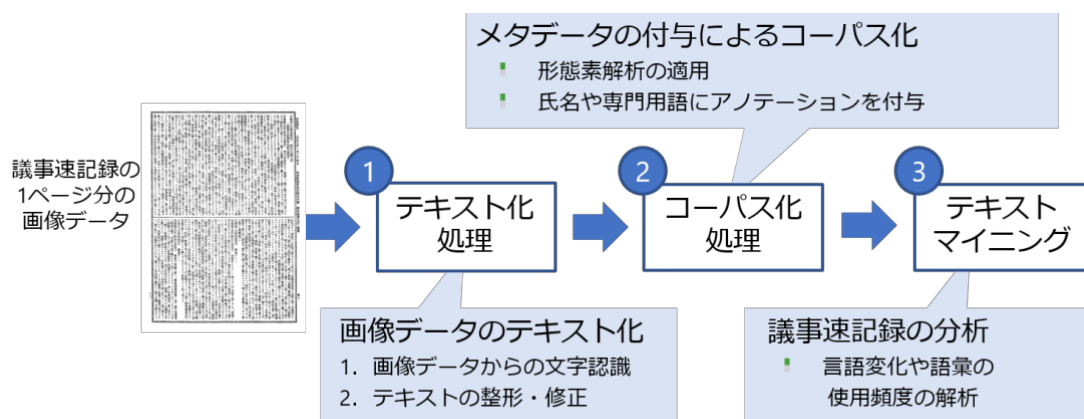


図1 帝国議会議事速記録の PDF データに対する処理の流れ

従来研究における翻刻や文字起こしを支援するシステムとして、みんなで翻刻¹が挙げられる。みんなで翻刻とハルニレの違いとしては、翻刻の作業者の管理が挙げられる。みんなで翻刻ではだれでも翻刻に参加可能な運用を行っている。一方、ハルニレでは、管理者が複

¹ <https://honkoku.org/>（参照 2024-09-13）

数の作業者に翻刻の範囲を指定して、翻刻作業を分担させるという運用を行っている。

3. テキスト化における NDLOCR とハルニレの利用

画像データのテキスト化では、画像データからの文字認識として、PDF 形式の帝国議会議事速記録のレイアウトに基づいて画像データを各行に対応する矩形に分割して、各行の矩形ごとに OCR でテキスト化する。各行の矩形への分割処理と矩形ごとの文字認識には、国立国会図書館が公開している NDLOCR²の利用を想定している。NDLOCR のテキスト化の精度に関しては「帝国議会議事速記録に対する光学文字認識プログラム NDLOCR の適用」（横山）で説明する。各行のテキスト化の後には、テキスト化した結果の整形・修正が必要である。画像ファイルを各行に分割した後にテキスト化する場合、各矩形の順序、途中で挟まれる見出しや注釈への属性の付与、OCR での矩形認識の抽出漏れや誤認識の修正を行う必要がある。我々はこれらの整形・修正作業の支援システムとしてハルニレを開発した。ハルニレを利用することで、テキスト化とコーパス化の作業効率の向上が期待される。ハルニレの持つ機能の詳細を「帝国議会議事速記録翻刻・文字起こし支援システムの紹介」（平間）で紹介する。

4. コーパス化におけるハルニレの利用

メタデータの付与によるコーパス化として、形態素解析として旧仮名口語 UniDic³を適用した MeCab を利用する。現状では形態素解析の精度の検証や形態素解析の誤認識の修正は行っていないため、今後の課題となっている。

5. テキストマイニングの適用

本研究におけるテキスト化およびコーパス化したデータに対するテキストマイニングの適用事例として、2024 年 8 月に公開された帝国議会議事速記録の全文に対して、可能表現の言語変化や使用頻度の解析結果を「帝国議会議事速記録の公開データを用いた可能表現の頻度分析」（北野）で紹介する。

6. 全文公開後のハルニレの利用方法

2024 年 8 月に公開された帝国議会議事速記録のテキストデータに対する対応について説明する。本研究の開始当初の 2021 年には帝国議会議事速記録のテキストデータで公開されておらず、NDLOCR とハルニレを用いた全文のテキスト化とコーパス化を進める方針を定めていた。しかし、帝国議会議事速記録のテキストデータが公開されたため、この方針を変更して、公開されたテキストデータを対象として誤認識結果の修正やコーパス化処理をおこなう。公開されたテキストデータには原文の各ページの PDF ファイルに含まれる速記録の各行の矩形との対応するデータがないため、PDF ファイルに NDLOCR を適用した後、その出力結果と公開されたデータをマッチングして、NDLOCR の認識結果をマッチングした公開テキストに差し替える。この差し替えの結果、ハルニレ上ではこれまでと同様に、各行の矩形画像とその画像に対応する公開されたテキストが表示され、修正することが可能となる。

² https://github.com/ndl-lab/ndlocr_cli（参照 2024-09-13）

³ https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/back_number.html#unidic_qkana（参照 2024-09-13）

帝国議会議事速記録に対する光学文字認識プログラム NDLOCR の適用

よこやま そういちろう
横山 想一郎（北海道大学）

1. はじめに

本稿では、文書画像データからテキストデータへの自動変換を行う光学文字認識（OCR）プログラム NDLOCR を帝国議会議事速記録に適用し、変換の精度を検証する。翻刻・文字起こし支援システムは、OCR による認識結果から、誤りのある部分のみを手作業で修正することで作業効率の改善を図るため、OCR の精度は有効性に大きな影響を及ぼす。

2. 光学文字認識プログラム NDLOCR

NDLOCR は、2022 年 4 月 25 日に国立国会図書館より公開された日本語の OCR プログラムである¹。次の連続した 4 つの処理により、図 1 の通り文書画像データをテキスト化する。

- (1) 見開きの状態で撮影された文書画像データの左右ページへの分割
- (2) 文書の撮影にあたり発生する傾きの補正
- (3) 文章画像中に出現する一行ごとの文字列領域の特定
- (4) 文章画像中の各領域に対する文字列のテキスト化

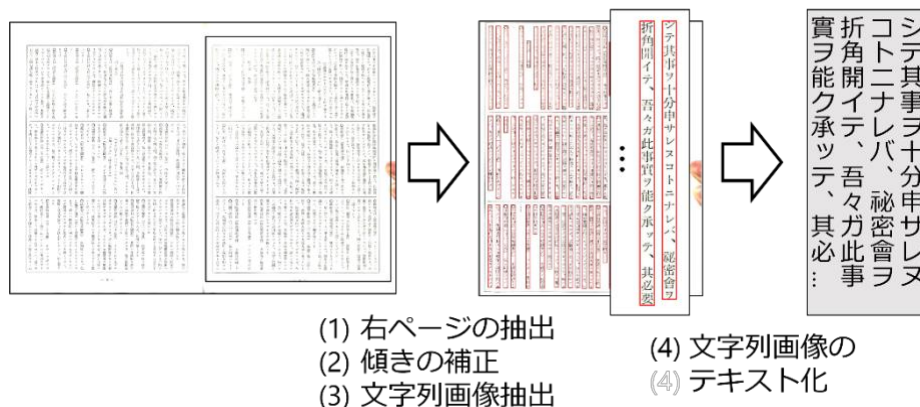


図 1 NDLOCR による光学文字認識の処理の概要図

3. NDLOCR の精度検証の方法

帝国議会議事速記録の文書画像データに NDLOCR を適用し、得られたテキストデータを文字起こし済みのテキストデータと比較する。手作業による文字起こしと検証が完了したテキストデータが入手可能な帝国議会議事速記録の文書画像データとして、文書(a) 第 91 回帝国議会衆議院本会議第 3 号 5 ページ目、および、文書(b) 第 13 回帝国議会全院委員会明治 32 年度予算案 2 ページ目のデータを用いる。文書(a)については、国立国会図書館が公

¹ https://github.com/ndl-lab/ndlocr_cli（参照 2024-09-13）

開するテキストデータを用い²、文書(b)は本プロジェクトにおいて独自に文字起こしが行われたデータを利用する。本稿では NDLOCR における処理(3)、(4)に着目し、文字列行の検出の成否を確認し、文字列行ごとのテキスト化結果と文字起こし済みデータと比較する。

4. NDLOCR の精度検証の結果

処理(3)一行ごとの文字列領域の特定について、(a)においては 166 行すべてが正しく検出された。(b)においては、84 行のうち 2 行が検出されず、残る 82 行すべてが正しく検出された。検出されなかった行の拡大図を図 2 に示す。画像の白飛びによるものと考えられ、撮影条件を整備することで十分な精度が見込まれる。

処理(4)文字列行のテキスト化について、文章画像データに現れる歴史的仮名遣いが現代仮名遣いに改めて文字起こしされたことによる表記ゆれや、比較対象のテキストデータを作成する際の文字起こしの誤りにより、正しく認識されているにも関わらずテキスト化結果が一致しない場合がみられた。これらの誤りを正解とみなし、1 文字以上の誤認識が発生した行の割合を表 1 に示す。文書(a)においては人名の誤りが誤認識の多くを占め、議員名簿などを用いた補正により精度が向上することが期待でき、文書(b)は、81%の行において正しく認識され、支援システムにおける文字起こし作業時間の短縮に貢献可能といえる。

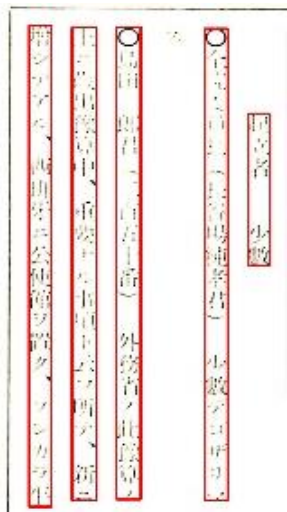


図 2 検出に失敗した文字列行の拡大図

表 1 NDLOCR における文字列行のテキスト化結果

	(a)		(b)	
	行数	(割合)	行数	(割合)
正解行	105	(63.3%)	67	(81.7%)
全文字が一致	95	(57.2%)	37	(45.1%)
表記ゆれ	9	(5.4%)	25	(30.5%)
文字起こし誤り	1	(0.6%)	5	(6.1%)
誤認識行	61	(36.7%)	15	(18.3%)
人名の誤り	45	(27.7%)	2	(2.4%)
漢字の誤り	27	(16.3%)	7	(8.5%)
かなの誤り	10	(6.0%)	5	(6.1%)
記号の誤り	8	(4.8%)	1	(1.2%)

5. おわりに

NDLOCR を帝国議会議事速記録の文書画像データに適用し、その精度を示した。議事速記録の性質を踏まえた議員名簿などによる自動補正手法の開発により、翻刻・文字起こし支援システムでの利用において十分な精度が見込まれる。

² <https://teikokugikai-i.ndl.go.jp/#/> (参照 2024-09-13)

帝国議会議事速記録翻刻・文字起こし支援システムの紹介

ひら ま ゆうだい
平間友大（平間 AI ラボ）

1. ハルニレの機能紹介

ハルニレはNDLOCR¹の認識結果を基に複数のオペレーターによる修正作業を行うことができるオンライン上のシステムである。修正作業は各オペレーターの PC 上のブラウザで行うシステムとなっている。文字起こしは文字・属性・順序の3つの作業区分に分割されており、オペレーターの活動を管理する機能も提供している。

本稿は帝国議会議事速記録²を対象としたハルニレの機能紹介と、ハルニレ使用時の作業ログから作業時間の分析を行った。対象のデータは PDF ファイルで公開されており、スクレイピングによるデータ収集と画像データへの変換、及び NDLOCR の文字認識結果をシステム内データベースに保管し、適宜ユーザーに提供する形式となっている。

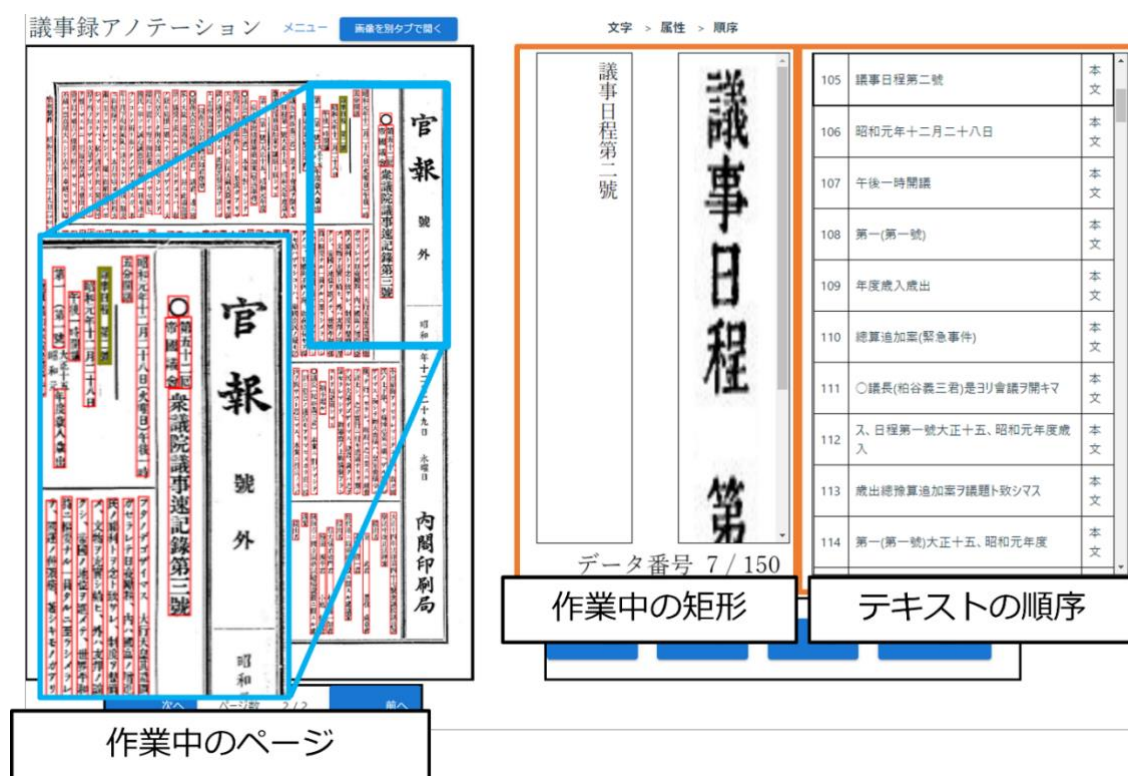


図 1 文字修正画面

文字修正機能

本機能は NDLOCR による認識結果の間違いを確認し、オペレーターが修正を行うための画面を持つ（図1）。また、抽出できなかった文字領域やノイズ領域を追加・削除できる機能も提供している。速記録は縦書きで記述されており、一般的なテキスト入力アプリケーションは横書きが主であったため、人間が対象の文章と入力を見比べる際非常に非効率であっ

た。そこで縦書きに合わせた入力画面と対象文章の拡大した領域を横に並べて作業の効率化を図っている。また、文章の順序や属性など全体を確認する際は表で見るなど用途を考慮した表示方法をとっている。

属性修正機能

本機能は各文章に必ず一つ割り振られるメタ情報である属性を修正するものである（図2：上）。属性とは、「本文」「課題」「ページ番号」「不明」「その他1～3」のカテゴリであり、テキストデータに属性を付与することで不必要なテキストをフィルタリングし特定の情報を取捨選択することができる。ハルニレはNDLOCで「本文」属性と推定されたものとそれ以外を「不明」カテゴリに再分類し、そこからオペレーターによる確認・修正を行うことができるようになっていている。

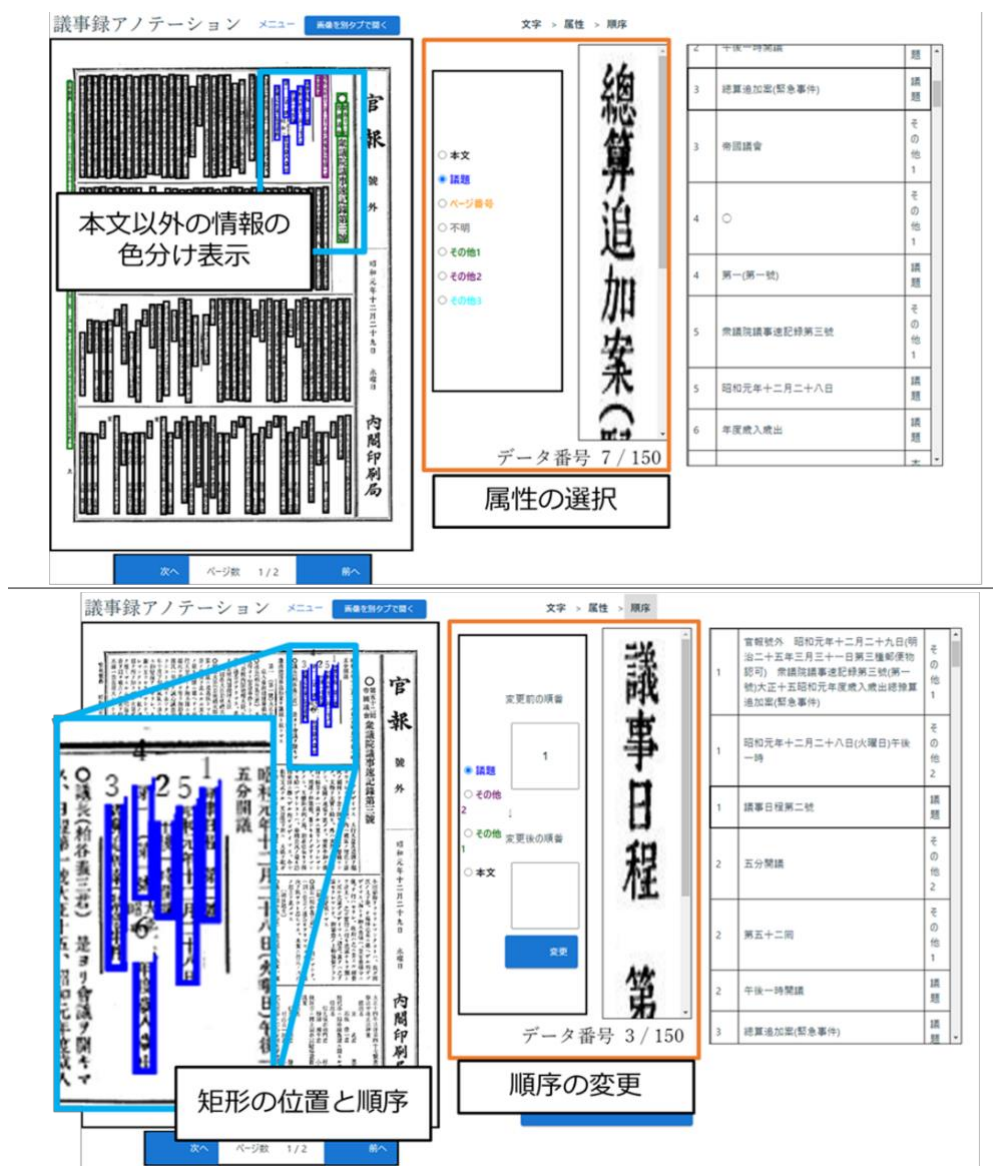


図 2 上：属性修正画面 下：順序修正画面

順序修正機能

本機能は修正された文章を適切に出力するため、各文章に文書全体から通し番号を付与するものである（図2：下）。速記録は縦書きかつ段組みも複数ありレイアウトが複雑な文書群である。NDLOCR の推定した文章順序のまま出力すると実際に読む順序と異なる場合があるため、属性修正機能で紹介した属性情報を基に順序を修正する機能を提供する。

1 ページあたり約 50～200 文（矩形）あるため、一つずつ数字を割り振るのは非常に作業コストがかかる。本機能では、数字の変更に加え、変更前から変更後の間にある数字を振られた文章の順序も自動で更新する機能があるため、最小限の変更のみで完了できるようになっている。

管理機能

ハルニレは修正作業だけでなく、各オペレータの作業担当文書の割振りや、作業時間の記録・管理などの機能も提供する（図3）。そのため、一般のオペレーターアカウントのほか、修正作業を管理するための管理者アカウントが存在する。管理者は文書の割当（アサイン）や作業時間を確認することができ、作業完了時間の見積もりや管理が可能である。

メニュー				
アサイン管理				
ユーザー別アサイン数				
一般ユーザー				
ユーザーID	ユーザー名	アサイン数	アサインページ数	完了数
3	a	0	0	0
管理者				
ユーザーID	ユーザー名	アサイン数	アサインページ数	完了数
1	test	0	0	0
4	pass	0	0	0
5	伊藤孝行	144	2124	1
6	北野真太	3	56	0

メニュー				
作業時間サマリ				
全ユーザーの総作業時間（時:分:秒）：20:12:19				
ユーザー名	総作業時間（時:分:秒）	1矩形あたりの平均作業時間（時:分:秒）	アサイン議事録数	完了済議事録数
test	02:50:54	00:00:14	0	0
a	00:00:00	00:00:00	0	0
pass	00:00:00	00:00:00	0	0
伊藤孝行	17:21:25	00:00:25	144	1
北野真太	00:00:00	00:00:00	3	0

図 3 上：アサイン管理画面 下：作業時間一覧画面

2. ハルニレを使用した文章の確認・修正作業時間をログから分析

ハルニレを使用し、文字修正にかかる作業時間ログを収集し、ヒストグラムにしたものが図4である。矩形数は287、文字数6,639文字であり、作業時間は5,099秒であった。これは、1文字あたり約0.77秒で修正・確認ができるということである。比較として、共著である伊藤孝行（北海道大学）が行った秘密会議事速記録の紙媒体文書約200万文字をPCに打ち込むテキスト化を行った事例をあげる。本文書のテキスト化における詳細な作業時間の記録はないが、作業員数1名が約3年（36ヶ月）という時間をかけている。ハルニレを使用した試算では200万文字は427時間でテキスト化できることになる。これは、1日1時間を週5日で行った場合約21ヶ月で完了する計算となり、大幅な時間削減ができていると言える。また、複数作業員の作業管理もできるため、作業員の管理コストを多くかけずに文書単位で作業の並列化が可能であり、数ヶ月でテキスト化が完了できる。

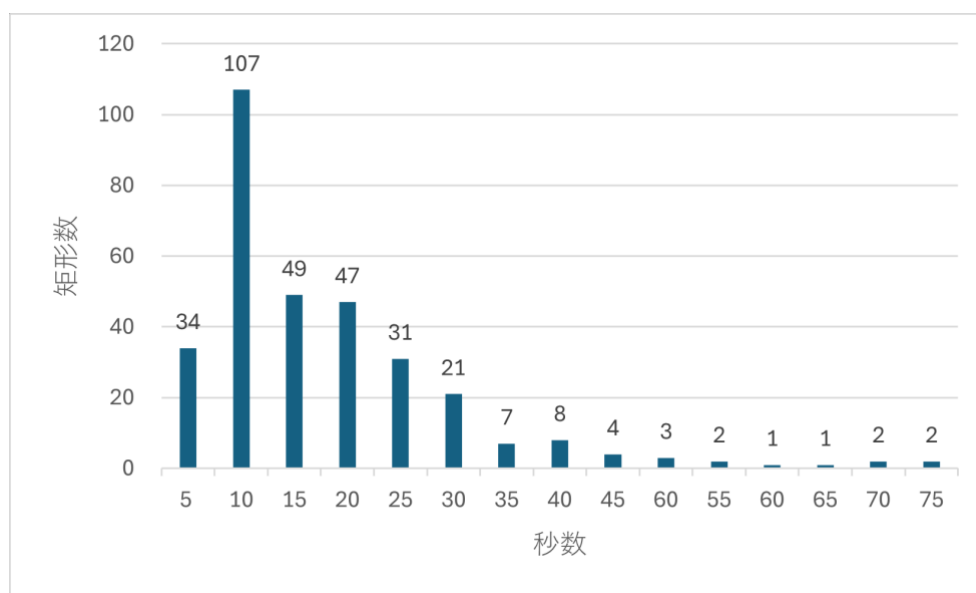


図4 矩形ごとの作業時間のヒストグラム

3. まとめ

これまでの人手による紙媒体の翻刻・文字起こし関連の作業を包括的に支援できるシステムであることが本プロジェクトメンバー内で試験運用した結果からわかった。NDLOCRは非常に高精度であるが、修正作業時間の多くを占めていたのがNDLOCRによる誤認識の修正であり、日本の古い文書に用いられる旧字体の認識間違いが目立った。さらにこの文字をキーボードの変換機能を用いてシステムに入力するには多くの時間がかかることも確認した。これら課題に対して、今後は修正記録の保存や誤認識が多い文字が出現した場合に類似文字を提案する機能などを提供し、より効率化を狙う予定である。

¹ https://github.com/ndl-lab/ndlocr_cli（参照 2024-09-13）

² <https://teikokugikai-i.ndl.go.jp/#/>（参照 2024-09-13）

帝国議会議事速記録の公開データを用いた可能表現の頻度分析

きたの ゆうた
北野 勇太（北海道大学学生）

1. 背景

国立国会図書館の「帝国議会議事録検索システム」で閲覧できる本会議・委員会の会議録のうち、テキストデータとして閲覧できるのは戦後のものに限られていた。2024 年 8 月 23 日、戦前分の会議録をテキストデータとして閲覧することが可能となった。

先行研究として、帝国議会議事速記録に対し可能表現の頻度分析を試みた例¹がある。しかし、速記録全体を対象とした大規模な分析は行われていない。これは当時テキストデータが存在せず、検索性が低い状態であったことが一因となっている。本章では新たに公開された帝国議会議事速記録の全文のテキストデータを用いて品詞のパターンマッチングによる可能表現抽出を行い、その頻度を会議の開催年ごとに集計することで、可能表現の使われ方の変遷を明らかにする。

2. 帝国議会議事速記録のテキストデータの取得

本研究では、取得対象の帝国議会議事録検索システムがプログラムでテキストデータを自動取得するスクレイピングを禁止していないことを確認した上で、帝国議会議事録検索システムからスクレイピングを行い、本会議・委員会のテキストデータを取得した。スクレイピングは、短時間での高頻度のアクセスでシステムに過度の負荷をかけてサービス提供に支障をきたさないように、リクエスト送信間隔を一般的な 3~5 秒と設定してデータを取得した。今回のテキストデータの約 3 万ファイルの取得には 20 時間程度を要した。

3. 可能表現の抽出

文章に対して特定の日本語表現を抽出する手法としては、n-gram を用いたルールベースの手法や、大規模言語モデルのファインチューニングによる手法が挙げられる。しかし、近代語の可能表現を自動で抽出する手法は未だ確立されていない。本研究では、先行研究の可能表現の区分けを参考とした品詞のパターンマッチングによる自動抽出を行った。この品詞パターンマッチングは我々の従来研究の頻度分析において十分といえる精度を達成したことを確認しているため²、本研究においても品詞パターンマッチングを用いる。

本研究で用いたマッチングルールとして、表 1 に示される 10 個のルールを用いる。「*」印のあるルールは、先行研究における可能表現の区分には存在しないが、会議録中に可能表現として出現することがわかっている表現である。可能表現の抽出は、次の手順 1 から 3 を帝国議会議事速記録の全文のテキストデータに適用する。

¹ 伊藤孝行（2002）『『帝国議会議事速記録』に於ける東北地方出身議員の可能表現』、『國學院雑誌』104-7、pp. 13-32

² 北野勇太ほか（2023）「品詞のパターンマッチングを用いた帝国議会議事速記録における可能表現の自動抽出」、人工知能学会 合同研究会 2023 第 24 回データ指向構成マイニングとシミュレーション研究会

表 1 可能表現の抽出に用いるルール

ルール番号	品詞パターン
1	動詞＋「こと」＋助詞 1 個以上＋（副詞）＋「出来る」
2	名詞 or 代名詞＋助詞 1 個以上＋（副詞）＋「出来る」
3	名詞 or 代名詞＋「出来る」
4	五段活用動詞 かつ 終止形が「エ段＋る」で終わる動詞
5	「能ふ」
6	「こと」＋助詞＋「ならぬ」
7	動詞＋「得る」
8	動詞「兼ねる」＊
9	「可能」＊
10	「出来るだけ」＊

手順 1. 会議録中の発言を抽出し、カタカナをひらがなに変換する。

手順 2. 旧仮名口語 UniDic³ を辞書とする MeCab を利用し、発言を形態素に分解する。

手順 3. 発言中にルールと合致する品詞の並びを可能表現として抽出する。

可能表現の抽出において、表 1 のルールをそのまま適用すると同一の文章を複数の可能表現として抽出してしまうことがある。そのため、マッチングルールに優先度を設定して、ある 1 つの文章が複数回抽出されることのないようにした。

3. 可能表現の使用頻度の分析

表 1 に示される品詞のパターンマッチングを用いて、帝国議会議事速記録の全文に対する可能表現の使用頻度の変遷を明らかにするために可能表現の抽出をおこなう。抽出対象は、帝国議会議録検索システムにて公開されている会議録から議員や参加者の発言のない索引や目次を除く 26,143 件、総文字数 623,021,251 文字である。このテキストデータ全体に対して前述した手順で可能表現の抽出を行い、約 10 分で可能表現の抽出を完了した。

図 1 に、年単位で集計した帝国議会本会議・委員会における全形態素数に対する可能表現の割合を示す。推移の傾向として、帝国議会の会期 57 年間を通して可能表現の頻度に大きな変化は見られなかった。1903 年と 1947 年に可能表現の出現割合が非常に高く出ているが、ほとんどの年における全形態素数が 50 万～350 万個なのに対し、1903 年と 1947 年は 5 万個未満であったため、可能表現の出現回数が変動することで可能表現の出現頻度の割合が大きく変動したことに起因する。

次に、可能表現の中で出現頻度が 9 割以上を占めた「出来る」と「得る」に着目して、図 2 に年単位で集計した全可能表現に対する「出来る」の関係するマッチングルール 1、2、

³ 小木曾智信（2012）「旧仮名遣いの口語文を対象とした形態素解析辞書」、じんもんこん 2012 論文集、pp. 25-32

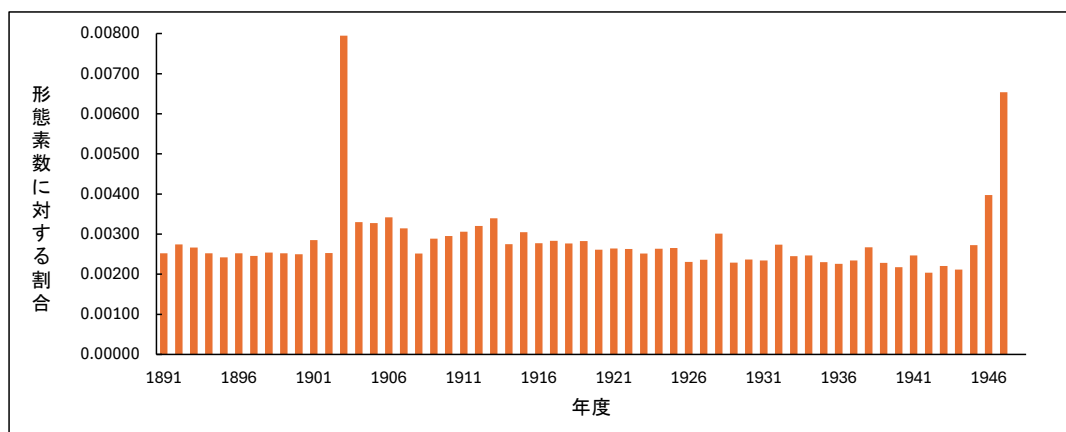


図 1 各年における可能表現の出現割合

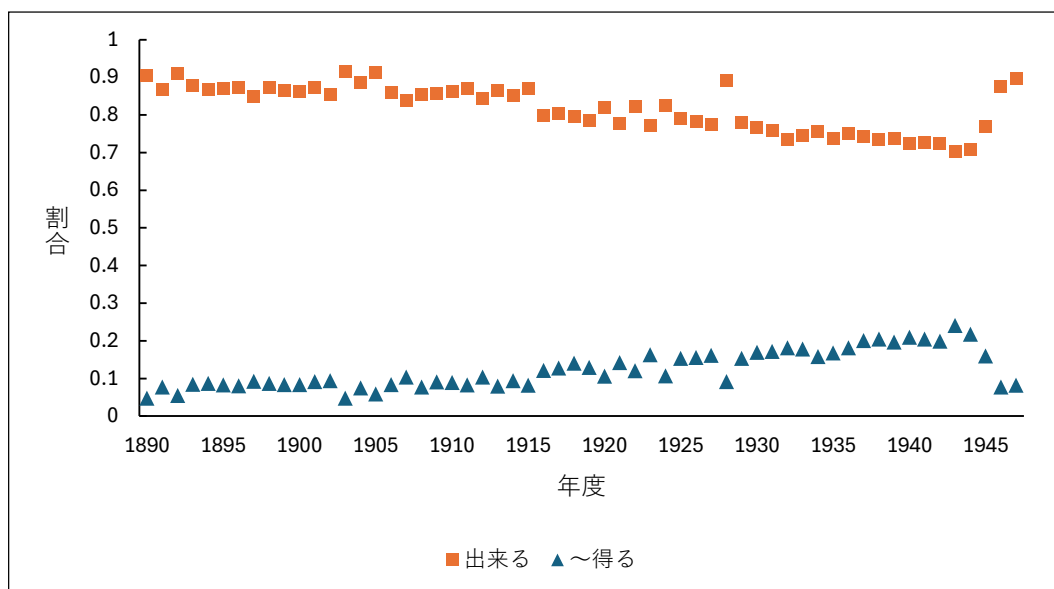


図 2 各年における「～出来る」と「～し得る」の関わる可能表現の出現割合

3、10、および「～得る」の関わるマッチングルール7で抽出された可能表現の割合を示す。「出来る」は議会初期から後期にかけて徐々に減少して、1940 年前半までに議会初期から2割程度減少したが、戦後に大きな増加傾向に転じている。一方「得る」は反対に議会初期からの増加傾向と戦後に大きな減少傾向を示した。この「出来る」の解析結果は、著者の伊藤が手作業でテキスト化した帝国議会衆議院秘密会議議事速記録31回分における可能表現を対象とした分析における「出来る」の出現頻度が一定だった結果とは異なる（本章1ページ目の脚注2の参考文献を参照）。この違いが生じる原因としては、本会議・委員会と秘密会議で差異のあるデータ量、対象期間、出席した議員の属性といった要因が考えられる。

今後は、可能表現の変遷の詳細を明らかにするために、引き続き帝国議会議事速記録の全文のテキストデータにおける可能表現の分析を進めるとともに、同時代の他のコーパスにおける可能表現の分析結果との比較を進める。

多文化社会のための複言語教育：ことばの研究の社会的役割とは

パネリスト

おおやま まよ
大山万容（大阪公立大学）
はんみね
半嶺まどか（名桜大学）
きくなが
菊永ふみ（異言語 Lab.）

企画担当

なかがわ なつこ
中川奈津子（九州大学）
さかい みか
坂井美日（鹿児島大学）

趣旨

言語の多様性の重要さはすでになんかなり浸透しており、消滅危機言語・方言、手話、海外ルーツの人々の話す言語など様々なことばが日本国内で話されていることがよく広く認識されつつあります。しかしながら、これらの言語について学ぶことは、いまだに当事者の問題としてのみ捉えられがちです。実際は、この多様な社会に生きる私たちすべての問題であり、少数派だけでなく、多数派の言語文化しか触れたことがない人々にも（あるいはそのような人々にこそ）、少数派の言語文化を学び、尊重するようになる機会が必要です。複言語教育は、多様な言語文化的背景を持つ人々がお互いの背景を学ぶ機会として実践されています。本シンポジウムではこの観点から複言語教育の実践・研究をしている方々に登壇いただき、その中で、日本語学・言語学の在り方を問い直したいと思います。

構成

14:00-14:10	趣旨説明・パネリスト紹介	坂井美日
14:10-14:40	言語から話者へ：複言語教育の射程	大山万容
14:40-15:10	日本の国内の消滅危機言語の再活性化の事例より	半嶺まどか
15:10-15:40	異言語脱出ゲームの取り組み	菊永ふみ
15:40-16:10	休憩	
16:10-17:00	質疑応答・全体討論	中川奈津子

言語から話者へ：複言語教育の射程

おおよま まよ
大山万容（大阪公立大学）

はじめに

言語教育観は 21 世紀に大きな転換を迎えたが、それは「言語から話者へ」という視点の変換を伴うものであった。20 世紀に発展した言語学は言語そのものを観察対象とし、しばしば人間の言語能力を他の社会的活動から切り離して捉えようとした。社会言語学研究はそこに異議申し立てをし、人間の言語能力には人間と環境世界（社会）との相互作用が本質的に関わっていることを主張した。さらにバイリンガリズム研究は心理学・社会学の方法論を用いて、バイリンガルの能力とは「2 つのモノリンガルの足し算」ではなく「複数言語を運用する一つの統合された能力」であるという見方を提示する。こうした複数の研究領域において発展した言語能力観の発展を受け、20 世紀終わりに複言語主義の概念が登場し、それは 21 世紀の言語教育観を大きく規定するようになった。本発表では複言語主義の提示する「複言語・複文化能力」による言語能力観をグロジャンの研究から示し、さらに複言語教育の射程について概観する。

1. 全体論的な言語能力観

「複言語・複文化能力」の概念化は、バイリンガルの日常的な言語実践の観察から始まった。1970 年代に始まるフランソワ・グロジャンによるバイリンガリズム研究への貢献は言語教育学に多大な影響を与え、現在でも影響を与え続けている。グロジャンによる「相補性の原理 complementarity principle」（Grosjean, 1982; 2008; 2010; グロジャン 2018）は、「バイリンガルは通常、生活の様々な領域で、異なる人と、様々な目的のために言語を習得し、使用する。通常、生活のそれぞれの場面で、様々な言語が必要とされる」ことを捉えたものである（図 1 参照）。グロジャンの研究は、言語能力に対する全体論的な見方、すなわち全体は要素の合計よりも大きく、要素同士の相互作用が本質的であると示すものであった。

ここからバイリンガルがすべての領域においてモノリンガルと同等の使用をする必要がないこと、また言語能力が環境の変化により変遷すること、さらに借用やコードスイッチングなどバイリンガリズムに関わる様々な現象を整合的に説明できるようになった。それ以前は、バイリンガルは、モノリンガル話者を基準として、それぞれの言語の流暢さとバランスという観点から説明され、評価されてきた。多くの研究が、当該話者にとっては実際には両方の言語が同時に使用されるような生活領域についても、いずれか片方の言語のみを対象として実験や調査を行ってきた。これにより研究者のみならずバイリンガル自身が自身の言語能力について否定的な表象を形成するという悪循環が生じていたのである。グロジャンによる全体論的な言語能力観とそのモデルの提示は、複数言語話者に対する社会的表象に大きく働きかけるものとなった。

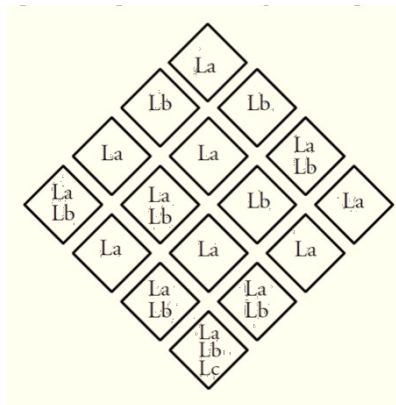


図 1 相補性の原理の図示化

それぞれのラティスは一人のバイリンガル（複数言語話者）のそれぞれの生活領域を、La, Lb, Lc はそれぞれ使用言語変種を示す。この話者は、ある領域（例えば、家族との会話）では La のみを用いるが、別の領域（例えば、行政サービスの窓口）では Lb のみを用いる。La と Lb を両方用いる場合（例えば就学）もあれば、3 言語を用いる領域（例えば買い物）もある。このようにバイリンガルが生活において必要な領域ごとに、どのように使用する言語を使い分けているかを図示化している。

2. 多言語主義／複言語主義

多言語主義（multilingualism）、複言語主義（plurilingualism）という 2 つの用語のうち、後者の概念はフランス語圏で生まれ、ヨーロッパの言語教育研究ではこれら二つの用語について、前者はある限定された地理的領域に複数の言語が共存していることを指し、後者は個人の言語能力に焦点を当てるものとして、区別して使われることが多い。

複言語主義は欧州評議会および EU の言語政策として知られている。EU は市民が「母語に加えて 2 言語」の習得をめざす多言語主義を掲げており、これはカリキュラムにおける言語の複数化を意味することから複言語主義政策とも呼ばれる。ここで政策研究と学術研究を明確しておくことは重要である。学術研究では非常に早い段階からこの概念は問い直され、それにより洗練され、複雑化され続けているためだ。

複言語主義、特に「複言語能力 plurilingual competence」の概念は 1991 年にフランスの言語教育学者のダニエル・コストによって考案され、普及したもので、これは個人の言語能力に焦点を当てた概念である。この概念はフランスだけでなくヨーロッパや北米を中心に発展していた、学習者の言語能力と、既存の、そして発展途上のレパートリーの微妙な相互作用を解明する研究の成果からインスピレーションを得て生まれた（Coste, de Pietro et Moore, 2012）。既にあった多言語主義（multilingualism）に代わり、新しい用語を用いた理由とは、グロジャンの研究を受け継ぎ、バイリンガル・複言語話者の能力を特徴づけるものが、そこに含まれる言語の数（専門用語では接頭辞 multi-で示される）自体よりも、その統合性の方にある（接頭辞 pluri-で示される）という事実

を重視するしているである。この概念は言語接触と移動に関わる社会言語学から大きな影響を受け、後述する「言語への目覚め活動」を発展させるスイスのフランス語圏やグルノーブルの研究と影響を与え合ってきた。「複言語主義の考えの基本となる「複言語・複文化能力」は CEFR において次のように定義されており、グロジャンから続く全体論的な言語能力観を認めることができる。

“a given individual does not have a collection of distinct and separate competences to communicate depending on the languages he/she knows, but rather a plurilingual and pluricultural competence encompassing the full range of the languages available to him/her”(Council of Europe, 2018, 168).

「ある個人は、その人が知っている言語ごとにばらばらのコミュニケーション能力の寄せ集めを保持するのではなく、むしろその人が使用可能な言語の全範囲を包含する一つの複言語・複文化能力を保持する」

このような見方をとることにより、複言語主義が、本質的に領域横断的なものであることが理解できる。言語そのものから話者へと焦点を当てることによって、複言語主義の研究には社会言語学や心理言語学、人類学やコミュニケーションの民俗誌、または第二・第三言語習得、バイリンガリズム、移民や越境研究、クレオール研究、あるいは言語の復興、言語政策、言語教育やバイリンガル教育の研究がすべて関わる。研究者はさまざまな側面を拡大したり、あるいは遠景から見るために、いろいろな焦点距離を用いて対象を観察するのである。

3. 複言語教育

複言語教育学の主たる関心は、言語そのものの記述ではなく、複言語話者である学習者が、家庭や学校、その他の学習文脈で、自らの多様なリソースをどのように活用するかを理解することである。そして、批判的な省察を伴いながら教育的介入を継続する努力から、複言語教育学（plurilingual education）が生まれる。複言語教育学とは、多言語的なアプローチを用いるさまざまな学習シナリオに対する総称である（Candelier, 2008; Candelier and Castellotti, 2013）。複言語教育では、(1)複言語・多文化環境における複言語の相互作用と学習の問題、(2)言語政策についての情報提供、(3)学習者と教師が言語的・文化的に多様な社会での生活に備えるための、文脈に即した新しい教育的介入の考案、という3点を織り交ぜながら、相互関連性を構築していくことを重視する。そこには社会的なものが常に存在する。個々人は社会の中で複言語レパートリーとリソースを構成し、またそれによって構成されている（Conteh et Meier, 2014）と考えるのだ。

・言語への目覚め活動

複言語教育の具体的な教育シナリオとして、言語への目覚め活動（Eveil aux Langues）

を挙げる（大山、2016）。これは 1970 年代に英国で始まった言語教育改善運動である言語意識（language awareness）に端を発し、1980 年代にヨーロッパのフランス語圏で教授法として大きく発展した。これは複数の言語変種を同時に使う教育活動と定義されるが、さまざまな地位にある複数の言語を同時に扱うことがポイントで、扱う言語には、移民のもたらす言語など、学校のカリキュラムに含まれない言語を含めることができる。

例えば小学 3 年生の児童に、次のような文のいずれかが書かれた紙片を配る。

1. Եթէ խօսեմ մարդկանց լեզուները եւ հրեշտակներինը, բայց սէր չունենամ, կը նմանուեմ մի պղնձի, որ հնչում է, կամ ծնծղաների, որ դողանջում են
2. Мені страшно, холодно, боляче й гірко. Та морок — ніщо проти вогню ваших сердець.
3. Met vreemden praten kan intimiderend en vermoeiend zijn, zeker als er veel op het spel staat..
4. وهناك على الكرسي المقابل لي تجلس فتاة، تضع يديها على خديها، مغمورة بخيالات تدور في عقلها الآن، وهي تنظر إلى النافذة.

4 種類の言語があるが、子どもたちは受け取る紙片にはそれぞれ違う文が書かれている。ここから「同じ言語の人を見つけてグループになりましょう」と指示を出す。4 種類のグループが形成される。次にそのグループごとに、「その言語が何語であるか」を予想させる。子どもたちは「何語に似ている」とか、「どこで見たことがある」と様々な手がかりを口にするが、教師のはしごかけによって正しい答えに到達することも多い。最後に、これらの言語で書かれた絵本を並べ、「自分の言語で書かれた絵本を見つけましょう」と指示を出す。こうした活動を通して、子どもたちは何を学び、それはどのような力につながっていくのかを考えることで、言語教育は多言語社会の中で生きていく個人の複言語・複文化能力の発展を促すものとなる。

おわりに

複言語主義はヨーロッパの政策として取り入れられて久しいが、政策としての側面だけではなく、学術的な発展を検証すると、それは北米やヨーロッパで行われた様々な関連領域の研究成果を取り入れて発展してきたものであり、言語研究や言語教育実践に社会的なものを取り入れることを重視していることが分かる。言語教育学で学術的に用いられる複言語主義の概念は、個人の統合された言語・文化レパートリー、能力の全体論的な見方の理論化を目指すものであって、不均衡を主題化することを重視する。そして理想的な話者や、ネイティブ・スピーカー、言語の完全習得や、アイデンティティのないモノリンガル・モデルといった古い見方を疑問視する。これにより、バイリンガル・複言語話者の本質に関する表象やイデオロギーに疑問を投げかけるものである。ヴェロニック・カステロッチ（Castellotti, 2014）が言うように、言語教育学研究には、学習の

環境を構成する人間の多様性を根本的に考慮しないでは、未来はあり得ない。あらゆる言語学習の場において、そこにいる人々の人生の軌跡、そしてそれを特徴づける関係性に関心を持つことが重要である。そして研究者もまた、何を言語だと見なし、そこにどのような表象を持っているのか、研究の過程で行う解釈を通じて学習者にどのような社会的な地位を付与しているのかを振り返る必要がある。そのためには研究者自身の軌跡や、そこで築く関係性、そして制度との関係における介入に左右される地位について、関心を持つことが重要なのである。

参考文献

- Candelier, M. (2008). *Approches plurielles, didactiques du plurilinguisme : le même et l'autre. Recherches en didactique des langues et des cultures : les Cahiers de l'Acedle* [numéro thématique : *L'Alsace au cœur du plurilinguisme*], 5, 65–90.
- Candelier, M. et Castellotti, V. (2013). Didactique(s) du/des plurilinguisme(s). Dans J. Simonin et S. Wharton (dir.), *Sociolinguistique des langues en contact, modèles, théories. Dictionnaire encyclopédique des termes et concepts* (p. 293–318). Lyon : École normale supérieure (ENS) Éditions.
- Castellotti, V. (2014). Contexte, contextualisation, cultures éducatives. Quels usages ? Pour quelles orientations de la recherche en DDL ? Dans S. Babault, M. Bento, L. Le Ferrec et W. Spaëth (coord.), *Actes du colloque international Contexte global, contextes locaux : tensions, convergences et enjeux en didactique des langues* (p. 111–124). Paris : Fédération internationale des professeurs de français.
- Council of Europe. (2018). *Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment. Companion volume with new descriptors*. Strasbourg : Council of Europe. rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989
- Conteh, J. et Meier, G. (dir.). (2014). *The multilingual turn in languages education : Opportunities and challenges*. Bristol, UK : Multilingual Matters.
- Coste, D., de Pietro, J.-F. et Moore, D. (2012). Hymes et le palimpseste de la compétence de communication. Tours, détours et retours en didactique des langues. *Langage et Société*, 139, 103–123.
- Grosjean, F. (1982). *Life with two languages*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Grosjean, F. (2008). *Studying bilinguals*. Oxford : Oxford University Press.
- Grosjean, F. (2010). *Bilingual : Life and reality*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- フランソワ・グロジャン著 西山教行監訳、石丸久美子・大山万容・杉山香織 訳 (2018) 『バイリンガルの世界へようこそ—複数の言語を話すということ』 勁草書房
- 大山万容 (2016) 『言語への目覚め活動 複言語主義に基づく教授法』 くろしお出版

日本の国内の消滅危機言語の再活性化の事例より

はんみね
半嶺まどか (名桜大学)

1. 危機言語を使用すること

くよーまなーらー。ばーなーや 半嶺まどかでいどう あんずむぬゆー。
どーでいん みっし たぼーていゆー。

これは、筆者の継承語でもある琉球諸語と呼ばれる言語のうち、石垣島の南西部にある宮良という地域のことばである。国内の研究会や大学の授業で、この石垣島の「めーらむに」でこのように冒頭部分に話をする、さまざまな反応が返ってくる。まず多いのは、聞いたことがない外国語ではないかと思う人もいる。しかし、これは、日本国内で話されている琉球諸語のうち、八重山語とも呼ばれる八重山諸島のことばである。そして、なんとなく筆者のことを知っている人は、無意識的にクスッと笑う反応をもらったこともある。もしくは、八重山から離れて育っているのに、よく頑張っていると誉める反応をする人もいる。また、このように挨拶をすることで、「八重山語」のみが象徴的に取り上げられ、そのほかに筆者が持っている言語や文化、アイデンティティが隠されてしまうこともある。言語を使用することで、「他者化」され、これらのさまざまな反応は、日本語が覇権を握る日本社会において、「めーらむに」が持つ異質性に、その場所に居合わせた個人個人が対応するために、無意識にとっているかもしれない反応かもしれない。

それらさまざまな周りの反応により、影響を受けるのは、話者や学習者、その言語の使用者や言語のコミュニティである。言語から「話者」へ視点を移動する社会言語学的視点の移動は、本シンポジウムのテーマである複言語主義に関わってくる。これらの具体的な事例を通して、本稿では、言語教育研究の中で、言語そのものだけに焦点を当てるのではなく、その言語をめぐる社会や、話者のアイデンティティ、社会の不均衡性などを主題として捉える「複言語主義」の考え方を紹介し、なぜ少数派の言語や文化を、多数派が知ることが必要なのかについて考察する。「複言語教育」の主たる関心は、言語そのものの記述ではなく、複言語話者である学習者が、家庭や学校、その他の学習文脈で、自らの多様な言語リソース（方言や、アクセントなどを含む）をどのように活用するかを理解することである（大山、本稿）。そして、本稿では、複言語主義のレンズを通して、琉球諸語の再活性化の事例をもとに、日本国内の多様な言語文化の継承のための教育をどのように行うべきか、一考察を行う。

2. 危機言語を「どのように」語るか

「危機言語」と「言語の復興」に関する言説は、言語学の中で 1990 年代初頭から登

場し、歴史の対照的な解釈を提示してきた。何世紀にもわたる疎外、同化、抑圧の後、「先住民の言語」や「少数言語」は世界中で特別な注目を集めた。この「危機に瀕する言語」というパラダイムは、言語学者、学者、国民国家、国際機関にとって、支配的で重要な行動の呼びかけとなり、注目を集めた (たとえば、Boitel, 2022 を参照)。言語の危機に瀕する言語というパラダイムは、世界中の先住言語や少数派の言語を記録し復興することを目的とした研究プロジェクトへの理論的枠組みと財政支援を通じて、言語喪失の問題に対する「解決策」を提供することを目的としていた。この発展に伴い、多くの研究により、危機に瀕する言語という言説は、通常主張されているような解放的な効果をもたらすどころか、支配、差別、人種的偏見、エスニック文化的コミュニティからの搾取の永続化につながる可能性があることが、いろいろな地域と国で、実証されている (Costa 2016; Davis 2017; Duchêne and Heller 2008; Hill 2002; Muehlmann 2013)。

このような「絶滅の危機」アプローチは、言語の多様性を非常に重視し、これらの言語は全人類の地球規模の宝であると主張することが多い。また、学者たちは、「絶滅の危機」アプローチが、少数派言語の母語話者の発話を列挙、つまりそのような言語の数を数えること (例: Hill 2002) や言語の抽出に焦点を当て、話者を彼らの言語の体現された生きた経験から切り離れた単なるデータ提供者として扱う傾向がある (例: Davis 2017) と批判している。これらの批判の背後には、言語を見て理解するための西洋中心の認識論の領域もある。これらの言説は、少数派の「絶滅の危機に瀕した」言語をより大きな言語の侵入から守ること、または西洋中心の「言語」理解に基づいて多言語主義を守ることに焦点を当てている (Pennycook and Makoni 2019)。これらの批判は、「危機」パラダイムで考えることは問題があり、言語コミュニティに悪影響を及ぼす可能性があることを、繰り返し示しているにもかかわらず、この枠組みは、学者や言語活動家の間では依然として支配的である。Hill (2002) が述べるように、先住民言語や少数言語の文書化、回復、再活性化は、人類全体の産物としての文化の保存という観点からではなく、抑圧や、阻害、同化を受けてきた言語的少数派とその文化の解放として捉えられるべきである。そう考えると、冒頭で述べたような、単なる象徴やトークニズムとしての少数言語文化の捉え方は、なくなるだろうし、冒頭のような事例が観察されるということは、日本では、まだ少数派の文化言語の解放が成功していないという例とも言えるかもしれない。

3. 複言語教育

グローバル化に伴い、多様性がますます増加する日本において、教育制度における全ての学習者と教育者に対し、多様性への教育は必要であるだろう。多言語多文化という言い方とは別に、複言語、複文化的アプローチがあり、本シンポジウムのテーマともなっている。複言語複文化能力とは、程度に関わらず、複数言語を知り、程度に関わらず複数文化の経験を持ち、その言語文化資本の全体を運用する行為者が、複数の言葉でコミュニケーションし、複数の文化的に対応する能力を言う (Council of Europe, 1997;

2007)。複言語複文化を語るときに、重要なのは、別々の能力の組み合わせではなく、複雑に入り組んだ不均質な寄せ集めの目録としての複合能力ということである。単体の能力や、部分的能力も含まれる。複言語主義的な視点 (plurilingual lens) は、「完全でバランスのとれた言語能力でなくてはならない」という前提に疑問を投げかける。むしろ、個人の言語・文化は時間やコンテキストによって絶えず変化し、それぞれの経歴、体験、社会的変遷、人生の様々な出来事と影響を与え合いながら、相互に関連している。こうした複言語主義的な視点を教育・学習の場で用いることで、教師は単一言語主義 (モノリンガリズム) を乗り越え、複数の言語と文化が行き交う学びの授業空間を切り開くことができるようになると思えることができる。

また、日本のような単一言語単一文化のイメージの強い共同体の内部にも、社会経済、世代、職業、学歴等様々な次元の多様性や集合があって、社会化の初期にそこから来る言葉文化の複数性に出会うのは不可避である。日本国内の先住言語や日本手話、地域のそれぞれのことばを含む多様性にも目を向けると、複言語主義的アプローチが上で挙げたような「八重山語」の例は、一例に過ぎない。筆者のような「ニュースピーカー」(Williams, 2023)、つまり少数言語を大人になって第二言語として学んだ世代にとって、複言語複文化的能力の不均衡さを当たり前とする前提があることは、一つの理論的な骨組みとなる。複言語主義では、以下のような点の不均衡さをむしろ肯定的で自然なものとして捉える (Council of Europe, 2007)。

- A) 言語ごとの使いこなせるレベル
- B) 言語ごとにできることが異なる(たとえば、ある二言語で口頭では素晴らしい力があっても、読む書く力はそのうち一言語にしかなく、三つめの言語では読みが少しだけ、口頭ではほとんど使えない等)
- C) 多文化側面と多言語側面が別の形で成り立っている(たとえば、言語のわからない共同体の文化をよく知っている、共同体の支配言語は使いこなせるが文化についてはよく知らない等)

特に、危機言語の復興という文脈では、上の (C) のような状況が存在する。言語は社会の中で覇権を持つ、支配言語に切り替わってしまったが、その土地や言語コミュニティの文化をよく知っているニュースピーカーの個人が存在する。彼らにとって、冒頭で述べたような「他者化」が繰り返される場合、言語学習のモチベーションに影響を与えることを考慮する必要があるだろう。また、多数派に所属する人々が、言語的少数派の言語や文化を理解し、尊重するためには、社会全体で、複言語複文化を持つことを肯定的に捉えられるようになる必要がないだろうか。

最後に、ことばの教員養成において、日本国内の言語文化的多様性についてどれほど認識されているだろうか。外国語教育や国語教育の中でも、複言語主義的なアプローチを取ることで、国内の言語多様性にもっと注目し、また外国語として覇権を持っている英語の指導法や、教員養成教育の変革も促すことができるのではないだろうか。複言語主義 (plurilingualism) とは、一人の人の中にはさまざまな特徴をもつ複数の言語能力

が存在し、それらが相互に作用しあって、"その人の言葉" を築き上げているという考え方であった。その複言語的現実を、日本国内でも、普段、多数派として生きている個人個人にも自覚を促すような活動や教育が必要ではないだろうか。

参考文献

- Boitel, Quentin. (2022). Discourses of Endangerment and Appropriation of the “Indigenous”: What Indigeneity Means in Non-Indigenous Spaces. In *Handbook of Language and Global South/s*. Edited by Sinfree Makoni, Anna Kaiper-Marquez and Lorato Mokwena. London: Routledge.
- Compétence plurilingue et pluriculturelle (1997) (Traduction en japonais) www.coe.int/t/dg4/linguistic/publications_FR.asp? (Translated by Mariko HIMETA)
- Council of Europe (2001) Common European Framework of Reference for Languages: *Learning, Teaching, Assessment*. Strasbourg: Cambridge University Press.
- Costa, James. 2016. *Revitalising Language in Provence: A Critical Approach*. Hoboken: John Wiley & Sons. [[Google Scholar](#)]
- Davis, Jennifer L. 2017. Resisting Rhetorics of Language Endangerment: Reclamation through Indigenous Language Survivance. *Language Documentation and Description* 14: 37–58. [[Google Scholar](#)]
- Dovchin, S. (2019). The politics of injustice in translanguaging: Linguistic discrimination. In T.Barrett & S. Dovchin (Eds.), *Critical inquiries in the sociolinguistics of globalization* (pp.84–101). Multilingual Matters. <https://doi.org/10.21832/9781788922852-008>
- Heugh, K., Harding-Esch, P., Coleman, H. (2021). Southern multilingualisms, translanguaging and transknowledging in inclusive and sustainable education. *Language and the sustainable development goals*, 37-47.
- Hill, Jane. 2002. “Expert Rhetorics” in Advocacy for Endangered Languages: Who Is Listening, and What Do They Hear? *Journal of Linguistic Anthropology* 12: 119–33.
- May, S. (2014). Language rights and language policy: addressing the gap(s) between principles and practices. *Current Issues in Language Planning*, 16(4), 355–359. <https://doi.org/10.1080/14664208.2014.979649>
- Saito, S., & Turner, M. (2024). Language Diversity in “Monolingual” Japan: Language Awareness Among High School Teachers of English. *Journal of Language, Identity & Education*, 1–15. <https://doi.org/10.1080/15348458.2024.2385837>
- Kloss, H. (1971). The language rights of immigrant groups. *International Migration Review*, 5, 250–268. doi: 10.2307/3002801
- Kloss, H. (1977). *The American bilingual tradition*. Rowley, MA: Newbury House.
- Pennycook, Alistair, and Sinfree Makoni. 2019. *Innovations and Challenges in Applied Linguistics from the Global South*. London: Routledge

異言語脱出ゲームの取り組み

きくなが
菊永ふみ（一般社団法人異言語 Lab.）

1. はじめに

異言語 Lab.や異言語脱出ゲームの取り組み、特に代表作品である「うしなわれたころさがし」を通して、参加者である手話未習得の聴者がろう者キャストの手話を視覚的に理解するプロセスを紹介する。

2. 異言語 Lab.とは

一般社団法人異言語 Lab.は「異（ことなる）を楽しむ世界を創る」をミッションに社会に手話を使った体験型エンターテインメントを提供している、ろう者主導の団体である。2018年に設立し、6周年を迎えた。主な事業に異言語脱出ゲーム、イマーシブシアター、グッズ制作販売がある。

異言語 Lab.は、「あなたに伝えたい、あなたのことを分かりたい」という思いの積み重ねで状況が変わることを学ぶことで、①コミュニケーションの活性化、②「できる/できない」の物差しではなく「異なる」の価値を感じる機会を提供している。

また手話はろう者独自の手話であり、音声言語とはまた異なる、視覚的な特性をもつ独特の言語であることを、言語や福祉とはまた異なる芸術というフィルターを通して、消えつつある手話とろう文化を守り、その価値を高めていく狙いがある。

3. 異言語脱出ゲームとは

筆者は、2015年に手話、筆談、ジェスチャーなど音声言語では成し得ないコミュニケーション手段を謎解きゲームに取り入れた「異言語脱出ゲーム」を開発した。企業の研修に取り入れ、7回ほど開催する中で、2018年に一般社団法人異言語 Lab.を設立した。2018年から6年間、日本の公共放送・NHKでのTV放映や国立民族学博物館、札幌芸術の森、企業や地方自治体などと協働し、異言語コミュニケーションや手話の魅力を社会に広めた。また2023年からは世界も視野に入れて、アメリカではSWSXEDU2023で手話未習得の聴者に、韓国・フランスでは世界各地から集まるろう者に異言語脱出ゲームを提供し、参加者に楽しんでもらった。

日本のみならず世界で、異言語 Lab.にしか作れない唯一無二の異言語脱出ゲームという新しいアプローチで、手話とろう者の身体・知覚から生まれる豊かな世界の可能性とその意義、価値を社会に発信している。

異言語 Lab.は、これまで通常の謎解きゲームを含め、18作品を制作し、延べ35,000人が体験した。

異言語脱出ゲームには3種類のタイプがある。

(1) ろう者・聴者が同じチームで協力し合って謎を解くパターン

手話を日常的に使用するろう者・難聴者と音声言語を日常的に使用し、手話未習得の聴者がチームを組む。手話を使った謎、音声を使った謎とお互いに得た情報を伝え合うことで謎が解ける仕組み。

作品：「5ミリの恋物語」「異言語脱出ゲーム ONTV」「異言語箱1」など

- (2) 音声言語を日常的に使用し、手話を知らない聴者がろう者のアテンドとコミュニケーションを取りながら謎を解くパターン

手話で交わされる物語世界を構築し、日本手話を第一言語とするろう者の役者がアテンドやキャストを務めている。その世界に没入し、身振り・覚えたばかりの手話を使いながらコミュニケーションを取りながら謎を解く仕組み。ゲームの世界で音声言語を使うことはあまりない。

作品：「うしなわれたころさがし」「異言語空間への招待状」「リモート DE お化け退治大作戦」など

- (3) ろう者が手話を使った謎を解くパターン

音声日本語を使った謎解きゲームと同じように手話を使った謎解きゲームを提供できるのも異言語 Lab.の強みである。手話を日常的に使用するろう者が制作する。手話の要素である、手の形、動き、リズム、顔・身体的位置を活用した謎がメインとなる。

作品：「Can you help the android?」「MYSTERY TOWN IN INTERNATIONAL SIGN」

4. うしなわれたころさがしについて

【あらすじ】

温暖な南の海域に浮かぶ「静穏たる楽園」と謳われている、とある島。

そんな島が未曾有の災禍に見舞われたという。

島の要請で島へ駆けつけたあなたは目の当たりにする。

ある日突然ころころを失い、力なく横たわる虚ろな人を…。

ころころと記憶を研究している、ココロシル研究所が開発した、ころころの奥底に触れることのできる装置「ココロフレール」と研究員のあなたに島の未来は託された一。



2022年に発表した異言語脱出ゲーム「うしなわれたところさがし」は、視覚言語（手話）が第一言語の島で感情と記憶を失う奇病が発生し、研究員である参加者が島の危機を救うために派遣される所から物語が始まる。手話を知らない聴者の参加者はその島の視覚言語で、島の人に扮するろう者の役者とコミュニケーションを取らなければいけない。70分間で島の人とコミュニケーションを取りながら謎を解き、奇病を解決して島を救うことがこのゲームのクリア条件となる。

5. ミッションの過程

「手話を知らない人が音声言語では通じない環境に置かれた時に、音声言語では成しえない手段、例えば視覚言語（手話）、表情、身振り、絵に描くなどの様々な手段でやり取りをしながらミッションをクリアしていくことが可能だ」と仮説を立てた。島の人達と視覚言語でコミュニケーションを取らなければ進まないミッションを幾つも用意した。

そのミッションの過程を物語上のネタバレにならない範囲で、紹介する。

前提（舞台の条件）

4人で1チームを組む。1人のろう者のアテンドがチームに入る。視覚言語が第一言語の島だが、具体的には日本手話と島独自の架空手話が使われている。島の架空手話は物語世界を理解したろう者のキャストが、議論・構築し、マニュアル化している。島で使われる架空手話が何を指すのか、島の人とのコミュニケーションを通して把握する試みも行った。

島の情報は全てピクトグラムで構成されている。手話で表現され、文字は存在しない。観光地の案内のように翻訳された日本語・英語が映像で流れることはあるが、最低限にしている。参加者は、その島に行く前に、島のガイドブックを手に入れている状況である。ガイドブックはマップ、観光名所、おすすめのお土産、島の特徴が日本語表記で書かれている。ガイドブックや謎解きで得られた情報を手がかりにアテンドや島の人

の手話を視覚的に理解する仕組みになる。

ミッション 0 島で使われる手話を覚えよう

ゲームが始まる前に日本手話を学べる場を用意した。アテンドが参加者に直接手話を教える。

教える手話：挨拶、わかる・わからない、好き・嫌い、何、いつ、どこ、どっち、どうやって、なぜ

ミッション 1 島の言葉を把握し、表してみよう

4つの基本的な単語（日本手話）を覚えて実際に表すミッション。島の人とのやりとりを観察する、あるいは島の人に直接聞く、島の人が表示されている映像を通して4つの手話を表現する。舞台装置のあちこちに小道具や看板に手がかりをおいているため、指を指して「これはなに？」と聞くことも可能な仕組みを入れた。

ミッション 2 アテンドの言いたい言葉をつかもう

4種類の映像をもとに、名前を当てていく。アテンドが映像内で、「「波線・指差し（＝とある山の名前）」「顔・二つの丸を目に当てる・耳から細やかな波線を描く（＝とある人物）」などの表現をする。その表現をつかみ、ガイドブックにある情報や複数のイラストから該当するものを選び、日本語に翻訳する。

ミッション 3 アテンドに質問し、その回答をつかもう

アテンドに10種類の質問をする。5W1Hの質問を行い、アテンドは手話で回答する。その回答に当てはまるものをピクトグラムで見つけていく。なお、中にはあえて教えていない手話単語もある。身振りや絵に描く、指差しなどの様々な伝える手段を駆使して伝えるなどの参加者の創意工夫が求められる場面もある。

ミッション 4 とあるアイテムをゲットしよう

アテンドが表示手話から形・色などの特徴を掴んで、複数の写真から正しいアイテムを指定する。

ミッション 5 これまでの情報を元に、アテンドの言いたいことをつかもう

アテンドが奇病の中で起きた事実を日本手話および、島の架空手話で1分ほど表現する。その言いたいことを全体的に掴み、奇病の原因となっているものを把握する。

ミッション 6 アテンドや島の人とコミュニケーションを取りながら島の真実にたどり着こう

以降はネタバレになるので割愛するが、アテンドや島の人とコミュニケーションを

取り、指示したり、話を聞いたりするなど、視覚コミュニケーションを通して、様々な行動をする。

要約すると、下記の通りに手話を獲得できるプロセスになっている。

ミッション1 手話使用者の行動・やりとりを観察、リサーチと分析→理解した手話単語を実際に表してみる

ミッション2 手話使用者の表現を観察→ガイドブックやイラストをもとに手話単語を日本語に翻訳する

ミッション3 アテンドに手話や身振り・指差し・絵を描くなどの手段で質問する（10個）→手話での回答を理解する（10個）

ミッション4 アテンドに手話で質問する・正しいものを絞る→島の人に伝える

ミッション5 アテンドの言いたいこと（1分間）をつかむ

ミッション6 アテンドや島の人とコミュニケーションを取りながら情報を総合的に分析・判断し、望ましい行動を取る

異言語脱出ゲームを通して、ろう者が表す言葉をじっと見つめ、彼らと何度もやり取りを繰り返すうちに、共通の概念が浮かび、謎を解くための手掛かりになる。謎解きゲームは謎を解くことで成功したいという参加者の強い欲求があり、それが手話を覚えたい、手話で伝えて理解したいというコミュニケーションの欲求とリンクする。参加者は手話を必死に読み取り、伝え合いながら謎を解く過程で、未知なる世界への不安、伝わらないもどかしさと葛藤、なんとかして伝わった瞬間の喜びと感動、多くの感情を味わうことができる。

6. 終わりに

異言語脱出ゲームの制作、つまり、企画・構成・脚本・謎制作・デザイン・映像制作・手話表現・演出・パフォーマンス・運営などあらゆることは、ろう者・難聴者が主体となって創り上げている。これらの作品は日常的に手話を言語とし、視覚で世界を捉える私たちにしか創れないものである。

その結果として、異言語 Lab.が、コンテンツそのものが、私たちろう者・難聴者の文化そのものが、社会に評価されることを肌で感じる事が重要である。実際にうしなわれたころさがしを体験した人からの声が寄せられた。

「まず、簡単なことに気付かされた。ろう者の方と接するのは、言葉の通じない外国の方と話すのと同じだということ。それぞれの国でコミュニケーションのための“言葉”は全く違うけれど、人々が感じる喜怒哀楽、葛藤忌避、そしてそれを伝えたいという気持ちは同じなのだ。ろう者の方々と対話することは、知らない言語を話す国の人と、ジェスチャーや筆談や今ではスマホなど様々な方法を駆使してコミュニケーションを

図ることと何ら変わりがなく、そんな基本的なことに気付かされる。

だから【異言語 Lab.】という名前なのですね。そして物語も体験も心に残る後味も全てがハートフル。最近の言葉だと“エモい“と言うのでしょうか（笑）、私が『ムリエモ』と言っている無理矢理エモに持っていこうとするような小手先の設定は何もなく、ただ参加者の中に巻き起こるドラマを信じている。“彼らの島”に行ってきたような既視感があるのも、物語体験がテーマのエンタメが目指す目標だと思う。あの島は、あの民族は、今も私の旅の思い出の中にあります。チャンスがあったら皆さんも是非今後の異言語 Lab.さんの活動にご注目を」

（E-Pin 企画:城島和加乃さん Twitter より）

参加者より頂いた声は、私たちのエンパワーメントに繋がり、次の制作に向けたエネルギー源となっている。このように当事者自身が心理的安全性が保障された環境の中で主体的に耕すことで自己変容につながり、社会が変わるという確信がある。

すなわち、異言語 Lab.での活動は、ろう者・難聴者である私たち自身を肯定的に受け止め、自らの力で立ち上がる過程そのものだと筆者は考えている。

日本語学会2024年度秋季大会予稿集

発行日（ウェブ公開日）：2024年10月5日

大会会期：2024年10月26日・27日

〔オンライン大会スタッフ〕

大会企画運営委員会 高木千恵（委員長） 庵功雄（副委員長） 矢田勉（副委員長）

田村早苗（オンライン大会委員長） 池上尚 太田陽子 小川晋史 苅宿紀子 久保蘭愛 鴻野知曉
佐伯暁子 坂井美日 堤良一 中川奈津子 幸松英恵 宮澤太聡（委員長補佐） 森勇太（委員長補佐）

事務局委員会 川瀬卓 富岡宏太 野間純平

広報委員会 市村太郎 村山実和子